

甲南大学 総合研究所所報

甲南大学総合研究所 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話(078)431-4341

特集「震災後の復興体験」

地域の復興にむけて

学長 中 西 典 彦

本日、甲南大学総合研究所の主催する公開討論会「震災後の復興体験」にお集まり下さった方々に一言ご挨拶申し上げます。

すでに御存知のように、甲南大学では、今回の地震の被害は大きく、教室の約55%と管理棟が使用不可能になりました。小川理事長の英断により震災後直ちにプレハブの仮設校舎の建設がなされ、現在講義が行われています。また2月の入学試験にも、一部の仮設校舎が使われました。7階建ての2号館の取り壊しも6月上旬にはほとんど終了する段取りで、キャンパスが狭くなり学生の皆さんには非常に迷惑をかけている次第です。しかし4月下旬からどちらかというと重い雰囲気に包まれていたキャンパスがぱッと明るくなりました。それは新入生の若々しい笑顔のおかげです。

振り返りますと、1月17日、5時46分52秒、たった10秒間でこの街の様相は一変しました。それまで平和で美しく、近代的な港町だった神戸が10秒後にはこの世のものとは思われない無惨な姿に変わり果ててしまったのです。前夜16日は満月で、燃えるような赤い月であったと聞いています。

本日お集まりの皆様の中には、今後二度とない程の恐ろしい体験をされた方もおられると存じます。地震による物理的なダメージ、そしてそれに伴う様々な心理的影響に対し、どう対応していくのか、また傷ついた人間の心が癒されるにはどうすればいいのか……といった問題が今日のシンポジウムで話し合われることと思います。

この度の震災で、学生の皆さんによる自発的なボランティア活動は実にめざましく、恐れと暗い雰囲気の中にあって、尊い汗が流されたことに対し、私は敬意を表すものです。また、彼らの被災された方々に対する奉仕活動に触れて、非常に暖かいものを感じました。そして、この暖かい心の輪をキャンパスの中で是非広げていきたいと願っております。

最後になりましたが、お忙しい中、基調講演をお引き受け下さった河合隼雄先生、そして貴重なお時間を割いてご参加頂いた8名のシンポジストの方々に厚くお礼申し上げます。

本日の復興シンポジウムが、岡本地区の、東灘区の、そして神戸市の復興に立ち上がっておられる多くの方々の心の支えになり、希望の灯（ともしび）になることを祈ります。

基調講演

日本臨床心理士会会長
兵庫県防災教育検討委員会委員長 河合 隼雄 氏



それでは皆さん、ここにおられる方は震災に遭われた方がほとんどだと思いますが、少しでもお役に立つような話が出来ればと思っております。私も、私の親戚の者が被害に遭いまして、従兄弟が一人死亡したんですが、そういうところから間接的には被災したことになります。私の家は奈良ですので、そんなにもちろんひどくなかった訳ですが、そういうこともおりませながら話をしたいと思います。

実際に今度のような大災害に遭われた方の心が、どのように傷ついたり、傷が残るようなことがあって、そこからどう治っていくかというふうな体験ですが、私は今までそういう方にお会いした事はありません。ただ考えてみると、なんか大変な事が起こって、それを乗り越えて行こうということをされる人とご相談したり、一緒に考えたりということはたくさんあるわけです。非常に典型的な場合でしたら、自分の好きな人が、自分の目の前で交通事故で死んでしまった、という体験をされて、後ももちろん気分が沈んで何も出来ない、それだけだったらいいいですが、自分も後を追って死にたいというふうな、そんな方が来られて、そこからどういうふうに立ち上がり得いかれるか、とかの経験は私もあるんです。もちろん皆さんは震災による体験は本当に様々で、例えば近い場所におられても肉親を失った人もおられるし、家が倒れなかったという人もおられると思

います。これは非常に差があります。非常に大きい被害を被られたり、非常にショックの大きい時は、その所が空白状態になってしまう、そしてその時の事を全然覚えていないというふうな方がおられると思います。

私の知ってる人にお聞きしましたが、自分が住んでいる所はあまりたいしたことがなかったけれど、すぐ近くに両親が住んでいて、その両親の方は古い家に住んでいますから、危ないと思ってすぐ飛んで行ったんですが、するとお母さんが泣いておられて、お聞きするとまだお父さんが下敷きになって出て来られない。それでお母さんに「僕が来たから安心しなさい。」と言って必死になってお父さんを皆で救い出したんです。そして「よかった、よかった。」ということで「二人で避難所に行きなさい。」と言って、仕事の関係でこっちに帰ってきて、何時間か経って、避難所へ行ったらもうお父さんは元気になられて、そこらへんを歩いておられて、他の人が「大変でしたですねえ。」と言ったら、「いやあ、たいしたことありませんよ。」と言って自分が下敷きになったことを全然覚えておられないんです。自分は助けてもらったということも覚えておられないんです。もう全く空白になっているわけです。今度お母さんに会いますと、お母さんは、「お前今頃来たんかいな、実は非常に親切な人に助けてもらったんだよ、お父さんは。」と。息子が来て助けてくれたという事は全然覚えておられない。誰か非常に親切な人が救い出して下さったとお母さんは思っておられて、そういうふうに人間というのは気持ちが転倒すると全くわからなくなる。

皆さんもある程度こういう経験をされたかもしれません、すごい事故なんかで怪我をしても痛くないです。その時は感覚が麻痺し感じないようになっているんです。それをそのまま感じたら、人間は痛みとかショックで死んでしまうかもわかりません。だから自分を守る本能としてぱっとそこは切り捨て

てしまう。これはある意味でいうと非常に健康な事です。それをそのまま受けとめてショックで死んだら大変ですから、ぱっとそこはもう忘れてしまっている。しかし人間というのは、忘れることは出来なくて、後から徐々にやってくるわけです。恐らく皆さんの中にも体験した方がおられると思いますが、肉親を亡くされた方などは、死んでいるということはわかつても余り悲しくなかったという人もあります。「ひどいことやられたなあ。」とかよそ事のような気持ちがしてくる。そして考えることというのは、悲しいなんていうよりも、こんなに人が死んだらどこに収容するんだろう、とそんなことばっかり思ってしまう。そして一週間程経った時にだんだん悲しみがやって来るというような事も体験されたと思いますが、非常に大きい悲しみとか苦しみというのは、その時に人間は体験しないようになっています。その時にそのまま体験したら命が危ないわけです。自分の肉親が死んだ時に、私は変な事を考えて冷たい人間だと思う必要は全然ありません。冷たいのではなく、それは本能的に守られているわけです。そして悲しみというのは後の方からじわじわとやって来ます。だから、その時というのはものすごい恐怖というのがありますけれども、その時にわっ、怖かったと覚えている人は、覚えられるだけ良かったといいますか、すごかった人はそれも忘れてしまうくらいなんです。

そういう体験に加えて、この震災なんかの場合は、ようするに自分は何も責任がないという不幸なのです。非常に困った時でも、例えば競輪に行って財産をすってしまったという人は大変不幸ですけれども、やっぱり自分がやったのだから、なんといっても「あんたの責任や」というふうになります。ところが震災の場合は誰の責任でもない。自分の全くあずかり知らない所でものすごい不幸がやって来る。そして私もそういう気持ちを持ちましたが、私は兵庫県の出身で、何か兵庫県の為にしたいという気持ちがありましたので、わりと早い時期に神戸に来たわけですが、その時なかなか電車もうまく乗れなくて、苦労して大阪駅に着くと、学生さんがスキーを担いでスキー一列車に乗ろうとして並んでました。それを見るとだんだん腹が立ってきました、「やめろ。」と言おうかと思いましたけど、考えてみたら世の中というのは本当にそういうもので、非常に不幸な人がおられても、不幸でない人を怒る事は出来ない。そういうふうな、つまり自分の責任でなくばっ

と不幸を背負っている、そして平気でのうのうと生きている人がいるという状況で、皆さんだんだん自分の感情が戻ってくるにつれて、怒りの感情というのが出てくる。

しかしこれは当然だと思います。なぜ私がこんな目に遭わねばならないのか、しかも被害も人によって違うと思います。つまり肉親を亡くされた方は一番大変です。それからもちろん自分の家が潰れたと、その時でもいろんな段階があります。お金をローンで借りて入って、仕事をするつもりでいろんな物を買いこんで、準備した所ではーんとやられた方が実際いらっしゃいます。お医者さんなんかで、開業しようと思って、全部準備が整った所でやられたということは、全くのマイナスになってしまいます。そういうふうな人になると、自分にはなんの責任もないのに自分の所にはものすごいマイナスが起こって、そして大阪に行けばスキー担いで遊びに行く人がいる。或いは、もっとひどい場合は、向かいの家は倒れていないということが実際起ったわけですから、そうすると私はものすごいマイナスを受けているのに、回りの人で平気な人がいる、というのはこれは誰だって怒りの感情が出てくるのは当たり前でして、ものすごい腹が立つ。ものすごい腹が立つけれど、怒って行く相手が無いというのは余計に難しい。地球に向かって怒ってみても、もっとしっかりせえと言ってみても仕方ないわけです。(笑)

だからやっぱり、後でも言いますが、人間の感情というのは、人間対人間の間で怒った方がおさまりやすい。だから例えば怒ると言っても、さっき言いましたように、この地球が悪いと言って地球を殴っているうちにだんだんすっきりしてきたということはないのです。それよりもやはり救援に来た人に「もっと早くやれー。」とか「救援物資の置き方が悪い。」とか、人間に怒らないとおさまらないのです。ここはもうすごく大事な所で、だからもう家族の間でも喧嘩をしなくてもいいのに喧嘩が増えたという家と、よく喧嘩をしてたけれど、地震で仲良くなつたという家と両方あります。これは非常に人間の感情の微妙な所でして、やっぱりなんでこんな私は損をしなければならないかと思ったときに、一番受け入れてくれやすいのは肉親です。隣の家に本当は怒りに行きたいけれども、「お前の家は建っててけしからん。」などといって、これは仕方がないので、隣の家の人に「よかったですね。」と言って、むしゃくしゃした分だけ自分の奥さんに「早くしろー。」

とか言って、そしたら「私はちゃんとやってますよ！」とか言ってしなくてもいい喧嘩をやられたと思います。

この時にしなくてもいい喧嘩を出来るだけいいといふか、極端にいふと肉親が死んでいたら肉親と喧嘩が出来ないから、夫婦で喧嘩が出来るだけでもよかったなという気持ちがちょっとでもあると、喧嘩をしながらでもそれは治まつてくる。その時に怒りが出てくるのは当たり前だとか、怒りを分かち合うのは肉親が一番やりやすいとかということを知らなかつたら、本当はそんな喧嘩しなくともよかったのが、その事がきっかけで本当に喧嘩になつてしまふとか、仲が悪くなつてしまうとかというのがあります。これは皆さん体験しておられると思いますが、今も続きをやっておられる方は、よく考えて下さい。「お前がおってくれるお蔭でよそに火つけんでもええ。」と。(笑) 本当は建つてゐる家に火でもつけたいような時がありますが、我々は絶対それはやつてはならない。しかしやつてはならないけれども、怒りはものすごくあっても当たり前なのです。

実は私はロサンゼルスに友人が多いのですが、前のロサンゼルス地震の体験を聞いていたわけです。で、今度の地震のあと又4月にロサンゼルスに行きました。そしてロサンゼルスの人とよく話し合いをしました。その私の友人が皆言ったのは、日本人はすごい、と。どこがすごいかというと、略奪と暴動が起つらなかつた、そんなのは考えられない、と。そしてこういう事をおしゃってました。ロサンゼルスでもううだし、フランスの僕の友人も言ってましたが、まずなぜ俺の所だけ不幸になるのか、他の人は何にもないのにというような怒りがもっと表現されるというわけです。震災後、避難所にテレビが入りましたが、テレビの映像は外国にも映つてゐるわけです。そうすると、あれが例えばフランスだったらものすごく皆憤慨するでしょう。我々だけがこんなものすごい災害に遭つて、他の人はなにもない、と。そういうことがあるのに日本人の人はそういうことを全然言わない。そしてマイクを持って行くと、「今日は握り飯一つでした。」とかと言って、にこっと微笑むんです。あれはどういう笑いなのかと。ああいう静かな受けとめ方というのを考えられない、奇跡だと凄く褒める人がいました。だから日本人というのは道徳性が高い、倫理性がある、考えられない、とすごく褒めてました。外国ではやはりわーっと怒つたり、そしてその怒りが何にも自分だけ損す

ることはない、この際物でも取つて当たり前といふにちょっと変わると、百貨店なんかにだーっと入り込んで、全部物を奪つてしまつます。今度はそれはほとんど起つていません。

皆さんご存知だと思いますけれども、どつかの百貨店の貴金属を全部取つて行った人は、よそから来た人です。東京から来た人が捕まつてました。そういう専門家は別ですが、どこの世界にも専門家はいますから、それはもう仕方ないですけど、神戸の人々が暴動をやつていません。これはすごく外国人に褒められました。しかし、面白かったのは、私は嬉しくなつくるわけですね、日本人の事を褒めてくれるから。「日本人はいいところがあるんだ。」というかんじで。そうすると必ず言われるのは、「それにしては政府の対応はなんだ。」と。ものすごく対応が遅かったです。それであれも考えられないと。総理大臣の來るのが大分経つてからでした。その点、クリントン大統領は、災害の明くる日に飛んで來るわけです。しかもその時に、心のケアの問題のために、日本のお金にして17億円くらいぱつと予算を決めているんです。そういうふうに政府の方は対応している。日本の政府はものすごく遅い、そして例えスイスから救援のために犬を連れて生存者を探すために来ましたが、そうすると「これは狂犬病の調査のために一週間空港におきましょう。」とか、いったいなにを考えているのだろう、対応もわけがわからないのです。

それで私はそれを聞いてまして、私が思ったのは、皆暴動も略奪もしないということと、政府の対応が遅いというのは、ひょっとしたら日本人の同一の心のあり方からきてるのではないかということです。つまり日本人のいい面と悪い面が出てるというふうに思いました。これは、復興の事を考える上で、大事だと思いますので、私は申し上げたいのですが、非常に割り切った言い方をしますと、人間と人間の関係というのは非常に不思議でして、二人の人間がいますと、二人は、日本語でいいますと“以心伝心”といいますか、気持ちが通じ合う、そして何も言わなくていいという、そういうふうな底で皆つながつてゐるんだ、一緒というそういう感じの関係と、そうではなくて私は私で、貴方は貴方で別々だけれども、我々がもし協力するのであればこういう点は協力しましょうとか、貴方がこうお考えになるんだつたら、私もこう考えましょうというふうに、独立しているんだけれども話合いでちゃんと決めて協力し

て行きましょうというふうな関係と二種類あると思うんです。

日本人の人間関係の今までからやってきたやり方は、話なんかしないでも以心伝心で、だいたいぴたつとわかってるというのが好きなのです。それで皆一緒にじゃないかという考え方なんです。だからいちいち説明しなくとも、もう一緒にやりましょうという気持ちがずっとあるのです。ところがそういう方法は、みんなないことばかり言う人は、日本人は家庭的でいいと言いますが、その方法の悪い面がわかりますか？どこが悪いかと言うと、そういうふうに皆とつながっていると、つながりすぎているから、自分の好きな事、やりたい事がやりにくいのです。例えば皆と一緒に酒でも飲みに行こうという時に、ちょっと酒を飲む気分ではないから、今日は家に帰って本を読もうと思っても、日本人はめったにそんな事は言わないので。行こうという時に、「ちょっと私は読書をしたいと思います。」と言いますと、物凄く嫌われてしまいます。

ところがアメリカ人やフランス人を見ていますと、一人一人がきっちり分かれていって、そして話し合いでまとめていっている。これは、私は日本も外国も知っているので、完全に一長一短で、私はどちらがいいとは言えないと思います。それを一方だけが好きな人は一方をものすごく褒めます。日本は家庭的で皆一緒にいいといふけれど、うちは家族が一体となって、何ものもを言わなくともすっとやっていますというような所では、案外お嫁さんが泣いてたりします。しわ寄せをだれかかぶっているわけです。それはほっといて、皆良かった良かったというふうなことがあるでしょう。そういうのはありませんか？例えばうちのクラブは皆と一緒に一丸となって頑張っていると喜んでいるのは部長さんだけで、皆いややなーと思って、なんで好きな事ができひんのやろーと思って。そういうふうなことはあるでしょう？それで今度外国へ行くと、一人一人が好きな事言ってやっているんだけど、その一人一人が好きな事言って頑張っているというのがちょっとはずれたら、何で俺だけ損せなかんのや、物があつたら取ってもいいじゃないか、というふうになつて、それが悪い方にすすむと略奪、暴動ということになります。日本はまだまだ皆一体感を持っていました。もっとも、昔の日本よりは相当西洋化してから、自分の生活考えられても割と西洋風に個人個人独立して生きておられたと思います。そ

して例えばマンションなんかに住んでおられても、上に住んでいる人に会っても「おはよう」と言うくらいで、何をしてる人かわからなかつたけれど、この地震で親しくなった人が多いでしょう。「おたく、どうでした？」とか、「くにへ帰りますんでよろしく。」とか、「水は出ますか？」とか言っているうちに段々親しくなつて、職業までわかつたりして。そういうのをやろうと思えばすっと出来るところの素地を我々皆持っているんです。

だから避難所なんか行っても、もめた所もいろいろあるでしょうが、外国と比べたら、ヨーロッパとかアメリカと比べたら、日本の避難所は静かで、皆がちゃんと行動しています。それは日本人のいいところなんです。悪いところはどういうところかと言うと、政府の役人もお互いがつながりすぎている。だから「震災だから首相として明くる日に行った方がいいだろうけど、官房長官はどう考えるかな。」と。で官房長官の方は、「私はいいんですけど、自民党の方が…。」とかと言って、別にこれは聞いたわけじゃないんですが、絶対そうだと思うんです。皆いろいろと考えて、「どなたかまだおられないんです。」とか、朝でしたから、「起きられるまで待ちましょう。」と言っているうちに段々日が経ってきて、「じゃあ、」なんて言うともう三日ぐらい経っているわけです。だから非常に迅速に政府は対応したつもりですけれど、遅くなっていた。例えばさっきの狂犬病の話でもそうですね。この際、人命がかかっているんだからというようなことは僕等が言うようなことであつて、その係の人がぱっとそれを通して、後でどう言われるかわからない。「お前は、勝手な事をやっている。」と。例えば架空の話ですが、イスラエルから来た時、普通だったら狂犬病の検査で一週間とどめるところを、「これは生死がかかわる。私の責任で通しましょう。」と言ったとします。そしてイスラエルの部隊が来て、命が助かったとします。すると新聞社がものすごく喜んで、税関のなんとか様はえらい人や、と。決断をされて、ルールを破つてやられた、というふうに新聞にのると、たいていその人は内部では嫌われると思います。「おいおい、一人占めしやがって。」とか、「勝手な事する。」とか。皆から褒められる程その人は税關の中では嫌われるかもわかりません。しかしその時に狂犬やとかぶつぶつ言つてたら、新聞から叩かれるかもしれないが、仲間同志では何も問題は起こりません。「しゃーないなー。」と言ってたらおしまいですから。

だからこの中にもおられると思いますが、私は避難所を預かられた校長先生方に聞いたんですが、校長先生は本当に大変だったと思います。自分は何も教育委員会から校長の辞令をもらっているだけで、避難所長を命ずるなんてどこにも書いてないわけです。ところが急に避難所長になったわけです。ある校長先生に聞いた話では、決断しなければならなくなつた時過去の記録や資料を引っ繰り返して探したそうです。関東大震災の時のとかね。つまり、前例があるとやりやすいんです。前例に基づいてやりました、と言うと通りやすいんです。ところがそんなものはないから、全部一人で判断していかないといけないわけで、そりやもう大変だったと思います。例えば、救援物資がたくさん入ってきた時に、数が足りなくても引き受けてお年寄りや子供にやった方が良いのか、100人いれば100個分が無ければもういりません、100人いるのに28個ではケンカの元だから返してしまえと言った方が良いのか、ということも全部校長先生自身の判断になるわけです。そういう時にどんな前例があるか、どこかに記録が残っているかと探すわけですが、そんなものは残ってるわけないでしょう。だからその時に今言いましたように、自分の判断でばんばん決断していかなければならないわけです。ところが、日本人はそれがとても下手だと思うんです。日本で、皆さん自分の生き方を見ておられたらわかると思うんですが、何もかも自分で考えてはめったにやらないですね。あっちへいったりこっちへいったりいろんなところとつながりながらやってますね。私が申し上げたいのは、これは一長一短んですよ。どっちがいいということはないんです。日本は、日本の良さで暴動・略奪が起らなかった。しかし、決断を迫られるというところでは、ばかなことをいっぱいやっているわけです。で、ちょっと先取りして言いますと、皆さんの心の問題で、この大変なマイナスをプラスに生かそうと思ったら、そういうふうな日本のつながりを維持しながら、ここぞという時に決断できる人間はあり得るのだろうか、また自分はそれになり得るのだろうかということをものすごく考えてほしいと思うんです。私は、常にそういう気持ちでおればできると思っています。できると言いましたが、そんなものの簡単にはいきませんよ。上手にはいきませんけれども、私が言ったようなことを心に留めているだけでも大分違うと思います。この際は、決断しなければならないと決めた場合には、とにかくやろうとい

うふうにする。そして、いつもいつもそういう人間じゃなくて、やっぱり心のつながりで生きているというのもこれまた非常にいい味があるので、この味は、これから日本がどんどん近代化しますます現代も越えるようになっていくんだけれども、そういう我々の持っている人間関係というのは、ある程度維持していっていいんじゃないかなと、私は思っています。

先に言ってしまいましたが、また話を元に返しますと、皆さんはさっき言いました怒りの感情、そして悲しみ、これは当然ですね。肉親を亡くしたりすれば悲しいのは当然です。まあいわば、変なものがぼっと心の中に入ったようなですから、何とかしてこれを心の中でうまく消化していかなければいけないわけですね。それで、その体験を心の中に治めていく為には、また、そこに伴った感情、怒りや悲しみというものを治めていくには、一番いいのはそれを出しても本当にわかってくれる人に向かって表現するということです。これは誤解されまして、そういう悲しみや苦しみはどんどん外に出したらいいんだと、中に持ったままにしていると傷が残るから出せばいいんだと簡単に言われ過ぎて、皆さんの中にもそういう被害を被った人がいるかもしれません。ご親切な人が来て、「震災の体験をしゃべって下さい。」「大変でしたね。何かしゃべって下さい。」と言ってきますが、そんな見も知らない人にしゃべって、心が治まるはずがないんです。まあ、見も知らない人が言ってきててもこの人なら言えるという人に言ってこそ意味があるんであって、だからそのところが不間にされてちょっと残念だったので、僕は新聞などにも書きましたが、人間関係があるところで表現するから傷は治っていくわけです。そのことがすごく大事だと思います。

皆さんは、地震の話は何回もされたと思いますが、やっぱりちゃんと相手を選んで話したと思います。仲のいい人とか親類の人とか言っても分かる人とか、あるいは勿論全然知らない人でも避難所へ行ったら皆同じ体験してますから、同じ体験をした者同志分かちあいやすいといいますか、人間と人間の心の交流があるところで、怒りとか悲しみとか出しから意味があるわけです。自分の子供が亡くなったとか、夫が亡くなったとかいう場合でも、泣いたってその涙を受けとめてくれるから泣けるのであって、何でもないのに悲しかったらどうぞ涙を出して下さいとか言われても、これは出来るはずがない。だか

らボランティアの人なんかで、そういうことをやろうとしている人達に僕は言ったんですけれど、「あなた方、よっぽど気を付けて下さい、あなた自分で考えたら分かるでしょう。あなたが失恋した時に急に新聞社が出てきて、『失恋の悩みを語って下さい。大分すっきりするでしょう。』なんて言ったら、ばかやろーと言いたくなりますね。だからそんな単純なものではない。」と。

そしてこれはある程度繰り返して話すことになります。一回言ってすっきりするというわけにはいきません。だから何度も話されたと思います。これはロサンゼルスにいた時にも聞いた話ですけれども、そのロサンゼルスで物凄い被害に遭った人が、アメリカはよくパーティーをしますが、この時に自分の被災の苦しい体験を話されると、皆は聞いているんですが、あまり大きい声でいつも同じ話されるから、だんだん皆に敬遠されて、だれも話を聞かなくなってしまいました。皆が敬遠するので、だんだんおかしく思うようになってきて、我々のような心理学をやっている者のところへ相談に来るんです。その人が話されるのには、気の毒な事にパーティで話をしても聞いてる相手が本当にがっちり受けとめてくれないわけです。軽く受け答えをされてしまうと、言った意味がない。だからそこの表現する者と聞く者との人間関係というのが非常に大事なわけです。そしてそういうふうな、心の中に大変な異物が入ってきたような、傷を受けたような、そういう状況が治まっていく時に、もちろんそこに伴う感情を表現するという事も大事ですけれど、しかし考えてみたら悲しかった、辛かったとある程度分かってもらえたとしても、別に家が建つわけではありません。「分かった、分かった。」と言ってもらって壊れた家はそのままだし、そして皆が「気の毒でしたね。」といふくら言ってくれても死んだ人が生き返るってことはあり得ないです。

ローンのある人の場合、「そうですか、じゃあ代わりにローンを払って上げましょう。」と言ってくれる人はいないですから、それは自分が持たねばならない。だからマイナスの物が、そう簡単に消滅するはずがない。で、その時に誰でも考えますが、「何故こんな事になったのか。」と。で、もちろん地震やと言えばそれまでですが、そういう意味ではなくて、「何故自分がこんな不幸な目に遭わねばならないか。」と。それで他の人を見ていたら被害の軽い人もいる。もちろん神戸の外へ出れば全然不幸

にならない人がいる。こういう時の「何故？」というのは凄く難しいわけです。皆おわかりだと思いますが、何故うちの家は壊れたのか、それは地震です、というのは説明にならないのです。そんな事を聞いているのではなくて、「何で私だけ損してるんだ。」と聞いているのは、「私はこれをどう心に治めたらいいですか。」と言っているわけです。そしてそれは自分でやっていくしかない。その時に一番簡単に納得しようと思ったら、これも運命だ、しょうがないと思う他ない。そして日本人の人は「これも運命だ、しょうがない。」と思う人が非常に多いのではないか。

その時にもう一つの考え方があります。それは、「何故こんな事があったんや、これは運命や、しょうがない。」というふうな考え方をしない。考えなくて、なんでやとか運命やとか考えるひまがあるんだったら「家が潰れているんだから、これを何とかしよう。」と。だから今から自分はどこで働くか、新しい場所で心機一転頑張っていこうという時に運命やとか考えず「頑張ろう、頑張ろう」とずっと頑張っていって、それを克服する事によって治めていく。外国人を見ていて、「しょうがない、運命だ。」とあまり言わなくて、「ともかくこの場から頑張って行こう。」と、いうふうな言い方をする人が多いと思います。

面白かったのは、小学校の子供さん達の作文を見てますと、「こういう運命やったんや。」と。中には、「我々人間があまり勝手な事ばっかりしたので、皆がもっと考え直さないかんというふうな一種の罰だった。」と書いている子供がいるし、片一方では、「我々は、もっと科学を発達させて震度8でも9でも潰れないような物を造ろう。」と書いているのがあります。これはすごく面白いです。私はどっちがいいとか悪いとか言う気はありません。人によってそれほど受けとめ方の違いがあります。ただし、今言いました「しょうがない、運命だ。」から次に続くのは「頑張ろう。」と「ほっとこう。」と両方あります。どのへんのところで気持ちが転換するか、そして今言いましたように、「運命もくそもない、とにかく頑張ったらええんや。」と言って頑張ってる人で、ときどき2年も3年も経ってから前の悲しみや怒りというのが後でぼーんと出てくる事もあります。これはもうその人によってずいぶん違います。

で、皆さん、自分はどういうタイプかな、どういうふうにやっているかなと考えて下さい。皆一長

一短なんですね。あまり人の真似はできません。隣の家の真似をしようとしても出来ないんで、自分のやり方をやりながら、「自分はこういうふうにやってきてるけれども、今頑張っているけれどももしかしたらぶりかえしが来るかもしれないけれど、来たら来た時のこと。」と思ってやるか、「しばらくはもうええわ、ほーっとしてたらええわ、せっかく大変な事があったんやから、それはそれで運命や、暫くやってて、まあ気分が動いたらやりましょか。」というのも一つのやり方です。それは自分のやり方を考えてやられたらいいと思います。ただその中でいろんな方法があるし、いろんな考え方がある、というふうに自分で思って頂いたらいいと思います。そして今言いましたように、傷があって、その傷があるためにずっと不安とか悲しみとか怒りとかいうのが、1年も2年もずっと残っていく人がいます。これは新聞でよく論じられましたが、PTSDとかいうような名前つけて言われました。私はまだわかりませんけど、欧米に比べると日本の方はそういう傷が後をひく事が少ないんじゃないかなと思っています。というのはさっき言いましたように、日本には全体として皆で受けとめているところがあります。皆で受けとめて、皆で分かち合っているところがありますから、一人自分の傷を背負って、それが後々まで尾をひくというのは、まだこれからですので簡単に言えませんが、少ないんじゃないかなというふうに思っています。

そしてロサンゼルスで聞いた一つの体験を言いますと、こういうのがありました。子供さんで、やっぱり不安がきつくって、1年経ってもうろうろして授業なんか余り聞いてない。別に知能に問題があるというわけでもないし、何でもないんですけど、不安がきつくて困るというふうな子供さんが、私の知っている心理学者のところへ連れて来られたんですが、そしてその子に、我々がやっている箱庭療法というものですが、箱庭を作ってもらうと、ものすごく熱心に作り出して、どんなを作ったかというと、砂を固めて固めてすっごい大きいお城を作ったんです。そしてそのお城を叩いて叩いて、ものすごいしっかりしたお城を作って、「これしっかりしてやろ、しっかりしてやろ。」と何回も言うんです。「しっかりしてんな。」と言うと、「しっかりしてやる。」といいながらばんばん叩いてものすごいがっちりした山作って、山の上にお城を作つてものすごい建築物を作ったんです。そしてその子が言うには、「も

う大丈夫、もう絶対大丈夫。もう僕はこれで来んでもいいんや、もう大丈夫や。」と言って、この後本当に大丈夫になって、不安が消えていったというのを聞いたことがあります、これは非常にめずらしいです。それなんかは、結局子供さんと私に話をしてくれた治療者との間に非常にいい人間関係が出来た訳です。この人やったらわかってくれるというか、この人やったら大丈夫という感じがしたんじゃないでしょうか。そしてこの人に、「もっとしっかりした基盤がないと僕は危ないんや。」ということを言っているうちに、段々しっかりした物が出来てきた訳です。それを作っているうちにその子の心の中にまでだんだん基盤が出来てきて、そしてそこでもう「僕は大丈夫。」ということがはっきり言えたって言うんです。

これはもうすごい体験ですが、子供達というのは見ていますと、そういう遊びの中で心が癒されていくということを相当やっていると思います。だから子供の書いている絵なんかでも、そういう不安があったのがだんだん治まっていく、しっかりしていくというのが絵の中に出たりします。ところがこれも間違われて、「絵書いたら治るそうや。」といって、避難所行って「絵書きなさい。」というのも無茶な話で、同じ事言いますが、人間関係があつてその中で、「地震の絵を書きなさい。」じゃなくて「好きなように絵を書きなさい。」というのが大事なんです。無理に地震の絵を書いたら治るというような単純なものじゃないんです。それでこの人はわかってくれるという人に自由にやっているうちにそこにその人の心が表現されて、かたまって、うまくいくと治っていくんであって、森先生はそういう事を考えながら、子供に絵を書いてもらっている。おそらく自由に絵を書いてもらったと思うが、無理になにも地震の絵を書く必要はないんです。それをちょっと間違われて、子供を見つけては地震の絵を書かせている人がおられましたが、子供の方こそ迷惑です。もちろん自由に書いている中に地震の事が出てくることもあるし、単に地震ということじゃなくて、自分の心が非常に憂鬱だと、暗いとか、しんどいとかという事が絵に表現されたりということもあります。それがだんだん癒されていくんです。

この癒されていく時にもうひとつ面白いのは、夢というのもあります。これは典型的なのは、地震と同じような夢を見るんだけど、だんだん間違になって、すーっと消えていくといいますか、だから夢の

中でも「わーっ地震や。」と思ってぐらぐらときても、ぱっと目が覚めて、「ああ良かった。」と思いますね。それが例えば3日後に夢見るけど、暫く見なかつたのに、1ヶ月ほどしてそんな夢が出てきて、あるいは今度出できたら、ぐらぐらときたけどまあたいたことないなあという夢を見て、そしてもう後無くなつたというか、そういう夢が余震みたいにちょんちょんと出きて、すーっと消えてしまうというこういう体験をする人もあると思います。私がそれと非常に似たことを私のところに相談に来た人が言うには、それはスイスでお会いしたハンガリーの人ですけれど、昔ハンガリーにソ連の戦車が攻め込んで来た時に、ソ連の戦車に追いかけ回されて、必死になって国境を逃げて、スイスまで逃げて来る途中で撃たれて負傷しながら逃げて來た人なんですが、もうハンガリーの動乱から何年も経つからですが、夢の中でその動乱の時の恐ろしい夢がそのまま出てきて、そしてその話を私にされるわけです。どんなにソ連軍が無茶な事したかとか。それを私が一生懸命お聞きして、「大変でしたねえ。」と言ったんですが、それは大変でしたねというしか仕方がないんです。それが二回ほどありました。そしてそれからだいぶん経って、そういう不安とかがなくなりましたと言っておられましたが、それはやっぱり人間の心の中でもういっぺんおさめかえすというか、体験しながらおさめかえすのを夢でやるというのがあります。だから子供さんの中にはそれをやってる場合が時々あるんじゃないかなと思います。夢で、地震の夢見てぎゃーと泣いたりするのは、あまり心配はいりません。「よしよし、もう大丈夫よ。」と言っておけばいいわけです。大丈夫、大丈夫というのがずーといけばおさまってきます。

そういうのを見ていると人間の心というのは、すごいなと思いますね。そしてうまい事消化出来なかったものをもういっぺん噛んで消化するみたいなものですね。もういっぺん夢で体験してだんだん心でおさめていくというような事が自然に出来るんです。だから結局のところはなんのかんのと言つたって、その人自身の治る力というんですかねえ、そういう力によってずーとうまく治まっていく、その治まり方がいろいろあるわけです。そしてだいたいそういう事が片付いてきて、辛かったけども治まってきた、そして1年も経てば、勿論いろいろ大変な事があったけれども、もうそんな事言っておれない、自分は頑張っていこうというふうに頑張っていくこ

とになります。そして頑張ってやっているんだけど、例えば震災から3年くらい経つて、何かの拍子で「何で自分だけが地震でこんな損せなあかんのや。」「あの損した事は忘れられへん。」なんて事を急に皆に言いたくなつたりですね、もういっぺんむかむかと腹が立つたり、要するに古傷が痛むような体験が出てくることがあると思います。すると「自分は地震の事は、大変やつたけど心におさめて随分頑張つたうのにな、3年も経つて又出てくるのは不思議だな。」というふうに思うだけではなくて、なんかその古傷と対応するような心のあり方を自分がその中でしていなかつたかと考えられるとわかる時があります。

もうちょっと具体的に例をあげますと、地震の事で怒っているように思うんだけど、友達の中で5、6人でちょっと好きな事して自分だけはねられたような気がしたとき、そういう俺だけ損してるというふうに思うような事が、地震の体験と共鳴するんです。そういう時というのは、もう一回ばーっと怒りが出てきます。そういう時に「又地震の事思つてるわ。」と思わなくて、「ははーん、俺は又自分だけ損するというテーマが又出てきてる。これはどういうふうに考えたらええかなあ。」というふうに考え直されますと、なるほど、というふうにわかると思います。そしてこれは考えてみたら、人生で俺だけ損してると思う時が時々あるでしょう？ 全然地震と関係なくてもね。損しないけど俺だけ損すると思つたくなる時ありますね。これは言ってみたら永遠のテーマなんです。何にもなかつたのに、責任も何にもないのに俺だけ何で損せなあかんのや、と言いたくなるような時は、地震と関係なく誰の人生でもいつもあるわけです。だからその事と、皆さんの地震の体験というのは共鳴しあうというのがありますので、今からよく覚えておいてください。2年後とか3年後とかに急に地震の事思い出してがーっと腹がたつたりした時は、「又昔のことを思い出している。」と思わんと、「『俺だけ損してる』というテーマがはたらいてる。」とかと考えてみられる、なるほどと思い当たる事があると思います。

これは、私の例で言いますと、例えれば若い人は別ですが、我々の年齢でいくと、アメリカに負けて日本人として物凄く劣等感があって、アメリカ人と見るとなんなくアメリカが偉いように思つたり、アメリカ人と見るとやっつけたくなつたりと、そういうふうな劣等感を僕が持つているとしますと、そ

するとそういう劣等感を持ってたとしても、アメリカ行ったり友達が出来たりしてずっと治ってしまって、「もう自分はそんな劣等感なんかなくなつた、普通にアメリカ人と付き合っている。」というふうに私が思ってても、何かのかげんで急に「やっぱり日本人を差別しやがる。」とかが一とつそういう気持ちが起こってくることがあります。それは「僕はこれだけ考えてもうそういう気持ちなくしてたのに、又出てきた。」というふうに思わなくて、「ははーっ、ここは日本人とアメリカ人とか、そういう劣等感とか、差別感とかいうふうな問題でもっと考えねばならない、もういっちょ考えなおさなあかん。」というふうに思うと、思い当たる時があります。要するに、考えてみたら劣等感なんてものは、ある意味で一生つきまとうところがあるんです。それを掘り下げ掘り下げて自分を鍛えて行くわけです。又もっと鍛えねばならないという時には、そのテー

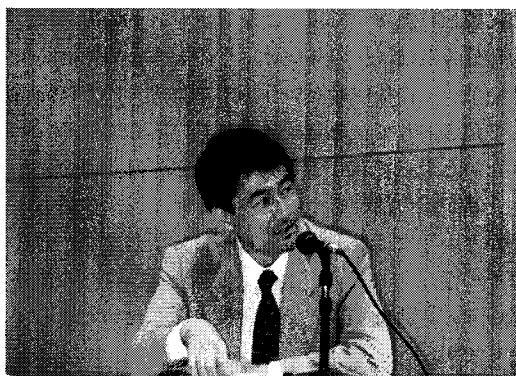
マがもういっぺん出てくる訳です。

だから皆さんもこの地震の事がふいに心の中に出てきたら、「俺はまだそんな事気にしてる。」と思わなくて、「これはもういっちょ自分を深めねばならない、考えなおさねばならない。」とか、「自分で損するという考え方ばっかりとらわれんと、もう少し広い見方が出来るんじゃないだろうか。」と考えられると、せっかく克服した事がもういっぺん出てきたというんじゃなくて、それが一つの自分を鍛えていく契機になっているといいますか、そういうふうな意味あいもあるので、これも良く覚えておいて下さい。おそらく皆さんその体験をされると思います。或いは今から10年後にもういっぺんあの地震の夢を見たとすると、「なんや、10年経っても覚えてるわ。」と言うんじゃなくて、それによって又自分がむしろ鍛えられていくんだというふうな考え方をしてみて下さい。

シンポジストからの報告と公開討論

【シンポジスト紹介（報告者順）】（平成7年5月21日 公開討論会 当時）

司 会 森 茂 起（甲南大学文学部助教授 臨床心理学）
シンポジスト 太田 一 郎（東灘区御影公会堂ボランティアリーダー）
小 山 博 昭（甲南大学ボランティアリーダー）
須 坂 久（本山第二小学校校長）
橋 谷 惟 子（「美しい街岡本協議会」メンバー）
西 崎 敬四郎（「美しい街岡本協議会」メンバー）
皆 藤 章（大阪市立大学文学部助教授 臨床心理学）
林 春 男（京都大学防災研究所助教授）



【森先生】

今紹介にあずかりました、森と申します。甲南大学で心理学を教えていまして、今回こういう討論会をひらくということで企画に加わって考えてきました。討論会の方では、今壇上に上がって頂きましたような先生方、地域の方とこれから討論を進めていきたいと思います。まず最初にご紹介しないといけないんですけど、席の順番でご紹介致しますと、一

番こちらにおられますのが太田さんとおっしゃいまして、東灘区の御影公会堂の方で震災直後からボランティアとして入っておられまして、ずっと現在に至るまでボランティアのリーダーとして活動されてきました。避難所の方の現状とか、困難とかそのあたりをつぶさに体験して来られたという方です。どうぞ宜しくお願ひします。（拍手）

お隣の小山さんですけれども、小山さんは甲南大学の学生で、太田先生からも紹介がありましたように、ここが避難所になっていた時に、ボランティアリーダーをなさっていました。そういうふうな学生さんとしてのボランティアを経験された方です。どうぞ宜しくお願ひします。（拍手）それから、お隣は須坂先生とおっしゃいまして、本山第2小学校の校長先生でいらっしゃいます。こちらも避難所として現在に至るまでありますて、たまたまなんでしょうけどもずいぶんマスコミが入り、映像として出てくる機会が多くかった場所です。今回の震災では、小学校というのが非常に大きな役割を果たしたというのもあると思います。それはこの東灘区だけではなくて、全ての地区でそうだったと思います。そういう学校の先生として今回の震災を体験されたという意味で来て頂きました。どうぞ宜しくお願ひします。

（拍手）

それから、避難所というのは特に震災で被害の大きい方が入っておられますし、非常にマスコミなんかでもとり上げられたんですが、避難所だけが被災地ではないのは当然です。地域の方で様々な形で被災というものがおこっていまして、そういうことから岡本の「美しい街岡本協議会」というところで活動

されている、地元の街づくりを考えておられる方お二人をお招き致しました。橋谷さんと、西崎先生です。(拍手) 西崎先生は眼科医院を開業されておりまして、医者としての立場で患者さんからいろいろ被災の話なども聞いているとお聞きしております。

それからその向こうにおられますのが、皆藤先生とおっしゃいまして、大阪市立大学の方で心理学をなさっている先生なんですが、実はこの秋から甲南大学に赴任される事が決まっておりまして、我々の仲間ということで加わって頂きました。それから皆さんの中にも書いて頂いた方がいると思うんですが、東灘区にお住まいの方に今回の被災の体験を被災直後から現在に至るまでを日記風といいますか、時間的に辿りながら書いて頂く体験記というものをお願いしましたところ、かなりの方に書いて頂きまして、しかもこの機会に体験をまとめておきたいということで、かなり詳しい力作も頂いております。それで皆藤先生にはその内容を読んで頂きまして、その中について少しどんな体験が出ていたとかというような事も報告の中でして頂きたいと思っております。宜しくお願ひします。(拍手)

それからあちらが林先生で、京都大学の防災研究所の助教授をなさっております。防災心理学を専門になさっています。今回震災後も神戸市や兵庫県の震災後の復興計画とかというようなものに、どういうふうなアイデアをもりこんだらいいかというような事で、ショッちゅう神戸に来られて神戸の背後からのサポートというような役割で、心理学者として関わっておられる先生です。宜しくお願ひします。

(拍手)

今日のシンポジウムの目的ですけれども、『震災後の復興体験』というようなタイトルをつけましたが、震災直後というのはこんなふうに集まって話し合うというような機会を持つことなど考えられない本当に混乱した状況で、皆さん方も我々も家庭とか職場で被災して混乱した状況だったと思います。ただ3ヶ月、4ヶ月とだんだんそういうふうな時が経つにつれて、少し振り返ったりとか体験を確認したり出来る様な時期に入ってきた時に、被災した大学として、東灘区という地域の中にいる人間として、地域の方と一緒に話し合いができる機会をもって、体験を語り合いたいというところが動機にあります、こういうシンポジウムを企画致しました。

シンポジウムのようなものはよく開かれておりますけれども、例えばボランティアとしてどうあるべ

きかとか、或いは神戸市の建物の復興はどうしたらいいかとか、一つのテーマを目指した討論会というのではなくあると思いますが、今回は一つの問題を解決するというような目的ではございませんで、本当にいろんな立場から震災を体験した人に来て頂いて、体験を話して頂く事で震災という体験が我々にとってどういうものだったかというようなことが見えてこないかなと、そして一人の人間としてはその中の本当に狭い範囲しか体験してないんですけども、他の立場からの体験というものを聞くことによって、違う光が自分の体験に当たるというような事があればいいんじゃないかなというふうに思いましたこのようなシンポジウムに致しました。それからフロアーの方、会場の方、地元からたくさんの方に来て頂いておりまして、こちらの上に上がって頂いた方は、我々から依頼出来た方に来て頂いたんですが、東灘区でいろんな形で体験なさった皆様からも後の討論の方でどんどん発言して頂いて、こちらで足りない分を補って頂いて、会場と壇上の境目がないような形で話が進めていけたらと思います。私もどういうふうにまとまっていくのか全然判りませんので、本当にいろんな体験が出て、それがもりあがって終わってもいいでしょうし、何か一つの方向性が見えてくればそれも主催者として非常に嬉しいことです。少し不安と期待を持ちながら進めていきたいと思います。それでは進め方ですが、初めに壇上に上がって頂いたシンポジストの方々に、約10分程度被災後の体験というのをまとめて話して頂いて、その後討論という形でフロアーの方に発言して頂きまして、あとは話の流れに応じて進めていきたいと思っております。それから先ほど河合先生が、私が絵の活動をやっておりまして、その話を出るかというような事をおっしゃってましたが、今日はその話はしません。(笑) 東灘区での我々の体験というのを共有する方で司会役に徹したいと思っております。

それではこちらに並んで頂いた順番で進めたいと思いますので太田さんから話して頂きたいと思います。宜しくお願ひします。

【太田さん】

どうもはじめまして、太田一郎と申します。1月20日に御影公会堂に入りまして、それからずっと活動を続けてきたんですけども、ついこの前5月17日に、最後はあれだけたくさんいたボランティアも



私と細井という人と二人になってしまいまして、引っ越しの手伝いとか細々と活動していたんですけども、ついに仕事もなくなりまして一応解散という形で終わりました。それでこれから話をさせて頂くんですけども、自分でもまだ気持ちの整理がついていないところがあります。実際自分にとってこの阪神大震災というのは何だったんだろうかとか、自分のやってきたボランティア活動とは何だったんだろうかとか、本当にそれは正しかったんだろうかとか、未だに自分に問い合わせている状態で、本当に今日は何をしゃべっていいのか分からないんですけども、ボランティアから見た現実というものを伝えられたらそれでいいんじゃないかなと思って話したいと思います。自己紹介なんですけれども、私はちょうど今無職の状態で、たまたま何もする事がなかったのと、それで西宮の実家に戻ってまして、地震を体験したんですけど、幸いな事に私の実家は大丈夫だったんですが、2日位家の中の片付けをしまして、ふと六甲山の方を見ますと、六甲山が煙で隠れる程神戸の街が燃えて見えなくなってるんですね。これはあかん、何かせなあかん、と思いまして、一番ひどい所はどこやと区役所で聞いて、自転車で御影公会堂に辿りついたというわけです。そしてそこから御影公会堂での活動でいったい何をしたのかと説明しますと、この前新聞でちょっと読んだんですけれど、被災者の心理的な動きから大きく3つの段階に分かれるんじゃないかという記事がありました。ああ、なるほどなあと思いまして、それにちょっとなぞらえながら話せたらいいんじゃないかなと思います。大きく分けますと、第1期のパニック期、第2期の連帯意識が芽生える時期、第3期の自我とか欲望が生じる時期という、避難所においてはそういう3つの段階があるという事があります。公会堂でも実際そのような状況で、それを

ふまえていきたいと思います。まずパニック期なんですけれども、1月20日に辿り着いた当初は、本当に何を始めたらいのかわからなくて、公会堂の方にも市の職員が詰めていたんですけども、市の職員は日替わりで替わっちゃうんです、メンバーが。それで被災者の方もいろいろ何をしていいのか分からない状態で、誰も引っ張る人とかまとめて何かする人というのがいなかったんです。比較的私はいわゆる第三者で、冷静に物事を見たり、考える事が出来ましたので、「これはこうしたらえんちゃうか、これはこうしょう」といろいろやっているうちに自分の責任分野が自然に大きくなってしまったんですが、だから本来ならばボランティアというのは出来ないところをサポートするとか、縁の下の力持ち的な立場が正しいと思うんですけども、そういうような事も言っておれなかって、「しゃあない、誰がするんや」と言うことで、「じゃあ自分しかないな」という感じで自分でもそんな大きな事するつもりなかったんですけども、自然にそうなっていったという事があります。だから後になってボランティアが自立の妨げになるとか、おんぶにだっこになってしまったとか、比較的落ちついてからよく言われたんですけども、実はそのような経緯があったというわけです。他の避難所のボランティアの仲間に聞いても、最初は誰も引っ張る人がいなかったからしうがなかったという人が多かったです。まあパニック期というのは本当にひどいもので、水も通ってない、電気も通ってない、何もないという事で、一番驚いたのがトイレに関する事なんですが、本當は公会堂のプライバシーに関する事は申し上げたくないんですが、せっかくのこの機会ですからいろんな事をぶちまけてもいいんじゃないかと思いまして申し上げますと、トイレが本当に、汚い話ですが“でんこもり”的な状態になっているんです。何でこんなになっちゃうのかと、自分でも不思議で、「誰か掃除せなあかん」という事でボランティアとかが掃除してたんですが、水をちゃんと置いているのに自分のした後をきちんと流す人が皆無に近かったんです。これじゃあちょっとやってられないなという事で、市の職員なんかに相談したんですけど、「皆で助け合いの精神で行きましょう」と皆さんに呼びかけました。この呼びかけは後になって功を奏した部分がありまして、初期の頃にそう呼びかけて良かったなと思いました。ですからトイレに関してもいろんな生活に対しても「助け合いの精神で行きましょ

う」という事で解消された問題というのも数多くありました。そして第2期ですが、連帯意識の芽生える時期でして、これは私達ボランティアにとって非常に大きな転機でした。すごく嬉しい事でもありました。だいたい2月の頭ぐらいからなんですが、ちょっと落ちつき始めて、「このままではボランティアにおんぶにだっこだ」という事がしきりに言われるようになりました。ボランティアの間でも「このままでこんな運営の中心に立っているわけにはいかない」とか、そういう意見も出てきて、私もそれを痛感していたんですけども、代表者の話し合いがもたれまして、少しづつ自治運営化を進めていくという事になりました。ですから急に私達が全部やってる事を一気に引き渡す事は出来ませんので、出来るところから徐々に移行していくという形で、自治運営化に向けてのスタートラインがひかれました。その辺なんですけれども、ボランティアというのは全国からどんどん人が来まして、本当に膨大な人数でした。それで本当は移行に伴って、ボランティアの数というのも減少していく、いわゆる力関係の大きさの移行と共に人数も減らしていくかなくちゃならないんですが、人は後から後から押し寄せてきますので、ボランティアに来る人もなんとかせなあかん、折角これだけ人手があるので、この人手を活用しないことには意味がないと思いまして、いろんな活用法を考えました。一番最初に思いましたのが、避難所だけが我々ボランティアのサポートする場じゃないというのがありましたので、いわゆる避難所の外へ目を向けて、実は避難所の外にも壊れかけの家で困っている人がいるとか、公園の中でテントを張って暮らしている人もいるということがありましたので、その方達にも物資援助など何かの援助が出来ないかと考え、丁度そのころボランティアの人がたくさん来てましたので、一軒一軒のいわゆるローラー作戦をしました。その中から一軒一軒廻って、困っている人がいないかどうかとか色々調べまして、そっから公園での生活者達との繋がりとかいろいろ聞きまして、後になって役に立ったという事がありました。ボランティアの数がかなりいたというのは3月の中頃まで続いていました。

第3期の自我と欲望が芽生える時期なんですけれども、この頃から色々人間関係のトラブルとか、避難所の内と外、いわゆる格差の問題とかが目につき始めました。やっぱり避難所の中でも集団生活をせざるをえないという状況の中で、いろんな人との確

執とかありまして、又「避難所の外の人は家があるのになぜ物資援助をするのか」とかそういう事を私のところにもおっしゃる方がいました、私もそれについてなんともできないものがありましたので、結構苦しんだ時期もあります。そういう人間関係のトラブルとか、格差に関する問題とかで、私とかボランティアの方に相談してくる人が多かったんです。ですから被災者の方のいろんな悩みを聞くっていうのもその頃一日の中で大きな比重を占めていたように思います。

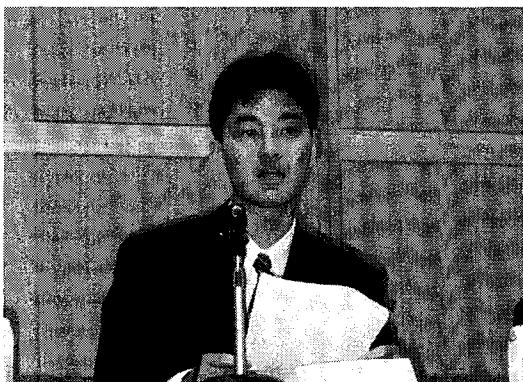
そろそろ締めくくりたいと思いますが、御影公会堂で今までボランティアをやってきて、私がやってきた事はベストかというと自分でも疑問であるように思います。何故かといいますと、まず物事始める前にゆっくり考えたり、熟慮する事が必要じゃないかと思うんですけども、そうする暇が全くなかったもので、取り敢えずこれを始めちゃって後から問題が出てきたら方向修正をしていくという、そういう方法ばっかり取ってきたもので、自分でもやってきた事は本当に良かった事なのかなという問い合わせがつかります。又、本音なんですが、今回本当に人間関係とかそういうものを生で露骨に思い知らされたという事があります。本当に裸になった人間と人間との付き合いをする機会が持てたという事があります。その中で気付いた提言というか、そう言う感じなんですけども、私も本当に未熟な人間なんですが、もうちょっと思いやりを持ちあえたらいいなと思いました。やっぱり人には貧富の差とか、いろいろ今回でも全壊の人、半壊の人、家が大丈夫だった人といろいろあると思うんですけども、もう少しお互いの事を少しづつ理解しあえるそういうゆとりがそろそろ持つ事が出来たらなと思いました。それからもう一つ、はがゆい思いを結構する事がありました。行政に対してここはこうするべきやとか、仮設住宅はなんであんなもんなんやとか、よく皆さん言われるんですけども、そういう苦情とか文句を言われる方というのは、誰も立ち上がりたくないという事なんですね。私は本当に一個人のボランティアですので、何の力も持ってませんし、避難所におけるサポートというのが基本で私の持てる責任というのはそこまでしかないので、行政に対する働きかけとかっていうのは私は出来ないです。ですから本当にこれから神戸の事を考えていきますと、誰かが少しづつ10%でもいいですから、いわゆる口ではなく、行動力を少しづつ出して行政に働きかける、

そんな事が出来たらいいんじゃないかなと思いました。

以上で私の話を終わらせて頂きます。どうも有り難うございました。(拍手)

【小山さん】

甲南大学学生会館避難所を担当しておりました小山です。宜しくお願ひします。(拍手) 今太田さんから避難所においての避難されている方の心の移り変わりや、ボランティアの精神的移り変わりについてお話をありました。私自身も甲南大学の避難所で感じた事は、時期の差は多少ありますがほとんど同じ経験・体験をしたと思っています。避難している人がだんだん打ち解けてくるにつれて、避難所が家であり家族になっていったという経過をみることができます。そこで私は、実際の甲南大学避難所全体の経緯と、ボランティアが実際何をし、何が必要であったかをご説明していきたいと思います。



私は当日尼崎に住んでいましたので、すぐこちらに来るというわけにはいかなかったのですが、20日に一度、電気ポットの差し入れを兼ねて下見に来ました。そして、24日から長期で神戸に滞在することができました。まず初めに、聞いた話も含めてということになりますが、甲南大学においての避難所としての初期の経過を説明していきたいと思います。17日当日、9号館・10号館といわれる正門を入ってすぐの2つの校舎が避難所として使われました。一般的な教室だけでなくロビーや廊下まで人で一杯になったようです。そのとき被災した学生も数多く避難してきて、その学生達が一般的な避難者に対してボランティアとしての役割を果たしたと聞いています。そして次の18日ですが、この日から避難所に10号館と小体育館、学生会館の3つが割り当てられました。この日は東灘区のガスタンク爆発の危険性が

あり、南半分、2号線の南側の広大な範囲に避難勧告が出されまして、その為に前日まで例えば灘高なんかに避難されていた方や、本山第二小学校におられた方が甲南大学に移動してこられ、先ほども話にありましたが、1,200人もの人で一杯になり、毛布や食べ物が不足したというふうに聞いています。そして、19日、20日になり、ガスの勧告が解けたこともあり、一時的に避難された方は帰宅されましたが、20日の夜に、御存知だと思いますが、今度は西岡本地区(すぐ近くですが)に崖崩れの為避難命令が出されました。その為に、また多くの人がこちらの学生会館とかに避難されてこられました。そして24日の段階で、私がこちらに来た時ですけれども、約500人～600人の市民の方が避難しておられました。

次に、私がボランティアをするにあたり、まず20日に下見に来て感じたことなんですがボランティアというのは、とにかく人に指示されるのではなく、自分自身でできることを見つけ、自分自身で実行しないといけない、ということを感じたんです。20日には手伝いに来ただけのつもりだったんですが、結局自分では何をすればいいのかわからず、その日は様子を見ただけで帰ってしまったという反省からそういうふうに思いました。その後、1週間分の自分の食料を持って24日から甲南大学の避難所にやってきました。私が来た頃には一応一週間たっていましたので、最初の混乱期は多少収まりつつありました。そしてボランティア側に組織ができつつありました。その前日の23日に甲南大学において甲南大学ボランティア本部が結成されまして、物資の調達・管理そして物資やボランティアの学内避難所への最適配分という仕事をボランティア本部が請け負っており、私はそこから学生会館避難所スタッフとして派遣されました。一方、私が担当した学生会館ではまだ当時は一人が全てを把握するということがとてもできない状況であり、混乱していたのですが、その為に5つの班を結成しました。それらの班は、食料など救援物資を管理し避難している人に配分する役目を担った物資班、市やマスコミからの情報をわかりやすくポスターなどにまとめ、新聞なんかは小さい文字で読みにくい方もおられましたので、できるだけ大きい紙に書いて色もつけたりしてポスターにして貼りだしてくれた広報班、広島からの医療チームと協力して、避難している方1人1人の常備薬など必要な物を聞き出して皆さんのがんや衛生面を気づかせた医療班、学内の他の避難所や学内ボラン

ティア本部と連絡を取り合ったりして外との交渉を主に行い、全体に大きな指示を出した渉外班、そして、渉外の仕事を助け必要な仕事を担当班にわりあて指示を出し、スムーズに仕事をすませるのに貢献したインフォメーション班、この5つの班が1つになり、まだ続く混乱期を乗り越えていきました。後でも説明しますが、甲南大学の場合3つの避難所が独立した形で運営されていましたので、こういう他との交渉をする班というのも必要になりました。

特にこの時期は、一週間目の肉体的・精神的疲労がピークに達した時期だったと思うんですが、栄養の極端な偏りなど、最初の一週間はパンみたいなものしか届いてなくて、それもいっぺんに届いてしまってかなり余ったり、逆に足りなくなったりそういう時期だったんですが、栄養面でのそういう極端な偏りで健康を損なう人が少なくありませんでした。御存知のように大変寒い中でしたし、学内でも学生会館と10号館の一部にストーブが1個有っただけで、本当に寒かったです。どこもそんなに条件がいいわけじゃなかったのですが、学内の他の避難所よりも学生会館の場合は平均年齢が高い人が多かったんです。そして学生会館では、常備薬が必要な持病をお持ちの方や、目薬の欠かせない視覚障害の方などもおられました。そのために医療・衛生面では大変気を遣いました。幸い目薬は視覚障害者支援団体の「ハービー」さんというのがこの度の震災でできたんですが、そういう団体の協力により手に入れることができ、最悪の事態は免れることができました。

多くの避難所では、テレビで聞いたのですが、悲しいことにお年寄りが衰弱の為に肺炎などにかかり、せっかく助かった命を亡くしてしまったのに対して、私達の避難所が大事に至らなかったのは、広島市民病院や吉田総合病院からお越し下さって常駐してくれた広島の医療チームの力なしでは語ることができないと思います。広島の先生方には、倒れた私達ボランティアも点滴して助けてもらったり、私達はどうしていいかわからないこと、例えば数少ない物資をどうしたらいいのかとか、作業をどうしたらいいのかとか、そういう相談にのってもらったり、本当にお世話になったんです。この場をお借りして広島の先生方には御礼を申し上げたいと思います。

その他に個人的に物資を持ってきて下さったり、岐阜の方から精神的なケアの知識を持った人が来て

下さったりと、色々なボランティアが来てくれたことで一番の混乱期を乗り越えることができたんだ、というのが私の感想です。

次に、2月に入り2週間を越えると、太田さんが言われたように、安定期というものが甲南大学でも訪れてきました。避難されている方とボランティア、避難されている方同士親しくなっていき、精神的な落ち着きが少しずつ出てくるのが目に見えてわかりました。例えば、ストーブのあるところに空間を作ったら井戸端会議のようにおじさん達が話したりというような光景が見られるようになりました。この頃になると、一般的には避難所相互での連絡がとれていない、片方の避難所には物資があるのに片方ではない、ということが言われる時期になりました。甲南大学でも例外ではなく、学内3つの避難所ですらお互い連絡がうまくとれていませんでした。その為にボランティア同志の小さなずれ違いとか、いざこざみたいなものが生じるようになりました。その頃になって初めて他を見る余裕がでてきたというか、ボランティア同志でも他ともめることができるというのは少し落ち着きがでてきたんだと私は理解していましたが、そうやって初めて学内の他の避難所に気を配りました。そうすると同じ学内でありながら、3つの避難所は違った顔を持っていたという印象を受けたんです。比較的若い世代の多かった10号館では住民の方が自ら自治的な活動に乗り出されたと聞いています。食パンがあり、キャベツがあった時にボランティアがそれをどうしようかと悩んでいたら、被災者のおばちゃんが「包丁貸して。」と言ひながらみんなでサンドイッチを作ったとか、そういうようなことも行われたそうです。子供の多かった小体育館では、少数のボランティアと避難している方がいち早く打ち解け合い、子供たちと遊び、受験生に勉強を教える等ということが行われました。そして、お年寄りの多かった学生会館では、前でも述べましたが、組織力を生かし多くの仕事をボランティアがこなし、医療的な気配り等を行なうことができました。

そしてこの頃には行政から食料などが安定して配給されるようになりましたが、いわゆる日曜ボランティアも数多く来られるようになりました。多くの日曜ボランティアの方はこの時期足りないと言われていた下着やカイロ、ウェットティッシュ、水のいらないシャンプーなどを個人的に持ち込んで下さいました。また、たくさんの甲南大学OBから大量の

救援物資を受け取ることができました。それらのうち、学内の避難所で必要以上にあったものは学内のボランティア本部が中心となって近隣の避難所に配ったり、芦屋や長田の避難所に運ぶという活動がこのころ行なわれました。また逆に、本山第二小から炊き出して余ったものをいただいたりすることができました。

そしてその後避難所は、水道・ガスの復旧と共に人数が徐々に減り、2月中旬には10号館を閉鎖し、3月には小体育館を閉鎖し、学生会館避難所を残すのみとなりました。その時点で当初5~600人近くいた避難者は100人ほどになりました。その後も少しづつ人数は減りだし、4月15日、16日に残っておられた約40人の内、仮設や新しい家を見つけられた半数を除く人には、大学の都合もありまして、近くの神戸商業高校へ移ってもらうことになりました。そちらは幸い体育館に空きがありまして、そこに入つて頂き、甲南大学の避難所は事実上閉鎖ということになりました。そしてその時ボランティアグループも事実上解散しました。

その後なんですが、今でも私達は個人的にできることを楽しみながらさせていただいています。例えば、六甲アイランドの仮設に行かれたおじさんやおばさんの所へお邪魔し、話し相手になってもらったり、私達がなつてもらっているっていう感じなんですが、また、荷物の整理を手伝ったり、神戸商業高校にたまに遊びに行きましてお話を聞かせてもらったり、神戸商業高校にいる子供たちと遊園地へ行ったり、そういう活動を個人的にですがしています。

ところで先日神戸商業高校へお邪魔した時あるおじさんが「私は元の場所で元の商売がしたいんだ。それだけなんです。」とおっしゃってたんです。家を建てたいとか元の商売がしたいとかいう人は、何度も現地へ足を運ばないとならないわけですが、そのために少し年をとられた方の遠方の仮設住宅入居というのは、体力的、かつ一度の往復で3000円近くかかるという経済的な負担から、大変難しい状況だと思います。これは、私達が神戸商業へ行ったときに避難者からいつも言われることなんです。神戸市の避難者は現在約3万人と言われていますが、今度最後の仮設住宅4次の募集が行なわれますが、その募集戸数はたった3,500しかないということは問題だと思います。これらの問題が本当の意味で解決しない限り、神戸には本当の春が訪れないのかもしれません。でも、今私達にはちょっとうれ

しいことがあるんです。実は3日前にちょっと散髪したんですが、そこの散髪屋さんは以前甲南大学へ避難されていた夫婦の方がやられていて、プレハブできれいな店を再開されていたんです。私達は避難されていた方のそういう姿を見るのが今一番うれしく思います。そしてその人が「復興じゃだめなんだ。復活でなきゃだめなんだ。」と言われたんです。「活力が溢れて活発な街でないといけないんだ。」と、その方は強く言わっていました。私達は、いつも自分たちが悩んだ時とかには元気な子供たちに励まして今までボランティアとしてやってこれたんですが、これからも皆さんと共に神戸の復活にむけて歩み続けていきたいと思っています。本はどうもありがとうございました。(拍手)

【須坂先生】

まず話を始める前に、本校では4名の児童が亡くなりました。その他たくさんの方々が震災で亡くなられたわけなんですけど、その方々のご冥福をお祈りしたいと思います。さっそく話に入りますけれども、まず災害、その他の非常の場合の校園管理というものが学校のほうではあげられるんですけども、それらについて自分自身では本当に何も知識が無かったんです。今は校長ですがその時は教頭ということで勤めていましたが、実際その中身というのはほとんど知識として持っていたなかったというなきれない状態でした。後で神戸市の教育例規集を調べて



みました。厚さは10センチ程あるんですけども、その中を見ていきます。まず学校が避難所となつた時には『避難所の開設は区長が管理者の協力を得て行う事になっているので校長はこれに協力すること。避難所になつた時、校長は状況によって教職員又は現業員に避難所開設の事務従事を命ずるものとする。』という条項がありました。その中で実

際私自身何が出来たのかということなんですねけれども、なんせ今までの経験をもとに動くということがどうしても多くなります。その中で今までの場合は、大雨警報或いは暴風警報、こういう時はあらかじめそれが起こるという事が予測されているということで、前もって学校の方に連絡があります。その中で「じゃあ、私が泊まります。」「あなたが泊まって下さい。」というようなことで対応を考えられます。けれども、今回のような場合はそれが全然役に立たないという状況でした。私自身も当日の朝、学校に行く時間が来たので出かける用意をしていたところだったんですけども、地震ということで、動くことができませんでした。おさまった後、外に飛び出して自動車で行こうとしたんですけども、門扉が倒れていて自動車が出せないということで、まずそれを取り除かなければならぬ状況でした。真先に学校に駆けつけなければいけないという思いはあるんですけども、なかなかそれが出来なくて、なんとかそれを片づけて出たところが、あちこち家が潰れたり、新幹線のけたが落ちたりして通れないという状況でした。県立西宮病院の前まで出ましたが、そこで車はストップということで、又引き返して自転車で行きました。家から学校まで辿り着くのに4時間もかかってしまい、実際自分が早く学校に行って何かをしなければという思いはあるんですが出来ませんでした。学校へ着いたのが11時頃でした。その時には前校長の岩本先生の陣頭指揮でそれぞれ対応されておりました。その中に早速入って動き出したわけなんですけれども、自分自身校長先生に次いで立場で、本当はそれぞれ指示をして人を動かさなければならぬんです。たくさん的人がいるんですけど、まとまりがなく実際に動いてくれる人がいない。先生が最初3、4人、そしてその日の終わりに全部で9名と言う人数になりました。そんな中で学校へどんどん避難して来られる方の対応ということで、まず病人・怪我人の看護というのが一番になっていたと思います。その後今度は座る場所の確保でした。休む場所が欲しいわけです。そのために教室等から机や椅子をどんどん出しました。お昼近くになっても病人がどんどん運ばれて来るという状態でした。私自身学校の中にどんな物があるかということがわかることもあります、ベニヤ板を出したり、その他必要な物を出さない事にはどうにもならない状態でした。今思い出してもその当時いったい何をしてたかというようなことが頭の中にはないような状

態です。後、一番問題になったのが先ほどの話にも出ましたが、学校の中ではトイレです。最初の日、次の日も含めて1,200人くらいの方が運動場にいらっしゃったということで、その人達の出したものがたくさんになってしまったわけです。そんな中、本校の職員は学習園に穴を掘って、サッカーゴールを持ち出してその回りにシートをかぶせて覆いをし、板を渡してトイレにするというような、そういう動きを一生懸命してくれました。トイレの中がたまるごとナイロン袋を持って行ってスコップですくいとるということをして、避難されている方のために一生懸命働き、休む暇もなく動いてくれていたと思います。午前中・午後とそういうふうな形で動いてました。食料等は17日は全然なしで、夕御飯もなしという状態で、夜になりました。本当に寒い晩でした。椅子に座っていましたが、寒く火が欲しいわけです。学校にはとりたて燃やす物はありません。そこで結局悪い事だなと思いつつ、各自で責任を持って下さいとしか言えませんでした。壊れた家の板を持ってきて燃やすという事が実際行なわれました。教室の方も鍵が開いておりましたので本を出されたり、体育倉庫から子供たちの使う跳び箱が出され、その跳び箱までもが燃やされました。寒さということもありますけれども、非常災害の時に人間の心はどうなってしまうのかなと本当に心配な面もありました。私もそれを見つけて、「何故子供の使う跳び箱を燃やすのか。」と大きな声でどなただと思いますが、返ってきた言葉は、「弁償すればいいんだろ。」ということでした。後の言葉が続かず、非常になきれない、こんな時だから仕方がないのかなというふうに思いつつも、その場を後にしました。次に、生きるために食料をなんとかしなければならない。水をとっても水道は全然出ない。幸いな事に、夜に区役所へ行ったらパンを頂けますよという情報が入りました。夜に学校の責任者が行かないともらえないということもありますし、何人かの先生ともらいに行きました。翌日の18日も食料の確保が仕事でした。それを配るのについて、実際にあの時はどうすれば良かったのかなと今でも思うんですが、その時は学校側の職員で、皆同じ命なんだ、皆同じように飢えているんだ、皆に公平にあたるようにと、私達がそれを全部配ってしまったんです。今運動場にいる人に、「これだけの物があります。これを皆さんで分けて食べて下さい。」というふうにお願いした方が良かったんじゃないかなと、今も

思っております。そういうふうに思った訳は、結局こちらでいろんな事をしそぎてしまったということです、言葉が悪いかもしませんが、してもらうことに慣れてしまう人達が増えてしまって、自ら動こうとする人が少なくなってしまったというような気がしたからです。いずれにしましても、そういう形で2日目が過ぎました。19日からは物資がどんどん届くようになりましたので、食べるということに関しては、安心でした。よそから救援物資がどんどん着き、それを運びこんで配ることが出来ました。そういう生活が1週間続きましたが、これではいけないんだと思いました。というのは、私達は避難されてきた方のお世話をするのが本来の仕事ではないんだ、学校というところは子供たちがいるんですよということで、子供たちの安否情報、それを早くつかまなければいけないと。勿論それ以前から子供が亡くなったり、お父さんが亡くなったりという情報は入ってきていたんですが、それらに対応する時間さえもありませんでした。ですからこのような非常事態の時にどんな形で動くのか、実際にマニュアルが作ってあったとしても動けなかったかもしれませんけれども、そういうものになると、こんな時にはこう動くというものがれば多少なりとも良かったんではないかなと思いました。次にしなければならないことが、子供の情報確認でした。地震より一週間後の1月23日、全員じゃなかったんですが先生方に集まって頂きました。それから情報集めをし、2月1日に子供達を1日だけまず元気でいた事を喜び合おうということで集めました。その後が、在籍は1,110名ほどいたんですが、集まった子供達は450名余りということで、半数以上の子供達がその時には家を離れてよその場所へ移っていました。そのため更に情報をつかむという作業を続けました。また、2月8日から2時間づつ勉強しましょうということになりました。本二の方は、本館が入り禁止、東館の方もひびが入っていて立入り禁止、西館の教室は被災者の方が入っておられるので勉強の場所が全然ないわけです。結局主人公である子供たちがいない学校がずっと続いたんですが、ようやく本一小の教室が午後から貸して頂けるということになり、本一・本二・本三、それぞれ午前と午後に分かれて2時間づつ授業をしようということになり、学校が動き始めました。子供たちが学校に来て、非常に活き活きとしている姿、結局2週間以上も家にいたという子供たちが学校に戻って来て、やっと

私たちも先生になれたんだなと喜んだわけです。そんなことをずっと続けて、その後20日から学校再開ということになりました。子供たちが少しでも多くの時間学校で勉強出来るように、学校自身が1日も早く元の姿に戻れるように活動をしました。幸いな事に学校に避難して来られた方達が運動場に一杯にあったテントを整理して、子供達が卒業式をそこで出来るように場所をあけて下さいました。そのお蔭でその場所に、実際にはプレハブ校舎が建つことになりました。そのために卒業式の場所がなくなってしまって、さらに住民の方たちに相談しまして、何とかこれだけの場所が欲しい。子供たちと被災者が共存するということで何とかお願いしたいと言って、卒業式の場所を確保し、無事に卒業式をすることが出来ました。それぞれが相手を思う心といいますか、そういうものがあって子供達がはれの卒業式を運動場でしたけれどもすることが出来ました。よその学校では被災者がたくさんいて、講堂が使えないというような状況がありました。自分のところに講堂があるのに何故卒業式を外でしなければいけないのかというような問題がいろいろあるわけですが、本当にこういう状態では仕方が無いのかなというふうな思いがしました。ただ、今私自身強く思う事は、子供たちは何も言わない、学校を返してほしいとかそういうことを言わないんですけども、学校自身は子供たちのものである、そして子供たちも被災者だという思いで回りの人たちが思って頂けると、先ほど言いましたように卒業式も自分たちの講堂で、或いは体育館で出来たのではないかと強く思いました。もう時間ですが、子供たちが替え歌を作りました。その替え歌を皆さんに紹介したいと思います。

僕等はみんな生きている 生きているだけで幸せだ

家がなくったって 生きているだけで幸せだ
大切なものがなくったって 生きているだけで幸せだ

地震が来ても 雷が落ちても 生きているだけで幸せだ

家がなくなった人も頑張って下さい
何かきてもみんなで協力すれば何だって出来るんだよ

ちょっと節回しがおかしい部分もあるんですけれど

ども、子供たちがこういうふうに歌って皆で頑張って行こうというふうな気持ちであります。今言いましたように大人の人たちも非常につらい思いをしているだけれども、その中でなんとか自分で立ち直ることが出来たら、もちろん出来ている人もいるんですけども、してもらうことに慣れてしまった人の中にはそれが出来ない人がいたんじゃないかなということで、私自身もつらい思いがしましたので、その事を言わせて頂いて、報告とさせて頂きます。

(拍手)

【橋谷さん】

紹介にあずかりました橋谷でございます。私はこの岡本に生まれ育って、まだ50年は経っておりませんけれども、そのくらい生活しております。それで私今河合先生のお話を聞いたんですけど、私まだなおってへんわ、と。わりと私自身しっかりしてこの4ヶ月過ごしてきたんですけども、まだなおってへんわという私が5、6分しゃべりますので、言い回し等、おかしいところは「まだなおってへん」ということでお許し頂きたいと思います。私は見て頂いてわかりますように普通のおばさんで、5、



6年前ならオバタリアンといわれるような人間なんですけれども、岡本で生まれ育ってました。宣伝を兼ねますが、岡本で雑貨店をやっております。生まれ育ってもう50年近くなっていますので、店が全然やってない時でもとりあえずシャッター開けて、電気は通っていないけれど、私は商売しますので、商売することが使命やと思い、電気がない中シャッター開けて、泣きながら商品を捨てたり、什器壊したりしている中でいろんな方がいろんな形で飛び込んで来られたんです。今までの方のお話を避難所の話だったんですけども、私は避難所には全然行きませんでした。その中で家が潰れかかっていても

ずっと家の中にいるお年寄りの方もいらっしゃいましたし、そういう方達がヘルプというふうに来られたり、又年寄り同志集まって、お互いにやってらっしゃるんですけど、あの時期水一つくみに行けない。そういう時避難所に入らない、若干若い私達がやらんといけないということで、まず「もうすぐ家が壊されるんやけど下着一枚出されへんねん。」というおばあちゃんの声を聞いた時に初めて、自分の事ばかりしどらあかんのやと思い、勿論組織もなにもないですし、一つの店舗でしかすぎませんので、神戸市からどうのこうのということは全然なかったんですけども、まあ、ここにも甲南大学の元気なお嬢さんが来てらっしゃいますけれども、「本山中学が全壊で、子供達が勉強できへん、橋谷さん子供達が勉強出来るようなどこ、どこかないやろか。」という相談を中学生の親御さんから受けた時に、兵庫銀行の2Fを借りまして、20人くらいなら入るんじゃないかなということでおりましたら、すぐに甲南大学のボランティアの方々が、「子供達は僕たちがみましょう、私達がみましょう。」と言ってくれて、2月6日から3月の20日まで子供達のケアをしながらして下さいました。私達もそういう中で少しづつ商売をしていって、近所の人に会っている中で、どうして私にかかってきたかわからないんですが、宮崎から電話がかかってきて、「神戸市にボランティアをしたいと言ったら断られた。」と言うことでした。そういうふうな中で私もわからないなりにクリアしていき、救援対策本部に話をもっていくというような形で関わりながら、自分がボランティアしているっていうんじゃなくて、しないといられない、ずっとそこにいると自分がどうにかなってしまいそうというのがあったと思うんです。そんな中でも私は若干社員がおりまして、戻ってきてくれたので商売しないといけない。それでは何をやろかな、と思った時に、私も含めて皆さんもお茶碗やコップがみんな壊れてるから瀬戸まで買いだしに行こうということで、主人と二人で2トントラックころがして、多治見の方なんですが陶器を買いました。私も商売人ですから、ただではわけません。損もしません。でも通常よりかうんとうと低いマージンで売りました。2トントラック分のたくさんの陶器が2週間でなくなりました。それによく考えたら自分ではそこで買えませんでした。仕事としてはしかけるんですが自分の中ではそこまで立ち上がりたくない。今この5月の21日になって自分のやらなけ

ればいけないポジションと、でも家に帰った時に年寄りがいて子供がいて犬がいて御飯の用意をせなあかんという現実社会のギャップがなおってないなと思いました。実を言いますと、震災後2回ほど仕事で東京に行った時のことですが、3月に行った時はみなさんが「神戸から大変やねえ。お茶碗送ってあげるわ。」というような形で、私の住んでいる六甲アイランドの避難所の方へお茶碗送って下さったりしているんです。で、この3日前に行ってきたんです。そしたら神戸の地震なんか皆知りはらへん。オウム、オウムでね。こないだ行った時には「お客様んどっから?」「神戸です。」「大変ですね。」という話があったんです。ても今回は私ももっふん可哀相と言つてほしいから、「神戸から来たんです。」と言うと「ああ、神戸。そっちはいいわね、こっちはオウムでね。」ということで、やっぱり忘れられる腹立たしさとかいうのが、私があの時「この運転手さん、しばいたろかな。」思ったような感情が、私異常かなと思ったんですけど、河合先生のお話を聞いて、これはなおつていく段階のひとつのプロセスかなというふうに思つているんです。それとやっぱり被災した時は頑張らなかん、と思ってたんですけど、回りから頑張れ、頑張れといわれるのがものすごいプレッシャー、ストレスになって、今はひらきなおりまして「もうええやん、ぼちぼちやつたらええんやないか。」と思います。それと私が立ち直れたと自分自身が感じる時は、きっと自分の食卓のテーブルにお茶碗が人数分、お皿がちゃんと人数分そろえられたら、私はひょっとしたら、震災は震災としてきっちり記憶にしてとどめておかないといけないと思うんですが、いい意味での形で自分のこの経験を風化出来た時とちがうかなと思います。一時期はしゃかりきになりまして何かせなあかんと思ったんですけども、まだ私はマンションでごちゃごちゃしてるのが全くそのままなんです。ぼちぼちやって自分のこの気持ちをひとつの記録としてとどめるような形でこの震災を、ある意味では千年に一回の体験をさせて頂いたというのをプラスにとつてやっていこかなというふうに思つてます。支離滅裂ですけど終わらせて頂きます。(拍手)

【西崎さん】

ご紹介頂きました「美しい街岡本協議会」の西崎でございます。体験は皆さんお話になつたんで、私は少し心の問題を河合先生のお話をもとにしてまと



めてみると、先生がおっしゃった、直後に記憶がなくなるというのを私も経験しました。私の家で物が倒れてベッドのかけで布団を被つておつて、それから続けて隣に建つてあります鉄筋の診療所まで行きます間の、どの道を通つてどこの戸を開けてどうして行つたかという記憶が全くありません。今でも思い出せません。これは年でだいぶん頭がぼけたからかもしれんけれども、やっぱりそういう経験は若い方でもあるようです。全く予期していないという異変に対しては、脳の反応というのは記憶の空白というのにどうもなるようです。強い精神的な衝撃というものの後には、意識における絶対不能期というのがあります。もっとひらたく言えば脳のコンピューターがあまりにもインプットされた内容が形にならぬものなので、とうとう脳のコンピューターが狂っちゃう、脳の反応がまともにいかないというようなものです。絶対不能期というのは生理的な問題でして、例えば視覚について言うと、皆様があそこでなんかぱっとたかれますと暫く見えませんね。網膜の細胞が一辺発火したら次又光を感じるまで時間がかかるんです。そういうのを絶対不能期というわけです。意識にもそういうのがあるんじゃないかという印象を持って、河合先生のお話を伺いました。それから価値観が変化したことなんですけれども、これはもう皆様いろいろお述べになつていますので、私もとやかくは申しません。ただ一言だけ申し上げたいのは、その人間がおかれた条件によって価値判断の基準というものは意外に簡単に変わるものだなということを今回の震災で教えられました。だから今までこれが非常に上等の壺である、これが大事な絵であるとか、そういうものは、いままでの価値判断の基準でありまして、これは簡単に震災によって変わります。即ち水がどこにある、米がどこにある、火がどこにある、そういうものから価

値判断がなされてくる。これは今後の私の生きざまに大きな影響を与える一つの命題であると考えています。これは全く個人的な心の問題になりますけれども、震災直後に私は死ぬんじゃないかなと思いました。というのは、これでもう一揺れしたら天井が落ちて来る。そしたら多分死ぬだろうと思いました。ところがその瞬間にはほとんどその恐怖感がなかつたんです。これは私が62歳である歳のためか、仏教徒として私が信仰を持っているためか、又人間というのはいつかは死ぬんだというふうなあきらめの人生観というのを持っているためからか、私にはよくわかりませんけれども、私が死にたくないと思ったただ一つの原因は、私は父親で小さくはないですけれども子供も家内もいるのでそういう自分の家族というものに対して、父親として一家の家長として義務がまだ残っているんじゃないかな、その義務を果たすためにはまだ生きづけたいなという気持ちが非常に強うございました。だから結局生も死も私と家族との関係において、どうも意味がありそうだなと思いました。じゃあ家族のない天涯孤独の人にとっては、生と死はどんな問題なんだろうと、今後考えてみたいと思っています。それからこれも心の問題ですけれども、やっぱりその虚無感と義務感という相対するのがありまして、いろんな物が破壊されてしまって社会の仕組みの機能が停止してしまう、又個人的にも身体的疲労や心がおちこんでしまうという時は、当然虚無感を抱くわけですけれども、それから立ち直るためには何が必要であるのかということを自問自答するのに、こういう災害の後では数時間かかります。だから数時間は全く抜けた状態で、何も考える力がない、いわゆる呆然自失というふうな状態だと思います。私がその間に悪い頭で考えた立ち直りの方法は、一つは情報の収集です。それから生きづけるためには何が必要か、と。それから他人の安否、特に私は医者ですので係わりあつてる患者さんや親戚や知人、近隣の人達はどうしているだろうということが知りたかった。で今の私に出来る事は何か、と。今の状態で私に何が出来るかというふうなことを心の中で整理することから始ましたわけです。それで結局自分の足で歩きまわってその辺の情勢を把握する。そしてその頃には診療所に突然訪れてくる患者さんが増えましたので、消毒したり、縫ったり、包帯を卷いたり、薬を与えたり、お金も与えましたしね。それから衣類も与えました、寒うございましたから。そうやって人につく

す数日間が過ぎたわけですけれども、こうして自分の義務を少しでも果たすことによって自分自身を取り戻す、そして自分の存在を自覚するようになってくるわけです。義務を果たすことによって自分自身を取り戻すという方法が、どうも私のような生きざまをしているような人間には一番てっとりばやいんじゃないかなと思いました。私は医者ですので、医療を通じての奉仕ということになりますと、多少専門的になりますけれども、いろんな事がございました。そして皆さんも助けて下さいました。しかし災害時の医療というのは、正常時の救急医療と全く異なっていました。高度の診断機器とかそういうものを使わないで治療方針をたてて治療しなければならないわけです。又必要な場合は二次の救急病院に送らなければなりません。ところが今回の震災で、誠に申し訳ありませんけれども災害時の救急医療における情報伝達というものは、全くゼロでした。ともかく電話がない。何にも伝達の方法がないんです。足しかない。これではやっぱり今の社会では無理です。だからホットライン的なものがやはりなければならないなと思っています。それから気持ちの問題ですけれども、意外に他人に語りかけたい気持ちと、忘れない気持ち、相反するような二つの気持ちがあるわけです。もう今4ヶ月ほど経ってますけれども、私の診療室で長々と震災の話をしたり、奥さんを亡くされて大泣きに泣かれるご主人もいるわけです。ところがやっぱりずっと見ていると、私に語りかけたい気持ちの強い人ほど心の痛みが大きいというふうに思います。それは自分がいかにみじめな現実にあるかということを訴えたいばかりではなく、私に語りかけることによって自分自身の状態というものを改めて認識しているわけです。そして彼自身は立ち直る方法を模索し、私にある意味で同意を求めていると考えます。だからその人達がお話しになる中には、例えば自己反省があります。それから災害の対策に対するいろんな不満とか問題点もあります。周囲の人々に助けられた感謝の気持ち等が色々込められているわけですけれど、それよりももっと今後の問題として災害に対して示唆に富んだ警告といいますか、提言とかあるわけです。つまらんことですけど、寝ているところには筆筒を置くなとかね。いろんな事をおっしゃいます。そういうふうな提言が含まれていることが少なくないです。やっぱり他人に語りかけることによって自分自身の気持ちを整理して、現実をもういっぺん確認して立ち直りの方

法を見出す。そして結果として今回の災害というものを忘れてしまいたい、過去のものとしてしまいたいといえるような気持ちもあるわけです。心の問題の解決方法になるかどうかわかりませんけれども、こういう事も考えてみなければいけません。それから私は地域の街づくりをさせて頂いていますが、地域の連帯感というものが、復興にどういうふうに結びつくかということでございますが、自分だけ災害を受けたんじゃない、程度の差があるけど一様に皆被害を受けたんだ、とこういうふうに我々が自覚しているこの時期は、地域の連帯感が生まれやすい、非常にいい環境じゃないかと思うわけです。連帯感の根本には助け合いの気持ちとか、他人の事を慮る気持ちとかいろいろあるわけですけれども、水や食料を分け与えたり、避難所でのボランティア活動、また自分の住宅の一部を他人に提供するというような、いわゆる住民としての共通の認識と目的を持って共同の行動をしているわけです。これはまた自然と出来ているわけです。又助け合いの気持ちというのは反面我慢しあう気持ちですので、自己の心や行動の許容範囲が非常に広がっているわけです。こういうことも連帯感というものを成立させる要件だと思います。こういうふうにして自然に生まれた共通観念というものをまとめてどう地域活動に役立てていくか、地域の復興のエネルギーとするかというのが非常に大事なのです。これがこれから我々街づくりをやっている者の問題でございますけれども、従来の行政指導型の街づくりではなくて、住民主導型の街づくりを進めようと思いますし、又今それが一番の、絶好の好機じゃないかと考えて、今後も街づくりを進めて行きたいと思います。以上でございます。(拍手)

【皆藤先生】

このシンポジウムの最初に森先生の方から、結局のところ震災とは何だったんだろうかというところに迫るようなシンポジウム、公開討論会ができたらというふうな話がありましたけれども、そういうふうな気持ちをもって、皆さん方に書いて頂いた震災体験を読ませて頂きました。50人を越える方の、それぞれの震災体験が非常に切々と綴られておりまして、こちらも心が動く感じで読ませてもらいました。結局のところ書かれた方のを読んでますと、人生觀が変わったとか、価値觀が変わったというふうなことがすごくたくさん書かれているわけです。それで



人生觀や価値觀がどういうふうに変わっていたのかなと、内容から少しフィードバックさせて頂きますと、まず神戸に地震はないんだというような神戸神話が崩れたという話があります。地震はどこにでも起こる可能性があるというのは当たり前の事かも知れませんけれども、こんなふうに書いておられる方がいました。「九州の雲仙普賢岳や北海道の奥尻島であった地震とか災害の時には、自分は当事者ではなかった、つまりその人達の痛みがわからなかつたということを痛切に思い知らされた」ということが書かれてあります、これは神戸に地震なしと自分の心の中でどこか安心しきっていたという感じを思い知らされたというふうなことだと思います。それからこれは私は知らんかったんですけども、実は神戸に地震なしという神戸神話には根拠があるらしく、ある方のアンケートでは、関東大震災の後に大蔵大臣が、「皇居を地震のない兵庫県御影に移すことを提言した」というふうなことがあります、全く私は知りませんでしたが。(笑) 神戸に地震なしという神話が崩れたというのはかなりの方が書いておられました。それからもう一つは、これは河合先生にも伺いたいことなんですが、「同じ被災者で自分のところが他の家に比べて被害が少なかった、被害が少なかったことに対して申し訳ないという気持ちがすごく強く湧いてきた」あるいは、「自分の所に精一杯で救助活動やボランティアに出ていけなかった。それがすごく後ろめたい」あるいは、「自分が生き残って無事だったということが本当に申し訳ないんだ」というようなことをかなりの方が書いておられるんですけど、こういう感情というのは日本人特有の感情なのか、それとも、ロサンゼルスや欧米の体験でもこういう感情があるのか、というのは聞いてみたいところです。それから、「地震が起きた直後に隣の人が『大丈夫ですか』と声

をかけてくれたのがすごくありがたかった、うれしかった」ということをやはりかなりの人が書かれていました。これは心のケアがここですでに始まっていたと、私は読んでいて思いました。それから、「ちょっと落ち着いてくると、音信不通の昔の友人から電話がかかってくる。それも、50年来音信不通の友人からでものすごくびっくりした」という話があつたりしまして、これはつながりとか連帯感とかいう言葉で言い換えることができると思うんですが、守られているという感じがすごく強かった。ところがこれもすごくおもしろいことに、そういう電話が毎日毎日、毎晩毎晩かかってくると、毎回毎回同じことを説明するわけで、そうするとだんだんだんだん嫌になってくるわけです。度重なると同じ説明をしている自分がなんて情けない、という感じもすごく体験したということです。心の守りや連帯感ということが程度を越えると、自分自身が当事者で非当事者側からの「大丈夫か」という声が空念仏のように聞こえてくるというふうな感じじゃないかと思います。それから、こういう体験をされた方がいてびっくりしましたけれど、救援活動に参加されて、参加といいますか、もう近所の方が「助けてくれー」とガレキの下から叫んでるわけですね。それで一生懸命救援するんだけれども、結局その方は亡くなられる。そうすると、遺体を運ぶ時に「遺体がこんなにも重たいのか」と実感したんだそうです。これは、現代社会ではほとんど体験することはできないことではないかと思うんですね。そういう体験をされた方もおられました。

それから、これは我々も自戒しなくてはいけないんですけども、「心理学者の偏見のような物言いがすごく腹立たしい」というふうなことがあって、例えばある大学の講義を聴いていると、さもありなんというしたり顔で心理学者が「神戸の人達はなぜ早く避難しなかったんだ。」というようなことを言われて、「避難しようにも自分の家がどうなるか心配で避難できないという気持ちもわからなくて、えらそうなことを言うな。」と言う方もありますて、幸い、私の講義ではなくて安心したんだけれども。

(笑) これも結局当事者と非当事者ということの関係で、物が言えると思うんです。

それから、ボランティアで活動されていた若い人達に対するありがたいという感情はすごくあるようでしたね。「『今時の若い者は』というのは禁句であったことがやっとわかった」というようなこともあります

ました。「山本五十六大将が『近頃の若い者はなどと申すまじく候』と言っている気持ちがわかった」という体験があつたりとか。(笑) それから子どもたち、先ほど須坂先生の話にありましたけれど、子どもは何も言わないというふうなことありましたけど、子どもたちはすごく元気にしてる、で、我慢している、それからお手伝いする、そういう子どもたちを見ていてすごく自分が安心させられたり励まされたりする感じがすごくあって、「自分の子どもは普段甘えていてべたべたしていくなんちゅうやっっちゃと思っていたけれど、地震の後見ると我が子はすごく成長したのを感じる」という話もかなりありました。それから私が強烈に感じたのは、「地震の体験で一番辛かったのは恐怖ではない、孤独が一番辛かった」と言っておられる方がありまして、孤独というのはつながりの無さというふうに考えたらいいと思うんですけど、連帯感の必要性ということとながっていくんだろうと思います。

そういうふうなことをずっと読んでいますと、まず心のケアというようなことはよく言われていましたけど、まず身体、ボディですね、その身体のことがちゃんとできっていて、それからライフラインなんかが復旧てきて、それから徐々に心のケアが始まっていく、というふうなことが言われていますけれども、実情、実はそうではないのではないかという感じを、読ませていただき受けました。つまり心のケアというのは直接的にそれを目的としなくてもあるんだ、ということですね。河合先生の話を言うと、「さあ何かしゃべりませんか」と言って「ちょっとはよくなりましたか」と言ってくる、そういうことではなくて、例えば炊き出しのボランティアがおられると、その姿を見て自分の心はすごく前向きになるとか、動くとか、そういうふうなことは実はボランティアは炊き出しをやっているんだけれども心のケアにもものすごく関与しているんです。これは河合先生に教えていただいたんですけども、実は心身症をうまく治すお医者さんというのは、身体のことを一生懸命やりながら心もケアしているんだと。だから心と身体はそう簡単には分けられないというふうな感じもありました。それを考えますと、ボランティアの人の存在感は大きかったなあと実感させられます。「ボランティアはそこにいるだけでいいんだ」とこれは中井先生の言葉でありますけれども、本当にそんな感じがするわけです。

心のケアというのはもう地震が起った直後からすでに始まっていたんだと、「大丈夫か」というふうに奥さんに声をかける、その時から奥さんは心のケアをもうもらっていた、そういうふうなことがある。ただ、レポートの中にもいくつかあったんすけれども、「震災後数か月たった今でも私の心の奥底にはなにがしかの不安があって、それがずっと続いている」ということを書いておられる方もおりました。地震に対する受けとめ方というのは人それぞれ一人一人違うわけですから、いろんな受けとめ方があると思うんです。非常に深い所で震災を受けとめてしまう、不安がなかなかとれていかない、そういう場合はやっぱり専門家の心のケアが必要になってくるのかなあというふうに思ったりもしました。

ちょっと時間がないのではしゃってしまいましたが、レポート読ませていただきて、結局のところ震災というのは価値観の変化、人生観の変化があったというふうに書いておられた方が多かったということと、それから心のケアというようなことを言うけれどもそれはすでにもう震災直後から始まっていたんだなあというふうに強く思いました。以上です。

(拍手)

【林先生】

皆さんが高い残したことと言うという、お掃除屋さんみたいな役割なんすけれどもね、それで座っているんですけども。いくつか思う事があります。私自身は後方支援というのが仕事だと思って、ずっとこの1月17日からいろんなことをしてきましたけれども。まず僕自身の本当の専門というのは社会心理学というのが専門でして、人と人とがどういうふうにつながっていくのかということを考えています。ところが、災害のことというのは実は昭和58年

5月26日日本海中部地震というのがおきまして、青森と秋田の県境の日本海で起きた地震ですが、ちょうど私その年の4月1日に弘前大学というところに赴任しまして、被災者になってしまいました。さあしがないやというので実は災害の時の人の行動というのを調べ始めることになりました。大変地域社会にとって大きな問題でございます。マスコミは一週間でそういう問題片づけてしまいますが、被災された方にとってはある意味で一生続く問題であって、その方達をどういうふうな形でケアしていくのか、というのが基本的な発想だったわけです。で、やっていまして途中でいやになりました。いやになったというのはいろんな理由があるわけですが、で、もうやめようと思いまして、今度は広島大学に移るという話があったので移りまして、半分は防災と縁を切ったつもりでいましたら、平成3年に台風19号というのが広島を襲いまして、一週間広島は大停電になってしまいました。我が家も58,000円ですが、屋根の一部トタンがはがされるという被害にあいました。実はその前の年に私が住んでいました官舎は屋根がぶとぶというもう一つの台風災害にあったこともありましたが、また災害にあって被災者になってしまいました。それぐらいから覚悟を決めまして、おうこれは災害のことをやったろうかと思っておりましたら、「おまえ、それだったら24時間防災屋さんをやりなさい」というんで、去年から防災研究所というところに移りましたら、こういうことになってしまいまして。(笑) これは決して私が呼んできたわけではないというのをまずお断りしておきたいと思います。そうやっていくつか自分自身被災者になりまして、あるいはその後被災者の方の所へ調査に行くことを都合10何年しております、災害について思うことというのは私自身は災害というのは新しい現実が生まれることだと思っております。それは決して皆さんにとって得な現実ではない。はるかに、その災害の起こる前の方が良かった。そういう意味では非常に損な現実に直面する。しかもその損な中でご自分の人生をもう一度建て直しなさい、再建していきなさい、あるいは心理学の言葉で言えば、再適応しなさい、そういう課題を負わされているんだと思います。その現実の変化の大きさ、あるいは個々の方がお持ちになっている力の大小、それによってどれだけたやすく立ち直れるか、再適応できるのか、というのは違ってくると思っているわけです。それを少しでも早く、あるいは皆さ



んに対してご負担がないような形にするというのが防災の仕事かなと思っていろんなことをやって参りました。そう言う意味では心のケアというのは私自身は被災者の方達が新しい現実の中で、ご自分のそれぞれの人生というものをそれなりの形で再構築される事のお手伝いをすることだと思います。直接的には本当に困っておられる方、そういう相談を持ちかけられる方に対してもいろいろなケアをするというのもそうだと思いますし、そういうそのケアをされる方達をケアするというのもそうだと思います。実は相談されてる方をケアするのは大変にストレスのかかる仕事だと思います。ボランティアの方達の燃えつき症候群ですか、防災担当の各部局の方々の燃えつき症候群という問題もいろいろ言われていますが、実はケアされないといけない人達は避難所にいる被災者だけではございません。地域住民みんなが被災者ですし、そのケアに携わっている人もある意味では被災者だと思って頂いていいと思います。そういう方を少しづつお助けできないかというようなことを考えて参りました。その中で一番重要な事は、まず新しい現実というはどういう姿をするものかというのを知ってもらうということが大事だろうと、僕自身は思っています。そういう意味では地域社会の中でのいろいろな広報活動というのは、今回ずいぶんいろんな形でやられました。そういう努力というのをやっぱりまず考えてあげなければいけない。それも非常に大きなケアだったはずです。それからもう一つは、新しい現実、それは皆さんの個々の現実もそうなんですが、この神戸、或いは阪神地域というもの、或いは兵庫県というのをどういう形にしていくのか、それが決まらなければ実はそのストレスのもとが絶たれないことになります。ずーっと混乱した社会が続していくこと自体が新しいストレスになりますので、そういう新しい兵庫県とか神戸のイメージというのを作る事のお手伝いというのを2月以降はして参りました。最後にそれをちょっとご紹介します。多分6月の末には兵庫県も神戸市も復興計画というものを出す筈です。ずいぶん誤解もございまして、復興計画というのはそれぞれの街の区画整理の計画のようなとらわれ方をしておりますが、それとはまた全然次元の違うもので、これからある意味で復興とはいいますが、21世紀に兵庫県なり神戸市が何を目指していくのかっていうのが今問われています。そういう目で見れば、古い物が壊れたのはチャンスだと思ってもいいのかもしれな

い。そういう気持ちまで持って頂いて、じゃあ21世紀の兵庫が、或いは21世紀の神戸が今までのまんまでいいのか、もっと住みよい地域社会になるのか、それを今考えている最中だと思います。期せずして県の側にも神戸市の側にも復興対策委員会というのをございまして、そのメンバーにさせられている事もありますし、いろんな所でいろんな事を申し上げていますが、結論は同じようなことを言ってます。それは4点に集約されるんだろうと思います。これは言ってみれば21世紀初頭に兵庫県なり神戸市が目指そうとしているゴールだと思って頂いたらいいと思います。1つは、安全な街を作りたい。もうあんまり壊れない街を作りたい。或いはライフラインがそんな簡単に途絶しないような街にしたい、という気持ちがあるというのが共通してるようです。それから2つ目は、もう一度経済的に繁栄した地域にしたい。地域の活力をなんとかして取り戻すんじゃなくて、もっとあげたい、という気持ちがあります。ですから今までと同じような産業をそのままの形でもとへ戻すんではなくて、これから兵庫県なりを支えていけるような新しい産業をどんどん作っていきたい、という気持ちがあるよう思いました。それから神戸市はそれを一つにまとめますが、兵庫県は2つに分けてます。そして魅力のある街にしたい。そのためには外の人に対して誇れる街にしたい。つまり神戸、或いは兵庫には高い文化性があるんで、みんな行ってみたいと思われるような街に戻したい、という気持ちがございます。それともう一つは、県民生活なり、この地域にいる人達の生活が本当に住みよいものにしたい。いろいろキャッチフレーズがありまして、『人にやさしい街にしたい』という言い方をしてましたが、いろんなところで議論している中で、『やさしい人が住む街にしたい』とした方がいいんじゃないか、つまり兵庫県で暮らしている人達お一人お一人がやさしい人間になれる、或いは人間としての質が高い人間になれる、そういう人達が集まっている地域社会を作るというのは、正直言ってすごく大変な事だと思いますし、半分は出来るか?っていう気持ちもございます。ですけど今皆さんは、21世紀、或いはこれから生まれて来る世代の人達に対して見られているんだと思って頂いたらいいと思います。今の力関係の中でいろんな問題があるかもしれません、21世紀初頭になった時に或いはこれが過去のものになって語り継ぐべき伝説になった時に、いったい形としてど

んな兵庫県が残っているのか、どんな神戸が残っているのか、今日ここでいえばどんな東灘が残っているのかが問われているんじゃないかなと思います。それに対するいろんなお答が今日皆さんからありました。それを答にするにはそれを実行するかどうかにかかっていると思います。どうも有り難うございました。(拍手)

【森先生】

林先生には全体的な構想、なんかここでシンポジウムをしめくくってもいんじやないかというようなお話がありましたけれども、ただもう一度その辺を個々の体験に戻りまして、又最後にそういう全体の話も入れていただいいかと思います。会場の方から今までのお話の中で刺激を受けたり、又違う面があるんだというようなことで語りたいという方ありましたら是非発言をして頂きたいと思います。どうぞお願ひします。

【Aさん】

魚崎町に住んで、家庭電気の店を甲南本通り商店街で経営しておりました、大倉でございます。一言、二言自分の希望を申し上げたいと思います。それには小山さんのボランティアの報告の中に、もとの場所でもとの商売をやっていきたい、こういう被災者の声が記録されておりました。それは私の希望と全く同じなんです。甲南本通り商店街に信号が一つございます。その信号の南側で家庭電気をやっておった者ですけれど、同じ場所でやはり家庭電気がやりたい、これが自分の復活の最も基本的な希望なんです。といいますのは、私に何か他の商売やれといわれましても、それは無理です。しかもそこで家庭電気は25年、生粋ばんでやっておりました。そして店の前の通りが鳴尾・御影線といいまして、そこでだいたい姫路・明石から大阪方面、特に宝塚方面へ走っていく車の道なんです。それが私の店の基本的なお客様なんです。そこで25年やっているということは、もういっぺんやりましたら、「ああ、あのやじが又やった。」ということで、寄ってくれる、そういうことがうかがえるんですね。どうでもやりたい。木造二階建てのお粗末な借家で、住宅兼店だったんです。それが全壊しまして、現在では更地になってしまいます。それで、地主はどう言っているかと言いますと、「もう借家は建てない、売ってしまうか、ガレージにするか、この二つでやっていきたい」と

言ってます。その中には、借家権というものが、ただの一言も折り込まれてはおりません。全く自分の考え方だけを言っております。しかし、取り方によつては神戸市がそういう土地を買い上げて、そうして神戸市が新しい、木造トタン屋根でよろしいんです、私が住んでおりましたのもトタン屋根で、私が二階で寝ておりましたが一階がペちゃんこになって二階のトタンが五軒そろってふたをあけたようにもちあがりました。ということは、何にも落ちてこないということなんですね。瓦一枚落ちてこない。そういうことで、掠り傷一つなしに二階から下へすべり落ちてきたということなんです。ですから今後も木造トタンでよろしいです。神戸市がそれを買い上げて、神戸市が建設をやる、そしてその建設も何年か先になれば、その借家人の持家になる、そういう家賃の契約、或いは単なる家賃でも結構です。何かそういうふうな方法で、もう一回又貧しい商売人が商売が出来るような、そういう方法を立てて頂きたい。これが希望として、皆さん方、おえらい方になんとかつかまえて、そして神戸市に対してそういう意見を持っていって頂いて、そして被災者を再建に向けて希望も持たせ、望みも持たせてやっていって頂きたいというのが私の希望でございます。どうぞ宜しくお願ひ致します。

【森先生】

どうも有り難うございました。今のお話の中になりました、ものとおりのものをやりたい、木造トタンでもいいからもとのとおりの場所でやる、それが希望というのはかなりの方に共通していると思います。全く違うものになってしまふ悲しみといいますか、それでは自分の今までの人生につながるものが多くなる、同じことを始めるで繋がっていくという思いがあるんじゃないかなと思います。今のようなことに関してどうでしょう、他の方で。橋谷さんなんか同じお商売やっておられる面から今のようなことをどういうふうに受けとめられますか。

【橋谷さん】

商売というのは店を開けるだけじゃなくって、それまで店を育てくれたお客様というのが非常に大事なんですよね。先ほどお話をなさいましたようにその店に来る人というのはその店だから寄って下さるというのがあると思うんです。だから全然違うところにあると、こういう言い方はあれなんですが、

やっぱり25年培ってこられた歴史をもういっぺん一からやらなあかんという部分では、私もやっぱり今の場所で商売出来るから少しは外向いて頑張っておれるんやないかんという感じがしてます。

【森先生】

そうですね。それと新しい街づくりとの両面というのは非常に難しいと思います。何か他に関係のあることでもよろしいですし、違う面でもよろしいですけど、会場の方で発言なさりたい方おられませんか。

【Bさん】

先ほど林先生もおっしゃったと思うんですけども、被災者にスポットをあてるんじゃなくて、ボランティアしてる側に焦点をあてて話してみたいと思います。

朝日新聞の4月27日の夕刊に、河合先生がボランティアやることの難しさという記事を書かれていたのを参考にさせて頂いて、今から申し上げたいと思います。僕も3週間ほどボランティアさせて頂いて、甲南大学にも2日ほど寄らせて頂いたんですが、こちらがやりたい事と被災者が求める事の乖離というか、そのへんが少し離れているというか、そういう時に心の専門家の人だったら忍耐強く人間関係が出来るまで活動されると思うんですが、我々心の専門家じゃない素人がボランティアにたずさわる時に、うまく人間関係が出来ていく人っていうのはいいふうにまわっていくと思うんですが、普通に心のことがわからないっていうか、どういうふうな中でっていうのを知らない人達っていうのは、挫折している人が結構多いと思うんです。それで大学生の中にも早稲田なんかっていうのは成功した例かなって思うんですが、中部地方のある大学なんかは嫌だってことでボランティアから撤退していくっていうか、そういうふうにこちらが求めていることと、被災者の方が求めていることとのギャップっていうのを埋めあわせる時に、我々素人がどういうふうな心を持って接すればいいか、とか又、何を拠り所としてボランティアをするかというのを心の専門家の方に教えて頂きたいと思います。

【森先生】

だれが答えたらいいいでしょうか。(笑) 河合先生には又後で伺いたいと思うんですけども、同じボ

ランティアをされました太田さんから、こちらではボランティアとして非常に苦労した面、難しかった面がまだ充分出てないと思うんですが、何か今のお話に対して補足されたい面ございませんでしょうか。

【太田さん】

どこの避難所でも同じようなことはあったと思うんですけども、ボランティアというはあるニーズがあって、それに応えるというのが本来の姿だと思うんですけども、よく新聞で書かれていることに、“やってあげている”っていうことと、本当にニーズがあってそれに応えるっていうのは違うと思うんですよね。そういうのを私は思い知らされました。やっぱり被災者の方のニーズに応えてあげるのは一番正しい方法だろうし、トラブルが少ないだろうと思います。けれど人間のする事ですので、私もいろいろ間違いもしますし、ただその中でボランティアのみんなに呼びかけたのは、“とにかく話をしようよ”ということでした。だから時間があいたら被災者の方と話をする機会を持つようにしようと、忙しい中で話す時間をとって、少しでも誤解があれば誤解を解いたりとか、話することによっていい人間関係が築ければいいなと思っていました。それが実際結果として良かったか分からんんですけども、なるべくそういうふうに動いたということがあります。

【森先生】

ボランティアの面でいかがでしょうか。この中にもボランティア活動された方は多いと思いますが、そういう点で悩まれた例とかありましたらぜひ聞かせて頂きたいと思います。実際そのニーズに応えるのがいいというふうに言われる面があると思うんですが、そのニーズが何かというのは難しいと思うんですね。ニーズのとおりに応えたら本当にいいのかという面もあると思います。先ほど避難所がやり過ぎて、それで依存的になってしまうような危険性というのもあります。須坂先生どうですか、そのへんの悩みというのは。

【須坂先生】

私が感じたことにこういうことがありました。学校の放送席のあるところをしていましたが、「本部やったら何でもやるんやろ」ということで、被災

証明を求められたことがありました。「被災証明ってなんですか。」ってこちらのほうは恥ずかしいことにその事を知りませんでした。その方は自分で歩けるんですね、しっかりと。話すことも出来るんです。自分でやろうと思えば出来ることを、本部だからやれというふうなことだったんです。私自身の生き方がそうなんですが、自分の出来る事は、自分で一生懸命するというのが第一番だと思いました。こういうふうな非常事態で大変だということは分かるんですが、その中で自分で出来る事は自分でやる、どうしても出来ない場面で、その必要性の高いものに関しては、回りの方が支えてあげるというようなことが出来たらいいんじゃないかなというふうに感じました。

【森先生】

そのへんの判断が非常に難しいと思います。河合先生がおられますので、その点についてコメントござりますか。

【河合先生】

まず私の感じたのは、だいたい日本ではボランティアが育たないというか、あまりないというふうに言われてたんですね。今回たくさん出て来られて私は非常に嬉しかったです。それだけやっぱり日本の国が変わってきたということです。先ほど、近頃の若者はという話が出ていましたが、本当に若い人が活躍してくれて非常に嬉しかったですね。しかし、皆体験されたと思いますけど、人の役に立つということはものすごい難しいことなんです。軽く考えていると出来ますが、今須坂先生が言われたとおりで、「被災証明持ってきてくれますか。」と言われて、「持っていきます。」と言うと、これはニーズに応えたことになるわけで、でもそうしていくと結局被災者の人は、自分が座りこんでても全部他の人がしてくれると思ってしまうと困るわけです。だから、そういう時にボランティアはそういう人に対してどういうふうにものを言うのか、どうすればいいかということは、僕はこれからボランティア学というのができるてもいいと思うんですね。これだけ日本人の人がいろんな所にボランティアに入りだして、これからももっとボランティアの数は増えると思います。そうすると「ボランティアっていうのは案外難しいぞ。」と本気で考え出します。今太田さんとか小山さん、須坂先生が言われましたが、自分たち

の体験がこれだけ出てきましたので、そういうのを皆に言ってもらって、そこからこういう際にはこういう事があったとか、こういう際にはこういう話し合いをしたとかいうのを、これからずいぶん研究されていくと思います。ボランティアですから明日からなるっていうそんな単純なものじゃない、というぐらいいのがいると思います。だからボランティア学っていうものすごく難しく聞こえますが、そうじゃなくて実際にすることは難しいが、それをもうちょっと考えていくという感じでいいと思います。今須坂先生がおっしゃったような、自分が出来る事を頼みに来られる人に対して、どういうふうに対応するかということは、非常に難しいことです。しかしそういう時に太田さんが言われたように、「してやってる、してあげてるんだ」という気持ち、或いは「この人は自分で出来るじゃないか、出来るのに俺に頼むな。」と言ってはだめなのです。あなたは自分でやるんだというのを教えてあげなければならぬ、というようにこっちが上に立ったら絶対だめなんです。上からものを言うのは絶対だめで、その人はすごいショックを受けて大変な状態なんです。だから自分で行けるかもしれないけれどもこれだけのショックを受けている人やったら私が行きましょうと思ったらいいし、「はい、行きましょう。」と言うんじゃなくて、「本当はあなたが行ってくれたら嬉しいんですけど、この際は私が行きましょう。」とかいろいろ言い方が出来ますね。その言っている時に、上からものを言っているか、下からとか対等でのものを言っているのがわかります。例えば「頑張ってねーっ。」と言わいたら、「やかましー。」と言いたくなけれど、「頑張って下さい。」と言わいたら、「はい。」と言えます。「頑張ってねーっ。」という声がどのへんから出てるか分かるわけです。その時にぴたっと真っ直ぐにものが言える練習というのをしないといけません。我々はそればっかりやっている人間ですが。だから学校の先生なんかによく言うんですけど、子供たちに「何でも言いたいこと言いなさいよ。」とか言いますが、これは上からものを言っているから誰も言わないんですよ。言うはずがない。私はよく言うんですが、水は低いところへ流れくると。だから向こうからものを言ってもらおうと思ったら、こっちの方が低くないとだめなんです。上からものを言って向こうから流れ来るはずがない。真っ直ぐの関係だったら「あっそうですか、あんた行ったらどうですか。」

と言っても真っ直ぐものを言っていると案外怒りません。そのへんは人間というのはものすごい不思議なもので。それを「教えてやろう。」とか、「自分の事は自分ですべきですよ。」とか言うと、喧嘩になります。しかしこれに応えるというのは、相手の言っていることをそのままやるんじゃない。ニーズというのは、相手が言ったことがニーズじゃないんです。人間が生きていくということがニーズなんです。人間が生きるということはどういうことかというと、今はしんどいから行ってくれと言っているけれども、本当はこの人が自分の足で行かれる方が人間が生きることなのです。だからお互いに「一緒に生きていきましょう。」とニーズの上に立ってものを言うという練習がいると思います。これはものすごく練習しないとなかなかできません。口で言うのは簡単ですが、なかなか出来ません。しかし「そういうふうにしよう。」と思ってやっていると、それは太田さんが「話をしましょう。」と言っておられましたが、「話をしましょう。」というのはこういう関係ですね。そういうのが出来たら案外言いやすいです。こういう人と関係が出来たら、「あなたそんなんやつたらええやないの。」と言っても怒らないでしょう。ところが、ものすごく丁寧に「ご自分で行かれるほうがいいんじゃないでしょうか。」と言っても、心が上に上がっているとバーンと蹴られるわけです。だからそういうふうなことをこれからもっとボランティアの人は練習するというか、分かるということが大事だと思います。

【森先生】

この中にも援助という経験をいろいろされたという人もあると思いますが、逆に援助してもらったという体験也非常に多いと思います。そういう体験から何かありますでしょうか。

【Cさん】

実は私の家は全壊しまして、潰して、今からどうしようかと、心がぎたずたになった時に小林健一郎さんが声をかけて下さって、朝日ホールでそのコンサートを聴いてきて、これも聞きたいからと、タクシーで駆けつけて来ました。それで我等が西崎先生の言葉を聞いて、それで皆藤先生の話を聞いて、したら「声をかけてもらって嬉しかった。」というのがあったと聞いて、私はぱっと庭に出た時に、隣のマンションの若いお嬢さんが私の前で、「どうし

たらいいのー。」と言ってきた時に、「あーっ、言わないで欲しい。」と思ったんです。実は、私の知っている人で50人は亡くなってるんですけども、「どうしたらいいのー。」と言われても、「降りてらっしゃい。」と言って、降りて怪我をしたらどうしようと思いました。私も孫のところに走ったりしていました。娘も本山中町で被災しまして、そして「母親はあの古い家だから潰れているだろう。」と思って走って来た時に、私はその娘に小さい時から、「何かあったら避難所に行きなさい。」と言ってたらしいんです。そこで娘に会いました。その時に、実は街づくり協議会で、街をきれいにしようという時に、いらぬ看板を取ろうということになったんです。すると誰かが「『避難場所』の看板を取ったら。」と言ってたんですけど、私はそれは違っているんじゃないかなと勝手に思っていたんです。それから本山第一小学校に行って、どこに一人暮らしのお年寄りがいるとかというのを知ってましたので、本当に年寄りの人ばかりを集めていろいろやりました。だからふと皆藤先生の言葉を聞いて、『声を掛けられて嬉しい』というのと、『声を掛けられて本当に困った』というのもあるというのを知って頂きました。

【森先生】

その辺の震災直後の体験といいますか、今のような事について他の方どんな体験を持っておられるでしょうか。助けられてこんな気持ちがしたとか、そういうことがもしありましたらどうぞお願ひします。

【Dさん】

お互いに生きていこうという姿勢のお話があった時に、ふと私が浮かんだことがあったので、それをお話したいと思います。私は、父と母、それから祖父母と暮らしてたんですが、祖父は去年の2月に亡くなって、あとは身体の不自由な祖母が一緒に暮らしてました。それで家は全壊になって、祖母が下敷きになり、なかなか救助が出来なかったので、亡くなってしまいました。私も父も母も生き埋めになり、一言では言えませんが、とても怖い思いをしました。それで避難所で暮らしていた時に、やはりいろんな方がおみまいに来て下さり、関東の方からも親戚が来てくれたんですが、その時にいろんな方と震災の体験を話してて、明らかに違うな、この人と

話してて違うな、と感じたことがありました。やっぱり体験しないと分からぬことがあるんだなと思いました。先ほど皆藤先生が、普賢岳の事とかおっしゃってましたけれども、私もそれを感じました。普賢岳も、ルワンダのことでも、あれだけ国内外で起こっているのに、私は今までテレビを見て御飯を食べながら「大変だねー。」って話してたんだなと思ったんです。それでやっぱり関東の方も、「テレビを見て大変だなーって思って来たのよ。」と言って下さった時に、親戚だから悪く言うつもりは全然ないんですが、やはりテレビで見て体験してないから分からぬことがあるんだな、私も今までこうだったんだと思いました。それで、人のことを分かる、人の立場に立つということは、どんなに難しいことなのかなっていうのを今回の震災を感じました。ですからお互いに生きていく姿勢っていうのを感じる、感じない、どっかで直観的に感じて言える人と言えない人がいるっていうのが、あるんだなっていうふうに、私の体験を感じました。

【森先生】

このあたり今回の震災の中核にあるような体験じゃないかなと思います。他に違うようなニュアンスの方とかいらっしゃいますか。

【Eさん】

魚崎に住んでいるものです。皆藤先生にちょっとお聞きしたいんですが、先ほどのお話の中で『神戸には地震がない』というふうな神話は本当に皆さんもってたんでしょうか。

【皆藤先生】

この震災体験の記録というのは、54人の方のものを読ませて頂いたんですが、その中でかなりの方の『神戸には地震がないと思っていた』という記載がありました。ですから私が直接聞いたわけじゃないですけれど、記録を読んだ限りではかなりの方が『神戸には地震がないんだ』と思っていただろうと思います。

【Eさん】

それは行政の方で、来ないんだという広報のための安心感じゃないでしょうか。

【皆藤先生】

そのへんはよく分かりませんが、僕自身は明日何が起こっても不思議じゃないと常に思って生きてますから。

【Eさん】

ですからこれは地震学会とか、そういう学者の間では常識であった、いわゆる断層の問題がですね、行政の広報では来ないんだというふうなところへすり替えられてしまっている危険性といいますか…。

【林先生】

ちょっと代わってお答えしますが、私は神戸市をこの頃よく見てて思うんですが、そんなに賢くないです。私はいろんなところでいろんな被災をしましたが、確実にどの地域に行きましたも、ここは災害がないところだからというのを聞きます。それはむしろ人間のごく一般的な思い込みのパターンのように思います。客観的な状況を見て、非常に災害の多発地域であっても、ほとんどの被災者の方は『ここは災害のないところだから。』と言われて、私はそれで三回安心して、三度ともに痛い目に遭いましたのでつくづくそう思いますけど。

【Eさん】

しかし知事とか市長は一応あらゆる情報を持っていたわけじゃないですか。

【林先生】

それも理想論だと思います。正直言って防災というものは非常にプライオリティーの低い事業でございまして、防災そのものは、県政或いは市政においても非常に優先順位の低いものとして扱われています。今までほとんど予算もついていません。ですからそういう意味では、実際県や市が作っている文章の量を考えてみましても、とても一人の個人が読みきれるものではありませんし、たとえ読んだからと言って頭に入れてそれをもとに何かが出来るというものではないと思います。

【Eさん】

普通地震というのは50年から100年の間に起きるというふうな事でしょうしね。

【林先生】

それも場所によります。

【Eさん】

不確定要素というはあるんですが、だから100年の間に一度あるかないかのものならば、経済的に防災に対する問題あまり考えるべきではないと判断されたわけですね。

【林先生】

今までではそういうふうに考えてこられた都道府県も大変多かったです。

【Eさん】

ということは、多分に政治的な判断で左右されたわけですね。ただ我々に対してもそれを知らしめる必要があったんじゃないでしょうか。

【林先生】

要するに、それは限られた予算の中でどの事業を優先するかという、結局その問題ですよね。正直言いまして、僕はそういう意味で言えば行政だけを責めるのは酷だと思います。そういう形で予算執行し、そういう方を議員として選んでこられたのは県民であり市民であると思います。そう言う意味では災害の起こった後いろいろな人間の行動があります。最初ショックの状態で何も分からず、その後いろいろな過程を経まして4番目5番目というところぐらいで、どこかに先ほどの怒りというものをぶつける先というのを見つけ出すようなことがございまして、大体どの被災地に行きましても行政というのは糞味噌に言われています。ですからその行政の中身の人達を見ていてつくづく私は可哀相だと思うのは、そういう行政の制約を実際に課してきたのはやはりそこの個々の市民であると私は思います。

【Eさん】

その通りなんんですけど、そしたら責任も何も言えないわけですかね。

【林先生】

ただ行政が十分賢かったかといえば、それも又問題があります。ですが逆に言えば今回これがわからといってすべての予算を防災につぎ込むなんていうのも、ある意味では糞に激りて膚を吹いている

のかも知れません。そんな気も致します。

【Eさん】

僕はちょっと意見が違うんですけど。地震に対してはいつ起るかというのははっきり言えないわけですよね。極端に言えば、市民の皆さん覚悟してくれよ、と市民に対して言うべきだと思います。

【林先生】

それはまさしくおっしゃるとおりだと思います。

【Eさん】

地震が起きるかもしれないということを、一切言わないというのは問題があると思います。

【林先生】

一切言わないということはないと思いますが、それを優先順位をあげて喧伝はしてこなかったというのは事実だと思いますけれども、例えば僕個人としては防災ということに気を使って頂けたらいとは思ってますが、そのためには先ほど須坂校長もおっしゃってましたが、一番大切なのは自分の命、自分の財産、自分の生活は自分で守るという気をまず持つ事だと思います。それを自分だけでは出来ませんから、街・地域全体としてそういうこともしてもらわなければならない、それに対して自分達は税金を払うんだという、やはり自分が払いになっている税金というのは自分達の生活をより安全によりいいものにしていくっていうつもりで払って頂く。それに対して、そうなっているかというチェックも自分達の生活を守ることの一部だと思います。普段は全部行政におしつけとて、いざことが起こった時に、「おまえら何も知らせなかつたじゃないか。」というのはどうかなという気も個人的にはしています。

【皆藤先生】

体験記の中に、こういう震災があって自助努力っていうですか、自分の身を自分で守るっていうことがこんなに大変だったのか、今までどうしてこんなことに心を配ってこなかったのかということを思い知らされたというのがいくつかあります、これもやっぱり大きな人生観や価値観の変換だというふうに思います。

【森先生】

行政までも含めて大きな問題だと思うんですけど、関連するんですけど私が気になってるのは、行政側の人に今日来て頂けなかったことなんです。例えば区役所の職員とかそういう方は行政側ということで非常に非難を受けるわけですよね。個人としては被災者でありまして、ものすごい体験をされたると思うんですが。もしそういう方で来られましたら…。個人としてこんな辛い体験をしたとかでもいいですのでございませんか。立場上言いにくいということもあるかもしれません…。

【Fさん】

私は80歳で、もう車の運転をしてないんですけれども、どうも日本において車の方が優先で、歩行者が非常に困っていると思います。ヨーロッパなんかに行くと、どこの街でもゼブラゾーンなんかに立っておれば車は止まりますし、警笛なんか鳴らしません。日本では平気で鳴らしますが。それが震災があってからますますひどいわけです。それは行政の方も非常に気を付けて、こんながたがたしてるとても歩行者の歩道を広くしたりして欲しいです。それは運転者のビヘイビア (behavir:行動) の問題なんですね。それから行政もですね、僕は神戸市の方に依頼したんですけども、歩行者天国というのヨーロッパの都市ではどこでもやっているんですが、日本はそれを真似しましたがすぐにやめてしまったんです。やっぱり強者が非常に強いということだと思います。河合先生がお話をなった中に、こういう大きな事が起こっても日本では暴動が起きなかつたとありました。たしかに米国では暴動が起つたと思うんですけども、これが英国のロンドンあたりだとはたしてこういう事が起つたかどうかと思います。私もそんな長いことロンドンにおったわけじゃないんですが、子供一家がロンドンにおった時に、三回ほど一月一月二年おきぐらいで行きましたけど、向こうでは例えばトイレでも一列にちゃんと並んで空いたところから順番に入ります。鉄道なんかでもきちんと列を正しくして並びます。それから今言いましたように、ちょっとゼブラゾーンなんかに立つと、ちゃんと止りますしね。普通に歩いても後ろから来た車が警笛で追い立てるようなことは絶対しません。ヨーロッパの小さい町でもどこでもそうです。ロンドンでの第二次大戦の空襲を見たわけじゃないんですが、映画なんかで見ますと、

地下鉄に入るのも順序正しく入ってます。私が神戸で空襲に遭った時に、加納町3丁目に大きな広場がありました。そこには公共の防空壕があったんですね。そうするとそこには我勝ちにと人が入ったんですね。それで入れずに山に逃げた人が助かって、我勝ちに入った大きな男はみんな蒸し焼きになったのを何回か見てるわけです。どうも日本は強者優先で、間違いが多くあるんじゃないかと思います。リュックかついで北欧の方、南は危なくて歩けませんけど、その歩いた経験によりますと、外国では弱者が保護されているので、そのへんのことについてお聞きしたいと思います。

【森先生】

何か先生方でコメントありますか。

【林先生】

よろず引き受け場になつますが、(笑) 確かに強者が強いというのがあると思いますが、強者というのは私がもっとむかついて言いますと、この頃自転車というのは歩道を走らされますが、自転車に乗っている人はチリンチリンと鳴らして歩いている方を追っ払っています。そういう意味では自動車だけではなくて、人間の在り方の問題だと思うんです。自分が強い立場になった時に自分の欲を通そうという気持ちが日本人には強くあります。それにひっかけて申し上げたいのは、私権の制限と民権、いわゆる公共権との問題が神戸や兵庫では本当に問われていると思います。私は日本という国はずっと私権を制限しないできた国だと思います。言ってみれば各人が勝手放題やってきて、その勝手放題やってきた結果として、自分が強い立場になったら自分の思い通りにやるということが、今ご指摘になつたことだと思うんですが、本当にそれでいいんだろうかというものが実は今回の災害で私達は問われていると思います。大変に危ない違法建築を建て、消防自動車も入れないような通りまで人が密集して住んでおります。いろんな理由で都市計画みたいなこともずっと阻まれてきました。例えば山手幹線というのは某市のところで中断しております。あれは某市のエゴで中断しているはずですが、そういうような強い者と弱い者の間で、“私の権利”というものが“公の権利”に優先するという社会が日本ではずっとあったと思います。それはある意味ではそういうことをいけないということを、僕がヨーロッパや欧米がいいとい

うのは、そういうことを公教育としてちゃんとやってきてるからだと思います。そういう教育なしに日本がいることが原因になると思います。神戸や兵庫が今回も私権が優先する形で復興をするのか、していっていいのか。私は皆さんに神戸が世界で一番、日本で一番だというような自負を持っているのをよくお聞きしますし、暴動も起らなかったとおっしゃいます。それだけ市民の熟成度が高ければ、やはり市民全体として神戸や兵庫の地を本当に一等地に抜いたところに出来るチャンスを今は神戸や兵庫は持っていると思いますし、じゃあそれをどれだけ実現していくのかというのを兵庫や神戸で問われていることだと思います。それは残念ながら皆さん被災された方にとって、確実に被災前の現実がもう一度作れるとは限らないということも含めてだと思います。ですから一番最初にご質問された方が同じ場所で同じ生活をしたい、同じ商売をしたいとおっしゃってましたが、私もその話非常によくわかります。そうすべきだと思うんですが、その時に一つぐらいはあきらめて頂かないといけないのかもしれません。前と同じように木造二階でという部分は、もしかしたら集合住宅や集合のビルになってしまってぐらいいの譲歩をして頂いて、「そこまでこっちも譲歩するからもう一度商店街を復興させよう。」と言って家主と話し合いをするとかしないといけないと思います。それほど先ほど街作りの皆さんにおっしゃったように、市民が主体になったような復興というのが求められていると思いますし、自分達だけのためになるんじゃなくて、みんなのためになる形にもっていけるかどうかっていうのが非常に重要なことで、先ほどの非常に小さい警笛一つもある意味ではそういう問題に繋がっているような気が致します。だから私は兵庫や神戸に期待すること大で、本当に日本にとって範になるような素晴らしい復興と復活を遂げて頂けたらと思っています。

【森先生】

どうも有り難うございました。何か今まで出なかった部分でございますか。

【Gさん】

私は今日は大阪から来まして、直接被災したわけではないんですが、西宮で被災された知り合いの方にこのチラシを見せて、「こういう催しがあるのによかったら一緒に行きませんか。」というふうに誘

いました。その時にその方が、公開討論会の題名を見て、一言「今は震災後ではない。」というふうにおっしゃいました。詳しく聞いてみると、「今現在倒壊家屋なんかでも、3分の1ぐらいしか撤去が終わってなくて、3分の2以上がそのままになって残っている。そういうた倒壊家屋なんか見るたびに、毎日毎日地震のことを思い出すような日々が続いている。だから今はまだ震災後じゃなくて、震災の真っ最中じゃないのか。」というふうにおっしゃいました。そのことを先生方はどういうふうに考えていらっしゃるかをお聞きしたいと思います。

【森先生】

他の先生方も考えがあると思うんですけども、私も企画する時のタイトルの付け方とかそのへんで悩みましたのでちょっとお答えしますけれども、まず一つは“震災後”というこの言葉の意味は、実際あった地震以後の体験といった意味で言ってるので、震災終わったんでその後のという意味で言っているんではないんですけども、とにかく震災があった1月17日から現在に至るまでの体験を語ろうという意味でこういうタイトルをつけました。そのへんはその方のとられた意味と少し違うかなと思います。実際震災というのは決して終わったわけじゃなくて、むしろしんどい時期というのはこれから来るということがあります非常にあります。それは経済的な面でもそうですし、心の面で言いましても初めの時期というのは非常に混乱して、自分のものとしてそういうものを体験として味わっていくのはこれからじゃないかというふうな気がしています。ですから我々専門家だけがそういうものに携わるわけじゃないんですけども、震災を考える人間としては1年2年という、或いは5年10年という長い時間の中でどういうふうにしていくかということを考えておかないといけないし、どこかでその体験を区切るものではないと思います。ですから今回の討論会も今までの時間の流れについて、ある程度語ることによって、今どこにいてこれからどこに行くのかという道筋が少しでも見えたなら意味があるんじゃないかなと考えて企画したわけです。先生方、“震災後”という言葉についてはどう思われるでしょうか。

【太田さん】

“震災後”ということですが、日本にとって永遠

の課題だと感じまして、1月17日というのは本当に日本にとって大きな転機じゃないかなと感じました。関東大震災に関する資料が全くないという話を先ほどされてましたが、第二の関東大震災にしてはならないなと思いました。ですからこれから継続的に、私も知り合いにいろいろ話をしたりとか、一人一人が課題意識を持って忘れないように努力することが必要じゃないかなと思います。被災者であるとか被災者でないとかそういう区別なく、日本における大きな課題としてとらえていかなくちゃいけないと感じます。

【森先生】

橋谷さんは先ほど終わってないというようなことをおっしゃってましたが、今のご質問に対して何かございますか。

【橋谷さん】

時間のことだと思うんですよね。終わったから“後”というんじゃないくて、例えば“結婚後”というのは結婚式をしたから“結婚後”というんじゃないくて、そこからがスタートだと思うんです。私もなおったと思ってましたが、ある友達と話していた時に言われている中で、全然なおってないなと思いました。自覚しているだけまだいいんじゃないかなと思います。だから潜在的に入ってらっしゃる人でも立ち直ってらっしゃらない方がいっぱいいらっしゃるんじゃないかなと思います。たまたま“後”とついてますが、私もそうですが、震災・被災を受けた真っ只中だと思います。だけどころうううにして私が一つ思うことは、全国とか世界から来て下さった方に対して、神戸市として個人として何を恩返し出来るかなと思うと、今私が恩返し出来るのは、自分が受けたこの被災でもって誰かが受けた時に少しでも返せる部分が今の積み重ねじゃないかなと思いますので、私が皆さんから受けた、いっぱいの愛情の一つ一つの恩返しのために語り部として生きたいなということがあります。引きずるんじゃないなくて、語り部としてやっていきたいなと思います。こういうふうにまだ真っ只中に居ります。

【皆藤先生】

今彼女が言われた通りなんですけれども、今ご質問されたお友達のおっしゃってる気持ちは本当にその通りなんだと思います。そして私も含めてここに

いる全員が同じような気持ちでいると思います。まだ避難されている方もたくさんおられるし、そういうことがちゃんと終わって、生活の復旧が全ての人々に終わってはじめて震災は終わったんだというふうにすらも僕は考えていません。そういうふうなことが全て終わったとしても震災というものは続いているんだと思います。だからそれは一人一人の心の問題として続いているし、こういうことがあったというのは絶対に消えない事実として残っていくわけですし、そのことをどう考えていくのかというふうな気持ちで我々はここに座っているんだと思って頂けると嬉しいです。

【森先生】

どうも有り難うございました。

【Hさん】

今日のお話を聞かせて頂きまして、感想を述べさせて頂きます。林先生には怒られそうですが、やはり私個人としてはできましたら1月16日の生活に戻りたいというのが、個人のレベルとして正直などこじゃないかなと思います。3連休をそれなりに楽しく過ごしまして、明日から会社勤め始めなあかんということでそれなりの準備をしまして寝ました。ほんやりと、朝目が覚めそうな時に地震が来て、今に至っているわけですけれども、やはり気持ちの中では元の生活に戻りたいというのが基本であります。それでいろいろお話を聞かせてもらいますと、やはりそれぞれの受けた被害とかインパクトというのはそれぞれ違うと思うんですけども、今日も話にありましたように、何らかの形で神戸市民の方は影響を受けておられます。私の兄も家は壊れませんでしたけど、実はダイエーの方からマージンを大きくするように請求されまして、結局会社を潰すという、赤字になりますので、会社を潰すということでは会社を解散するということになりました。一般的なことを言って、お年寄りの方に怒られるかもしれませんけれども、やはり年をとっておられますと収入は少ないのでしょうし、貯えがある方はいいと思うんですけども収入がない、やはり先立つものはお金ですから、入ってこない方がおられる。身体的にも夫婦二人で住まれている方だと、やはり何か復興しようと思っても限界があるということだろうと思うんです。それぞれの方が思われているのはやはり元の生活に戻りたいということですから、10年先20年

先、林先生が言われたみたいに誇れる神戸の街にしたいという気持ちは持っているんですけども、そういうことが優先されるべき時とそうでない部分もあるという具合に私は考えますし。やはりそれぞれの状況に応じて、個人の力ができる部分と、行政ができる部分と、あるいは地域の皆さんと協力をやっていける部分というのが、いろいろ今日の話を聞かしていただいているように思います。ですから、個々のレベルで努力できる部分、あるいは地域の皆さんが話し合って協力できる部分、あるいはもう少し大きな組織で対応できる部分、あるいは市全体で兵庫県全体で議論して対応できる部分、その辺の所を、指導する方や地域の中心になっている方々が引っ張っていくということも大事なことではないかと、私は感じました。以上です。

【森先生】

ありがとうございました。適切なコメントいただきましてありがとうございます。申し訳ないんですけども時間を延長しておりますので、これだけの人数の方が来られていて、発言なさりたい内容をお持ちでありながら発言されなかった方も多いかと思いますが、時間の方に限りがありますので、このへんで締めくくりにさせていただきたいと思います。震災というのは、私が思いますに、例えば今日の話にも出てきましたけど、カリフォルニアであった体験とつながるとか、どこか遠い場所の震災・災害とつながっているというふうに非常に同じ体験を共有している部分もありますけど、隣の人と全く違う体験をしているという、本当に隣の人と自分とがこの

震災で違う体験を味わう、切り離される、そういう両面、両極端な面、両方あるような感じが非常にいたします。どちらも結局、人生そういうもんだということかもしれませんけれども、なんかそういう人生のある局面を思いしらされる体験であったというふうに思いますし、それがまた続いているというふうに思います。今日のこれは区切りではなくて、流れの中の一つの体験として考えていただいて、今日ここに来ていただいたことが、もし皆さんそれぞれの心の中で、何か変化といいますか、そういうものに繋がれば我々としては非常にうれしく思います。

今日はどうも参加して下さいました先生方、シンポジストの方々、ありがとうございました。河合先生もどうもありがとうございました。参加して下さった方もありました。これで終わりとさせていただきたいと思います。(拍手)

それからですね、連絡なんですけども、今日アンケート用紙配っていますのでお書きいただきたいと思います。それから住所を書く紙がありますけれども、かなりの方に体験談を書いていただいたらしくて、中にはあれでは充分に書けなかったと、あるいはああいうものがあるんであれば自分もそういう体験記を残しておきたいというそういう方の声も聞きますので、もしそういうご希望のある方がありましたら、その紙に少しコメントとして、自分も書きたいとかそういうようなことを書いていただけたらまた連絡差し上げて送っていただくということもできると思います。そういうふうにも使って下さい。

震災体験に関する寄稿

震災発生からおよそ3ヶ月にわたって甲南大学の施設の一部が地域の方々の避難所として開放されました。東灘区は山側にも住宅地が伸びており、一時は山崩れの危険性により広い区域にわたって避難勧告が出され、甲南大学の構内には数千人の人々であふれました。校舎の約半分が全壊するという被害をかかえながら地域の人々とともに教職員は復旧に向けて努力する日々が続きました。余りにも局地的な被害による他地域との格差を克服しながら我々の心の持ち方が時とともに変化してゆくのが感じられました。その様な状況の中で、本学文学部の臨床心理学を専門とする教員を中心に「阪神・淡路大震災後の被災者の心理的回復プロセス」をテーマとしたグループが出来上り、総合研究所がその活動を支援することになりました。

震災後の人々の心の持ち方の推移を調べようという意図でこのアンケートが企画され、第1回目は主に東灘区に住われている方々を中心に回答を依頼し

ました。アンケートは時間軸を明記した震災体験の記入例を同封し、約300名にアンケートを送付しました。

家屋の倒壊、避難先不明、その他の理由で手元に届かなかったものや送り返されてきたものは50通程度と推測されます。避難者数が20万人を超えているといわれた復旧最中の時期でもあり、約60名の内容のこもった回答を得たことは驚きであり、御回答下さった方々に感謝致しますとともに今後も総合研究所の活動を御支援下さいますようお願いする次第です。

回答者60名の内訳は次の通りです。

男	女
23	38

年代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
	2	6	8	13	14	14	4

女性・58才・本山町

1/17 激しい揺れの中で地震であると思いつゝ、関西（神戸）にあるはずがないと思いつづけている自分が、後から考えるとおろかであった。誰が保証していたわけではない。だから何の備えもなく、暗がりで主人に声をかけ、主人は子供達の無事を確認した。ガスもれなど念頭になく、マッチでろうそくに灯りを燈した。これも後々考えると不用意であった。子供達の携帯ラジオでニュースを聞くが事の重大さが分らない。しかし、雨戸を開けると市街地はあちこちで火の手があがっている。関東大震災を経験した義母の話が思い浮かんだ。家の中の家財道具の倒れ方は我家では東から西へ倒れているものが多かった。しかし、幸いな事は食器棚が作りつけで開き戸でなく引き戸であったため食器の損失はほとんどなかった。我が家は山の中腹で、近隣もさほどこわれている家もないので無事を確認し合ったが、こんな大きな地震である事にまだ気づいていなかつた。

午前7時すぎに朝食をとっているとドイツの知人から電話が入ったのにはびっくりした。ドイツで大きく報導されている事が分る。だんだん電話がかかってくる状態でよくかかったものと思う。

1/18 無気味な余震の中、初めて昼間の服装で眠り、懐中電灯、貴重品など手許にまとめる。夕べは眠れなかつたが、朝から炊き出しのおにぎりを自治会で作りつづける。本山第一小学校へと運んでもらう。様子が分るにつけ、こうしてこの地域だけが無事だったので後めたさを感じる。この思いは今もずっとある。

1/19 炊き出しあつづく。おにぎりを握る手が赤くなってきた。

主人と子供は職場へ。西宮北口まで歩いて出勤。疲労感が家中を支配する。

1/21 今回の地震の時程、ヘリコプターの音が耳ざわりに思った事はない。山すれすれに低く飛ぶ。凶器にすら思えてくる。

1/22 天候のせいで西岡本に避難勧告が出る。同じような地形の我が家も北区へ避難する。六甲山トンネルを抜けると平静である。人間は勝手なもので、眼にしなければ恐怖を忘れてしまう。対岸の火事と見てしまう。しかし、テレビで報道されている様子を見ると一日何回涙を流したか分らない。

1/23 主人、子供達は三田まわりの通勤地獄が始まった。

1/26 自宅に戻るが、留守番電話があちこちから入り、テープは切れてしまっていた。中には涙声で心配してくれる友の声に家族一同しんみりとした。本当に大勢の人に守られている事がよく分かる。

1/27 次男が会社の車で中国道まわって出勤するが10時間かかるて大阪に着く。夜の帰宅11時すぎ。

1/28 親戚の人を風呂に招く。我家は温水器（深夜電力）がこわれなかつたので井戸水も出るので利用してもらう。この非常時に風呂に入れる幸福を感謝する。

1/30 長男は会社の寮へ。通勤にほとほと参ったようだ。（新聞に出ていた防災頭巾を作る）

あちこちからやっと電話が通じて心配の電話が入るが、応答するのに疲れてしまう。何回も何回も同じ説明をしている自分が情けない。こんな時はハガキ一枚の見舞の方がうれしいなどと思う。少し電話恐怖症になる。でもこんな事思うといけない。切角尋ねて下さっているのにとも考える。気持ちがひどく揺れ動いている。

2/5 次男が会社から沢山の食品を持ち帰る。避難所へ持っていく。これで何回目になるのか分らない。少しでも役に立つようになったと子供の成長を喜ぶ。次男の友達を避難所から連れてきて、我が家で暖かい所で暖かい食事をする。同じ東灘区とは思えないとの感想に何だか申し分けない気分となる。次男は震災直後から友達の家をまわりあちこち手伝つてくる。4月になって友達の家の解体も手伝う。やはり、こういう若い世代がどんなに役立つ事だろう。

2/8 途切れていたコープの共同購入が再開されたが、ほとんど商品がない。阪神間に住んでこんな状態になるなんて考えられない。鉄道の不通もこんな便利な所に住んでいて今まで考えた事もなかつた。

2/15 未だに定期のごみの回収がないので、猪、猫と食い散らされるので、ごみに名前を書き、自分のごみを自分で処理するように自治会で決める。今ごろにごみの収集を頼める状態ではないのだが、たまりにたまってしまう。震災時には見かけなかつた猫が大きな顔をして徘徊している。

2/16 震災で引っ越す人、神戸に見切りをつける人と、10人程のグループが集つて送別会をする。震災の程度により同じグループの中でも言葉をかけてもしらじらしく思われないかと気を使う。全壊した人の気持ちの荒れ方が手に取るように分かる。こ、

まで何の隔りもなく接していたのが、震災のために気持ちにひびが入ったようで、何の気持ちの上の手助けが出来ないのが情けない。

3/23 友の葬式に出る。同じ震災で被害を受けた他の多勢の友達と話をするが、被害の大小でやはり言葉を選ばなければと気を遣う。運、不運はまさに紙一重であるという事が今回の震災でいやという程思い知らされた。それにしても自助努力と云う言葉がよくきかれるが、自分の事は自分で守る、こんな当たり前事がむつかしい事であると云う事にも初めて気がついた。行政の及ぶ所はまだまだなんだと。神戸は世界に誇る美しい街だと誇りにしていたが、わずか数十秒の揺れでこんなになってしまうと云う事はまだまだ浅薄な街だったのだと思う。もっと私達も行政に眼を向け、表面的な事だけでなく、もっとしっかりと見据えねばならない。
それでもやっぱり神戸が好き。生まれ、育ち、結婚しても神戸の私は戦争で疎開をした時期を除き、ほとんど神戸に住んでいる。We love Kobe!!
神戸が輝やく日までがんばりたい。

行政へのお願い

1. 道路（幹線）の整備。東西線だけでなく南北（裏六甲へ）に通じる道を早く作ってほしい。
2. 防火水槽を確保して、公園などと一緒に緑地をふやしてほしい。
3. 駅前などの広場を広くとってほしい。広場と緑地帯があれば尚すばらしい。
4. 小学校の本来の姿に戻すために避難所を集約化するか仮設住宅を早く建設してほしい。
5. 再開発計画には色々問題があるようだが、今回の震災を地域のみんなで話し合い、ある程度の私権も譲歩してもらい、その代り市がその部分を補うと云うような建設的な計画を実行にうつしてほしい。この機会を失うと又以前と同じような過密都市ができ上ると思う。（芦屋市内の山手幹線道路などよい例だと思う。神戸市内の山手幹線ができるから何年たつだろう。）

男性・61才・岡本

1/17 一部損壊なれど倒壊を免れる。家族全員無傷。愛犬もOK。

1/24 愛犬“脳梗塞”で動けなくなる。

1/27 愛犬死亡。

“老犬の死”

去る2月27日の朝、1ヶ月近く入院を操返した吾が家の雌犬が死んだ。生後13年3ヶ月、賢い茶毛の大型雑種で甲南大キャンパスにもよく遊んだ。

大震災後の数日間は食欲も旺盛、何時も通りの早朝散歩の足も軽かったのに突然動けなくなってしまった。脳梗塞と診断された。激震の後で度々と襲って来る余震の恐怖に堪え切れなかったものと思われる。

私の住まいする岡本町近辺は、あの瞬時の激震で軒並み家屋が倒壊し、多くの死傷者も出た。テレビでも何度か放映された活断層地帯に当っていたのかもしれないが、その中で、私共は多少の被害を受けたとはいえ、倒壊を免れ、全員怪我一つなく無事であっただけに、年老いていたとはいえ、まだまだ元気で家族の一員としてのウエイトを占めていた愛犬の発病と死はショックであった。私共の身がわりになつて災難を引受けてくれたに違いないと思うが。それにしても、此度の震災で死亡された約5,500人の44%が65才以上の高齢者であったと報じられている。『弱者に皺寄せ』の世情の反映でなければよいがと思っているが。

2020年、4人に1人が高齢者と云う時代を前にして「災害と高齢問題」の具体的指針を見出す機会になればと考えている。

吾が家の愛犬も高齢犬であったことには間違いないが。

女性・73才・渦森台

1/17 突然の物音に目覚めた。何事かと戸惑う間もなく、はげしいゆれが来た。あーと声を上げて一人暮らしの自分に気が付いた。あたりは真暗がりでガラスの割れる音がひゞく。止めて下さいと今度は祈った。勿論手許にラジオも懐中電灯もない。頭から布団をかぶって……。ガタガタ身体がふるえた。心細くて、ふるえた。

2/1 思いがけなく五十年振りに友より電話が入った。

三十五年振りに懐かしい声を聞かせてくれた人もいる。生きていたのかとの第一声が耳にここちよかったです。

3/17 これが夢であればと二ヶ月経った今でも思う。この震災で自分自身の為に泣いた事はない。傾いた半壊のマンションでも住めている。誰もこのマ

ンションで亡くなった人はいない。これで泣けばもっともっと辛い人々に申しわけがない。こわれた家々を目にする度に、胸が痛み泣けて来ることはあっても……。唯人々の優しさに泣いた。一人暮らしの私を気使って、それこそ暖かい心が一杯降って来た。平素のつきあいのないご挨拶を交わすだけの人々からも……。

いま、マンションは建直しの問題をかかえている。有難いことに、人々は常に弱者である私達を気使つて発言して下さる。残り少ない私の人生にとって、このような幸福にめぐり逢えたことは喜びである。失ったものも大きいが、それよりも得たもの、方があるかに大きく暖かい。いざ、生きめやもある。

女性・62才・田中町

1/17 当日は秋に孫が産まれ、その手伝いのため西明石の娘宅にいましたので、身体は無事でしたが、留守の間に家は全壊し、交通機関が不通のため見に行くこともま、ならず、不安な日々を送っていました。

2/5 荷物をできるだけ取り出して運んでもらいました。

マンションのテラスにビニールシートをかぶせて置いてもらいました。

3/16 解体することになり、長い間の思い出に別れをつげるためと、今日までくずれずにいてくれた我が家に目に見えぬ力を感じ、お礼を云いたく、最後の別れに行きました。塩で清め、線香をたいて気持をすっきりさせてまいりました。

これからを明るく生きて行きたいと努力しています。若い人々の力と、家族の愛に感謝しています。

女性・58才・御影町

1/17 A M 5時46分、熟睡中に突き上げられ、何が起きたのかわからずに目覚めると同時に横ゆれとなり、その瞬間にドカン、ガシャンとものすごい音で物が落ち、やっと地震だと思ったが、立つ事も歩く事も出来ないゆれで布団をかぶるのがやつの動作であった。

電気がきれ真っ暗の中、夜が明けるのを待つしかなかった。(いつも懐中電灯とラジオを用意していましたが、飛んでしまって役に立たなかった。)

夜明けと共に部屋を見回し、ガク然とした。何も

かも全部と言っていい位倒れていたのです。頭の中が真白になり、10分位ボーとしていたが、子供達(広島と松戸市に在中)に電話をかけ、やっとの思いでつながりホッとする。長田区に居る両親とは全々つながらなかった。幸いマンションがあまり被害がなく私自身もケガがなかったのが何よりであった。

街は異状な程静かであった。たゞ鳥のさえずりがいつもよりも多かった。余震が続き、やっとラジオを捲し出す。ラジオからは今後震度6の余震があると言っていたが、片付けようと思いつか、夜まで後片付けをした。

夕方4時に電気がつき、その嬉しさは一しおであった。長田区の両親とは何回かけてもつながらなかった。不安がつのったがどうしようもなかった。

1/19 早朝、猪名川町に住む弟の嫁から両親が無事の朗報がありほっとする。

夜になり松戸に住む二男夫婦が電車を乗り次ぎ、阪急西宮北口から歩いて、これ以上持てない程の荷物をもって来てくれた。

1/20 広島に住む長男が長田区の両親の家へ、これ以上持てない程の荷物をもって来てくれた。

御近所の民家の方が地下水を開放してくれ、どれ位の人達が助けられたかわからない。感謝の気持ちで一杯です。

地震以来、幸い住む処が無事だった事がだんだん辛くなっている。避難所へ行かれている人達のあまりの多さに家があるのが悪く思えてくるのである。

3/29 夕刻5時にガスが復旧し、これでライフラインがすべて使える様になり、疲れがドッと出て来る。

街は日一日と復興して来ましたし、人々の服装も随分とカラフルになって来ました。いつの日にか、又神戸も以前にも増して住みやすい街になるであろうと思っております。

電気・水道・ガスと各地の人達が働いてくれました。その姿を見ていますと、とても有難く感謝致しました。自衛隊、ボランティアの人達、頭のさがる思いでございます。

男性・74才・岡本

1/17 何時ものように、朝5時起床。新聞をねころんで仰向けに読んでいた。ドンという音と共に飛び上った様に感じた。そしてすぐ横振れ、こりゃ大変と起き上ろうとしたが、バランスがとれない。や

むなく再び横になる（この間、無我夢中の状態で頭の中は所謂眞白だった様）。リビングの茶ダンスが倒れ、瀬戸物、硝子の割れる音、何やら飛び交う気配、横の洋服ダンスが倒れる音、何もかもが交錯して、その中で隣室の家内が蒲団をかぶっておしつぶした様子、鋭い悲鳴をきいた様な気がした。

や、あって（此間時間にして1～2分）声をかけ、無事を喜んだのも束の間、懐中電灯は、ラジオはとさくが、真暗がりで所在が分らない。その場所もすっかり混雑してさがせない。常日頃教えられ、考えて居た事は何一つ実行されなかった。マンション住い

（1F）であり、兎に角外部では何が起ったか、町の方はと外へ出て見たが、シーンとして物音一つしなかった。所謂狐につままれた様な状態だった。とにかく携帯ラジオのS.W.を入れ、相当の激震で被害があった事は判った。とにかく茫然自失ではどうしようと、タンス、茶ダンス、T.V.、其他の家財道具の復元、あと片付けをする事にし、午前中で瀬戸物、硝子食器のこわれたもの（中段ボールに6箱）の整理や倒れた家具の復元作業をした。

現在老夫婦（74才、73才）2人ぐらしで、長男（在千葉）、長女、次女（在広島）に連絡し、安全をつげた。次男夫婦（在芦屋）は仲々連絡とれず、多分大丈夫だろうと多寡をくくっていたところ、打出の4F建の文住が全壊。本人の妻が入院したと息子から連絡が入って吃驚した。夕方脳部強打した妻をつれて来たが、きくと1、2F居住者のうち12～3名が即死したとの事で、事の重大に驚いた。尚、2/25のAERA臨時号（P34～36）に焼跡で見つかった本人達の新婚写真が2P大で掲載、死亡扱い？にされていた。（後日談）

1/18 家内の生家（在氷上郡氷上町）から姪夫婦が水タンク5ヶ、食料品を多数、乗用車で見舞を兼ね来てくれる。その後、甥夫婦等が丹波、姫路の地から車で見舞がてら灯油、食料品、水の差し入れをしてくれる。終戦直後から昭和30年初頭に亘り、色々と面倒を見てももらったお返しの一端と言っての行動には、頭が下がる思いであった。因果応報とでも言うべきであろうか。

1/20 断水にはほどほど困りぬいた。丹波より運んでくれた水は一滴たりとも無駄にすまいと、米のとき汁、洗い水、洗面後の残水等はバケツに貯めてトイレの水洗用に使った。然しどうしても絶対量が足らない。この日から居住のマンションの西にあるスサノオの神社の麓に當時山水が湧出して居り、一

般に使用を許可された。この日から水道が通水するようになった2月26日迄の30数日、毎朝5時起床、3～4回往復して生活水を確保した。常日頃、毎日10kmウォーキングを行っていた成果が出たものと自負もした。然し、3月に入り、右足首上部疼痛になり医者通いをする破目になった。全治迄1カ月余かかった。年寄りの冷や水と揶揄された。

千葉在住の長男が見舞に帰って来た。交通事情悪いし、我々も無事だから帰らぬよう連絡していたが、新幹線→西宮北口と乗継ぎ、北口から歩いて帰って来た。常日頃は無音は変りない証據と音沙汰のない息子がやはり心配しての事だったのだろう。23日帰る時は岡本→西宮北口迄近道を求めて同道し乍ら送った。往復5時間かかった。然し満足。

1/28 マンションも裏山（はげ山）の一部に土砂崩れがあり、地盤が緩んで危険であり、77世帯の中残2/3が親戚、知己を頼り避難した。

管理組合の役員をして居り、外部と管理会社との連絡、行政機関への問合せ、避難者との応接等、忙しい。時には管理人の代行もやらねばならない。

常日頃は年金生活の気易さもあり、あまり神経を使うこともなかったが、何となく気ぜわしい。こんな緊急の時こそ、少しでも住人の世話が出来れば幸せとアクティブに動きまわる事にした。

1/ 定年を迎える、自適生活を送っている先輩、同僚の事が気になりかける。電話で一応安否は確かめていたが、出来る丈訪ねて見る事にした。

1/23 A氏72才（西宮豊楽町）、1/25 B氏77才（本庄町）、1/29 C氏65才（芦屋茶屋之町）、2/8 D氏71才（灘、高羽町）、2/9 E氏74才（宝塚、仁川台）、2/15 F氏70才（兵庫、菊水町）、何れも一戸建に居住して居り、一部損傷もあったが、本人、家族共健在であった。安心した。

前に書いた様に1/17地震発生以降神戸方面へはよく外出した。

1月0回、2月6回、3月10回、4月5回（4/20現在）

4月に入り、JRが開通したが、それ迄は乗継ぎ、ウォーキングとあらゆる手段を講じた。神戸市の被害状況と復興状況を記録に収めるためであった。JR、阪急、阪神と乗継ぎの為、リュックをかついで歩く姿は、状況世相に大きな隔りはあるものの、終戦後食うや食わずで満員列車に揺られた姿とオーバーラップするものがあった。思いは遡って我々世代の歩んで来た道一日中戦争の学生時代、太平洋戦

争の軍隊時代、終戦後の混乱、神武→岩戸→とつづいて高度成長時代、反動的に訪れたドル・石油ショック、安定成長期、このあたりで一線を退いた訳だが、こんな時代の数々の出来事が走馬灯の様に脳裡を駆けめぐった。震災の残した余韻かも知れない。

3/10 神戸の街々をよく歩いた。そしてボランティアの活躍ぶりも目のあたりにした。よく我々先輩の者が口にした、「今時の若い者は云々」は禁句である事に気付いた。危急存亡の秋には人は必ず性善に立返り人のために己を無にして尽すものである事を知った。戦前昭和10年代、勤労奉仕に駆り出された思い出がある。護国神社の地ならし（昭和15年）、神戸水害（山津波）（昭和13年）等があった。

一番悲しかった事は、私は最後の職場とした本山の会社の事業所本部4F建ビルが危険建築物に指定され、2月5日頃から解体、取り壊された事であった。3月10日頃には凡て作業が終了。更地となってしまった。この間、10指に余る頻度で現地を訪れ、刻々と変容してゆく姿をカメラに収めた。私の当時の日記にこんな文字がある。「骨粗鬆症により夭折、國破れて山河あり」何か淋しい心境であった。昭和25年に入社した場所、関西の生産拠点として最大限の能力を発揮した場所、昭和45年頃ビルを新築、本部事業所として生まれ変わった場所。そして20数年にして思わぬ崩壊。私を育み、そして最後は見届けてくれた場所であった。1人砂塵を浴びて、シャッターを切り乍ら、懐旧に耽った一時であった。

女性・75才・西岡本

1/17 その時私はベッドの中にいた。横の夫に「ふとんをかぶりなさい」と大声でさけんだ。今にも2階が落ちて来る衝撃を感じた。両手を堅く合せ祈っていた。夫と共に死ねる喜びさえ感じていた。余りの恐ろしさに身体を硬直させていたので、たてゆれだか、横ゆれだかかんじなかった。ふと気がつくと、二人とも生きされていた。感謝の気持ちでいっぱいであった。残りわずかの人生をこの世の為につくさねばならない使命のようなものを感じた。心は平静であった。ふすまは開かずドアは動かず足だけだった。廊下は食器のガレキの山となっていた。余りのひどさにおしいとも思わず、全部割れてしまうとあきらめの心境であった。

戸外では人々の声がする。「山手幹線は家が沢山

倒れている」。隣ではお父さんが下敷になって居られると車をはしらせ騒然となっていた。「今までよく家の中にいたね」となかばあきれられると同時に無事であったことをだきあってよろこんで下さった。

家の辺りは余り被害も目にとまらない。我家だけ瓦がずり落ち、ペチカの煙突が倒れ、家根をつきぬけていた。ただ呆然としていた。なすすべもなく、電話は通じず、情報はなく、東灘区の大変さを知り、知人が遠方から乗りつぎ、西宮北口から徒歩でリュックに満載して両手に荷物を持って老夫婦の安否を気づかってたずねて来て下さった。うれしさで涙が出た。不安いっぱいのまゝ一日一日があけていった。電気は早くついたが、水には苦労の毎日であった。タンクが近かったので幸いしたが、遠の方々はどんなに苦労なさったことだろう。体調の悪い私には耐えがたい数日だった。娘夫婦が須磨から4時間半かかったといってたずねて来てくれた。折しも岡本九丁目で水道管が破裂水があふれていたので車でピストン運転をしてお風呂いっぱいと満たしてくれたので、とても助かった。若い人々に感謝する日々である。屋根の修理を依頼せねばと二号線までこわごわおりて行った。電柱はたおれ、電線はたれ下り、余りのひどさに事の重大さをはじめて知った。

1月下旬 滋賀県近江八幡の娘の家に身を寄せることにした。孫（小学5年）もお休みの日にはお菓子作りをしてよろこばせてくれ、よくもてなされた毎日だった。不自由のない生活が続いたが、テレビの報道を聞くにつれ、こんなにしていいのかしらとあせり出した。家も気がかりだし、心は神戸に帰っていた。じっとして歩いて歩けなくなったら大変と夫がスケッチに出かける度に、同行して少しでも心の落ちつきをとりもどそうと努力した。被災地でご苦労して居られる方々に申し訳ない気持でいっぱいだった。

2月中旬 水道が出るようになったので、我が家に帰って来た。片づける気にもならず、元気を出さなければならぬと思いつゝ、不自由な生活に疲れきってストレスもたまりがちだった。築50年近い我が家が倒れなかつたのが、不思議な気がする。夫（80才一級建築士）は、太い通し柱にしてあるから大丈夫、基礎もしっかりしてあるからと安心させてくれるが、若い時に苦労して建てた我が家だけに愛着はひとしおである。何とか安住の住家に早く修理される

ことが願われる。家をおおっているシートは春のあらしでひどくあおられ、大きい音をたて瓦はゴロゴロころげおち、眠れない日がいく夜続いたことか。

S31年から生協運動に協力して来た私は、生協の復興をこの目で見届けなければと今年も立候補して、小さい力ながら若い方々の仲間に加えて頂き、奮闘しようと体の不調の事も気分的にも元気がわいてきた。

風呂は何日振りかでJRに乗り、50数年振りで銭湯に出かけた。一人が出ると一人が入れるという順番だった。久し振りに大きな湯につかり、せいせいした気持でした。線路わきの家は殆ど倒れていた。目をおおいたい位である。悲しさで胸が一ぱいになる。住み心地のよい神戸がどうしてこんなめにあつたんだろう、一人一人の心を思うとやるせなかった。我家はまだましな方だ。次々と情報が入るようになり、○○さんが下敷になり骨折で入院。又、亡くなられた人もあり、悲しい報せばかりで心痛む毎日である。交通機関が思うようにいかず、胸をつまらせるばかりだった。

3/8 各県からの応援をえてガスがやっと出るようになった。うれしかった。生活も大分らくになった。水道タンクが近くで樂をさせてもらったが、よいことばかりでなく、朝早くから東京都はじめ各県の給水車、大きい自衛隊の給水車が列をなして遠方へ水を運ぶ。家がゆれてるように地ひびきする毎日が続く。空には給援物資を運ぶヘリコプターの音、騒然としている。

庭の木々、草花は何もなかったかのように季節を忘れず、新芽を出し、すくすくと育っている。自然の力強さに感心する。今年も例年通り近所では一番に我家の「そめい吉野」桜が咲いた。青いシートをバックに何となく淋しげに見えた。こちらの心のせいだろうか。

ながい年月歩き続けて来た住吉川ぞいの散歩（約5km余）も逢う人ごとに安否をきずかい、無事であったことを安堵しあった。

4月中旬 やっと大工さんが入り、屋根も近い内に手がけて下さること。5月にずれ込むだろうと思うが、ひとまず胸をなでおろす。体も次々と好調になり、精神的にも安定しつゝ会合にも出席出来るようになり、よろこんでいる。思いもかけない大きい地震に出会い、経験して、私の価値観も随分とかわった。21世紀にむかって夫共々元気で趣味をいかし、はばたきたいと思っている。我家では、家族新

聞「おかもとの奄」を発行している。今回は特別号とて、地震のことを中心に発行した。

連絡見舞って下さった方々には、夫のスケッチ八幡堀をガクにおさめお届けして、感謝の気持を現したいと考えている。

男性・69才・本山北町

1/17 「ドン、ドン、ドン」と突き上げるような衝撃と、「あっ、地震よ」と云う家の呼び声とで目が覚めたが、部屋は真っ暗だし何が何だか分からなかった。地震だと云う意識だけははっきりとあったが、そのまま布団を被ってじっとしていた。東京に住んでいて良く地震にあっていたときも何時もこうだった。隣で寝ていた家内は布団の上に起きあがって「どうしよう。大きい地震やわ」と声を掛けてくるが生返事しか返せなかつた。

揺れもちょっと収まったので暗闇の中で急いで着換えをした。その頃には家内はもう身支度を済ましていて、「今何時頃やろ」と云う。「懐中電灯は、携帯ラジオは」と家の矢継ぎ早の注文にいらいらしながら新しい電池を探ってきて懐中電灯の消耗した電池と取り替えたり、カード型の携帯ラジオを押入から出してきてスイッチを入れたりした。何を放送していたかは記憶していない。

階下のダイニングキッチンでは、食器棚こそ倒れはしなかったものの転がり落ちて壊れた硝子や瀬戸物の食器が足の踏み場もないくらい床に散乱していた。2階の6畳の部屋と私の小部屋とでは、元々安定性の良くなかったスチール製の本立てがすべて倒れて本やフロッピーディスクのケースが床一面に散乱していたし、本立ての上に載せてあった時計や電気スタンド類は全部転がり落ちていたが、それ以外の家具類は殆ど異常はなかった。お手製のデスクに搭載してあった2台のパソコンも無事だった。私たちが寝ていた2階の寝室は、元々小さな茶箪笥と人形ケースくらいしか置いてなかつたので、勿論ここも全く何の異常もなかつた。

「余震がちょっと納まつたら、おばあちゃんの様子を早く見に行って欲しいのやけれど」と家内に急かされてコートを羽織り懐中電灯を持って外に出た。私の家は阪急から100メートルほど北にあるが、家内の母である84歳のおばあちゃんが一人住まいをしている家は、私の家から歩いて6、7分、JRの線路からは50メートルほど南に下がつたところであ

る。外もまだ暗かったし、近所の家は特に異常は見られなかったが、山手幹線まで来てみて家が倒れたり、傾いたりしているのでびっくりした。J R のガードに近づいたとき、「怪我人がいますので誰か助けて下さい」と云う女の人の叫び声や、戸板に人を乗せて運んでいる姿を見て仰天し、必死の叫び声に後ろ髪を引かれる思いで、おばあちゃんの家に向かって駆け出した。

おばあちゃんの家に着いたときはまだ暗かったから、恐らく地震から半時間くらい経っていた頃だったろうか。着いてみると壊も門も倒れていて見る影も無い。玄関も応接間も斜めに倒れかけていた。庭に面した8畳の部屋も小屋根が潰れていてとても中には入れない。胸を突かれる思いであった。

おばあちゃんが寝ている筈の潰れた応接間の窓際に近寄って「おばあちゃん、大丈夫?」と声を掛けると「ああ、大丈夫よ」と元気な返事が返ってきた。「どこも痛いところはありませんか」と聞くと「どこも何ともないよ。ただ身体が少ししか動かないのよ」と云うのでまず一安心した。尤も、内部は暗いし、ベッドの上は簾箭や壁が重なり合っていておばあちゃんの姿は見えない。窓の硝子戸は完全に壊れ落ちていた。窓の木製格子を剥ぎ取ってやっと部屋の中に入ったが、足の踏み場もなくくらいに内部はいろんなものが散乱していた。ラス網に壁土を塗ったものが覆い被さっていたのを何とか取り除いたら、やっとおばあちゃんの頭が見えてきた。懐中電灯で良く見るとベッドの横の床にうつ向けになっていて、ベッドに倒れ込んだ簾箭とベッドの間の三角スペースに身体が狭まれていて、頭だけが簾箭から出ている状態だった。簾箭の上には反対側から壁が倒れ込んでいて、簾箭を起こすことは不可能だった。簾箭の向こう側で足元がどうなっているかは見えない。簾箭を持ち上げてみようとしたがびくともしない。消防に電話して助けに来て貰おうと考えて直ぐ近くの公衆電話に走った。

電話ボックスでは何人かが行列を作っていたし、その中には頭から血を流している人もいた。結局電話は消防にも自宅にも掛からなかった。せめて家に電話できたら家内の応援が得られるのにそれも叶わないから孤軍奮闘するしかない。覚悟を決めて大急ぎでまたおばあちゃんの家に取って返した。

窓からまた中に入り、「今から上のものを除けますけど、壁土が落ちますから目を瞑っていて下さい」と声を掛けておいて、まずおばあちゃんの頭の

辺りのものを除けだした。倒れたテレビを向こうの方に転がし、人形やら額縁やら壁土やら、片っ端から反対側の壊れた窓から廊下の方に投げ出した。やっと頭の方はおばあちゃんを引っ張り出すためのスペースが出来たので、今度は簾箭を乗り越えて足元の方に廻った。上のものを除けると、5本ほどの足が蛸足のように広がったシャンデリアが天井から落ちておばあちゃんの足元に覆い被さっていた。よくこれで足に怪我がなかったものだ。硝子の笠や電球も割れてはいなかったようだ。シャンデリアやそれ以外のものも皆向こうの方に放り出してやっと引っ張り出す準備が整った。

「おばあちゃん、引っ張り出しますからね」と声を掛けて気が付いたら、床は一面ガラスの破片だらけである。おばあちゃんの身体に纏い付いていたタオルケットを身体から引き抜いて床に敷いた。「ゆきますよ」と云って引っ張り出そうとしたが、腰が簾箭に引っ掛かっているのか全く動かない。一瞬「ああ、駄目か」と思った。「待てよ」と思い直して、おばあちゃんの身体に纏い付いていた布団を簾箭と身体の間から少しづつ引き抜いた。やっと布団がおばあちゃんの身体から離れて身体と簾箭の間に隙間が出来たときは思わず「万歳」と声を上げたい気持ちだった。後は簡単に身体が抜けて漸くおばあちゃんは床に立ち上がった。

丁度その時後を追って駆け付けてくれた家の声が窓の外でした。室内が氣を利かして玄関先に転がり出していたおばあちゃんの靴を拾ってきて差し出してくれたので、それを履いて貰ってやっとの思いで窓から外に出した。出るときに床に転がっていた毛糸のセーターを拾って出た。おばあちゃんは「眼鏡を枕元の棚に置いてきた。ラジオも枕元にある」と云うのでまた部屋の中に戻って探したが分らなかった。「とにかく寒いから、早く家に行きましょう」と云ってパジャマにセーターを羽織ったままのおばあちゃんを急がせて室内と一緒に我が家に連れて帰った。この頃には外はもうすっかり明るくなっていた。

おばあちゃんに云わせると、「私は関東大震災の経験者だからすぐにベッドの下に潜り込もうとしたんだから」と云うが、引っぱり出したときの様子を話すと、「どうして布団が身体に巻き付いていたんだろう」と不思議がる。地震の時は目が覚めていたらしいが、もしベッドの上にいたままだったらどうなっていたか分からない。何れにしても命拾いがで

きて本当に幸運だった。おばあちゃん自身は、この時点でも至って元気で、眼鏡がなくて外もあまり見えないためか地震の実感もまだあまり感じていないようだった。

1/20～22 四日市から駆け付けてきたおばあちゃんの長男のA君に我が家の中の長男のBと私の3人で崩れたおばあちゃんの家から連日家財を運び出した。運び出したものは殆どをおばあちゃんの次女の家で預かってくれて、一部は我が家に運び入れ、残りはおばあちゃんの家の庭にシート掛けした。保管場所に限りがあるので、何を出すか、どこまで出すかは難しい。我々からすればつまらぬ物でもおばあちゃんから見れば思い出のある物も多いことだろう。おばあちゃんはぼちぼち近所の壊れた家並を見て廻って、「ひどいね、ひどいねえ」と盛んに驚いていたが相変わらず元気だった。

2月上旬 おばあちゃんは長女の所である私の家と次女の家とを交互に滞在するパターンとなった。何処もガスが出ないので、あちこちのゴルフ場の風呂に半日がかりで行くのが一仕事で落ち着かなかった。市に申請してある壊れた家の解体の話も何時になるのか何度訊きに行っても全く分からず。おばあちゃんも気が急くのか自分自身で区役所まで足を運んで訊きに行ったが結果は同じことだった。

倒壊跡に小さな家を建てたらと云う話が出ていて、おばあちゃんもその気になっていたが、近くの小学校に避難している友達の話を聞いてきて、「私も仮設住宅を申し込みたい」と云い出したりした。おばあちゃんは養子取りだったし、割合身勝手な一面もある人だが、娘の家でもやはり遠慮があるのだろう。考えれば気の毒な話だ。空襲でも焼け出され、ジェーン台風でも家を流されたりしていて、「私はどうしてこうひどい目にばかり遭うんだろう」と云ったりしているが、それにしては割合元気で、し�ょげたりしていないのは有り難い。「おばあちゃんのお金なんだから後に残そうなどと考えないで、好きなように使って家を建てたらいいですよ」と云うと「子供達に何も残さないのでは申し訳ないんだがね」などと云ったりしていた。

3/中旬 家の新築もだんだん資料が集まって、どんな家がよいかとぼちぼち具体的な議論が交わされるようになった。「私はどんな家でもそれに合わせられるんだから」とおばあちゃんは云うが、出来上がった後で苦情を云うのは決まってこういう人だ。

この頃になると私の家でも次女の家でもおばあ

ちゃんとの間に小さな摩擦がときどき起きるようになってきた。母親と娘の間だから一番問題が少ないはずだが、やはり長期間となるとそうはゆかないようで、些細なことから感情の行き違いが生じる。公平に見るとどちらにも問題があるが、まあ成り行きに任せるとしかしない。要するにいらいらの鬱積だ。

おばあちゃんは、近所の人で小学校に末だに避難したままの友達二人に誘われて、ライオンズクラブの被災老人の招待旅行で勝浦に1週間旅行してきた。同じ被災者同士で気兼ねもなかったようで、帰ってきてからも「良かった、良かった」と喜んでいた。本当に有り難いことだったが、帰るとまたもとの生活に戻らねばならない。

4月中旬 壊れた家の解体は、遅いねえと文句を云われたがやっと17日に始まった。

家の新築はいろいろ余曲折はあったものの間取りも決定して契約も終わった。完工は10月末だがこれも「遅いねえ」とおばあちゃんはご不満である。長男のA君の顔を利かせた結果なのだから、これ以上望むのは無理な話だ。おばあちゃんは、「家を新築するのよ」と知人に宣伝しては「その歳で家を建てるなんて偉いねえ」と云って貰い、それでいささかプライドをくすぐられているらしい。

女性・69才・岡本

1/17 午前5時46分、直下型大地震に見舞われた。70年の生涯にはじめて経験するすさまじいもの、家中ガラスの破片とせとものの残骸で足のふみ場もない。道具類は殆ど落ちて散乱。電気、ガス、水道、すべて止まり、電話も通じないし、情報は何も入らない。管理人や近くの方が大丈夫ですか?と声をかけて下さったのはうれしいが、さほど重大な災害とも思わず、只々必死になって二人で片付けに追われ食事も残りものをかき込んで一日を終え、夜はろうそくで過ごした。けがの無いのを感謝。

1/18 電気がついた。テレビの報道などで事の重大さを知る。ベランダに出ると、すぐ下の家屋がペシャンコになっている。Aさんの葦ぶき屋根も下に落ち、甲南大学も沢山亀裂が入っているのが見える。温室のガラスもこわれて蘭どころではなくなった。朝から部屋の修復に追われ、フラフラになりつゝ頑張る。老人家庭でも二人居るから出来ること。長田の火事は手がつけられない様子。どうなることやら。

1/19 昨夕、B子さんが家の下敷きになって压死

したとの報せがが入る。今日は何としても西宮へ行かねばならない。道が悪いことも渋滞も覚悟で食物も積んで朝から出かける。夙川に辿り着いたのは昼過ぎになっていた。家はガレキの山になっていて敷地一ぱいにペシャンコになっている。昨夜、レスキューチーム40人で掘り起こしたとか。中央体育館に遺体確認に行き、警察病院、役所などもろもろの仕事をすませ、渋滞の中、夜になってやっと帰り着いた。これも車があればこそだ。

1/20 今日も又、片付け。やっと子供や親類と連絡がつき、無事を確認。でも、○○の義姉さん宅も全壊とか、Cちゃんが食料を大阪で買い込み、北口からリュックを背負って運んでくれた。Dちゃんも大阪から自転車で○○へ行ってる由。電車が通らなければ歩くしかない。

1/21 西岡本の土砂くずれがテレビで報道され、避難勧告が出ているので、東京の嫁や孫、横浜の次男もともかく東京へ来る様にとやかましく云つて来る。余震がこわいと云う。然し、私達はB子さんのことを放つておくわけに行かないし、建物が無事である以上、この家に残るのが一番だと思い断る。

1/22 又停電した。ファンヒーターもつかず、とても寒い。やっと火葬場が修理されて、火葬が今日だと知られ、埋葬許可証を12時半まで持つて来る様のこと。あわてて飛び出す。満池谷の墓地のいたみ様はすごかったが、幸いうちの墓は大丈夫だった。

1/28 Eが私共の事を案じてマニラから帰ってくれ、今日東京から来ることになる。幸いJ Rが芦屋まで通じているので、電子レンジを持って来て欲しいと頼み、芦屋まで迎えに行く。水が出ないのは困るが、すぐ裏山の湧き水を隣のお宮さんで引いて来ているのを貰っている。若い力でお風呂その他一ぱい汲み置きしてくれた。

1/30 この冬一番の寒さとか、避難してられる方はさぞ大変だと思う。私も終戦の時、北朝鮮で約一年も避難民生活をしたのを思い出す。震災以来お風呂に入れないでいて、Fさんの借りている大阪のホテルへEに送り迎え（芦屋まで）して貰つてお風呂へ入りに行く。J Rの窓から見る家屋の損壊に驚き、明暗を分けた様な何事も無い大阪の様子は運命とは云え、複雑な気持にさせられる。

2/3 今日は天気もいゝので、友達にきいていた有馬温泉へお風呂目的で出かける。長い間、車で遠くへ行っていないが、必要に迫られ、ば何とかなる

もの。御所坊で気持よく入浴。気持も晴れた様。

2/8 今日からJ Rが住吉まで乗り入れるので、本山も大阪へ出る便は楽になった。長いことプールに行けないし、今後の見通しも立たない今は泳ぐところが無い。エグザスのあるヒルトンホテルへ今日やっと行ってみた。東神戸と違つて僅か2コースの14mプールだったが久し振りに思い切り泳いで、風呂やシャワーで垢も流せた。J Rは有難い。

2/26 合同慰靈祭が鳴尾浜体育館であり、43号線は使えないで、芦屋で岐阜から来るGさんと待ち合わせ、阪神電車で会場へ。立派な慰靈祭だった。帰り夙川の家に立寄り、Gさんにこわれた家を見て貰い、和服や壺など少し壊り出して持つて帰る。

震災から三ヶ月余り経ち、夙川の家も無事瓦礫撤去が終り更地になって、梅雨まで放つておかれのではという心配は無くなった。私の一生を様々な人間関係で悩まされ続けた邸跡に立つと、よもやという結末に感慨深いものがある。主人は既に78才という高齢に達し、若い時から病気ばかりのくり返しの中で、よく最後まで生きついてくれたと思い、あまりにも遅すぎた再出発の我家を建てるかどうかを思案中である。私達のまわりもみんなにまでいためつけられた建物が一日一日片付けられてきれいになるのを見ると、こわしてもこわしても蟻が巣づくりを止めなかつた幼い日の記憶と重なる思いだ。何はともあれ、私共二人の無事を神に感謝。

男性・76才・住吉宮町

グラッゲラッとの大揺れに眼が覚めて、寝床にとび上ると更に大きな横揺れに柱も大きく揺れて、「これは家が倒れる!!」と一瞬直感した。その時、私は小学校一年の時北但大震災の時の揺れが頭をよぎったが、その時の揺れとは違つて、はるかに大きかった。

隣に寝ていた室内も飛び起きたが、「痛ッ!何かが頭にあたった」と叫びながら、枕元に置いていた眼鏡がないとうろうろしていた。とにかく外に出ないと危険だと直感し、急いで布団を頭からかぶって玄関へ急いだ。暗いのでよくわからないが足元には、本や食器、その他が散らばつてなかなかうまく歩けない。

漸く玄関まで来ると、玄関は大きくひしゃげて、ガラスや板切れで足のふみ場もない。なんとか玄関の戸をけ破つて外に出たが、あたりはまだほの暗く、

人影もない。

そのうち、近所の人々も、一人二人と出てきて、お互いに恐怖のことばがしきり、そのうちに辺りにガスの臭いがたちこめてきて、これはあぶないと感じたが、幸い近くの若者がガス関係の仕事をしている人で、破れたガス管の口に古手袋をつめてガスをとめてくれて、ことなきを得た。

夜が白むと共に被害の大きさが次第に判明し、これはただごとでないのがわかつてきた。道まで壊れた全壊の家、傾いた半壊の家、一階がつぶれ傾いた四階建てのビル等々、周囲を見るだけで軒並み大きな被害である。

改めてわが家を見ると大きく傾いて、倒れてはいるまでも、今にも倒れそうな状態。壁も所々大きく落ちて見るかけもない。(その後全壊の証明をもらい、4月17日に業者によって解体済み)

後の報道で東灘区の死者は1,300余と報ぜられたが、階下に寝ていた私共としては、もし我が家が倒壊していたら、2人共完全に下敷になって死んでいただろうと思い、生きていた喜びを改めて感謝いたしています。

ところで、私の家の周囲の家の被害状況を見てみると、いろいろ理解に苦しむことが多々あります。以下、私なりに感じた点を列挙いたしてみます。

1. 古い木造はほとんど例外なく、全壊しています。

特に戦前から焼残ったような家は、完全に瓦れきの山となっています。

2. 終戦直後の平屋の古い木造家屋で残っているものが数軒あります。おそらく、平屋で軽いから大丈夫だったのだろうと思われます。但し、内部はおそらく相当ひどくやられているでしょう。

3. プレハブの家はほとんどつぶれず残っているようでした。

4. 2階建の文化住宅の大ていは1階がつぶれて、2階がその上にのっているような状態が多いようで、1階に住んでいた人たちの中に死者が多いようです。

5. マンションも一階に店のある者で古い建築がやられているように思えます。

大都市直下型地震として、又、六甲山脈南側の活断層に沿った地震として、地域によって被害の集中度が違い、ひどい所とそうでない所が混在し、何とも不公平な地震であることを痛感しています。

数百年に一度の大地震との事ですが、神戸の大地震を予告していた学者もあったと聞いています。ま

だまだ地震の予知は困難だと思いますが、これを材料に更に細かい科学的な究明を望みたいと思います。

今まで神戸には地震がないといわれてきましたが、地震国日本に安全な場所はないといってよいでしょう。地震のメカニズムの究明も大いに進めてもらいたいが、復興に関するあらゆる努力を精力的に進めもらうことを希望いたします。

女性・72才・御影

1/17 あの地震の時刻、もう目覚めていた私は、今迄にない大きな揺れとは思い乍らも、建物が大丈夫らしいので、生命の危険など考えもせず、一番階下の食器棚の扉が観音開きだから、大分破れたなど思っていました。隣室のスチールの書棚が倒れ(幸い無人)、下のリビングの食器棚は上の部分がおちて、想像以上に足の踏み場もない有様、勿論停電で懐中電灯を探し、ラジオ党の私は枕元にあったラジオを入れました。刻々と放送され、状況は凄じく、南の海岸あたりに七本の黒い煙が上がって、こんな早朝にどうして火が出たのだろうと思いました。

停電しますと、マンションは暫くすると断水するので、先ずお風呂と飲水をためました。間もなく、隣などの方が声をかけて下さったのは有難いことでした。午前9:30、東京の長女も公衆電話からやっとかかったと安否をたしかめましたが、テレビでは余りひどい有様に信じられなかつた様でした。

午後3:30、電気が来て、電子レンジ、オーブントースター、ホットカーペット、テレビ、何よりも明かるい夜を迎えることが出来、ほっとしました。

1/18 余震度々で不安でしたが、そして、ガスも水道も不通でしたが、建物にひびも入らず、ガラスも破れず、我家で住めるということは感謝でした。

1/19 給水車(倉敷)が来て下さり、寒い中、夕方一時間余行列しましたが、嬉しいことでした。近くのコンビニエンスが少い品物乍ら開店しました。

1/21 東京の長女と孫(大1)が夜行バスで西宮北口から歩いて来てくれました。カート一ぱいの救援物資、電磁調理器など、大変助かりました。

片付けなど手伝って、最終の新幹線で帰京しました。

給水車も近く迄来て下さるようになり、又鴨子ヶ原の橋の上に、太いパイプを上げて下さって、伏流水が四六時中あふれ(歩いて五分)、飲用以外のお

水……きれいな水……に使え、本当に助かりました。
1/23 電話の通じない住吉、魚崎の知人の家三軒を歩いて訪ね、一軒は全壊乍ら無事。幸い家は無事だったものの、御影から住吉と進むにつれ被害の大きさに息をのみました。

1/30 お風呂やさんを見かたがた六甲口へ。六甲道にかけてすっかり変っていました。

2/1 知人からきゝ、大阪東三国のお風呂屋へ。代替バスが30分待ち、西宮北口まで1時間10分と結局3時間（片道）かかりましたが、それは惜しくない位、さっぱりしました。それ迄は電子レンジで作ったおしごりとドライシャンプーで凌いで来ました。

2/4 水道が通りました。信じられない気持。

大阪のお風呂の帰りに、以前と変わらぬデパートで展覧会をのぞいたりして気分転換になりました。

（ガスがまだで当分大阪通いは続きます。）

2/8 震災以来の郵便が届きました。

2/9 大阪へお風呂。

2/13 ク （大阪に出る度に交通事情がよくなり、家から1時間余で行けるようになりました。）

2/20 ク

2/22 ガスが出るようになって、1ヶ月余ぶりの我家のお風呂でした。

2/23 芦屋市役所へ。芦屋は阪急線の北側も大分被災していました。

3/13 阪急で三宮迄。思ったより残っている所もあり、ひどい所も。1/15に行って以来で、夢を見ているような気持が致しました。

3/17 昔住んだ板宿へ。テレビでも出ていた市場は無事で、活気があったが、山陽電車の南側、東山手の五位ノ池は相当な被害を受けていました。

3/24～4/6 今年はあきらめていた「いかなご」が求められるようになって、炊き始めました。例年通り、友人に送ることが出来るのは、神戸の復興の一つと言いきかせるような気持でした。

以上、私の震災メモを乱筆で記しました。

今は、いろいろな記事をみますと、特に同じ位の年齢の方のご苦労、お気持は他人事でなく、自分のこと丈に明け暮れた三ヶ月を申訳けない気が致します。関東大震災（之は親や恩師の話で）大阪の室戸台風、空襲といろいろなことに遇って来ましたが、戦中の物資不足の中、何度も繰りかえされる空襲よりもしかなと思っていたり、又、ひどい災害に会い、肉親を失われたりした方にとっては、平和な時代丈に

口惜しい思いをして居られることかと思いましたり致します。

女性・34才・森北町

昨日、私はある大学の生活環境心理学の先生の講義を受けました。その時、その先生は驚くようなことを分析されておられました。

「どうして、一時的でも避難されなかつたのか。それによって精神的ストレスが全然違うはずだ。」それは確かです。

「そして、女性の方が震災時にストレスがたまつたと調査した結果わかつたが、それは、女性は家、物にこだわるからだ。そして被災者自身のボランティア活動は、男性が活発にしていた。」

とおっしゃった。ひとりよがりな分析にも程度があると、怒りがこみあげます。小さな子供をもつ女性は、子供に手をとられて自由がきかないのに。

あの1月17日から3か月経った今も、街は動き出しましたが、この震度7の帯状の地域の人々は、みな心に大きな傷を残しています。家族を亡くした人、家を失った人はもちろん、そうでない人もです。1月17日から1か月くらいのことは、口に出したくありません。

「家の物がとられるから、そして知らぬ間に土地をとられるのがいやで、その場を動かなかつたのだ。とにかく一時避難をするべきだ。」

とその先生は、平気で自説を語られました。

この地震の悲しみや、苦しみは人それぞれ本当に違うのです。このような分析がなされているなんて、悲しくなってきます。

では、なぜ他の土地へ避難してしまう人が少なかったのでしょうか。

地震が起きてすぐに、他の地の親戚の家へ移動したり、大阪のホテルへかなり移動してゆきました。動かない阪急電車の線路の上は人が黙々と歩かれてました。水を求めて、割れた水道管やまた安否を気づかう電話の列が、途切れることはありませんでした。何か戦争中の様でした。

私が住んでいる集合住宅は、あの区画事業地区的森南町のすぐ北に位置しております。歩いて5分のところが、あまりにも無惨は姿になり、また、すぐ北西の地に甲南女子大学があるのですが、そこは活断層のずれが発見されるくらいで、ひどかったのです。私の住んでいるある一部分だけが、一部損壊だ

けですんだのは、今でもつらいことなのです。そんなまわりで、悲惨な状況に陥った人々は、これからのことを考えたり、また、壊れた家の後始末を早急にしなければいけなかったりで、とても避難の余裕などなかった様に思います。私共の実家や親戚がそうでしたから。そして、集合住宅の建て替えなどの問題を抱えると集会が度々あり、それどころではありません。私の弟がそうでしたから。そんな状態のまま、一部損壊だけですんだ者が、精神的に楽になるために、この地から避難するのは、また心が痛むのです。一時避難された人々も、意外と早く戻られたのは、家の物が盗られるとか、土地を盗られるとかの問題ではないと私は思うのです。

この震災で、人間のみにくい部分も見えたと思いますが、やはり、優しい気持ちになれたことの方が大きいと思います。急がないで、ゆっくりこれから進めていくべきだと考えます。今まで人も物も何にもかも急ぎすぎました。心が十分に落ち着くのを待ってゆっくり事を運んでくだされば、本当にありがたいことだと思います。

最後に、私達をあたたかく支えてくださっていた皆様、何度もお礼を申し上げても足りないくらいです。どうもありがとうございます。

女性・37才・御影町

1/17 午前12：30頃、通常どおり2Fに上がり、寝むろうとしていました。しかし、1月にしては妙にあつく、中々寝むれず、外の景色をボーッと見ておりました。寝入ったのが、2時頃？だったでしょうか…。左右のゆれを感じると目を覚まし時計を見ると6時前でした。左右のゆれは、私がそれまでに経験した地震にしては、ゆれが少しだ大きくて、中々とまらなかつたので地震なのかしら？と疑問に思った瞬間、ものすごく大きい上下のゆれ、それから左右の大きいゆれ、自分の意志で身体など動かすことはできず、ただ地震のゆれに身をまかせているといった感じで、回りのタンスもとびはねていました。気がつくと、自分の上にタンスがのっていました。必死の力ではねのけ、それぞれの部屋の子供たちに大声で大丈夫かと叫んでいました。2人の子供たちの「ワアー、なんだあ一体!!」「すごーい!!」という声を聞いた時はホッとした。ともかく服、ジャンパーを持って外へ出るよう指示しました。家がかたむいていたせいか、子供たちの部屋のドアは中々

あきませんでしたが、さすが男の子たち、必死に押して出てきました。階段はねじれてましたが、何とか外に出ることができました。主人が病院に当直だったので、私がしっかりとして、ともかく、子供たちと一緒に外に出なければ必死でした。近所の方も外に出て来られ、会話をかわし、ホッとしておりましたが、明るくなり、周辺を見回わすと、あまりのひどさに悲しみがこみあげ、又、余震による恐怖などで、立ちつくしておりました。いのちは助かったものの、全壊した我が家を見るのはつらく、この先どうなるのか…という事ばかりが頭の中にあった様に思います。しばらくして、南の方から呼び声が聞こえ、行ってみると倒れた家の下から助けを呼ぶ声がしました。しかし、私たちの手では全く無理で男の人たちもいろいろ手をつくしておられましたが、結局無理だった様です。わが周辺は家が全壊というだけで、いのちにかかるることはなかったのですが、20m位南へ行った場所では、同じ全壊でも1階がまったくなく、又死者も7人ほどあったと聞いております。〔皮肉にもレスキュー隊（東京からの）が来られたのは、3日たってからでした。〕

実家、親せきに電話をしようとしても、公衆電話（テレホンカードのみ）は使えず、やっと使える電話を見つけても長い行列でした。

1/18~20 全壊といっても家には入れる状態だったので、大切な物、使える物は取り出す事にし、朝から暗くなるまでがんばっておりました。取り出した物を実家に持ち帰って、アルバムなどを見ているうちに、精神的にホッとしたのを覚えております。

1月末 1月の末には、仮住まいのマンションを探し、今後の事を考えようと意欲的でした。まだ若いし、がんばろうと…。又、この震災をバネにして精神的に強くなろう…と。

2月中旬 2月中旬には水道がO.K.。力仕事がへり、ホッとしました。

2月末 2月末には自宅の解体を終了し、かえってすっきりした気持ちになっておりました。又、このころには、交通渋滞も少ししましになっており、鉄道関係も少しずつ復旧しておりました。（震災後、1ヶ月位は山手幹線3km位を車で移動するのに1時間、ひどい時には1時間半位かかっていました。）

4月 4月に入りJR住吉→三ノ宮が通り、周辺を歩いている人たちも少しへり、車もへり、又、ガスも通り、ホッとしました。（人々の顔も落ち着いてきた様に見受けられます。）

電気、水道、ガス→今回、この3つの有難さをつくづく考えさせられました。

今現在（3ヶ月たち）、ようやくもと通りの生活にもどっております。ただ、空気のよごれはひどいです。又、公立小・中学校に子供たちが通っておりますので、学校はまだ、もと通りにはもどっておりません。わが家は大へんですが、何とかめどはたちました。学校に避難されている方々が、それぞれ一日も早く復旧されるよう、願っております。

男性・81才・向洋町

1/17 前日（16日）、奈良より来宅の孫を送り方々妻は奈良へ行き、小生一人にて就寝中、突然上下に大変なゆれにびっくり、とび起き、隣室に行く。大体20秒ほどにてゆれもおさまる。

被害はと見たが、盆栽のみがたおれていて、他にはあまり被害なしと思われたので、直ちに今後の事も考へ水道を確かめ水の出るあいだと思い、飯を電気釜にてたく。又、重要な物をリュックに入れる。又、食料もおにぎりを作り、又、他の缶詰めを、又、直ちにたべられる食料を入れ様子を見る。

朝、かかるくなった午前7時頃、魚崎か灘あたりのL.P.Gタンクに故障が出たので、中学校へ避難との呼びかけあり。直ちに避難する。ひるすぎ水及びくだもの一個、おにぎり一個の配給あり。カナディアンスクールに取りに行き、一日中学校の体育館にて過す。

1/18 午前8時過ぎ、タンクの状態もおさまった由にて自宅にかへり、室内の点検す。壁のつぎめにところどころ亀裂あり。しかし、大した事もなく掃除する。状況はラジオ（手持の）にて聞く。一日在宅。昼過ぎ、水道がとまっているので水くみに出たついで、公衆電話は通ずること。直ちに息子宅、又むすめ宅、その他親類等に電話にて無事を通知す。水道、ガスは不通なれど電気は通じていたので、電気ゴタツで暖をとる。

1/19~25 朝7時過ぎ起床。水をくみに下におりる。長女より午前10時頃連絡あり。長女の夫の関係の会社の人が夕方5時頃迎えに行くとのこと。直ちに家の内の危険と思われる電気及びガスの元栓を点検す。午後4時頃電話あり。これより迎えに行く由、下にており待つ。車に同乗させてもらい、甲子園（阪神電車）駅へ向う。途中道路の故障等で約3時間半ほどで甲子園駅につく。ここにて自動車をおり、阪

神電車にて大阪を経て午後10時前に奈良のむすめ宅につき、皆で無事を確め合ふ。次後25日迄在宅す。

1/26~2/3 奈良より河内長野の長女宅にて過ごす。（体調くずして医者通い）

2/3~10 向洋町の自宅に帰り在宅。

2/11~17 河内長野に行き泊まる。

2/18 河内長野より帰宅。以後、自宅に在宅。

女性・49才・住吉東町

1/17 地震が来たらテーブルの下に潜れと言いますが、今回は無理でした。1月17日5時46分、一回目の突き上げで、ベッドに躍び起きました。すぐ、ドンドンと2度激しい縦揺れ、次いで胸倉を掴んで揺すぶるような横揺れが10数秒。ベッドの上で膝立ちのまま唯揺れに耐えるだけでした。立って移動するなどとんでもない事でした。正直「これは家が壊れるかも」と思いました。

子供達は1階の各自のベッドでひたすら収まるのを待っていたとのこと。暗い中でいろいろなものが倒れ、割れ、部屋の中はまるで「たつまき」が通りさったあとの様でした。誰にも怪我がなかったのは不幸中の幸でした。すぐ、ラジオとライトを持ち、パジャマの上から、ズボンとジャケットを着、スリッパで1階に降りました。揺れが収まると人々から人々が出て来ました。ラジオを家の埠上に置いて近隣に情報を確保。

やがて夜が明け、周りのすさまじい倒壊状況が目の辺りにとびこんで来ました。倒壊した5軒の家から9人を掘り出しましたが、お2人は帰らぬ方となってしまいました。普段ご挨拶したこともない人達がどこからか集まって協力しました。2階の床板を鋸で切り、倒れた1階の土壁をスコップで掘り、梁を持ち上げての作業でした。遺体は信じられない程の重さでした。午後遅くなつて一段落、ホッとし部屋へへたり込んでしまいました。主人を始め、子供達22才の娘、中3の息子ももう上から下までどろどろになって一緒に働いてくれました。やっと掘り出したお2人の老人を背負って住吉小学校まで搬んで呉れたのは子供達でした。私達も1階の和室に搬入した怪我人に毛布を運び、傷をされたお年寄りの手当をしたり、土壁を掘るスコップを探し出したり、もうなにがなんだか、朝からなにも口に入れず一日が暮れました。

その夜はライト、ラジオ、靴を手元において家族

全員 2 階の居間に集まり、服のまま横になって寝りました。1 時間毎にくる震度 3 の余震の中、とても寝るのは無理でした。

近所の奥様（66 才）を亡くされたご主人様が 8 時頃から我が家の前の四ッ角で救急車の来るのを待っていました。6 時に届けにいらして 2 ~ 3 時間待ってくれとのことでした。12 時になつてもまだ寒い外で待っていました。椅子を出し食物を持っていってあげ、時々私達も出て話をしても共に救急車を待ちましたが来ません。救急車のサイレンは方々で鳴り響いているのに、この家の前には入つて来ないのです。午前 2 時頃、東灘署に電話を入れ、やっとの事でつながりました。事情を話し、すぐに来てあげてほしいとなん度もなん度も頼みました。救急車は午前 3 時にやっと来てくれました。崩れた家の横で蒲団に寝かせてあつたご遺体を隊員の方と共に車に乗せ、ご主人は脇に付き添い、隊員の方々はお世話になりました、ご連絡どうもありがとうございましたと言つて真暗の道をはしつて行かれました。隊員の方々も一日中走り回つて疲れ果てていたことでしょうに。午後 6 時前に掘り出されたご遺体の方々は 9 時間後にやっと近くの灘中の安置所に向つて行きました。私達も家に戻り、一日の仕事を終つた気持とやつと区切りがついた安堵の思いが眠らせて呉れたのでしょう。長い長い一日がこうして終わりました。

1/18 2 日目には避難先の住吉中学校で先生方や PTA のボランティアの方々にお握りや温かいお茶をいただきました。

近隣の被災状況を住宅地図を片手に一軒一軒調べてくれたのは東京消防庁、水道を通してくれたのは名古屋水道局、ガスは西部ガスの方々でした。日本全国が我々を支えてくれたのです。これから神戸の復興が始まります。向年後、今まで以上に素晴らしい神戸がきっと来る日を祈るばかりです。

女性・54 才・住吉山手

幸いなことに私は偶然に、震災の当日は高知県に居り、JR が住吉駅迄開通した 2 月 8 日に自宅へ帰つて参りました。1 月 17 日夫が一人家に居りましたが、建物の損壊も家具の倒壊も一切無く、無事でした。昨年夏に転居して、台所の改裝を今春に予定して居りましたので、大半の食器はダンボールに入れており、食器も何ひとつ壊れおりません。1 月

17 日以降テレビで毎日神戸の様子を見ておりましたが、2 月 8 日帰つてきて、住吉周辺を歩いてみると、現場に立つた臨場感はまるで画面とは違うということをはっきり感じました。迫つてくるものが違うとでも表現出来ましょうか。一瞬にして壊れた家々やビル、亡くなつた多くの方々の事を想うと涙が溢れましたし、自然の大きな力の前に畏敬を感じずにはいられませんでした。

この震災でガスや水道が不自由な時を少し経験しましたが、私は何ひとつ失つては居りませんし、精神的にも何もダメージは受けませんでした。でも、震災を受けたことの意味とこれからの人々のくらしと心のこと、神戸のことについて考え続けたいと震災後は思っています。

私は二人の息子が居り、今春学校を卒業し、それぞれ就職致しました。私は世間的にみれば幸運な部類に属すると言えると思いますが、今年の体験からこの世の中は不平等に出来あがっているという事を改めて思いました。それとともに人間万事塞翁が馬であり、何が良いとか悪いとか言えるものではないとも思います。今、私が幸運な部類に入つたとしても、明日、交通事故に会わないとは断言出来ません。

地震は多くの教訓を人間に与えたと私は思っています。日常性に埋没している時には気付かず見えたものが、何か事が起つてはじめて見えてくるという事が多くありますが、地震というくぐり戸をくぐつて、人それぞれに見えて來るもののが違いますが、今迄の価値観を変えなければ適応出来ないことが数多く起きてているように思えます。何か事が起きた場合、それにどう取り組むかはその人の物の考え方方に大きく左右されますが、現実に上手に対処して行く人の考え方にはある方向性があるように私は思えます。上手に対処して行く人々は愚痴が少なく、現実をよく觀察し、認識し、肯定的に前向きに考えて行くという態度が難解な場面を切り拓いて行く原動力になっているのではないでしょか。

私の知人に地震で家が倒壊し、ある学校に避難している 82 才の女の人が居ます。この人は足に軽い障害があり、ひとり暮らしだす。3 月下旬に講堂から、教室に移りました。広い場所から狭い場所に移つたことで人間関係も変わり、人々のストレスも加わつて、いじめを受けるようになりました。避難所には家族や身内で暮らしている人も多く、それらの人々は何人かで結局出来ますが、知人はひとりで何事も

堪えなければいけません。高齢でひとり暮らしから、いたわってあげつゝ暮らして行こうという気持ちよりも、避難所暮らしの長さも加わってか、避難している人々はとげとげしくなっているようです。見えすいた陰湿な行為やののしりやあてこすりの言葉は毎日のようです。悲しくて枕が涙でぬれることや、眠れぬ夜も多いようです。利不尽な行為やいじめに抗議したりすることをその人は知っていますが、日頃の人々の言動を見ていて、それがかなう相手で無いことがわかっているのと争いをしたくないので、相手に合わせて上手につきあっています。私は知人に我家に泊りにくるように言ったのですが、床が変わると眠れないからとことわりました。その人なりの生き方もあるので、週に1度位訪ねることにしています。訪ねて話を聞き、励ますことしか出来ませんが、それで十分嬉しいという事ですので、続けています。その人は「震災迄は気まま一人暮らしを続けていたけれど、震災でこんな暮らしをしてはじめて、人の心の裏表がよく見えてきました。こんな経験はちょっと出来ない」と言っています。普段から体もあまり丈夫でないのに寒い暮らしの中、よく乗り切ってきたと自分ながら感心しています。82才になって何もかも失って、尚、けっして表に出ないいじめも加わる暮らしの中での現実を受け入れながら、明るくけなげに生きる姿に感動を覚え、私は励まされています。仮設住宅に二度申し込みましたがはずれ、今度やっと三度目に当たりました。その人は経済的には不安は無く、出来るだけ早く家を建てたいと思っていますが、今度当たった仮設住宅の出来る場所は、自分の壊れた家から一番近くになり、二度もはずれた事がかえってよい結果となり、苦労を忍び、待っていた甲斐があったと喜んでいます。万事塞翁が馬の例のようです。私の知人は特に高学歴でもなく昔の人の常で小学校を出ると奉公に出て、その後結婚し、結婚した人の両親が貰い子していた子を自分が育てる羽目になり、その子で散々苦労し、夫が亡くなった後はひとりでこつこつ働いて貯えを作ってきた人です。股関節の手術も受けており、障害者四級です。いろんな困難をくぐり抜けています。それに又、84才で震災に会いました。そんな中でも、私は恵まれている、多くの人のやしさを受けてしあわせだと感謝して暮らしてもいます。どんな境遇になってもその中で現実を切り拓いて行くのはその人の知恵ではないでしょうか。なまじか知識や学歴があると、ときにはそれが邪魔にな

なって、物の本質が見えなくなってしまっていることが旺々にしてある。そんな人々の多くの場面を見ている私は、この知人の生き方を清々しくたくましいと感心しています。

人は頭を打って賢くなります。頭を打った時は自分の考え方のパラダイムを新構築するときです。人生とはそれのくり返しの連続ではないでしょうか。だんだんと枠がはずれ見える範囲が拡がって行くと、この世には何ひとつ無駄なものが無く、世界を切り取って見ているのは自分なんだということが感じられてきます。地震も、自然が人間に与えた成長を促すぐり戸に違いないと私には思えます。人間が知り得る範囲は限られたものです。限られたものであると知れば顕虚にならざるを得ません。

多くの場合、人間は快を求めます。やさしくしてもらうと快く感じ、そうでない場合は疎外感、孤独感を感じます。疎外感、孤独感が心の根底にある時には、外部からの刺激に対しては過敏に反応します。心が満たされている時にはゆったりと適応出来たことも心に不安があると適応ができにくくなります。又、加齢によっても適応能力は落ちてきます。私の知人も何気ない人の言葉もつらいと感じている場合もあります。

人間は不満を感じた時、何かの形で発散させようとします。その発散先が弱いものに向かう事は人間にはよく起ります。良いとか悪いとかという次元ではなく。そのような人間の心の傾きはあります。又、自分の理解出来ない相手に対して排除して安心しようとする傾きもあります。いじめが起きる可能性は集団のどの場面にもあるといえますが、避難所におけるしわよせがこんな形で出ているとは、ほとんどの人が想像出来ないことではないでしょうか。

でも事態はすべて移り変わっています。私の知人も仮設住宅に当たったことが、次へのステップの楽しみとなって心に灯りがともりました。

女性・72才・田中町

1/17 每朝5時30分に家を出て、保久良神社に登ることが日課になっていましたが、当日虫が知らせたのか、5時30分過ぎても床の中でグズグズしていて家の内で震災にあいました。

幸い、マンションに住んでいて被害は少く住める状態ですが、つくづく運命の不思議さに考えさせられました。

終戦時、神戸の町は焼野原になり、当時は物資も苦労もがまん出来たように思います。

しかし、神戸の町や周囲の全・半壊の家屋を見ていますと悲しくなります。大好きな神戸が一日も早く前の美しい神戸の姿に戻ってほしいと念じています。

男性・73才・岡本

1/17 ゴーと言う地鳴り、家がきしむ音、物が激しくぶつかり壊れる音、寝ている体が放り出される程激しく上下左右に揺られる。隣に寝ていた家内と手を取り合うことが出来たが、棚から崩れ落ちてきた本に二人ともすぐに埋まってしまった。揺れている最中に、もう家が倒壊する、倒壊すると何度も思った。揺れがおさまり家の倒壊が免れて、兎に角命だけは二人とも助かったとほっとした。余震に備えて脱出路だけは確保せねばと、家内に動かぬようと言つて、寝ていた二階から一階に暗闇の中進もうとするが、家財の散乱で思うままにならない。ようやく玄関の戸にたどりついたが鍵が地震で壊れて開かない。仕方なく裏の居間の戸を開けて外に出た。倒れた門柱を超える道路に出たところで、隣り近隣の方々も外に出て来て、お互いの家族の無事を確認し合った。周辺被災の様子を確認出来て、再び家の中に入ったが、総てのものがひっくり返り身の置き場がない。手探りの中でなんとか家内と場所を確保して夜明けを持つこととした。

私は不思議にも10日程前に震災の夢を見た。今年こそ富士山の夢と思っていたのであるが、見たのは昔住んだことのある地域で家内と瓦礫の上に立ち、津波が来るかも知れないとおびえていた夢であった。

富士山の夢が縁起でもない夢になったと家内に話をしたところ、私の用事でこのあいだ、あの場所を通ったものだからそんな夢をみたのねと笑われてしまった。その後黒雲が淡路島から西宮にかけて真っ二つに割れその縁が夕焼けで茜色に染まる不気味な風景に接したり、自宅の井戸が枯れたり、なにか異変がと言う予感がしていた。

しかし、神戸には地震がないのだと言う誤った先入感が総ての不安を払拭し去っていた。それで地震の瞬間に、やはり来たか、神の啓示や自然からの教えを何故素直に受け入れられなかつたのかと言う己の不明さを反省する気持と、確かに何かに守られて

いる、絶対助かると言う妙な自信とが地震の揺れで混乱した頭の中を交錯した。私は現役で搜索23聯隊に戦車兵として入隊した。技術幹部候補生で内地に帰り、電波兵器を専攻したため本隊には戻らなかつたが、本隊はハイラルからフィリッピンに転進し全滅した。私の戦場は台湾であったが、それでも幾度か死と隣合わせとなりながら、見えない糸に操られて、命永らえて、今があるのである。聯隊の生き残りが私を含めて5名であることを復員後知らされた。搜索23聯隊はノモンハン戦で敵中深く孤立し、重圏を破って後退したため、命令なく後退と言う責を負い聯隊長が自決した悲劇の部隊で、部隊としての幕引きも兵の屍を重ね語られねばならない運命の部隊となつた。

夜が明け、明るさを増したところで、電池のラジオを探し出して地震の情報を入れ、被災の様子が判るにつれ、早い時点で子供達家族の無事が推定出来たので私達は安心した。逆に子供達は親の安否が確かめられず2日間本当に心配したことであつた。

4/20 最近知人の外人に震災のショックは？ 立ち直れますか？と慰めの言葉を掛けられたが、「私たちは何度も大きなショックを受け、その都度立ち上がりっています。大丈夫です。」と答えている。戦時中或は戦後の混乱を乗り切った経験と自信とがそう言わせているとは思っているが、これも色々と考えて見ると、我が家の今の被害の程度であればと言う条件付で、震災で家族が死んでいたらこんな言葉は出せなかつたように思う。

人間は常に幸不幸の尺度を他人と比較することを求めている。世の中が落ち着くに従つて比較も正確さも増すであろう。欲も出てくる。最初命さえ助かればと思っていたのに、最近は自分の不幸を訴える人が多い。

半壊した家屋から脱出した直後に人々は普段口も聞かなかつた者どうしでも、心から良かったねと声が掛けられた。3ヶ月経つ今は次第と様子が変わつてきているのを感じている。

男性・78才・岡本

1/17 2回の上下動を体感、引き続いて激しい横ゆれが10秒、前後15、6秒のゆれであったと思う。起き上がりないので隣にねていた妻にフトンをかぶる様云つて、ゆれのおさまるのを待つた。一方、家

がつぶれて来たら致し方ないと覚悟を決め、じっとしていた。

おさまた後、玄関、台所、応接間、二階を見て廻ったが足のふみ場もない荒れ方で茫然自失。

7：00頃裏通りのお婆さんの救出を手助けした。家に帰ってピッケルを持ち出し、大変役に立った。近所の家は断層とはずれていた為か、倒れた家はあまりなかった。

昼前、住吉台マンションの娘の家の様子を30分歩いて見に行った。途中、甲南大学東側、北側に多くの倒壊家屋が見られ、自然の力に恐ろしい思いがした。マンションの高台から南、西の方向に多くの煙が上っているのが見え、ヘリコプター、救急車のサイレンが多く聞かれた。

在和歌山の息子が様子を見に来たので、足の悪い妻を一時避難させる事にした。しかし、翌朝到着の電話が入り、20時間を要したようである。話では倒れた家が道路にはみ出し、通れる道をさがし乍ら走ったとの事である。

1/18 生活ラインのガス、水道、電気が止まり、コード、ダイエーもあかず、食べ物、水に苦労、飲み水もさる事乍ら、手洗の水を近くの川までくみに出かける。

1/20 20日の夕方、足がはれ、歩行困難となり、大阪の息子の家に21日正午頃避難し、一週間静養。26日帰宅。その間マンションの娘一家が自分の家を守ってくれた。

電燈、水道が通じ、救援物資を戴き、何とかその日、その日を過すことが出来、人さまの思いやりに厚く感謝の気持で一杯であった。

男性・62才・岡本

1/17 センター試験で休校の金曜日から数えて、神大生は4連休明け一後期テストが次々週に迫り、作品提出、レポート提出はこの4日間に勝負がかかっていた。17日もふとんに入ったのは午前3時。従って、ドーンと来たのは寝入りの鼻一助かったのはシャツのまゝ寝ていたことである。(成人式を済ましたばかりの同級生の女子学生2人が、いっしょに課題をやっていて、電気コタツに足を入れた恰好のまゝ、六甲道の女子アパートで圧死したことは、後日、知ったことである。)

『放りあげられた、というよりは『引きこまれた、後、猛烈にゆすぶられたという記憶一激震と感じた

のは揺れもあるが、「ぱりぱり」「どすどす」という音響の方がより強烈一床柱を暗闇で探ったら、女房の身体があったので思わずふとんをかぶったまゝ掩いかぶさる。「サチコ、サチコ、早よ、降りといで」が、女房の第一声。外へはい出ようと畳に手をおいたとたん濡れて冷たいでドキッとする。昨夜のお茶が電気ゴタツの上に載ったまゝで、こぼれ落ちていたのだが、このショックで意識が醒める。

「みんな、松の木のところへ行き」女房の第二声。瓦れきを踏んで、母親も、娘も、われわれも庭先へ遁れたが、不思議と足裏をけがする者なし。(建物が崩壊寸前で、形を留めたが、ガラス建具や引戸が外れても一枚も割れなかった。)

かすかな明るさの中で振り返ると、ものの見事に屋根瓦がほとんど全部南側にすり落ちて、内も外も壁土と屋根の下地の土が粉塵をまき上げている。

「カズオのところへ行こう」と、娘とともに女房は薄もりの道を、近くの息子夫婦と孫を気遣って走っていく。

「オレは、家に残る」と、家の中へ。寝ていた部屋は本箱、ふすま、ガラス、障子がみな倒れ、机上の本棚の物が、それこそ足の踏み場を無くしている。中廊下の天井が落ちて、家の中までも瓦だらけ。上を見ると、裂け目から空、又、恐ろしいことに廊下に続く平屋部分の梁が抜けかかって斜めになっている。非常用懐中電灯を取り、くつ、コートを持ち出す。一(近い将来、建て替えを考えていたが)これで遂に一と観念する。この気持ちが、以降の生活全般に及んでいるといえる。ただ、電源を切る、ガスの大元栓を締める。水が一ヶ所噴き上げているので、これも元栓を止める一管理面の気遣いは、男のものなのかも知れない。先ず、一番先になった労働は、手近かで見つけた草取り鉢を使って、居間へ入るために通路確保に、雪掻きの要領よろしく、瓦れきを除け始めたことである。

その間、女房と娘、息子一家は、指定避難先の本山第一小へ、揃って遁れた。

同じ区内、渕ヶ森から、弟と二男坊が車で様子を見に下りてくる。集めるだけシートを確保するよう言い残して、一たん戻る。(1/19木曜日、再び来てくれたとき、彼の家の全てのビニールシート、自動車のカバー、近所で入手したテント地など積んでくる。このときから先述した二階の壁と、一階屋根との間の大きな亀裂のカバーの作業が開始された)。御影の山の手から岡本の途中の被害状況を聞かされ

て、耳を疑う。

一方、避難先で、女房たちは、本山中町のマンションに住む娘夫婦、孫に出会い、余震の不安もあり、今夜は揃って本山一小に避難と決める。

崩壊を免れたお蔭で、冷蔵庫内の冷凍食品が役立つ。家と生命を守ってくれたと家族みんなが信じた松の下で一族がローソクを持ち寄り、ごった煮の鍋を携帯ガスコンロで作る。

六甲アイランド近くのガスタンクのせいで、勧告の出た避難の女子大生、娘（二女）の仲間などが頼って寄ってくれ、ちょっとでも口に入れて、女房の口ききでお隣りの教会で泊って貰えたのは「一期一会」一よかったです。

本当は一人、危険でもわが家で寝たかったが、皆に心配をかけても…と、揃って本一小に行く。先のガスタンクの件もあり、冷たい廊下にまで人があふれていた。

夜になって、方々で出火。放火説も囁かれて、『関東大震災のデマで、『朝鮮人迫害』の煽動の再来を心配。「デマだ」と否定するが、男たちはそれぞれの家を何回も見廻りに出る。月皎々。

1/18 昨夜（午前2時頃だから早晩）、滋賀県彦根の辺りから懸命に車で、長距離長時間かけて戻ってこられたご主人と母子の涙の再会を避難先教室で見、「ハンドル持った手や、ひざが震えた」程の恐怖を感じられた潰れようとは、どんな状況なのかに不安つのる。ファミリーの絆の強さを思い知る。

本一小から、わが家まで少しまわり道して、はじめて凄さを実感する。

昼頃、隣りの教会との境から「センセイ、センセイ」との声。驚いたことに大阪城公園駅附近に住む46才になる卒業生（男性）。

「明日、また来るから、何か要る物を言え」とのこと。天の祐けと、カセットボンベを頼む。彼は翌19日、日曜日の22日、28日の土曜日、29日の日曜日と何度も食料や水、果ては2人用テント、釘、ロープまで届けてくれる。しかも自転車である。彼は遂には昔のリヤカー、橇、シャベル……こちらの親族が避難してしまった後の自転車まで届けてくれた。有難く預らせてもらっている物もあるが、その熱意と行動力は何なのか。国籍は韓国。今でも一匹狼の生活であるが、彼の同級生たちはこんどのことで、一様に彼に敬服していると同時に、「日本人として恥づかしい」とも。私自身は、国籍には関係なく、それぞれの人の“思い”だと思うが。

1/19 神崎川の26才の男性が、単車で訪ねてくれる。ビニールシートとロープ、金槌と釘を頼む。更に、昨夜、避難所で書きあげたコミュニティー誌（「ザ・淀川」）の原稿を背のナップサックに入れて編集部へ届けてくれる。（注文の品は、22日（日）の早朝、門の中に置いてくれていたのを発見）夜中に大阪中央区から単車を連ねて、食事を避難先に届けてくれた自営のレストラン主と友人、父親のオートバイに同乗して駆けつけてくれた中3生……無事を喜んでくれたが、電話が通じないので、「兎も角も安否確認に来た」と皆が言う。それぞれに横の連絡を頼む。

偶々、自宅に居て電話が繋ったとたん「生きてたんか。テレビ、新聞の死亡者名をずっと見て気が気やなかった。無事なら無事とアピールしいや。」と言われるが、テレビでそんな個人的なレター情報を提供しているとは、TVが見れないのに分るはずがない。

深夜、身重の息子の妻君と2才の児を迎えて姫路から彼女の友人たちが実家の母親と共に、懸命に道を探し探しして避難先に来てくれる。（4/8出産）

昨日から、私の母は弟の渦ヶ森の家へ。ライフラインの切断と同時に震災前のわが家の構成員（母、女房、娘（二女）、私）が揃うことは無くなってしまった。

小さいひびが地震によって大きな裂け目となっても、地震によってくっつくことは無かったのであるうか。

1/21 明日が雨の予報。娘の友人2人が、届いた登山用テントを張り、一階屋根にビニールシートを。更に、夕方、かつて器械体操部だった46才組の一人が大屋根にも掛けてくれる。（日曜日、雨洩れ全くなし）

私の方は、続く余震で崩れることを想定、庭のゴルフ練習ネットの枠を利用して、手造りテント。（幸いに、物置きにはならず、接客用の場所に變った。）大阪に勤めのある娘（二女）や、長女のムコはとも角出勤をする。神戸は被害大でも、大阪は機能しているのだから。

1/23 非常勤講師を勤める北野高校（定時制）に、電車を乗り継ぎ顔を出し、今週いっぱいの休みをとる。

息子の方は、先週金曜日から職務命令で出勤、目的は被災者救助の為。

1/24 私の叔父（92才）が、肺機能不良で、西宮上が原病院へ救急入院の電話が入り、避難所から途

歩で見舞う。病院自体が傷みひどく、目下、患者をあちらこちらの病院へ転送中。「貴方の身体も大切」だからと、看護婦さんに呼びとめられて、お粥をご馳走になり、更に誰か困っている人に……と4人前タッパーに入れて持たされる。(直ぐ出たところの上ヶ原中で世話係の人に託す。)

その帰途、芦屋まで帰るからと、左ハンドルを止めて乗せてくれた青年に、「北野町も旧居留地もダメになったとは、もったいないねえ。」と言ったら、「そんなところは勿体ないと思わない。巨額の費用で造った高速道路やビルの倒壊こそが勿体ない。」と言う。

暫くして、神戸新聞のコラムに『復興は、新しく創造していくこと、復旧は元通りにすること』と區別してあったが、彼と私の間にはこれと似たギャップが感じられる。

「他人を心配することよりも、他人に心配を掛けまい」と思いつつ、大学生として、科せられたレポート課題に明け暮れ、女房に言わせると、「自分本位の役立たず」であったようである。

1/25 本山一小から、電気の灯った息子の家に、娘の家族と共に引き揚げ、居候生活が始まる。ワープロで「無事宣言」を打ち、あらゆる手持ちの絵ハガキにシールにして貼り出します。

女性・59才・岡本

今日は4月22日、26日に解体します。

50年前に建った土の家です。倒壊はしませんが全壊です。

1/17 前夜、布団の向きをかえて寝た。これはすごい地震を感じたが、不思議に命は助かると思いました。二階の次女の安否を確かめ、身重の長男夫婦と1才8ヶ月の孫の家に走る。

隣のマンションから「○○さん、どうしたらいい。」と若い美容室2人の声がしたときは困ったが、「とりあえず降りなさい。」といった。次女と共に長男の家にいくと無事、毛布を持って本山小学校へ行く。

南向きの便所に近い水道のある多目的ホールを空けてもらい、すぐに入室(長男夫婦にも偶然に会い喜ぶ。近くの高令者の家族、乳幼児を誘い、知り合いばかりで随分と心強かった。

12年前、岡本1丁目で民生委員をしていたので(今はしていません。)、高令者の家族とは、親しくお付き合いをしていました。(そこであっという間の一週

間)

昼ごろ、家に戻ると、甲南女子大の3人の学生が魚崎で焼け出されたと逃げてきたのを助ける。次女の友達26才3名もガタガタふるえていたので、2日小学校で泊る。2日後、6名は西宮北口まで歩いて各々家にかかる。

1/18 本山第一小避難所にて

母親は子供を思い、子供は親を思い、父親は家を守りで、有無は云わさず、老人達はそれぞれの身寄りのところへ行ったような気がします。

それから、色々とトラブルが起るのですが……。

1/20 人の為にやろうと走った本山第一小学校卒の社会人達、子供の同年令の人(30才28才29才)医者は医者なりに、名簿作りに、掃除に、とよくやりました。甲南大生も自転車部がパンクを直して車で走っていました。

3/上旬 だれがいいだしたか本山保育所の中でラジオ体操をはじめました。4月1日より中止になりました。結構心の傷をいやしながら、お互い助け合っていたのに残念です。朝の空を見ながら楽しかったのに。

4/12 甲南大グリークラブ、マンドリン部と、桜の会をしました。答はでていません。よかったか、悪かったか。新聞を切り抜いたので見て下さい。

4/中旬 一人で家の中にいるお年寄りを救急車で運びました。救急車に乗ったのはよかったです、帰り乗せてくれないので困りました。これも初経験です。(六甲アイランド病院)

○50人以上の知人が亡くなりました。なぜか心はすっきりとしています。

○4月8日に孫誕生。女の子でした。

○お嫁さんのお父さんが報徳学園の校長だったこともあって、野球(甲子園出場)もありました。

○地震前、死にかけていた小猫を育てていましたが、今はのら猫になり、おす猫を追いかけています。

(のら猫とちがうところは、人にだかれるのを好みます。)

私は戦争の時、小学生4年生でした。いろいろありましたが、これからの中の世代の学生達、子供達にいい経験だったと思っています。人のありがたさが分かっただけでもいいのです。



ササベザクラ眺め 疲れいやす2百人

神戸「桜守」ゆかりの公園

水上勉の小説「桜守」のモデルとして知られる故・十本の桜の多くは三分から五分咲く。集まつた約三百人の住民は、花を眺めて震災疲れをいやした。観桜会が開かれた。ササベザクラは十三回目。例年

は地元の桜守会が主催しているが、今年は被災者の心情を考慮して一時は中止決定。しかし開催を望む声が増えたため、復興への願いなどにした。
紅白の幕やちょうどみんなの踊りは自費されたが、会場は家族連れでいっぱい。甲南大ゲリーカラードマンドリンギタークラブとマントリンドラムの下で「虹の彼方に」などを演奏し、和やかな花見気分にあふれた。

今日のノート

水上勉「桜守」（一九六九年、新潮社刊）のモデルは故筆部新太郎翁である。駕籠・御母衣ダムに水没する船四百年の歴史を記録。船上に花を守つたことが、作曲家を感動させ、物語を書かせた。

一九七八年十月、頃が九十一歳の誕生日。岡本南公園として生まれ変わり、今十四年になる別名「桜守公園」。

阪神大震災でも最も波留の大きかった東灘区の桜を見たくなって住宅地の中の公園を訪ねた。総務課で新規のササベザクラや工八枚のものが入りまじっているとの話を聞いた。

田信勝

ドリマンザクラ、イトザクラが満開。旗井が三十五枚、とさほ九十枚のものがある、と市役所の解説板があった。

だらか静かに談笑していた。R・揖津本山までの沿岸も傾いた。それに各地の木造業者が名刺シートをかぶせたままだ。老桜自慢銘板は枝葉の端まで垂れ下がる。堤防の土砂を越え、隣家のへだたりも乗り越えて交流しやすってきた。

江戸の中末期、この頃の觀音寺は、物に生産を閉じ、今まで住んだ神戸の西洋諸國よりもほかに優れていた。と翁は嘆嘆している（文芸春秋、一九六三年五月号）。

そんな中で、氣品の高い花が今、その他の多くの旗井が雄しくて難べきを包み込んでいる。花のなかからでもあった筆部新太郎翁が精魂を擱けた路桜の下で、しばしば時の経験を出でる花びらが五枚のものと二枚のものが入りまじっているとの話を聞いた。

女性・31才

1/17 「ドーン、『あ、地震や』主人が言った。とっさに隣でねていた2才の子供をひきよせて布団

をかぶせた。次の瞬間、私の耳には信じられない音がとびこんできた。『ゴー、『ガッシャン、ミシミシ。たくさんの車のクラクション（今日が日本沈没の日だったんだ。そういえば1995だったような）そんな気持ちで早く終わってくれと、そればかり願った。「助けて、ここにお母さんが…だから早く」と叫ぶ声が自分の両親や弟妹と重った。12月末にできたマンションではほとんど近所づきあいのない間柄だったのに「大丈夫ですか？」と懐中電灯で助けに来てくれた。「小さい子供さんがいたでしょ、心配で」と言ってくださいり、涙がでた。

実家が古い土壁の家だったので、つぶれてるかもしれない。父母も妹も祖母もだめかもしれないと逃げる途中、一戸建の家はことごとく、マンションも傾いて、その前にうずくまってる家族の人を見てそう思った。小さかった頃から「何かあれば本一へ逃げなさい」と言われたのを思いだし、実家ではなく本一に行き、そこですぐに無傷の両親、妹、祖母に会えた。昼すぎ、子供達だけにマクドナルドよりパンがもらえた。道路には車が渋滞、その上信号機はつぶれていた。その中で、北畠、田辺の青年団の人々が交通整理をしてくれていた。全然事故がなかったのも、この人達のおかげだと思う。自分の事だけでも考えられない非常時にみんなの事を考えられる姿に感動した。

日の入前に、5世帯でもちよった食糧、携たい用ガスコンロで煮炊きし、ぶっこみうどんを作った。

日の入とともに、小学校の避難所で眠った。

1/18 座ったら紙がつきそうにまでたまり見るからに不潔な便器を朝6時ぐらいから、ボーイスカウトの人や小学生がピカピカにきれいにみがいていた。大きなバケツに水をためてトイレ番をする子供もできた。

コープが店を開けるという情報があり、3時間並ぶ。ガスボンベ、懐中電灯、乾電池は一人一個ということで、欲しいものがなかなか手に入らない。しかし、大パニックになることもなく、きちんと並びこの地区の風紀の良さを改めてすごいと思った。

余震だけでも精神が参っているのに、「放火される」「強盗団がくる」といううわさが広がりはじめる。本一のグランドでは、北畠、田辺小路の堤灯が並び、青年団の人が自警団を作つて見まわりをしてくれていた。ここは大丈夫、この地区で本当によかったと思った。

1/19 つぶれている家からの救出を自衛隊の人が

「がんばれ」と言いながら作業しているのを見て「よかったです、これでもう安心」と思ったが、その中で亡くなつた人の名前がだんだんわから、その人のことが思いだされて、何でこんなことになつたんだろう。せめて、苦しまずに即死ならよかつたけどと思った。

2才の子供は、たくさんの子供との共同生活の中で、いろんな言葉をしゃべるようになり、みんなにおかしを配ってくれたり(私が避難所の班長をして、食べものを配っていたのを真似して)、泣かずに我慢することもおぼえ、数日で成長したのにびっくりした。

こんな時期だけど、ビクビクせずに子供のためにも元気に暮らさないとすぐ真似されると思い、子供のおかげで暗くなることもなく、たすかりました。

1/25 主人の祖母の火葬のために姫路に行き、私と子供だけはそのまま姫路の義妹の実家に1カ月半ほどおせわになる。2週間ぶりにお風呂に入り、余震におそれることもなく、ゆっくりと眠れた。神戸に残っている家族も心配だったが、やっと逃げれたと思った。

3/5 姫路より神戸にもどる。車で4時間かかる。神戸に近づくにつれ青シートが増え、つぶれた家をみて、やっぱり現実なんだと暗い気持ちになる。

女性・48才・岡本

1/20頃 市立本山中学校立入禁止の為、1、2年の父兄から学習する所を作つてほしいという話が出て、教室代わりの場所、文房具、ボランティアの学生さんを探して、2月6日より自主学習教室を兵銀の2Fの会議室にて開始。10:00~16:00(17:00に変更)から、一、二年生を中心に、三年生を含め、50名強の生徒達の文字通り、自主的に友だち同志のコミュニケーションや大学生の人々の話を聞いたりする中で、時間割(大学生が作った)に沿つて勉強をしていった。これは3月20日の本山中のプレハブ校舎が建つ迄続けられた。

それと前后して、避難者に入つてないおとしよりの方々の水くみや家の整理、又2月に入って解体される家の荷物の持ち出しなど。

2/中旬 非公認の避難所への物資の調達、炊き出し。

3/7 岡本でチャリティーコンサート(屋外)

3/21 ク (屋内) バ
ロックヴァイオリン

4/ 兵庫区の避難所での聞きとり調査(ボランティアが少くなり、今非常に人手のたりない所である。)

本山は、調査 etc も落ちついている。

今後は、仮設住宅での人々が自立するため多くの問題を、回りで、どのようにサポートしていくか。仮設住宅が「0」になったときが、市民が復興出来たという事ではないだろうか。

5/4~5 だんじりパレード自粛の折、本山八カ村の連合青年会と共に子供の日に、だんじりばやしフェスティバルを開催。企業、個人のボランティア多数参加。

男性・62才・岡本

記憶の空白

私はその時ほとんど目覚めていた。5時40分と時計を確認した後、まだ犬の散歩の時間には少し早いとベッドに再び潜り込んだ。暫くして数秒間の地鳴り、丁度新幹線の列車が直ぐ傍を通過する様な轟音と振動、次いでどおんと2米程落下する衝撃、更に8の字を描くような振動が数秒持続、壁が落ち書棚や整理棚が振れ動き倒れた。上下動でベットより落下した私の上には、棚と本と壁が重なり、私はそれらに埋れた。私は爆撃かな、北朝鮮が攻めてきたのかな、いやそのような事は有り得ない、それじゃこれは地震だ。もう一振れしたら天井が落ちてきて圧死するな、とうとう私の人生も終わることになるなどと漠然と考えていた。

その後、大声で家族と犬の無事を確認してから、居宅と併設して建つ鉄筋2階建ての診療所へ移るよう指示した所まで明確に記憶している。私自身が瓦礫の中を通って診療所に連絡する階段を登り、診療所の非常燈の明かりの下にうづくまつてゐる室内と娘と犬の安全を確認する迄の約2分間は全く記憶が欠落している。どのようにしてガウンを探し、眼鏡を見つけ、どのコースを通りて診療所に到着したかは今だに説明できない。全く予期していなかった異変に対する脳の反応は、記憶の空白となり、強い精神的な衝撃の直後には意識における絶対不応期があるようだ。

女性・60才・向洋町

1/17 地上130m41階建のマンションに爆弾が落ち

たと思った。地震だと気付いた時、断末魔の叫びを上げて一瞬覚悟した。

私の住む中央階あたりで折れるのではと思い、恐怖で身が凍った。六甲ライナーが海へ向って落ちている。神戸のあちこちで火の手が上り、夜空は火事で染った。翌日は対岸の液化ガスタンクが洩れると云って避難勧告が出た。

1/20 頻繁にくる余震の怖さに耐えられず、早朝東灘の瓦礫の中を孤島と化した六甲アイランドから離れた。六甲大橋は無人だった。

2/24 二月下旬、自宅に帰った。人工島の周囲の岸壁は迫り出し、船の碇泊を許さない程崩れている。

活断層、液状化、色々云われた島にも子供達の声がそろそろ戻って来た。

車の渋滞で島外へ出るのが不自由だが、それ以外は元の生活だ。

美しい神戸の夜景、外国船の出入り、異国情緒溢れる街、不幸を乗り越えて立ち上る神戸っ子に未来あれと願わざには居られない。

1ヶ月程、東大阪の娘の家で暮らしました。御近所の皆様にも優しくして戴き任せでした。

女性・58才・住吉台

1/17 每朝5:30にめざましラジオで目がさめ、フトンの中でラジオを聞くのが1日の始まり。グラッとした感じると同時に、フトンの中からとび出したのがよかったです。ふりかえると、タンス2本がフトンを覆っていた。その後、体がふるえて来た。ガスの元栓をと、叫んで台所に行こうとすると食器棚の転倒。ガラスの破片で動けなくなる。

隣室にねている85才の姑は大丈夫かと主人に声をかけると同時に、母がトイレに行くため起きて來たので、無事だったと安堵する。その時は母の顔をはっきり見る事もなく4時間後、近くに住む息子が來た時、祖母の前額に大きな血腫が出来ているのを見つける。母もショックで痛みを訴える事もなく、布団の中にもぐっていたのだろう。余震の続く中、3~4時間は何をしていたかはさだかではない。外の様子もわからず、ただラジオからの情報だけをたよりにして、この様な大惨事だったとは想像もしてなかった。

夕方までのままで食わず、又、その気にもなれず時間だけが過ぎる。夜、どうしても家で寝る勇気もなく、学校に避難する。すでにどの教室も満員…。理

科室の部屋をみつけ机の上に毛布を敷いて母を寝かす。母も落ちついて眠れる訳がなく、何度もトイレに行く。板張りゆえ靴の足音、引き戸の音が非常にひびく。他の人に気がねする。(避難生活をしている高齢者、弱者の心情がわかる。)

避難中、急病人でも出たのだろうか?「ドクター、ナースの人がいたら職員室まで来て下さい。」とスピーカーが流れる。1年前まではナースとして働いていた私だったが、なぜか行く気にならず、朝を迎える。今となっては心残りになり、後悔の念にかられる…。

母も朝まで疲れぬまま、もう家に帰ろうと云いだす…。家で死んでも良いと云いだして…。1夜だけの避難生活だった。

1/19 母は食欲もなく、1日中フトンの中ばかり。ライフラインのたたれた中、若い者は何とかなるものの、母にはとてもたえれない。何とかして大阪の娘の家まで避難させようといやがる母を説得して、早朝5時息子が車で5時間かけてつれて行く。この時ほど息子がたのもしく思えた事はなかった。息子も震災後の通勤の疲労とストレスが重なって胃痛を訴える様になる。

1/21~28 母の入院となる。私の地獄の様な生活が始まる。一日おきの病院での看護。交通網のたたれた中の病院行きは並大底ではなかった。40日後、退院帰宅する家では水の確保、救援物資の分配、ライフラインもほつぼつ復興はじめ、人々の気持ちも明るさを感じ始める。

(雑感)

この度の震災で全国の皆様から寄せられた多くの義援金、又、精神的な援助がどれだけはげみになり、生活の糧になったか…ただただ感謝したい。

日頃、あまりつき合っていない人からのTEL、はげましの言葉、近隣の人との会話。助け合い、思いやり、人情の深さ、普段味わえない心の豊かさを感じた。

ある日の事、主人と大阪の病院まで行こうと歩いていたところ、乗用車に乗った中年の女性が車をとめて、どうぞ乗って下さいとやさしい言葉をかけて下さった事。又、夜おそく大阪から阪急電車にいわゆる震災ルックで乗っていると、サラリーマン風の中年の男性が家族にでも土産に買って帰っているのだろう、菓子箱をどうぞこれを震災地の方に見舞って下さいとさし出されたのです。どうもありがとうございました。

戦後50年、初心にかえって頑張れば、物、金にめぐまれた現代であれば何でもない様な心境です。

女性・36才・本山南町

1/17 ゆれの中、なにをするすべもなく、頭からふとんをかぶっておさまるのを待った。運良く主人がいたのですぐ隣室の子供たちに声をかけ、様子をみてくれた。子供たち（6才、8才）は、はじめはじしんとは思わなかったようで、恐くて泣くようなことはなかった。すぐに、ライト付ラジオが使えたので情報を聞くが震度もすぐにはわからなかつた。はじめの間（電池がある間）は液晶TVもうつたのでパニックにはならなかつた。友人が家族で避難してきたのでその対応に追われ、地震後すぐはさほど恐怖を感じなかつたが、回りの様子が分かるにつれて、家族皆がケガ一つなく生きていてすごくラッキーなんだと思った。余震がつづいたので、車を安全な場所に移し、車中に避難した。何時間かたてば事態は解決する…と考えていたが、そんな甘いものではなかつた。何か自治体などから指示などがあるので…とラジオを聞くが、それもなかつた。取材のヘリコプターの音にいらだちをおぼえた。

2/18 早朝から液化ガスもれの避難かん告がすぐ近くまで出た。人の言葉や指示にはたよれない。家族は自分たちでどうするか判断して行動しなければいけないと痛感する。西宮北口まで歩いて行くことを決める。線路の上を歩きながら、後から追われるよう感じる。めったに線路の上なんか歩けないよ…と子供たちをはげまし、歩くのをやめたら死んじゃうよ…と半分本気でおどかして約2時間かけて歩いた。歩きながらいろいろなことが頭にうかんで涙が出そうになるが、グッとこらえた。この時一番思ったことは、子供たちが、やわでなくてよかった…ということだった。心から勉強なんか二の次だと考えた。元気で歩ける身体があること、少々食事がとれなくても文句を言わず、どこでもトイレにいけて、車で寝ることも意にかえさない…本当に感謝した。十三に着いたら別世界だった。京都に着いて実家にTELがつながった時、ああ生きて帰れた…と、ほっとして涙が出た。その日から実家での避難生活が始まる。

2/ 実家とは言え、いそうろうで肩身がせまく、ストレスがたまる。親や親せきとのかかわりあいの中で、心を痛めた人は少なくないと思う。友人と

TELでお互いをなぐさめあったりもした。

子供たちは幼稚園と学校に通い、回りの皆さんから大変よくしていただいて、ただただ感謝するのみだった。しかし、あまりしていただくと反対に少々みじめに思えてきました。

2月も終わりに近づくにつれて、恐くてにげ出してきた神戸に、自宅に早く帰りたいと思い、復旧に願いを込めた。2/24に帰神することが出来、やっと落ちついた心地がした。

3/ 子供たちを再開した幼稚園や小学校に通わすのは少々不安はあった（手もとから離すことに対して）が、復旧を信じいっしょに歩んでいくにはさけられないことと思い、少しずつ出来ることからもとの生活にもどせるよう努力しようと思う。毎日のように自転車であちらこちらを見て回る。もとのまま残っている所を見ては嬉しく思い、あまりのいたみ様に悲しくなり、傾いた建物にもおどろかなくなっていた自分自身におどろきもした。少しずつお店などが再開し、その度におとずれてうきうきとうれしくなった。私は、地震前からもそうだったが、今日一日をせいいっぱい楽しく生きようと日々考え方を変えてきた。この地震でその考えが以前にも増して大きくなり、どんな時でも楽しいこと、うれしいことをさがして、過ごしているように感じられる。

4/ 春を迎える新学期も始まり、下の子はピカピカの一年生になった。青空の下の入学式に仮設の校舎は正直いって一生に一度のことなのに…と、少しさびしさを感じたが、これも良い記念と考え直す。一日々復興していく一方で、建物が次々と取りこわされて更地が広がっていくのを見ると、とてもさみしさやむなしさを感じる。こんなにも被害が大きかったのかと、改めて目の前に地震の恐怖を見せつけられているように感じる。今までの生活とこれから的生活と…とありえずその日一日生きるのがせいいっぱいだった日々が終わった今、何か生活的リズムに乗り切れていない。やり場のないさみしさ、むなしさを覚える。

女性・37才・御影

1/17 AM 5時46分、一瞬何が起こったのかわからないまま、ただ大声を出し布団にしがみついていたように思う。体を起こそうにも上下、左右にと宙に舞っているようで、自由がきかない。タンスの上のあらゆるもののが体の上に落ちてくる。とっさに頭

から布団をかぶり、うつ伏せになる。そのとたんドスンと体の右半分に重いものが乗りかかり動けなくなる。

「助けてー!」と叫ぶ心の片隅で「もうこのまま死ぬのかなあ」と瞬間思う心が同居した。

遠くの方で電話のベルが鳴り続けている。「もうどうでもいい」と思いながらも鳴りやまないベルにやっとの思いで抜け出しが、右も左もわからぬくらい真くら闇の上、部屋の入口が何かでふさがれて出られない。手さぐりでふすまの向う側の部屋の電話をさがす。母からの電話だった。「大丈夫かあー!」「あかん…家の中が…」その後は何を言ったのか、どんな会話をしたのかわからないまま電話が通じなくなる。恐かった。とにかく一人でいるのが恐かった。

手さぐりで着るものをさがす。パジャマの上からカーディガンをはおり玄関に向う。食器棚と冷蔵庫の上を乗り越え、外に出てお隣りのドアをたたく。カギはかかっておらず人の気配もない。

1階までかけ降りる。声が出ないくらいびっくりした。まわりの民家のすべてが崩れ落ちている。その片わらで素足にパジャマ姿の女の子が「おばあちゃんが…、おばあちゃんが…、家の下に…助けて…」と泣き叫んでいる。がれきの中に向い声をかけるが応答がない。

その日の昼頃には帰らぬ人となり、毛布にくるまれて自家用車でどこかにはこぼれて行かれるのを見送りながら、人の命のはかなさを感じた。

御影高校に避難する途中、壊れた古いアパートの前を通りかかると「助けて下さい」と女性に呼び止められる。がれきのすき間から、パジャマ姿の女性の足が見えた。「大丈夫ですか」と声をかけると返事のかわりにヒクヒクと足を動かさせて反能されたので、側にいた男性が交番まで走って助けを求めに行かれた。

やっとの思いで、グランドまでたどりついた時にはあちこちで火の手が上がり、JRの高架が落ちているのが、薄明かりの中ではんやり見えていた。そこに集まっていた誰もが寒さと恐怖にふるえながら、ほとんど無言だったよう思う。

普段から仕事に行って帰るだけの生活で、近所づき合いのほとんどなかった独身の私にとって知らない人達ばかりの中で頼る人もなく、話す人もなく、地震の恐怖よりも一人の孤独感の方が恐かった。

AM 7時頃、自宅に一旦戻る。手のつけようがな

いくらいすべての物が倒れ、物は散乱し、足の踏み場もない。

PM 4時頃、自宅のまわりではガスもれの為、避難勧告が出て、とりあえず貴重品をリュックに詰め込み再び御影高校に行く。

寒い、心細い、ただそれだけで朝から何も食べていないのに空腹感が全くない。一晩中鳴り続けるパトカーのサイレンとヘリコプターの飛びまわる音に、あちこちで子供がおびえて泣き続けている。けがをした人か、病気の人か、どこかでうめき声が聞こえてくる。疲れぬまま夜が明けるのが待ちどおしい。

1/18 明るくなるのを待って、公衆電話に何度も並び直し、実家、職場、中央区の弟の所にかけてみる。昨日と同じくどこにもつながらない。

自転車で近くを走りまわってみる。あまりのひざんさに声も出ず、ただ涙があふれる。

お昼頃、リンゴ1個の配給を受ける。食べる気がしない。のどがかわく。

夕方になり、紙コップ半分のミネラルウォーターが配られる。列に並ぶが途中で無くなり、私の所までまわってこなかった。

二日目の疲れぬ夜を迎える。

1/19 朝早く、中央区の弟の所に自転車を走らせる。無事を確認出来ホッとする。その足で東灘区魚崎北町の友人宅へ。柱一本もないくらい丸焼けになっていた。安否もわからない。涙が止まらない。こんな所でただ救援を待っているだけではだめだと自分に言い聞かせ、尼崎の職場まで自転車を走らせる。

尼崎からJR、阪急、JRと乗り継ぎ、やっとの思いで実家のある谷川駅にたどりついた時にはもう夜になっていた。JR大阪駅から阪急の梅田駅に乗り換える為、歩きながら私のみたものは神戸とは全く違う別世界だった。街にはネオンがきらめき、きれいで着飾ったOL達が楽しそうに会話をしながら通りすぎる…。さっきまで私が経験してきたこと、そしてまだその場所にいるたくさんの人達のことを思い、同時に自分のみすばらしい姿かっこうに涙があふれた。胸の奥、そこからつき上げるような涙だった。その日の夜から、高熱が出て4日間寝込んでしまった。引き戸を開ける音、ドアのしまる音、どんな小さな音にもビクッと身がすぐむ。目がさめる。

1/24 一週間振りに職場に出る。被害の大小はあるものの、それぞれ皆、何らかの被害を受けられた

様子。言葉をかわし、仕事に打ち込んでいると不思議と気が落ち着き、冗談の一つも飛び出してくる。皆、わざと明るくふるまっている風でもあるが、こちらまで元気になってくる。もう一からやり直すしかないと勇気さえわいてくる。

3 / 上旬 マンションに荷物を取りに行く度に、近くのお寺に避難されている20~30人の人達の所に実家で取れた野菜をはこぶ。もちろん、顔を見たことも、話しさえしたこともないような人達ばかりではあるが、同じ境遇を味わった者同志の連帯感のようなものからか気軽に話しが出来る。

5 / 現在 芦屋の親戚と氷上郡の実家を行ったり来たりの生活の中で職場に通勤している。どんな悲惨な状態を見せつけられても、やっぱりこの神戸で再び生活したいと思う。その思いは増え強くなっていく。

あの状況の中から立ち上った人達の集まっているこの神戸はきっと今まで以上に住みやすい、すばらしい街に生まれ変わることと信じている。そんな神戸の復興の過程をこの目で見届けながら、皆と共に神戸で生活して行きたいと願っている。

男性・67才・田中町

1 / 17 この日は午前5時半頃に目を覚まし、何時ものように携帯ラジオをイヤホーンで聞きながら、今日の予定や行動の段取りを考えていた。

突然ドーンと突き上げられてはげしい震動におそれ思わず柱にもたれた。家内に「危ないから動くな」と云って激震の終わるのを耐えていた。

幸い懐中電灯が手許にあったのですぐ着換えて、他の部屋を見ると、家財道具は倒れ、食器類やガラスが割れて散乱していた。

ようやく玄関へと出たが、扉が開かないで、折返しベランダからお隣に声をかけ、戸外に飛び出した方々の応援を得てやっと玄関扉が開きほつとした。すぐに長女宅（三田市）へ無事である旨を電話で告げ、先づはガスの元栓を締め、破損したガラス類の処理をして1階に降りるとガレージの柱が數本倒壊し、その上にある北棟（7階）は大きく倒斜していた。さらに東（9階）西（9階）南（11階）の各棟の連絡橋がはずれ廊下も亀裂状態で、自宅（南棟3階）も玄関の壁が大きく亀裂し鉄筋の一部が露出していることが判り、今更乍ら災害の大きいことに気付き、これは「いかん」と急いで貴重品等を持ち玄関ホールへと出た。

やがて三ヶ所の避難場所が表示されたので、全壊して逃げて来た妹と3人で近くの灘高校へ避難し、その日は余震・停電・断水等のなかで不安な一夜を過ごした。

1 / 18 昼頃役所から御影の液化ガスタンクが亀裂しガス洩れのおそれがあるので国道2号線より北側へ移るようにとの連絡があり、また寝具類など持って本山中学へと移動したが、すでに満員の状況で、仕方なく運動場で焚火にあたり待機したが、このままで夜になると風邪を引きそうなので、急遽この近辺に住む友人宅を尋ねてみると建在であったので、御無理をお願いして2泊させてもらった。

1 / 20 4日目の午後3時頃、三田市から長女夫妻が救援隊のラベルを自動車に貼って迎えに来てくれた。この時まさに感激の対面で、孫達の無事な姿を見るとようやく落着きを取り戻した。

3 / 21 マンション再建のための臨時総会を開催、私は管理組合の初代理事長を務めた関係から緊急対策委員に選出され、以後諸問題解決のために多忙な日々を過ごしている。

震災や 奈落の底に 声ありき

マスク行く がれきの街や 春遅し

人生の終着に近づいている私達は、マンションと一戸建のメリットやデメリット、さらに三世代同居の楽しさと難しさ等を色々と実感している今日此頃である。

男性・66才・住吉台

1 / 17 醒めて、寝床の中で夜明けを待っていると、突然ドーンの音と共に、畳の下から巨大な力で突き上げられ、「しまった、遂に東京を飛び越して神戸に地震が来たか」と直感した。物凄い速さの横揺れ、タンスや家具が大音響と共に倒れ飛んだ。ガラスの破れる音、今にも家中が崩れ、奈落の底に突き落とされる時を運命に任せて待つ心境。

戦争で若い命を失いかけたが、何とか平和になり生き伸びてきたが、今度はいけない、この蒲団の中で静かに死を待とう。動いてはいけない、冷静に命を惜しまなければ万一生きる道もあるやも知れない。こゝが私に与えられたさだめの明らかになる時だ。こんなことを一瞬の内に思っていると地震はぴたりと停止した。後は物音一つしない静寂。人の叫び、声もサイレンも聞こえない。それは何か錯覚か。

奇妙な気持ちで隣に寝ている妻を呼んだ「痛いよ、重いよ。」と泣き声を上げる彼女。これが現実だ。「気をしっかりもって」と。しめた、妻も生きていた。二人でやり直そう。幸運だ。未だ見放されてはいないんだ。

重いタンスが妻の上にのしかかっているし、それが彼女の左胸や肩を強打し、悲鳴を上げているが励ます以外に方法もない。私の上にも重いものが乗っている。辺りは未だ真の闇。懐中電灯には不用意にも電池が入っていないし、枕元にマッチ、ローソクもない。「明るくなるのをこのまゝ待とう。マッチに火を点けると火事になるかも知れない。静かに耐えよう。」と妻に云う。枕元の英語学習用のミニ・ラジオのスイッチを入れると、『淡路島北端を震源地とする強震が兵庫県南部に発生、震度6』、と第一声が入り、やがて震度5と訂正、そして又震度6、マグニチュード7.2と発表。当然だ。5ではない。ひょっとすると関東大震災に匹敵するものかも知れないと思った。時に午前5時50分。

辺りは依然として物音一つしない。起き出すにはガラスの破片がこわい。

20分位後に近所の○○さんが廊下から戸を叩き、「△△さん、大丈夫ですか。おかげありませんか」と呼んでくれた。嬉しかった。未だ見捨てられない。「大丈夫ですよ。」と返事。「ドアがゆがんでいるので開きません。窓から出て下さい。」と云われた。

明るくなって（約6時40分頃）見ると、部屋の中はメチャメチャ。どう始末すべきか途方に暮れてしまう。身体の痛む妻を起こし、先づこの寝室の整理から始めなければならない。急がずゆっくりと、身体の不自由な妻をかばい乍ら、家具を片付け、ガラスの沢山の破片を避け乍ら、復旧に努めた。元の位置に戻すことに危険を感じたが、当面己むをえない。午前8時45分長男から電話。「どう、大丈夫か、けがはないか。」「大丈夫だ。心配するな。爆撃をくらったのよりも未だました。」と答えると彼も安心して、大きく笑った。山形行の新幹線の中からだった。

午後になっても部屋片付けは終わらない。夕方になって妻が「パンでも食べよう」と云うが、全く食欲がない。「水や食物は何日分あるか」と聞くと、「明日まで位」と云う。明日には何とか外と連絡もつくか？

夜、電燈がついたので一安心。何とか生き延びられそうだ。

1/18 余震を恐れ乍ら、何とか眠り、不安な、寝不足な心身で、妻を助け起こし、昨日の続きの部屋片付け。ガラスと陶磁器の破片、壊れた家具や煮物や汁の散乱の整理、拭き取り。水が貴重で洗えない。飲料水さえ節約。顔も洗えず、トイレは流せず。何日保つだろうかと一瞬不安になるが、妻には云えない。残りのパンを妻と分けて少し食べ、水と少量の牛乳を飲む。午後になって整理も少し進んできた。漸く給水車も現われ、一時の光明を見出した。併し、エレベーターが不能で重い水を寒さの中を8階まで運ぶのは大変だ。若い人によく助けて頂いた。この頃から人情の復活を強く印象付けられた。

又、友人、親戚から電話があり、大いに励まされて、人の心の暖かさと友情を思った。この電話の一言程私達を支えるものはない。ありがたいし、私達のこの致命的な経験を皆に生かして欲しいと願い、その実情を話し、又、アドバイスした。

この地震で色々学んだが、水の有難さと人情の重みを知らされた。

女性・77才・住吉本町

1/17 「アッ、地震スゴイスゴイ」（ここは大丈夫と思いつこんでるので）

「アッ、又、スゴイスゴイ」「どこが震源地だろう、震度どれ位だろう」

テレビのリモコンを探してたら、先に懐中電灯が手に触り、点て見てビックリ。リモコンどころかテレビが前倒しにひっくり返り、隣りの部屋を見たら何もかも無茶苦茶。これは大変と思った時、姫路の次女からTEL。「大丈夫？」と「大丈夫だけど、皆ひっくり返えってる。」と。すぐ後、長女からもTEL。でも此のマンションが倒れる等思いもしないから、先トイレへ。手洗の水が出ない。これは大分ひどいなと思っている所へ、玄関の外で一人暮らしの私の事を心配して皆さんが「○○さん、○○さん」とドンドン、ドアをノック。開けようとしたら下のキーは開いたが、上のマジックキーが私の力ではどうしても回らない。「キーがあかないの！」とどなったら、皆でドンドーンとドアを何かでたゞく音。先、着替なければとズボン、細いのから二枚、ハイネックのセーターニ枚、コート袖の細いのからと上に皮のジャンパーを着、毛糸の帽子かぶり、さて、どこから出ようと…、北のベランダの戸を開けたら外においてた衣裳缶（野菜入）がひっかかるて10種類し

か開かない。これはえらい事だと南のベランダへ。戸はスッと開き、やれやれと下を見たら左手下の家から火が上がってる。

「どうしよう。」ガラス戸をしめ、北の部屋へ行ったら、又次女からTEL。「下から火の手があがった」とだけ云って切る。北のガラス戸のスキマから大声で「此の窓外からなら聞くと思うのだけど」とどなり続ける。我家の上の階の御主人が下から排水管をつたって登って来たと部屋に入り、男の力で開かなかつたマジックキーを回して下さったら開いた。

「早く、早く。」と連れ出して下さる。「煙に気を付けて」と下の階段へ行ってビックリ。一階の床がガレージにおいてある自動車の屋根の上にガシャンと、其のショックで自動車から火が出たのだと、もう皆さんはパジャマに毛布をかぶって沢山出でていらした。私が着れるだけの物を着てブーツ迄ぶらさげて出たので、皆さんおどろいておられた。此のマンションがつぶれるとは夢にも思わなかつたのが、幸せと落ちつかせたと思う。家の御隣の列は水がないため消防車はホースをおいたまま「中の物がもえつきる迄仕方ありませんな」となんと云う御氣毒さ。もう我家も焼ける。どうしようもないと思ってたら、男の学生さん三人が「おばさん、今ならまだ行けるよ。僕達ついて行ってあげる」と、なんと親切な言葉。言葉に甘えついて行ってもらい、其の人達には「御位牌、たのむ」と私は実印と銀行通帳だけ探し出せました。何んと有難い事だったでしょう。

助けに来て下さった御主人、一緒に貴重品を取りに行って下さった学生さん。本当に本当に感謝いたします。

次女家族が十一時間半かかり、渋滞と火事の中、必至で車を走らせて避難先の甲南小学校へ迎えに来てくれ、其日のうちに姫路迄連れ帰ってくれました。

此の地震で皆々様のあたたかい御協力が身にしみて有難く、其の上私が健康であった事がなによりの強みとよろこんで居ります。マンションの方も二十四軒で会長や幹部が若手でしっかりして居られるので、第一回の総会で解体がきまり、第二回の総会で再建がきまり、毎日新聞に此のマンションの記事が出来ました。御自分達の仕事もそっちのけで、マンション再建計画をやって下さり、本当に皆々様のおかげと感謝、感謝で御座居ます。元の所へ住みたい一念で御座居ます。

女性・52才・本山中町

1/17 夜明け前、大きな地鳴りのようなドーンという音で目が覚めた時には、すべては終っていた。下敷になっていた家具からぬけ出し、家族の無事を確かめ、くつ下、くつ、めがね、ふとんをひっくり返った家の中から『さがし出す』。時々窓が雷のように光る。地震の上に雷！と思う。家をとび出すと両側の家が道路にまでくずれ落ちている。ただ呆然としてウロウロとすぐ前の公園に行く。布団をかぶって近所の人も集まつてくる。空はまだ時々光るが音はない。『この世の終わり』の絵を想い出す。顔見知りの人に会うと『大丈夫？御家族も？』と声をかけ、無事を知ると、その家の惨状をみて、良くぞ御無事で！と安心する。しかし、顔の見えない人もある。家は軒並みくずれている。その家に向って『……ちゃん』と何度も呼びかけている声がする。『お願いします、誰か』と。公園にはかなりの人がいたが、何人かがくずれ落ちた足元からガレキを取り除いてみたりはしても、素手ではあるし真暗でもある。ガスのにおいもしているし余震もある。主人も行きかけたが、主人自身顔にけがをして、顔半分血で真赤である。私は『行かないで』とひきとめた。この光景は始めの頃、くわしく書き記した日記の中にも書いていないが、本当はこんな時にすくんでしまって、何も出来なかつた自分を忘れてしまいたい気持ちがあるのだろう。書く事さえさけていたという思いが、今となっては余計に心にはっきりと刻みこまれているような気がする。夜が明けてから道具を持った人達が何人かを救い出し、そして隣の奥様、何軒か先のいつも公園のまわりを散歩していたおばあさんと息子さんが亡くなつた事を知つた。私はその日は外に出る気にもなれず、家の中を通れるように寝る所をつくろうというだけの思いでウロウロとしていた。電話が通じず、娘が祖父母と婚約者に無事と知らせる葉書を書きポストに入れたが、後で思えば郵便など届く筈もなく、間が抜けた頃届いたが『うれしかった』と喜んでもらえた。

このような中で何とか家は建つたので2晩は家で過ごし、片付けと水、食料の確保に明け暮れた。1/18 18日昼頃、京都に下宿している長男が北口から2時間半かけて歩き、水、おにぎり、ゆで卵、おもち、携帯用コンロ、ウェットティッシュ、紙皿、紙コップ、軍手を背負つて来てくれた。普段、通帳の残高のみが生きている印という長男の気のききよう目に見張った。しかし、この状況の中、強い余

震でもあつたら、行方知れずになつしまう。ありがたいけど、もう当分こなくて大丈夫だからといつて帰す。

2晩目、近所が2カ所火事になり見に行くと、川ともいえないチョロチョロした流れをせきとめて消火している。近所に殆ど人もいない。我家もたき木の真中に建っているような状態ではあるし、交通もなく主人も会社に行く事も出来ない、という事で急拠快よくひき受けてくれた西宮の親せきを頼っていく事にした。

1/19 1月19日、本山から甲子園口まで親せきを頼って行った日の日記の一部。

2号線を歩く。木造の家はもちろん、ビルもつぶれている。歩道は歩けない。電柱は倒れて信号はついていない。車はびっしり。人はゾロゾロ。ポン(犬)は何かにとりつかれたように必死で歩き、私はずっと引っ張られる。鼻の穴はほこりでまっ黒という感じ。主人は顔の真中に大きなガーゼをはっているので、外人カメラマンに2度もクローズアップされる。ガーゼをはって大きなりュックを背負いスーツケースをひき、汚ない犬をつれた奥さんと、これまたリュックとスーツケースをひっぱっている娘という図と少しおもしろがって自分達の姿を書いている。その一方で、救援の為らしく大きな荷物を背負って神戸方面に向う沢山の人をみると、自らの危険をもかえりみずにこうして助けに来て下さるのだなーと涙が出る。私だったらこんな事が出来るだろうか。

翌日社宅を借りる事が出来、それからしばらくは北口から、青木から、芦屋からと交通機関の復旧につれて毎日のように自宅へ戻っては、日用品をねずみの引越しにより運び、下宿している長男、次男、東京の弟もかけつけて家中のガラクタを片づけていった。

こうして塚口に落着き、犬の事、生活の事で目いっぱいの日が過ぎていく。主人も会社に行き始めると待っていたように、いろいろな友人から電話がかかること。お手紙をいただく。殆ど年賀状のおつき合い位だった友人、30年も合っていない会社時代の同僚が毎日の放送に私の住所を照らし合せて心配して下さる。何か出来る事は?といつて下さる。何をしていただく事はなくとも私を想い出して心配し、無事を喜んで下さる気持は本当に大きな慰めになり、心底ありがたい事だと思った。逆に私も友人の1人の連絡がどうしてもつかず、誰に聞いても分らず連日○○さん、まだ不明と日記に書いている。

娘は震災の2・3日前に市営住宅の申し込みをし、住居のあてがついたら結婚するつもりでいた。彼の家は被害はなかったものの、会社がガレキの山と化して機材も書類も全く持ち出せず、解散になってしまった。子供達の人生については昔から『水の流れるように、と無精も手伝ってやって来た。就職に当ても小さな所でも興味のもてる所へという希望で選び、そこでの同僚で初めから自然に気が合ったという彼と3年間のおつき合いを経て決めていたのだった。大企業のサラリーマンが無難と思っていた私も案外苦にもせず認めていたのだった。ところが、この震災で被害を受けてみると、大企業と小企業では雲泥の差である。放り出されたら全くの無からの職さがしとなってしまった。新卒も何千人と取り消され、職業を失った人2万人というこの時期、職さがしは難行をきわめ、未だに目安がたたない。地震に会ってからは人生観も価値観も変わってしまった。もう何もいらない、暮らせる最底限の物と、家族、親族、友人との暖い交流さえあれば。そして今度こそ人が困っている時に勇気を出さねば等と思っている。ところが、事娘の事となると、震災前と違って勤めるならば大きなしっかりした所、結婚するなら大企業のサラリーマンという思いは起きてくる。子離れしているつもりなのに、頭から離れない娘達の事。いざとなると、なかなか割切れないものである。

今回の地震では娘達の事、家は無事であっても周囲の石垣のくずれの為に思わぬ大出費。頭の痛い事がが多いが、これで浮わついていた自分の生活を整理し、娘達もこの大きな試練をのりこえて仲良くやつて行く事が出来れば、全くのゼロからの出発というのもかえって良い想い出になる筈。そうなる事を祈っている。

男性・44才・住吉本町

1/17 激しい揺れが過ぎた後、「もう大丈夫だ」と自身に言い聞かせていた様に思う。直後、近隣の老人男性が大声で私の名を呼び、安否をたずねて下さったが、私の方から老人御夫妻をおたずねしなければならないのに、いかに自分が動転していたか、余裕を失っていたかを思い知られ、その瞬間大変恥ずかしく感じた。同時に老人の声に大変心強く、有難く思った。

少し明るくなった頃には建物住居に被害の無いこ

とを確め、「大きな余震など絶対来ない」と不思議にも根拠も無く確信し、部屋内部を片付けはじめた。その際は「大地震ではあったが、家財道具さえ元通りにすればそれで終わりだ。早くきれいにしよう。」と思っていた記憶があり、震災の重大さには全く気付いていない。空腹感も疲労感も覚えず、これは実際に夕方まで続くことになる。その後、TV情報に釘付けとなり、「これは大変なことが起きました。」と不安感が増した。

1/20 友人、知人、親戚を訪ねようと朝から徒歩で出発し、自宅から（阪急御影近く）岡本、芦屋川、満池谷方面へ向った。素晴らしい青空だったのを覚えており、大きな被害地域も通らなかったため、「久しぶりの長い散歩だ」という気分であった。訪ねた先でも全て全く被害無く、皆無事もあり、永らく会えなかつた恩師、友人にも会え、むしろうれしかつた。

1/下旬 近所の人々で、今まで知らなかつた人、話したことのなかつた人達とも、言葉を交わすこと、共に行動することも多くなり、間違いなく皆元気である。ただ、その後2ヶ月程もするとそれも無くなりもと通り、時々会釈する程度となる。近所付合いとしてはむしろ通常か？少し横着か？反省もしている。

2/初旬 知人を探して近くの避難所を訪ねてみたが、いずれも人々であふれ、活気はあるが、ごった返しており、大変な状況である。今回の震災では道一本へだてているだけで被害の様子は全く明暗を分けており、偶然の幸、不幸に言葉も無い。

2/中旬 「復興ムード」もやや出てくるかといったところだが、依然として全く手つかずの倒壊ビル、家屋も多数目に入り、震災とは無縁の梅田方面から阪急電車に乗るとやがて西宮北口で終点となってしまうし、本格復興などまだまだ先は遠いと思うしか無い。4月に入ってもその思いは変わらず、がしかし季節は確実に巡つて來るので、複雑な思い。

4/ 「兵庫県南部地震の原因」について、いつだつたか（3月初め頃だったか？）夕刊紙・スポーツ紙・マスコミが「原因は明石海峡架橋工事である」との記事を載せていた（ようだ）。近頃、又それを思い出している。地震直後から被災地ではまじめに語られていたうわさであるというのだが、その後全く情報・記事には出逢は無い。

真偽の程など全く確め様も無いが、「地震発生の時期、震源地の位置」などを思うと、今後の解明が

不遜ながら興味深い。特に海外の学者からどの様な意見が出てくるか？？

女性・70才・鴨子ヶ原

1/17 そろそろ起きる時間と床の中で軽く手、足を動かしていた。ぐらっと来たので地震と感じ、さっ立って電燈をつけ、いつもの様にこれで終わりと思った。次の瞬間大きく身体が揺れ、照明が消える。咄嗟にベランダの扉を明けようとガラス戸に両手を掛けたまゝで上下左右に身体が振り廻され、家具の倒れる音、頭の上へ何かが飛んで来る。一瞬頭の中が真白になって何が何んだか分らなくなる。ともかく外へ出るつもりで斜めになって倒れているタンス、本箱の上をはい上り、次の部屋にある洋服ダンス（幸い倒れていなかった）より、衣類を出して重ね着して外へ出ようと思う。先程から頭から顔にかけてねばねばした液体が流れているのに気付き、懐中電燈で照らした指先が赤く染まっている。頭に何かが当つて切れたらしい。ぞっとする。タオルで押さえながらドアを開けようとする。3階の息子さんが大丈夫ですかと戸をたゝいて声を掛けて下さる。気持ばかりあせつて手が震えてチェーンがなかなか外れない。人の声がこんなに頼もしく、うれしく聞えるとは。お隣りの奥さんと戸外で過す。近所の方々もみな集まって、早く明るくなつてほしいと念じる。ラジオは刻々と災害の様子を報じて予想以上にひどい有様にどうなることかと心身共に震える。幸い住所は無事だったが、足の踏み場も無く、呆然とする。

1/21 大阪市内に住む長男が（本人は単身赴任で名古屋に居り週末に帰つてくる）単車で迎えに来る。余震に怯えながらもご近所の方々と一緒に行動し、気分も平素より高揚しており、健康状態も良いため、もう少しこゝで様子を見てからと思っていたが、今日は連れて行くと言われ、生まれて始めて単車の後にヘルメットを被り乗る。

大阪の住いに着く迄の道中で、あまりにも無残な街の様子に思わず涙がこぼれる。甲南病院の前を通り、水道筋より本山駅前を経て、芦屋、苦楽園と私の大好きなオシャレな街が影も形も無く、倒壊した家屋とホコリと刹氣だった人々と道路にあふれた車の波、まるで戦場より脱出しようとしている映画の一シーンの様な現実離れた感じで、洪水の様にあふれる車をさけて裏通りをひたすら走り、大迂回して尼崎を過ぎ、大阪市内に入る。あんなに生き地獄

の様な世界がまるで嘘であったのかと思われる程街は平静を保っていた。大阪で過ごした日々に感じた事は、こんな近距離でありながら千里も離れている様な気がしたこと。

1/29 千葉に住んでいる長女の婿が迎えに来る。自宅よりあまりにも遠いので躊躇したが、どうしてもとの事でその日の新幹線で千葉へ行く。子供達にまで迷惑を掛けて少々気が重くなるが、長女が何かと心使いしてくれ一家で労らってくれる。本当に感謝の気持でうれしく思うが、その一方で被災地で不自由な生活をしながら頑張っていられる方々の事をテレビ、新聞で見るにつけ、何不自由なく過ごしている自分に後めたい気がして気分が重くなる。風邪を引いて病院へ行く。お医者様にもっと気持を明るく持って意欲的に生活しなさいと注意を受ける。

3/15 やっと春めいて来た。(本当に永い冬であった)電気、ガス、水道と全部開通した。娘に頼んで神戸へ戻って来る。今回私は被災された方々に申し訳なく思う位、子供達がよくしてくれて嬉しく感じました。この震災は70年の人生を通じて大層貴重な体験であったと思いますと共に、やはり神戸が一番だと、私の住む場所として感じました。

女性・50才・魚崎中町

1/17 前夜、寝入るのが遅く、地震の起こった時刻は熟睡していた。普段は震度1でも感じる位、敏感な方だが、あの時は「一体誰がこんなに私を振り回しているのか」と夢うつつにいぶかしく思い、家具の倒れる音、瓦の落ちる音、材木の折れる様な音、ガラスの割れる音、スチール本棚の曲がる音、今まで聞いた事もない様な種々雑多の音が耳に入って来て、次第にこれはただ事ではない、と感じた。そして、はっきりと目が覚め、ベッドに坐って「コワイ、コワイ」と云っていたのは、後半の10秒位だった様だ。隣りのベッドの夫が「ふとんをかぶれ!」と叫びながら私を押しつけた事を覚えている。間もなく揺れがおさまり、娘、息子がそれぞれの部屋から出て来たのを見て、始めて子供達の事に考えが及び、「二人共、無事だ」と安心した。

一階に下り、ピアノ、その他の家財道具の散乱したところをかきわけ、玄関を出ると門もへいも崩れ落ち、道路が丸見え、その向こうの二階建ての家が傾いていて、今までとは全然違った景色に唖然とした。昨晚、つないであつたはずの犬がヒヨロヒヨロ

と出て来て、初めて「あっ、ハナちゃんも無事だった」と気がついた。南の方へ回ると土蔵が崩れて中の竹材まで見えていた。その横に住んでいる夫の両親、妹も無事に出て来て喜び合ったが、全員余りの驚きにボーとした状態だった。その頃、夜もあけてきて、隣り近所の人も出て来られ、東隣りの奥さんがまだ1階にとじ込められていて、御主人と二人の息子さんが必死に救出しておられた。近所の御主人方も手伝っていた。私の夫はまだウロウロしていたので、「アナタも早く行って手伝わないと」と云うと、夫もそれに気がついた様だった。板戸に乗せられた奥さんが片足を傷められて救出されたのは、午前9時になった頃だった。

この間、娘は家の内外をフィルムにおさめ、ボーランとしている家族を並ばせて写真を撮った。私は芦屋で一人暮らしをしている母の安否が気になっていたが、魚崎の家が形状を留め建っているので、芦屋は古い洋館とはいえ、ガッシリと建てられているので大丈夫だろうと考えていた。しかし、やはり息子に見に行く様頼み(6時過ぎか?)、息子は友人の妹の自転車を借りて出発した(息子の原付バイクも私の自転車も埋もれていた)。何時位に戻って来たか覚えていないが、帰って来た息子は、芦屋の家がペチャンコで「おばあちゃん、おばあちゃんと呼んだが声もなく、僕一人ではどうする事も出来なかつた」と報告した。「何でそのまま帰って来たん!」としかりつけ、何故助けようとしなかったのか腹立たしく、すぐ夫、娘と息子の友人のお父さんの車で、山手幹線を通り、近くまで送つてもらい、後は走つて行った。あの時見た実家付近の光景、そこへ行くまでに目にした町の変わり様は忘れる事が出来ない。そして家族4人と近所の方、知らない若いご夫婦とで何とか母を助け出そうとしたが、人間の無力を感じるだけだった。機械の力が必要だった。すぐ芦屋消防署へ息子の原付バイク(門の下から出した。ゆがんでいるが走れる。)に乗せてもらい、母が生き埋めになっている事、救出にはブルドーザーが必要な事を訴えたが、そんな人が多勢いて、これは頼れないと暗たんたる思いがした。消防署の地下に臨時電話があると聞き、並んで兄へかけたが通じず、奈良の姉へはつながった。実家の状態、声がないので母はダメかもしれない、悲愴な連絡を入れた。又、実家へ戻り、救助隊の来るのを待ったが、いつになるか皆目見当もつかず、どうする事も出来ず、今とるべき行動が考えつかなかった。一度、家

族全員魚崎へ帰ることとした。このまゝ崩れた家の中に母を置き去りにするのはとても辛かったが、すぐ又戻ってこようと決めていた。国道2号線に沿って歩いて帰ったが、本当にひどい光景だった。家に帰り、散乱した家財道具の片付け等を始めたが、もう一度、実家へ行こうと乗りすてられていた自転車で出発した。途中、甲南本通りの火事を見た。水も出ないし、この辺りの川はいつも殆んど水がないし、どうして消すのか、次々と燃え広がらないか、心配だった。2号線まで行ったがパンクした自転車では行きつけないと引き返した。途中、人が並んでいたローソンで懐中電灯の乾電池を買おうとしたが、既に売り切れていた。

17日夜は、魚崎小学校へ避難する事とし、毛布を少しもって犬もつれ、全員で夕方行ったが、もう一杯で、それでも二階廊下の踊り場に場所を見つける事が出来、七人と一匹で真暗な中、余震におびえつゝ、夜を迎えた。しかし、息子があの激震でも魚小の建物には被害が殆どなかったから大丈夫と云い、又、大勢の人と一緒にという安心感があった。ただローソクをつけている人がいて、火事をひき起こさないか心配だった。家から持ち出した食料を少し食べたと思う。トイレが不自由だったので、余り食べない様にした。食欲もなかった。ラジオで情報は聞いていた。夜中に何度も余震が来たが、もうあんなひどい揺れないだろうと何故か確信していた。

1/18 夜があけた。近くのLPガスタンクにヒビが入り、爆発の恐れがあるのでJRより上へ避難する様にという勧告が出たので、リュックに貴重品を入れ全員でゾロゾロバラ公園へ行った。TVや映画で観た難民の群れに自分もいるのだと感じた。公園では早く勧告が解かれ、家に帰れる様願った。又、芦屋の母の事を知りたいと思ったが、電話はどこも一杯で出来なかった。お昼頃、しぐれ雨も来て寒いし、建物の中へ入ろうという事になり、本山中学校へ行ったが、危険で中へ入れず、又その西の本山第二小学校へ行った。こゝも校舎には入れず、校庭のたき火にあたらせてもらった。近くの壊れた家の材木をくべた。『食糧庫』と書かれた乾パンを初めて二人に一コ、配ってもらった。86才と81才の夫の両親も一緒に、校庭で夜を過ごすのは無理と思い、勧告が解かれなくても魚小へ戻ろうと決めた。娘は大学卒業前であり、京都の友人の下宿に避難させてもらう事にした。夕方、京都から原付バイクで迎えに来てくれた友人に、西宮北口まで送ってもらい、京

都へ帰って行った。一人でも少ない方が良いと思った。幸い電気のついている神戸商業高校の体育館に場所が見つかり、娘を除く6人と一匹で、二日目の夜を迎えた。おにぎり、パンが配られた。新聞もあった。被害の大きさにただ驚くばかりだった。

1/19 夜があけ、家に戻り、片付け、近所の電話の通じるお宅から奈良の姉にかけて、初めて昨18日夕、消防隊がブルドーザーを使って母の遺体を出し、現在、潮見中学校に安置されている事を聞いた。どこかでひょっとしたらという希望が完全についた事を知ったが、やはりそうだったかと、冷静に受けとめた。しかし、この目で見るまでは信じられないとも思った。すぐ息子のバイクに二人乗りして、お棺の母と対面したが、白髪が土や砂でうす茶に汚れていて、一瞬わからなかった。しかし、母だった。額に少し傷があったが、眠っている様だった。おふとんにくるまれて、きゅうくつそうだった。あんなにペチャンコの家から出されたのに、どこにも傷がなかったと聞いたのがせめてもの救いだった。ショックによる即死だと思われる。日頃からパッと死にたいと云っていたのが、その通りになった。長患病の父を見送って三年、元気に一人暮らしを愉しんでいたのに、非常に残念に思うが…。

ガス、水は勿論、電気もないでの、暗くなる前に全員で避難所へ戻った。

1/20 朝、家の電話が通じる様になった。そして、兄から今日母を大阪の北斎場でダビにふすという連絡が入り、又、潮見中学校へ行った。そして、救急車に乗せられた母に連らなって、車で43号線を大阪へ。途中、倒壊した高速道路、落ちかけのバス等を見て、驚くばかりだった。北斎場で姉達、兄達、弟と顔を合わせた。皆、同じ様に今回の事は驚きとしか云いようがなかった。しゃべり合う事で、自分を納得させて行ったと思う。この夜から両親が娘のいる東京へ避難して行ったので、ほっとした。元気とはいえ、高齢なので、このまゝの生活が続くのは心配だった。

1/21~26 昼間、家で引越しの荷造り、夜は避難所の生活を続けた。救援物資が避難所にどんどん届く様になり、有難かった。又、夫の会社の方々、親類、友人からも色々な物を頂き、感謝の気持で胸が一杯になった。次々とかゝって来る知り合いの方々、遠方の方々からの安否を尋ねる電話や励ましの言葉に、本当に元気づけられ感激した。

近くの魚崎小学校に仮設トイレが設置されたの

で、大分、気持が楽になった。

1/23 夫が震災後、大阪の会社へ初めて出勤するので、息子がバイクで阪神甲子園まで送って行った。今晚から会社の寮に入れてもらう事にした。そして、会社を通して引越し先のマンションを捜してもらう事にした。大会社が被災社員の為に物件をおさえていいると新聞に書かれていて少々焦った。

1/24 大阪の千里にマンションが見つかり、とりあえず安心した。今度は夫からの引越しの日の連絡を待つ。その間、マンションに持つて行く物を決め、荷造りをする。経済的な事等、色々心配な事はあるが、この不自由な生活から抜け出し、夫も通勤出来て、この先の事を落ち着いて考えられると思うと、気持が前向きになった。

1/27 家に電気がついたので、避難所を出て、夫の妹、私の息子と三人、二階で寝ることに決めた。

1/31 引越しの荷物を出した。

男性・80才・御影町

1/17 5時30分目が覚めて5時40分までベッドでラジオを聞き、寝室である二階から階段を降り、一階廊下に出た瞬間、ドシン、グラグラと揺れを感じ、廊下つづきの離れて寝ている妻を大声で呼ぶと、無事であったのが分りほっとする。未だ暗いのでローソクをつけて各部屋を見廻ると全部の家具が倒れ、陶磁器などが散乱しており茫然とした。夜が明けたので外に出ると、木造二階建の我が家は屋根瓦の大部分が庭に脱落し、足の踏み場もない有様である。此の地区は、区画整理をした際に新築した家が多くかったのと、震度が多少低かったためか被害は少ない。終戦直後に建築した我が家は、柱がしっかりしていたので半壊ですみ、修理すれば居住出来ることがあとで分ったが、その時近所と同時に新築しなかったのを悔んだ。

午後、妻の主治医の医院を訪ねるため石屋川を渡り、灘区高徳町に入ると、家屋の倒壊状況のすさまじいのに驚いた。医院も一階がつぶれ、一家は御影北小学校に避難していた。汲み置きの水とパンで飢えをしのぎ、此の日は平静にすごした。

1/19 東京の娘から電話で余震が心配であるので上京するように言って来た。私は80才、妻は75才で阪急西宮北口まで、御影までどうして行くか？ともかくリュックに健康保険証、印鑑、通帳など入れて、山手幹線に出て東へ行く自動車に便乗を求めた

が素通りする。1人乗りのタクシーが止まって便乗させてくれた。よく見ると元NHKのキャスター木村太郎氏で取材を終えて帰京中であった。氏の善意で西宮北口まで送っていたとき、夕刻東京に着いた。東京は物が溢れ、人々は生活をエンジョイしている。誠に天国と地獄の違いである。これから約二ヶ月間娘の家と狭いレンタルマンションで生活したが、神戸の半壊の家が気がかりで、何をしても興味がわからず、新聞とテレビを見て過ごした。

2/20 1月末に屋根の応急修理の依頼で帰ったが一泊して、又東京へ帰り、2月19日罹災証明をもらうため再度帰神した。東京と神戸の格差の大きさに腹だたしい思いをしたが、全壊して避難所で生活している人をみると、気の毒で仕方がないが、老体で何もしてあげられない。2月20日家具が散乱したままの部屋やトイレ、湯殿等の破損状況、庭に落下した瓦の山を眺め茫然としていた所、女子ボランティア5名の訪問を受け、トイレ、湯殿の掃除、家具の片づけを援けてもらった。そのあと男子ボランティアによって瓦の道路への運搬を援助してもらったが、いづれも若い学生や会社員の方でほんとうに感謝している。3月13日に妻も帰り、少しづつ落ち着きを取り戻した。4月に入って各種の公開講座を受講する気になって来た。

女性・28才・西岡本

1/17 揺れ出す直前に目が覚めていたのだろうか…。自分でもよくわからないのだが、現実か夢の中で、隣の部屋で寝ている母が「地震だわ」と父に話しているのが聞こえた。私はベッドの中にいたまま、自分でも揺れを感じるかどうか、じっと集中してみようと思った。瞬間、かすかな横揺れを感じた。「あ、本当だ。揺れてる。」と思った。後は、目が覚めているのを覚えているのだが、それ以前の数秒は意識がはっきりしておらず、夢の中で数秒後にやってくる恐ろしい出来事を予知していたのか、耳だけが「起きていた」のかわからない。

いずれにせよ、最初はたかをくくっていた。もともと東京出身で地震の多い横浜に住んでいたので、少々の揺れでは驚かない。このときも冷静にベッドの中で、眠いなと思いつつ、おさまるまで待つてしようと様子をみていた。そうしたら突然、ドーンとものすごい音がして下からつきあげられた。びっくりして飛び上がったが、ふとんをかぶる余裕もなく、

たてゆれ、横ゆれが同時に起きているような中で、ただひたすらベッドから振り落とされないようにするのが、精一杯だった。頭がベッドのサイドにある壁に何度もゴツンゴツンとあたった。台所でせとものがガチャンガチャンと次々に割れているのが聞こえた。隣の部屋の両親が気になったがとても見にゆける状態ではなく、とりあえず、自分はキーキー悲鳴をあげて生きていることを伝えることしかできなかつた。搖れがおさまった後も地鳴りがズーンとしばらく聞こえていた。直後に両親が私の名を呼びながら戸を開け、互いの無事は確認できた。しかし、停電になっていたし、外はまだ暗かったので、暗やみの中、手さぐりで部屋の外に出た。

関西では地震はないと思い、懐中電燈の電池もとりかえず放っておいたので、全く役に立たなかつた（揺れているときはくずれるかと思った。もう、これで死んでゆくのかなと思った）。だが、まわりはあまりにも静かだったので、うちだけ爆発でもおきたのかと思った。とりあえず、着替えた方が良いという冷静な母の指示で、手さぐりで服に着替えた。その間にも余震が起き、手がふるえ恐かった。数分たってから、ロビーに降りてみようということになり（今思うとなぜもっと早く逃げ出すことを考えなかつたのかと思う）、非常階段で降りていったら、他の住人も集まりだしていた。だれかが震度4だと言っていたが、皆があのゆれで4のはずがないと言っていた。

夜が明けるまでがとても長く感じられた。明るくなつて一回部屋に戻つたが、窓から見える範囲では崩壊した家 etc は直接見えず被害の状況はよくわからなかつた。遠くで煙がたちこめていて、三宮方面で火事が起きているのだろうと思った。近くのコンビニでは長い列ができていて、電池は売切れていた。隣りの市営住宅は4階（多分）の部分がつぶれていて、すき間から助けを求めて、つりざおの先に白い布を結びつけて横にぶつっているのが見えた。何とかしてあげたかったが、素人の私には何もできなく、くやしかつた。

余震が恐くすぐ家に戻つたが、どこにいても地鳴りからは逃れられない。会社に無事の連絡もできず（今思えばやむを得ないが）、会社を休んでいるのは私ぐらいではないかという不安があつた（大阪住まいの人が多いので）。次の日からでも、又通勤できるように、ただひたすら黙々とわれたせとも

の、飾りものを片づけた。何十年かけて両親が買いつめてきた物が、こっぽみじんになつてしまつた。

夕方、暗くなつてきて、より一層恐くなつた（18日午後まで停電は続いた。）。洋服のままで寝た（でも寝つけなかつた。）。

1/19 車で7時間かかる大阪のホテルに避難した。湯水、食事にこまらない所に移れたありがたさと同時に、大阪と神戸の状況の違いの大きさに驚かされた。

後々、いろいろな人の被災状況を聞くとけがというけがをしなかつた我が家は恵まれていたのだと思う。感謝すべきことだが私のようないまに親から独立していない厄介者が無傷ですみ、一家の大黒柱が亡くなつてしまうことが一方であると、いたたまれない。私が代わりに死ねばまわりで困る人はいないのでと思う。

3/初旬 ガス、水道が戻り、ホテルから自宅へ戻ってきた。お湯・ガスが以前の様に出るのが不思議である。近所の風景は今でも変わりつつある。地震後、物に対する欲が一切なくなつた。特に割れものはもう見たくもない程嫌になつた。お見舞いに高価なわれものを下さる方がいらっしゃるが、（失礼だが）とても二度と飾る気にはなれない。じつとしていると、今でもまだ地震がくるのではないかと思ってしまう。枕元にはマッチとろうそくを置いてある。のどもとすぎれば…というが、元の様に全く恐怖感のない生活は二度と送れないと思う。あの恐さは体験した人にしかわからないだろう。

補足

J R 神戸線が全線開通し、コープこうべ（SEER）が全館営業開始した。4月1日、住吉に再び活気が戻つてきた。店が久々にぎわつてゐるのを見て、ものすごく嬉しかつた。

『がんばろうや神戸っ子。』というポスター etc を見かけると、目頭があつくなつてしまつた。

父の仕事の関係で、間もなく神戸を離れなければならぬ。もともとの出身地でないが、気に入つてゐた街が復興していくのを現地で何年でも見守つてゐたかったが、残念である。2年弱の関西での生活で、とんでもない体験をしてしまつたが、又、遊びに来たい。

女性・74才・西岡本

1/17 一瞬の出来ごとと、何も考えず隣室の母の

部屋へ。白寿を迎える、目も耳も不自由な母がベッドの中に小さく埋っていたこと、本当に幸運だった。幸いに怪我もなく、家屋も一部破損程度ですみ、神様有難うございました!!と幸運を感謝した。

近隣の方々との温い交流、人間のやさしさをこれ程感じたことはない。息子一家の力強い応援、初めて自分が老人であることを感じ、孫たちの働きに大きく感謝した。被災という平等の立場で互いに助けあい思いやりのある行為、美しい光景に感動した。

1/22 電話が通じた。知人、友人、親類縁者の安否の確認。胸の痛むいとこの死。励ましたり、励まされたり、余震の心配はあるものの、少しだけ不安がうすれてゆく感じ。

被害の大きさが日に日に加わる。心が痛む。

1/27 水が出た。郵便物が届いた。新聞が入っていた。店が開かれているので買物で随分と明るい気持になった。

2/上旬～中旬 主治医が開かれていた。安心感倍増、血圧158にも上り、坐っている時間多くなる。血圧130になりホッとするが、気力がなくなつて、只、呆ーっとしている許り。

一ヶ月も経つのに…と、焦りを覚えるが落ち込んで行く気分。

2/下旬 相変わらず、うつ状態。睡眠不足。口内炎、腹痛あり。避難生活の方たちを考えたら…と、自責の気分で一杯。でもどう仕様もない。

3/上旬 ガスが出た。

生活が日常にもどれると、明るい気分になる。何とか交通と時間をかけなければ利用出来るので、習字の教室へと出かける。

3/下旬 友人3人で一泊二日の旅、京都へ。きれいな空気、静かなお庭。すっかりストレス解消出来たようだ。

4/末 老後の気儘な生活の夢も打ち碎けて、果敢なさのみ感じますが、今はさっぱり前を向いて残りの生を大切に生きようと考えています。沢山の方々の励ましと温かいお情けを頂いて、美しい人間関係に大きな希望を見出しました。「よかった」と思っています。

いま、自分に出来ること、矢張り母が普段通りに不安なく送れるようにすることだと考えます。老人許りの生活、私が明るく健康でなければと考えます。

まわりの方達のご援助に感謝し、日々を送ることを願っています。

女性・57才・森北町

1/17 激しい揺れがおさまって外に出ようと思うと玄関のドアが開かず、食堂のガラス戸からかろうじて外に出た。庭の東南の地面が10cm位沈下して樋がはずれてぶらぶらだった。近所の人も外に出て来られて、お互に大丈夫ですか、と声をかけあった。自分では冷静で動転していないつもりだったが、近所の人の顔がはっきり見えないような感じだった。後になって二、三人の友達がやはり目が見えないような感じになったと話してられた。

1/18 かつて娘や息子が通っていた本山第三小学校に水を頂きに行った。私の家は阪急より北なのであるが、南へ行くにつれ全壊した家が多く、特に小学校周辺はひどく、あまりの惨状に息を呑んだ。小学校の校門をくぐるのは何年振りだろうか。体育祭の日、万国旗がひるがえり、小学生の息子は児童代表で誓いのことばを述べた。その同じ校庭でお化粧もしないで、スカーフをかぶり、寒さに震えながら給水車の水をいただく長蛇の列の最後尾についている私。これは夢ではないのだろうか。まぎれもない現実だった。震災後、はじめて涙が溢れ出てきた。

1/20 知人が京都に避難してはどうかと強く勧めて下さった。私は近所の人達にも悪いと思い、あまり気が進まなかつたが、厚意に甘える事にした。

1/21 京都に来てみると、神戸とはちがつて別世界だった。でも私は神戸の本山第三小学校の教室に毛布にくるまれて、多数の遺体が安置されていた光景を忘れる事が出来なかつた。私だけがこんな結構な生活をしていいのかという思いが強かつた。近くの西本願寺の掲示板に『生かされて二度とない日を今日も生く、』と大書されていた。私の心境そのものだった。

1/24 体調を崩し、39度近い熱が出た。夫は片道3時間以上もかけて通勤しているのに、何もしていない自分が病気になるなんて申訳けない気持だった。熱はなかなか下らず、流感と診断されたが、回復するのに一週間以上もかかった。

2/8 神戸の自宅に戻ってきた。私は小学校時代から本山に住んでいる。小・中学校の同級生の中には家が全壊した人や肉親を亡くされた方が多くいらっしゃるのを知った。殆どの人とは電話で安否を確かめあったが、家が全壊した人と家が全壊して孫二人を亡くされた二人の同級生とは会って話をし

た。私の家は昨年11月末に新築したばかりだった。入居して2カ月も経たないのに半壊してしまった。でも二人の話を聞くと、私の方の被害など軽微であることがはっきり分かった。私の半壊した家を修復する事に関しては不安な問題が色々ある。考えていると絶望的にさえ思えてくる。でも同級生の話を聞いたり、まだ避難所で生活されている多数の人達の事を思うと、はるかに恵まれていると思う。

震災後、自分の家が全壊しているのに、私の事を心配してかけつけて下さった二人の同級生。私には到底出来ない事だと思った。今、こうして生かされている事に感謝し、一日一日を大切に生きて少しでも人のお役に立てるように過ごしていきたいと思っている。

女性・43才・向洋町

1/17 早朝、数秒間の震動が長く感じ、もうこれで私の一生が終わるのではないかと思った。(マンション10階)揺れが収まり「あー！人間って、ちょっとやそっとでは死なないものかしら」。揺れている時は、妙に冷静だった様な気がします。

家族全員の無事を確かめ、先づ、外に出ました。(公共の避難場所→中学校)携帯ラジオを持ち、2時間程してとりあえず家に戻りました。

以後、1週間後に奈良へ避難し、2週間して2月始めに戻ってきました。

奈良の2週間は、表向きは震災を全く忘れさせてくれましたが、新聞、テレビ、ラジオ等、震災関連のニュースばかり見聞きしました。近くには、橿原神宮、古墳と散歩がてら行ける距離だったので、行けるはずなのですが、気持ちがなかなか向かないのです。私達だけ、こんな幸せでいいのかしら。こんなのがんばりとしていいのかしら。いてもたってもいられないのですが、家に戻るだけの勇気がわいてこないのです。(余震が恐ろしかったのです)2週間は、あっという間に過ぎ、いよいよお別れという時に、2週間前の緊張感が蘇ってきました。それぞれリュックを背負い、両手に荷物を持ち、家族4人の気持ちが1つになっている事を実感しました。帰る途中、これが私達が住んでいた、往復していた神戸かしら？と目を疑いました。まるで別世界です。

人の流れ、様子が妙に緊く感じ、私の顔も自然とつきくなっていたと思います。それ違う人々は一様にリュックを背負い、しっかりした足どりで、さっ

さと歩いています。戦争体験のない私は、終戦後ってこんな感じだったのかしら…?と感じました。家に戻り片づけものを始めました。食器、ガラス食器等、大事にしていたものは全てこわれました。形のあるものは壊れてあたりまえ。これからは壊れないものを心の中に貯えようと本気で思いました。主人は会社、長男は帰ってからすぐにボランティアに行き、長女は学校へと、昼間は主婦の私一人っきりです。この瞬間余震がきたら……、絶えずつきまと不安でした。この不安は今だに残っています。

今まででは明日がある。未来があると思い、夢も希望もかけて毎日を送っていましたが、予知しない事が突然やってきたことの恐怖は測り知れません。明日があるではなく、明日があるか判らない。予測のつかない未来、未知なるものが未来なのですけれど、今の私は残念ながら不安のいっぱいといった未来になってしまいました。私は、この気持ちから少しでもぬけ出したいと思い、何か一生懸命、打ち込めるものをもちたい。今はある団体で活動しています。今まででは、明るい未来しか見えていませんでしたが、最近の社会不安も加わり、ますます未来に対する不安がつのるばかりです。今回の震災は、起こるべくして起こったと、最近思う様になりました。それは、神戸市、芦屋、西宮の開発に問題があるのではないかと思う事です。山をくずし、埋立てし、そこに住宅を立て、止まる事のない開発、あまりにも被害は大きすぎましたが、大地の警告だった様な気がします。

男性・82才・住吉山手

1/16 寒い日が続く。女子府県別対抗駅伝が京都を華やかに駆けぬける。宮城県が優勝、京都2位、東北地方の県が勝つのは珍らしいことだ。社会党山花氏の新党結成でもめている。どうも山花氏の行動が不可解だ。小沢氏に合流する説もあり、政局は混乱する可能性を含む。

1/17 曙方、突然ドンドンドンと身体が突きあげられた。何だ、何だ、これは何だと大声をあげる。頭から枕元のベットの横に積んでいた40号のカンバスがドカドカ覆って来て、その上に何やら重いものがドンドンと落ちて来て、蒲団の中にうまってしまった。やっと地震だと気付いた。御影は地震のないと云う神話(註1)を信じていたので、大したことはないと思っていたが、室中のものがガタガタ、

ドカーンと落ちたり倒れたりする音が暗闇に響くので、之は大地震だ。落着け、落着けと云いきかせて、なるべく蒲団にもぐりこむ。

又、余震が来た。今度は冷静に動きを感じた。関東大震災の経験で、余震は本震より小さく、次第に減衰してゆくと思っていたので、そのまゝじっと動かないでいる。

又、余震が来た。随分長い時間が経った様だった。無理にカンバスの束を少し押しあげて窓のあたりをうかがったら少し明るくなつて来た様子。蒲団の上のものを身体で押し上げ様としたが、重くて動かないので、蒲団の下の方に次第に身体をづらしながらやっとベットの下の方から脱出した。室はすべて倒れた本や額がとび散り、うず高く積った惨澹たる状態だった。居間もテレビはとび、食器棚が倒れ、硝子器、陶器は破れて足の踏み場もない。2階から妻が茫然として下りて来た。外に出てみると門柱の側のブロック塀は倒れていた。前のO家は東側の崖の方に、倒れた家は南側にずれていた。通りに出ると、道路の西側の造成地に建てられた家はほとんど倒壊していた。遠くの御影の海の方が何か煙っぽくもやつて、えらく近くに見えた。家に戻って更めて健在な我が家を不思議な気持でしばらく眺めていた。

(註1) 関東大震災のあと、大蔵大臣の久原房之助が皇居を地震の無い兵庫県御影に移すと云う提言をした。

1/18 どうやって生活するかが問題だ。先づ水と食料、家が助かったことの意味は大きい。200m程上の渦ヶ森小学校にプールの水を汲みに行く。トイレのタンクにこんなに水が必要とは今迄考えてみなかつた。東京の弟から電話。妻の弟からも。突然思いもかけないSさんからも見舞の電話。午後から給水車が学校に来ることを知らせててくれる。近所のミニケーションが急に大きくなつた。老夫婦に何かと連絡してもらえて助かる。

1/23 信じられない夢幻の時から一週間たつた。未だに何がこうなつたか理解の域を超えている。近所のFさん、Oさん、Kさんが去つていった。一寸した偶然が運命を支配する。人生はすべて運命の一すじの糸によって支配されているのではないかと、運命論者の気持になる。東京のOさんから電話。あなたには昔から何かあったと暗示的なことを云われる。

1/25 朝は定例の水汲みに行く。午後から自治会の集合があり、集団の盜難が発生しているので、自

警団を作る相談。50才までの人の地区内での確認、年令的にも肉体的にもお役に立てなくて残念。政府や官の不手際が次第に判つて来て、批判が出て来る。地区は自らの手で守らねばと云う意見、関東大震災のときの自警団の朝鮮人虐殺のいまはしい事件を想い出した。今度も妙なデマが一寸流れたが、長田区などでは韓国や北朝鮮の人達と融和して共同生活をしており、さすが国際都市神戸だ。

1/29 夜11時から小沢征爾氏の32年振りのN響があった。ドボルザークのチェロ協奏曲のあと客演のロストロボービッチ氏がバッハのカラバンドを無伴奏で演じ、今回の震災の死者の鎮魂曲とした。拍手は行わず、全員黙禱をささげる。凄く胸にせまるものあり、感動した。

2/1 地震から半月過ぎた。近くの渦ヶ森公園の水道から水が出る様になった。この意味は大きい。平常なら些細なことにこんな喜びを感じようとは、本当に毎日2回の水くみは老体にはこたえた。お蔭で難物のトイレの水が大分楽になった。テレビで障害を持つ人がトイレが大変なので、物を喰べるのをひかえているとの画面を見て、心を暗くした。人間は何故三食喰べて毎日排泄しなければならないのか。

2/6 地震後初めて下着を全部着替えた。水汲みが楽になつたので洗濯が出来る様になったからだ。次第に何かが少しづつ回復してくる気配がする。然し、又別の問題も色々と生じている様だ。新聞で子供達の震災によるショックの問題を読んだ。私も関東大震災の翌日上野の野宿地で恐ろしい夢(註2)をみてうなだれ、母親は逆に気が狂つたのかと狼狽したのを後になってきいたが、その悪夢は70年を経た今迄に数回みている。

(註2) 空から無数の白いウンコが降つて来て、私の体をうずめ動けなくなつてしまう。たあいのないものだが、いつもうなされる様だ。反みて1月16日とそれ以後と如何に異った生活を送つたものだ。感無量である。

女性・59才・岡本

地震などとは思はず、ジェット機が落ちて来たと言う認識で声も出せず、ふとんの上の物が重くて身動きが出来ず、「もはやこれまで…」と思いつぐに火が出て焼死すると覚悟した。それはそれは物すごい音であった。娘の「お母さん地震や、大丈夫？」

と言う甲高い声で我にかえり「地震？」と心の中でつぶやいたのを覚えている。娘も主人もすぐに起き出せたが、私は本箱、本立てが倒れ、反対の壁から重い額縁が落ちて来て起きられず、二人によくやくふとんの上の物を取り除いて貰って、パジャマの上に外出用のセーターなどを押入れから出して身につけ外に出る。三人ともケガもなく、後で見ると私の枕には本箱のガラスが突きさゝって居り、よく無事であったと信じられない位。

お隣りに再三声をかけたが応答がないので、そのまゝ下に降り近所の電気屋で電池と懐中電燈を分けて貰い、急ぎ家に戻りシンガポールの長男に電話。一時間の時差に加えて何の事やらわからぬ息子に全員無事を一方的に伝える。しばらくして一時だけ電気が通じテレビをつけ、阪神高速の惨状を見て仰天。自分の家の廻りの家の倒壊位ではない現状を知る。夜明けと共に家の中のふみ場のない状態をとにかく危険のないように片付けるとし、手をつけるがとにかくひどい。1.8mの食器棚がガラス戸と共に中の食器がテーブルに倒れこわれ、その食器棚にめり込むようにピアノが倒れ45°位で止まっていた。ピアノの前の観葉植物が根本から倒れ足のふみ場もない。これでよく表に出られたと不思議な位。冷蔵庫も流し台の所も戸は皆開き、中の物が出て通れない状態であった。トイレ、洗面所は水浸しで便器がこわれて使用不能かと一瞬思ったが、あとでタテゆれで水がとび出したのだろうと言うことで、こわれてはいなかったが、下に水もれがしては大変と思い、シーツ、タオル等で必死にふく。余震におびえ乍らも醤油さしがこわれてカーペットに色がついているのをみて、こわれた食器類を沢山の袋や箱につめまとめる。「特別に粗ゴミとして出して下さい」とのマンションの理事さんのおしらせに、小さな子供さんを連れて一軒一軒まわって下さる大変さに思わず感謝する。しかし、その後かなり長い間、粗ゴミと言わず生ゴミと言わず収集はなく、放置され放してあった。

それ以後、電気も来ず、余震もありで、緊急避難としてガレージの車へと移り、ラジオを聞いた。ガレージは家と少しあなれ、廻りに高い建物もなく安心出来たので三泊することになった。寒くて暖房が欲しかったが、ガソリンの消耗を考えラジオのみにし、毛布をかぶり、トイレと食糧を取りに三人で行動する以外は車でじっとしていることにした。報道のヘリ、急救車のサイレン、消防車の音を聞き乍ら、

唯々我身のことだけを考え身を守っていた。夜、月が明るくて電気がなくてもまわりがよく見えたのを覚えている。車で3泊したあと、安否を気遣ってくれる姉妹の電話でしぶしぶ妹宅へ避難する事となり、阪急西宮北口にまで歩く事となり、しぶる主人を追い立てる様にして二国を東へ向う。本山駅前のマンションの倒壊を見てよくぞ我家は倒れなかつたと思い、これが倒れた位だから、我が家も次の余震では倒れると納得。北口へ急ぐ二国はまるで戦場(?)のよう、車の間をすり抜けて行くバイクで恐しい思いをし乍ら人波について異状なまでの勢いで歩いた。芦屋が過ぎ夙川べりで休み、持参の水でノドを潤す。大阪から救援に來ての帰りと言う中年男性のグループに励まされ、後をついて北口へ。遠かったし、人も多かった。阪急に乗るのも大変だった。やっと阪急電車にのり、普通よりスピードを落として運転するとのアナウンスも安心出来たが、梅田で宝塚線に乗り換えた途端ものすごく違和感を感じた。我々は持てるだけの荷物を持ち、リュックに帽子にスニーカー。電車はいつもの通勤帰りのラッシュで本を読んでいる人もいる。毎日お風呂にも入れているであろう。トイレも不自由ではない筈。食事も普通通りであろう。我々は？ 大変な目にあって命からがらの感じで、はっきり逃げて来たのである。キャリーもひいて自分でもいつもの外出姿ではないから恥ずかしい。何故、大阪は何ともないからいつも通り？、なんで私達だけ？、そればかり思って妹宅へ急ぎ、タクシーの荷物ばかり多くて近距離で拒否されるかの不安は却って「大変でしたね」に慰められて到着。味噌汁におにぎり、熱いお茶で一息つき四泊させて貰った。妹宅も結構被害があり、重いテレビも吹っ飛び、食器も今はこわれ、グランドピアノが台座からはずれてしまったと言う。娘は仕事の関係で休む事はこれ以上出来ないので残し、我々は北口経由で我家に戻り、1月29日、娘の会社が借りてくれた避難場所で、3月31日まで行ったり来たりの生活を送る事になった。水はとも角、ガスがいつ迄も出ないので、本当に不自由な毎日であった。

妹宅は我々と同じ恐しい地震を体験し、物の被害にもあった。しかし、電気はすぐに着き、水は出、ガスは通じていたので、すぐ日常に戻れた。我々はずっと非日常のまゝ長田や中央のことを知らなかつたので、自分が一番ひどかったのではないかとさえ思つた位であったから、大阪のことをひどく違和感

を持って見てしまった。梅田のデパートで入口に大震災の御見舞いを申し上げますと書いて貼ってあるのを見ても素直になれなかった。美しい物を見るのもモーツアルトを聴くのも耳をふさぎたくなつて、唯々テレビの震災ばかりを見ていた。ボランティアの人々が活躍しておられることを見、聞く度に同じ日本人と思えなかつた。頑張ろうと街頭で炊き出しをする人々を見て偉いと思った。しかし、私は私の家族に対する普通のこと以外積極的に何もしなかつた。

最近、近所に住んでいて、東大阪に住いを余儀なくされた人に岡本で出会い、「神戸に住めていいわね。私はずっと東大阪よ。いつ戻れるかわからないし、家賃もかかる。狭い、不公平よね。神戸の水が飲みたくて税務署に来たついでに寄った。コーヒー飲みに行こう。つきあって」と腕を組まれ、あまりの剣幕に驚いた。反対の立場だったら、私もこうだらうと思う。なぜ、家だけがと思うであろう。よくわかるので何とも言えなかつた。

水が出てからであったが、高校の時の友人が二人、姫路から代替バスを乗りついで見舞いに来てくれた。熱いお茶と家族分の二段重ねの可愛いお弁当を持参で。「私達はスクスクと過ごさせて貰って申訳ない…。」と見舞金も包んで友人分もまとめて差出され、私は勿体ないと思い、有難うと御礼を言った。3ヶ月が過ぎて、せめてその気持の何分の一でもとクッキーを送った。電話があり、「こんな事をしておこるよ。」とのえらい勢い。でも本当に嬉しかつたんだからとあやまつた。

1月17日、地震直後は知らない人にもおけがはありませんか、よかったです、頑張りましょう、お大事にと何の抵抗もなく声をかけられたのに、落着くと又、元のどことなく疎遠で気軽に声をかけられなくなつた。読売新聞で全死亡者の氏名、年令、住所が一覧出来る別紙が出て、改めてその多さに驚いている。私の同窓生も四名亡くなられた。これから限りある命をどの様に生きればよいのか改めて考えている。

女性・56才・住吉台

1/17 6時、起床。いつもと変わらない朝の筈が突然の大きな揺れで、云いしれぬ恐怖と一緒に始まった。

すごいスピードで物が落ちる。揺れる。蒲団を被っ

て、そお長く続くものじゃないと自分を落着かせ、収まるのを待つた。

我が家は10階、余計揺れたと思う。

いざという時の為と、手近に置いたラジオ、懐中電燈も飛び出してわからない。目覚時計のメロディは何処かで恨しくも楽しいメロディを奏で耳ざわりだった。

とも角、家具などこわれたり、割れたりした物達を飛び越え、外へ飛び出した。マンション群の騒ぎは以外と軽い会話で軽づけられたような気がする。

数時間後、テレビで『阪神大震災』となる惨状を知り驚くばかりだった。

3時頃、先づは水、と公園に湧き水を汲みに夫は出かけて行った。こんな時にエレベーターに乗るなんて、停電で閉じこめられてしまうなんて…。食料を求めに行く人、安否をたづねて行く人、来る人、そんな中で気づかってくれる人、こんな時に乗るなんてねと云う人。陽は落ちて暗くなつてくる。大きな声で元気づけながら、もしやと心配になつてしまふ。

エレベーター会社には全く電話はかかるない。非常ベルは耳をつんざくように鳴っている。警察も消防署も一向に来てくれない。後になって、それどころではないすごさを知って納得した。もう自力でやって下さいとの通じた電話。8時迄待つたのにこれだった。

住人の男性の方々が集まって救出の方法を相談。道具を持って来て下さり、共同作業が始まった。やがてドアが開き、私を力づけて下さった人たち皆の拍手。こんな嬉しい素晴らしい響、決して忘れないと思う。ありがとう、本当にありがとう。地震の体験とは云えないかもしれません、人の親切、やさしさに人の絆を感じたのは皆さんと同じかなと思い書かせてもらいました。

被災者の方々の犠牲を無にしないで、明るく、住みよい、生きた街の再建を願っております。

時間が経って、冷静になって、いろんなことがあって、我々の共同住宅も結局は半壊ということになった。去年、12月に外壁、防水などの工事が終わったところ、260軒が1つの組合を作っている。考えは皆、それぞれ。財政もそれぞれ。復旧のメドはまだまだ。ヒビは1日1日深くなりそう。秋には話がまとまるかしら、と問題は山積しています。

まあまあの応急処置の早さより、きちんと、きっ

ぱりと安心して、トラブルのない安全な住いにと、一日も早い復活を祈っております。

男性・45才・本山南町

1995年1月24日

地震から8日目の朝を迎えた

朝がきて、夜がきて、また朝がくる
ただそれだけの日々が続く
希望のない日々が続く

地震についての記録を残しておく

地震の瞬間

1月17日早朝の5時46分、ドーンという音の後ガタガタと上下の揺れを感じた。車でスピードを挙げて走っていたところ、急に舗装が切れて岩がゴツゴツしている道に入ったときの、車の激しくバウンドする感じが近いと思う。その後左右に激しく揺れ、タンスが倒れてきた。○○子と声を掛け合い（怒鳴りあっていたのだろう）すぐに子供達に声をかけ、無事を確かめた。

倒れかかっていたタンスからはいだして、○○子をはい出させた後（後で確認したら子供が先で、○○子は最後だったと修正があった）真っ暗の中懐中電灯をとりに行ったが、倒れかかっていたのがタンスと思わず、壁か天井かと思いマンションが崩れたと思った。途中狭い部屋だがまともに歩けず、動き回った家具にぶつかりながらようやく明かりを手にした。その途中もその後も頻繁に揺れていて、歩きもフラフラしていた。

子供達も起きあがらせて、懐中電灯の明かりで部屋の状態を確認し、どうやら大丈夫らしいので、上にコートを着せた。数分後、隣のAさんが「開かなくなるといけないからすぐ開けるように」とドアをたたいて歩いており、すぐにドアを開け外に出た。廊下には非常用の電源で、電気はついていた。この明かりはしばらくついていた。

隣の倒壊家屋内の人の救出

外に出ると、マンションの隣の二階屋の一階が潰れていて、そこからはいだしてきた人たちがいた。まだ中に入がいるとのことで近づいてみると、壁のしたから「助けて」と女性の声。声の場所を探して発見。上になっている壁を押し上げて一人救出。ま

だ奥に老夫婦が埋まっているとのことで、五、六人で探して、回りの家具や木材を取り除いてようやく救出に成功。

もう一人近くの人が犬の散歩にきていてこの家の前を歩いていたときに、地震に出会い崩れた家の下敷きになった。身体は出ているが足がはさまれていてどうしても助けられない。同じマンションの人が頑張ってくれているがどうにもならない状況。消防に電話したが「人がいなくて行けない。みんなで助けてほしい。」どうにもならない。大型のジャッキを借りに行つたが、重いのと現場が川のそばで足場がなく使えない。身内の人もきて、柱をきったり、自動車用のジャッキを使つたりで5時間後ようやく救出に成功。

ところが運べる病院がわからない。近くの宮地病院は一階が倒壊して閉鎖しているとの情報。脚立を担架にして他の病院に運んだ。（他の人がやったので詳細不明）話では命に別状無いとのことで、玄関におかれたとのこと。

近隣の様子

マンションの対岸（天上川の西）には一戸建てが十数軒あるが、そのうちの半数が倒壊（1階部分が押しつぶされた状態）残った家も実際には柱が折れており、かろうじて建っているだけの状態。鉄筋のマンションも傾いている。近くのコーポリビングセンターも1階が倒壊、甲南商店街も壊滅、周辺の鉄筋のビルも倒壊しているものがある。それらのほとんどが1階の柱が折れたり曲がったりしたもの。

昼過ぎから倒壊していた甲南本通りの靴屋から出火、一帯に火が広がった。消防車はまったくこない。燃えるに任せているだけ。

夕方になってようやく消防がきて消火が始まったが、水が十分でなく（少ない天上川からとるのがやっと）消せるまでにいたらす。その一方では、同じ商店街にあるコーポ甲南店には食料品を求めて、燃えている火を背に数百人が列をつくって並んでいる。なにかが違っているなと悲しくなった。

火は夜中になっても消えず、電気の無い真っ暗な夜にその火事の火だけがいつまでも明るかった。

不安な一夜

不安な一夜とテレビやラジオでいい、何度も聞いてきたが、本当に理解できる人は少ないだろう。勿論自分でもわかっちゃいなかつたし。

朝の地震の後、引き続き余震が繰り返され、夜になつてもいっこうに治まらない状態だった。子供は

それぞれ寝させたが、自分と○○子の二人は椅子で仮眠をする。勿論洋服をきたままで懐中電灯を手元に、貴重品を持っていつでも飛び出せる準備をした。

余震は必ず「ドーン」という音の後「グラグラ」と揺れる。そのたびにみんなが目をさまし、声をかける。子供達にしてもたいして疲れなかったようだ。真っ暗な夜は不気味だし、そんな中で数十回の余震は、決して無傷でないマンションにいるとまさに不安な一夜だ。

朝が待ちどおしく、日の出を待ちわびた一夜だった。

大阪への避難

ライフライン（いつから誰が言い出したのやら）の水道、電気、ガスがまったく見込みがないので、生活ができない。余震も相変わらずひどいので、枚方にいる○○子の兄の家に避難することにした。12時出発として準備をしていたところ、向かいのBさん（女性の一人住まい）が一緒に行きたいとのことで、阪急西宮北口に向かって歩きでスタート。彼女の荷物が多いので少なくするように言ったが聞き入れず、大きな旅行用のキャリングケースを持ってきた。

500m位歩いてみてとても無理だと思い、車に切り替えることにして取りに戻る。結局大渋滞で、通行が困難な陥没した43号を走ったりしたが、甲子園口まで3時間、Bさんを降ろして枚方を目指したが、さらに渋滞しそうなので家族も阪神の出屋敷で降ろした。その後は豊中、茨木経由で2時間程度で行けた。今回の一連の行動で、車を使ったことは最大の汚点だと深く反省している。

途中の道からも被害状況が確認できたが、まったく「ひどい」としか言いやうがない状況。阪神高速の高架が落ちたり、潰れたりしている横も通ったが「ひどい」に加えて「恐ろしい」と思う。一年前のロスでの地震の後でも「日本の道路は大丈夫」といったノーティックな専門家はどこに行ったのかと思う。いつものような大渋滞の中での地震や、東京の首都高速でも同じことが起こり得ると思うと本当に恐い。

素人が心配していたことの方が現実だなんて、もうどうしたらしいのやら。

報道について

地震の後の情報は、唯一ラジオだけだった。電池式のラジオと、そのラジオの放送を使命感に燃えてやっていたいしていることは、本当に嬉しくもあり、助かった。

ただ各局が独自に努力しすぎて、一部競いあって

情報を流すため、バラツキもあればダブリも多い。人の安否確認も各局が独自にやっているようで、偶然その局を聞けば良いが、都会であるため数局が放送しているのでかえって一部の人しか伝わらない。また、県知事や市長からの直接の話しかけはなかったよう思うが、こういうときこそ、市民に安心できる公の情報を各局から流す必要があると思った。

各局を聞いていて、NHKがいかに働いていないかが良くわかった。現地には誰も行っていなくて、対策本部や警察に行ってそこからの情報だけを知らせていました。いつも情報が一番遅く、役に立たないことが良くわかった。民に比べ官（にちかい）の使命感がいかに低いかが露呈した一現象だった。

大阪についてはじめてテレビが見られた。多くの場合被災地は停電をしており、テレビが見られるることは少ないと思う。

テレビというメディアがいかに野次馬であるかが良くわかった。被災地に向けた情報でもないし、被災民のためを考えた報道でもない。自分でも今まで同じ見方をしていたのだから、急にそんなことを言って非難すると言うのではなく、そうゆうメディアであると言うことが十分に理解できたことを明記しておく。

ラジオよりもっと競争意識が強く、危険な現場にレポーターを行かせて悲惨な状態を伝えている。若い女性にも行かせ、有名なキャスターはヘリコプターなどでチョイと来てサッと帰ってしまう。同じような視点で報道しているので、チャンネルを変えても皆同じ現場が映っている。

被災のその日からすぐに、各局のヘリがバタバタとうるさく上空を飛び、交通の手段がなく水や食料が届かないときにでも、何等手助けもせずに「人道上の活動を」と叫んでいる。

当事者と非当事者

19日に大阪の本町のオフィスに出社。本来の神戸のオフィスが立ち入りできない状態であり、上部組織である関西営業部に出社した。

避難した枚方でもうそだったが、ここでも人は今までとまったく変わらない生活をしていることに、当たり前ではあっても感情で理解できなかった。

神戸で本当にあんな悲惨なことが起こっていたのかと疑いたくなるような、自分に問いたくなるような気持ちだった。昼には何を食べようかとランチ屋さんの前にいた自分が、どうも釈然としない。何が現実で、何が偽なのか？

会社でも勿論みんなが心配してくれて声をかけてくれ、話を聞きたがったが、彼らは非当事者。他にも阪神間に住んでいて、被災の当事者も出社していた。やはり当事者間の話は生々しい。お互いを心配しあってかける言葉も、心にしみる。

夜テレビを見ている時は、非当事者になって見ている。明日はテレビの中の世界に入っていく、つまり当事者に戻るんだなと思った。

20日に一人で自宅に帰った。地震の当日からマンションの管理組合として情報の共有化、食べ物、水の確保等助け合っており、役員と一緒に活動をしていたことが気がかりであり、再び当事者になった。

阪急西宮から歩いて神戸に近づくにつれ、倒壊した家屋が増えてくる。芦屋川を越えてからの二号線の両側はほとんどの家が倒壊していて、ボロボロ涙がでてきた。テレビでみていた時の非当事者から被災した当事者になって、同じ被災の状況を見ると自分も含めてかわいそうに思えてくるのだろう。

翌日また枚方に行って非当事者に近い状態でテレビを見て、23日家族で帰宅。全員で当事者に戻った。気持ちがそう簡単には切り変わらず、精神状態もおかしくなりそうだ。

肉親を無くした人がテレビのインタビューに淡々と答えているのを見て、無くしたことの非当事者として気持ちちは理解できないが、自分に自信はない。

海外の報道でも、日本人が整然と落ちついて行動していることに、驚きの報告がされているようだが、みんな爆弾を抱えているような状態だと思う。非当事者達が当事者の中にすかすかと土足で入り込んで来て、我慢の限度を超えたとき、一気に爆発をしてパニック状態にだって発展しかねない。

「気持ちちはわかるよ」などと無責任な発言だけは慎みたい。

地震予知について

東京を中心とした地震の予知については、1,000億の予算のほとんどを使って調査がされているのだろう。ところが今まで一度も話題にされなかった、神戸を中心に地震は起こった。そしたら急に地震予知連とやらが、阪神間は活断層が多く危険だったなどと言い大きな余震の可能性があると脅している。そのせいもあって、市民が逃げて行ってしまい、また避難所に行ったままで学校が始まらないと言う子どもへの二次災害をもたらしている。

地震予知に関わっている人はもっと責任を明確にすべきである。昨年ロスの調査に行って日本は大丈

夫だと報告したメンバーは国民の前に出てきてほしい。神戸に来て壊れたビルや高速道路を見ての報告を聞きたい。

今にして思うに、この組織は東京を守るためにカモフラージュだろう。東海沖が危ないと何十年も叫び続けて、東京の防災対策にお金を集中させるための作戦としか思えない。

もうだまされ続けることをやめて、各自治体が真剣に防災対策に取り組むべきだ。勿論個人すぐ出しきことから始める事だ。世界の、日本のどこで起きても不思議はないのだから。

地震から学んだこと

1. 壊れなかった建物

プレハブの一戸建て、四階から六階の低層マンション（鉄筋）、高層マンションの鉄骨鉄筋造り。

鉄筋の高層の建物はもろい、特に一階部分が駐車場や店舗になっている建物の多くはその部分が潰れた。10階建てくらいの3階か4階部分が潰れたものも多い。

2. 倒れない家具

天井まで詰めものをしてあるもの。タンスや書棚でその上にさらに箱などを置いてあった物は倒れることができなかつたようだ。さっそく対策をした。金具などの固定ではとうてい耐えられそうにない。

3. 非常灯は部屋の中にもほしい

災害の場合ほとんど停電するだろう。落ちつくまでの5分や10分でいいから明かりがほしい。何もわからない状態では不安が更に増す。マンションの廊下や階段部分では非常灯のおかげで、下に降りてくるのがうまくいった。

懐中電灯、携帯ラジオは必需品。

4. 少しのストックを

なにかに付け少しのストックのある生活がいい。なくなつてから買い揃えるのではなく、残り半分くらいになつたら次を用意するくらいの余裕がほしい。最初の一日が乗り越えられるとなんとかなりそう。

5. 決断と行動のスピード

信頼できる情報を摑むこと。ラジオしかないだろう。判断し、決断し、行動すること。スピードが勝負。家族の安全の確保や、その後の生活基盤の確保に差がでていると思う。

（実験に加え、その後の人の動きを見たり聞いたりしての感想）

6. 日頃の近所付き合いが命を救う

緊急時に役に立つものは警察でも消防でもなく、コミュニティー、近所の人の協力。壊れた家の中から救い出された人の多くは、家族と協力してくれた近所の人の力。そこに人が残っているかどうかの情報も、隣の人からのもの。

近所づきあいが大切。今回の件で、この地域のコミュニティーはきわめてよくなつたと思う。今後の明かりだ。

7. 人の傷みはわからない

雲仙や奥尻での災害の時、自分はどう感じどう行動したか？それを反省する。傷みや苦しみは当事者以外にはわからない。わからないと言うことがわかった。自分の身の上に起つたこと、自分が感じたことだけを話すようにしている。倒壊した家からようやく出てこれた人や、階が潰れたり傾いたマンションに住んでいた人の恐怖感など想像もできない。

自分も地震の被災者ではあっても、家が壊れてしまった人や家族を失つた人のことを聞くにつけて言葉もなく涙が出てくる。自分達はまだ良かったが、もっと悲しい思いの人がいると思うとかわいそうで涙が出てしまう。みんな我慢をしているけど、テレビなどで大人の男の人が泣いている場面が出る。今まで見たことのない場面だ。大阪のNHKのアナウンサーも番組の中で泣いていた。

この惨状を見て「言葉がない」と言う人が本物かも知れない。

8. 倒れた木などない

地震で倒れた木はない。街路樹やこのマンションの浅い人工地盤の高木も倒れていない。彼らは地球が生きていることを知っているかのようだ。逆らわず大地と一緒に動いたのだろう。地球は動かない物だと勝手に決めて、堅い物を動かないようになつた人間の作品だけがことごとく壊れてしまった。地震があるのが当たり前の前提で、構造を考え直す必要があるのだろう。

地震の時一番安全な場所は、大きな木の下のようだ。

提言（2月23日）機会を見て提言したい

1. 構造物は壊れると思い、建物を守るより人命を守る基準を！

日本の耐震基準はすべて関東大震災を基準にしていたようだ。今回の地震の規模がそれを大きく上回っていた事で、誰も責任を問われないように

している。震度7という気象庁の発表も、建物の大きく壊れたところをそう呼ぼうという事で、行政と建設業界の責任回避以外に何物でもない。今度は震度7以上でも壊れない基準をつくろうとしているようだが、考えを変えるべきだ。次にさらに大きな震度8とでもいう地震に見舞われたときまた同じ言い訳をしているだろう。勿論そのときはいよいよ壊滅状態なのだろうが。

これからの基準は壊れる事を前提にして、建物を守るのではなく人命を守るための基準づくりをすべきである。一部の建築家と話してみると、そんな事を言っている人がいたが、真剣に考えるべきだ。そのためには建築家として構造の強化だけでなく、中に入れたり取り付ける設備や家具、備品類についても関心を持つべきである。

今回亡くなった方は倒壊した建物の犠牲が多いだろうが、倒れてきた家具や設備の犠牲になった人も多いと思う。逆にその家具の隙間などで助かった人も多い。さらに強い建物をつくる事だけでは人命は救えない。

建物を守る事より人命を守る基準を考えてほしい。

2. 古い基準の建物（構造物）にも新基準を適用！

地震は天災とばかり思っていたが、今回の被災状況を見るにつけ人災だと思うようになってきた。同じ地域で倒壊したものやほとんど被害のないものがあった。頻繁にそれは地盤の違いのように言われたが、隣同士や回りのほとんどが被害を受けているにも関わらずポツンとのこった建物を見ていると、納得しがたい。おおむね新しい建物ががんばっている。一戸建てではよく言われているようにプレハブが強かった。

つまり耐震基準が違うのだ。新しい厳しい基準のものがやはりもっている。震災の度に基準の見直しがされ、学習の成果が反映されて良い事だが、あくまでも適用は今後建築されるものからになる。危ないと思っても以前からの建物はそのままになっている。今回の被害もそれらの古い基準のものが倒壊したのだと思う。亡くなった方もそう言った建物の犠牲が多いようだ。

今後作成されるであろう新基準は、人命を守る部分についてはすべてのものに適用するようにすべきである。

3. 家具の安全基準を早急に策定、実施！

人命を守る基準づくりのうち、すぐできる部分

として、家具や備品等の転倒防止策を製造者、販売者に義務づけたい。

一番危ないタンスや書棚、食器棚等の大型で高さの高い家具は最重点だ。これらは重量もあり、また重ね合わせたものが多いので、金具でとめる程度では無理だ。

まず重ねあわせの家具類は、この重ね合わせ部を必ずネジ止めをする事。転倒防止策として天井との間の隙間を詰めるスカート（強度のある）と一緒に提供する事を義務づける。本体と同様の材質で、隙間に応じてフレキシブルに対応できるようにする事。これらを含め転倒防止をP.L法に含め製造者に加え販売者にも義務づける事とし、実行度をあげていく事が急がれる。このことは自分達でもできることもあるので、多くの人に伝えたい。勿論自分でも被災後真っ先にやった事だ。

この事はオフィスの家具、機械類にも同様のことと言える。今回は時間が早かったため直接被害として現れなかつたが、後であちらこちらのオフィスに入ってみて、キャビネット類が椅子や机の上に覆いかぶさっていた。そこにいたら死んだなと思いぞつとした。止めてあったものもほとんど倒れており、天井までスカートのようにしてあったものは動いただけで倒れていなかつた。

これ以外にも報道のあり方、行政の実力について、救援活動などいろいろな思いはあるがほかで提言もされているのでそちらに譲る。

以上、地震に関して感じた事をまとめておきたい。

男性・65才・向洋町

1/17 (六甲アイランドのマンション10階の一室：老夫婦？と25才の息子)

その時…大きな激しい横揺れに「地震だ」と感じた直後、ベットの下から今まで経験したことのない大きな突き上げが来た。13階建ての建物そのものが大きく飛び上がったように感じた。「これはなんだ！」と叫んだのを覚えている。なにか大きな事故が発生したように思われた。そしてすぐに横揺れに戻った。「やはり地震なんだろう」と思い直す。被害…一家三人無事、息子は危うく家具の下敷きになるところだった。幸運！建物自体には全く異常無し。窓ガラスに割れたものはないし、建具の立て付けにも狂いなし。

室内は、足の踏み場もない。お仏壇・本箱・箪笥

などかなり重い家具が10~15cmも移動したうえ倒れて中身を放り出す。食器棚3本も倒れガラス・陶器の食器類の殆どが飛び出して割れ、一面に散らばる。別の大型の本箱と冷蔵庫は、倒れはしなかつたが大きく移動。その他、細々としたのが、どの部屋にも散乱、手が付けられず。倒れた家具で畳に穴が開き、襖・障子のあちこちを破る。天井灯の一部破損。

ライフライン…電気・ガス・水道は、震災直後停止。電話は7時頃、西宮からの安否確認の電話を受けたが、直後通話不能。新聞入らず。

情報…終日皆無、外で何が起きているのか。携帯ラジオを発見出来ず。

行動…夕方まで、ガラスの除去だけで過ぎる。電気掃除機がなく、完全な除去は出来ない。

食事…夕方、バターロールと乾パンに缶の茶、それにビール。

1/18 避難…ガス漏洩による避難勧告に従い、昼近く「カナディアンアカデミイ」に避難。この時が震災後はじめての外出であり、建物周辺の状況を見て驚く。あちこちに段差・亀裂があり、ブロック塀が傾き、路面がうねる。住宅区域には、その後伝えられた液状化現象はみられず。

避難先（教室）では、場所を譲られたり、毛布を貸して貰ったり、いろいろな人の親切に接す。未知の人々とも積極的に言葉を交わす。他人が目を通す新聞記事がちらりと目に入る。この島の向こう、本土側？は大変なことになっているらしい。

ここには、すでに電気がついていた。島の東側は、早々に電気はついた様子。

夜7時、避難勧告解除、家に戻る。

六甲大橋通行止め、孤島となつた一日。

食事…避難先で校庭を一周する行列に加わって、一人一個のお握りと、一家ペットボトル一本の飲料水をもらう。持参の乾パンとともに口にする。夜は、ビールとつまみぐらい。電気が切れて、冷蔵庫の中のものや飛び出したものは、食べる訳にもゆかず、それに菓子類には、食欲がない。乾パンが一番、50年前を思い出す。（冷蔵庫の中にまでガラス片が）午後、スーパーが開き食品の提供を始めたので行列に並んだが、閉店までに入れず。

情報…うずたかく積もった本の下積みから、ポケットラジオを見つけ、イヤホーンを耳にする。水汲み…夜トイレ用の水を汲みに出る。エレベーターが動かない中、200m先のリバーサイドからの一日2~3回の水運びが、この後水道が通るまで続

くことになる。

夜…蠟燭だけの暗く、つめたい夜。ライフラインの早急な復活は望めそうにもないことを知る。手も顔も洗わず、着替えすることもなく横になる。

1/19 食糧…朝9時早々にスーパーに並び、2時間後に多少の食料を入手。

別に管理組合から、お握り・アンパン・ミカン・飲料水の支給を受ける。

情報…午後、管理組合ではじめて新聞を入手できるようになる。

夜、公衆電話の一部が通ずると聞き、電話ボックスに並び、名古屋の姉に無事を伝える。名古屋近辺だけでなく、静岡・横浜・宇都宮など各地で、安否確認の情報を求めて電話が飛び交ったことを知り、申証ないと思う。神戸の状況はこちらより遙かによく知っている。

外出…午後、六甲大橋を歩いて渡り、本土側へ行ってみる。六甲ライナーの橋桁が落ち、あるいは、ずれている。橋の歩道部分はすぐ上が六甲ライナーの橋桁、傾いていて怖い。(翌日には通行止めになっていた)住吉川を中心に歩いてみた。想像を絶する破壊に唖然としてしまう。島の中の破損など、被害の口にも入りはせぬと痛感する。

1/20 救援の食料・飲料水の供給を受け、スーパーの細々とした売り出しに出掛け、トイレ用の水を汲む日課が続く。

各戸の電源のブレーカーを切るように指示あり、給電の近いことを知る。同時に、半分以上の家が、避難し不在のために、どう処置するのか、まだ確認に時間が掛かりそうに思う。

夜、電気は来ていないが、ファックス機の受話器で通話できると知り、早速あちこちに電話する。

1/21 午後6時、電気通じ、明るさを取り戻し、電子レンジによる暖かい飲み物を口にし、テレビの画面に釘付けになる。たゞ、エレベーターは、安全のため使えず、階段の上がり降りは続く。電話も開通。

1/22 日中だけ、エレベーターを使えるようになる。

大阪から、甥が電気ポット、コンロなど持ってきてくれる。甲子園から歩いてきたという。

本棚・お仏壇など少しづつ元に戻し始める。

1/24 エレベーターが全面的に復旧。

1/27 生協に商品出回り始める。

1/28 三田まで出掛けはじめて入浴、以後水が出

るまで都合3回出掛けれる。

1/29 住民集会あり、震災後の管理組合の活動状況の説明と飲料水を除き救援物資の供給を停止するとの伝達あり。

2/1 新聞の各戸配達再開。

2/6 建物に「大きな損傷はない」旨の緑の証紙添付さる。

2/9 夕刻、ガス通る！

2/10 夜9時、水道開通！ 水汲みから解放され、夜遅く久し振りに家の風呂に入る。

これで一応平常の生活に戻る。たゞ、温水の供給再開は、当分期待できそうにないし、六甲ライナーの復旧もかなり先のこと、足の不便も続きそう。

大震災にも拘らず、幸運に恵まれ、結局は何も変わったことのなかった私が、ライフラインと情報を絶たれて、じたばたした一ヶ月、遙かに大変だった被災者の方々に何も出来なかったことを申し訳なく思います。

女性・52才・岡本

そおーっと眼を開いた。

刻々と心臓が動いている。

空が見えた。

異様な程静まりかえっている町

夫が…子供が…

「よかったです、助かったよ」

泣けた。笑えた。話が出来た。

私の命がみんなものになった。

痛みがはしった。足が…

しごれている。動かない。何だろう。

何日振りだろうか。

病室で深い眠りに入った。

そおーっと眼を開いた。

みんなが、笑っている。話している。

左 大腿骨複雑骨折。

神経圧迫

右 足首神経圧迫麻痺

悲しむのはやめよう

神戸の復興と希望に向って

頑張ろう。

震災記念の足と共に。

野良猫の親子が3、4日前から姿を見せなくなつた。交通事故でもあったのかと心配していた。17日、

家が全壊した事も解らず、動かぬ身体の痛みと闘いながら気を失い、息子の声でふっと眼を醒ました時、「今、助けてやるぞー」の言葉に、今、自分がどの様な状態にいるのかすら解らなかった。痛みは増し、息は荒くなり、冷汗が出、次第に呼吸が止切れでゆく不安の中、必死に頑張った。御近所の方々と家族の者に助けられた時、又氣を失いかけ、娘の声で気がつき「助かった」と思った瞬間、涙がとめどなく溢れてきた。御近所の方からいたゞいた一杯の水が、私に活力を与えてくれた。甲南Hでは次々と亡くなられてゆく方々の看護で休む暇のなかった看護婦さん。六甲アイランドHではバケツリレーで水を溜め、手の温まる暇もないナースの方々。そんな中で骨折と判明し、別天地の様な大阪の病院で手術を受け、未だ入院治療中である。

院長先生が回診時「神戸へ行ってお手伝して来ましたよ」と云われた時、「有難うございました」と云い、思わず涙してしまった。

夫の転勤で岡本に住んで3年弱、貴大学の講座に毎回参加し、「永住」しようと家族と話し合っている矢先の出来事であった。未だ、私の頭の中にあの静かなたずまいの街並が鮮明に残っている。命が授けられたから何もいらない。たゞ一つ、また岡本の地に戻って穏やかに過ごせる生活がしたいと願っている。

男性・66才・田中町

1/17 (AM5.46から数分間の出来事) (理解をして頂くために——東灘スカイマンション7階に夫婦と娘の3人で居住。それぞれの部屋にて就寝中)

突然、ドドンと身体を突き上げられる。「なんじゃこれ!」と叫びながら目を覚ます。4~5回ほりあげられたか、咄嗟に壁際に身を寄せる。

〈地震! ドアを開けねば…仙台地震の教訓が頭をかすめる〉

「〇〇さん、地震だっせ!」と隣の奥さんの声。外からドア引っ張ってもらう。「大丈夫か?」妻と娘に声をかける。返事なし。(しまった! えらいことになった) 暗がりで何も見えぬ。やや間をおいて二人より返事がありほっとする。(妻は私に地震を知らせようと立ち上がったが動けず、必死に柱にしがみついていた。娘は暗闇の中を家具や本が倒れ飛び交うのを茫然と見ていた由) いそぎパジャマの上にダウンのコートを引っ掛け、ズボンをはき素足に

て触った靴を履く。部屋の中は倒壊、散乱。妻子はなかなかドアに近づけず、手近にあったスリッパをほり投げ、「テーブルの上を越えてこい! 下は通ぬ、ガラスに気をつけろ!」やっとの思いでドアまでくる。部屋の外は大雨? ジャージャーと水が降ってくる、〈エレベーターは使えぬ、非常階段へ〉といそぐ、廊下はあちこちに亀裂、階段は傾き危険な状態、それでも「危ないだせ、ここ割れてまっせ」とお互に声を掛けながら灘高のグランドへ避難する。(後から考えると、混乱もなく怪我人もなくよく整然と避難できたもの……ジャージャーは屋上の給水塔が瞬時に壊れたものであった)

(AM 6.00~) ようやく夜も明けはじめ。グランドには方々に地割れ、塀にもたれ腰をおろしほっとする、グラグラと来る、慌ててグランドの真ん中へ飛び出す。東南の方向に黒煙がもうもうと上がっている。〈どこが火事か? まあ遠いからまだ大丈夫。近くならどこへ逃げるか?〉

(AM10.00~) 夜が明ける、余震しきり、妻子はパジャマに毛布、素足にスリッパだけの姿に気が付く、何も持ち出していない。だんだんと避難者が増えてくる。余震の合間にみて、3人揃って決死(?)の思いで倒壊の恐れのある家に入り最低の必要品・貴重品などを探します。電話は幸いにつながっていたが、こちらからはかからず。子供や孫たちの安否が気遣われる。

持ち出したラジオにて地震の規模・被害がおぼろげに分かり出す。

大阪の妹より電話が偶然にかかる。「西宮の兄は無事、義姉はタンスの下敷きになり重傷、入院する、六甲アイランドの姪は無事。」とのこと。茨木の息子一家も無事との電話がつながる。

震源地が淡路北淡町と伝える。垂水に住む娘一家の安否が不明(誰か孫の一人位やられたのではないか、と密かに腹をくくる)

(PM12.30~) 食糧・水類を求めて、ローソンに長い行列ができる。みな必死の形相。朝から何も食べていない、飲んでいない。並んでみたが何も買えず、別の店でジュース(ペットボトル)3本1,000円でやっと買える。

〈若い奴程ガツガツしゃがって。わしらは戦争体験者。水さえあれば大丈夫。なんとしても生き抜いてみせる。それに今度は周りは助かっている。すぐに助けに来てくれる。慌てることはない!〉

灘高のグランドに続々と避難者が集まる。自動車、

キャンプ道具一式持ち込みに驚く。世代の違いを痛感する。

(PM16.00～) どこからもなんの連絡・指示もない。今夜をどうするか？体育館を覗く。寒そう。柔道場はましなようだ。誰に言われた訳でもないのに、同じ思いの何人かと一緒に場所をとる。いつしか隣のご夫婦、平素心安い一家と固って座る。

空にはヘリコプターしきり。サイレンひっきりなし。国道2号線を東へ人の行列が続く。逆に東から西ヘリュックを背負い手車を引っ張った人の列が続く。西の空には黒煙が……建物いたるところで崩壊。道を塞ぐ。

我が家は幸い崩壊にまで至らず、またしても必要な毛布類を持ち出し、今夜の『ねぐら』を確保する。

(夜になる～) 真っ暗な避難所に続々と人が増え段々と窮屈になる。横になるのがやっとのこと。トイレに行くのも一苦労、人の頭を跨ぎながら手探りでようやく出られる。〈普通だったら文句をタラタラいわれる状態なのに誰も言わずに通る道を空けてくれる〉行ったトイレが早くも「糞づまり」の状態、誰かが持ち出した懐中電灯の明かりがパッとつく。場内より拍手が上がる。

(真夜中～) ようやく寝静まる。窮屈な姿勢でウトウトとする。〈なにわともあれ無事であった…〉突然ガタガタッとする「キャー」との声。一斉に起きだすみんな震動に敏感になっている。何回も繰り返す。

寝られぬままに外へ出てみる。消防車・救急車・パトカーが続々と連なる。体育館に何か運ばれてくる。「遺体だ！」次々とやってくる。そばで棺桶の組立てをしている。みな必死に働いている。住吉川病院も被害をうけている。真っ暗・病院の前庭に院長はじめ医療班の医療活動が続く。

肉親の安否を気遣う人達が続々と避難所を訪ねてくる。体育館にて遺体と対面し泣きながら帰る人が増える。〈いつの間にか、この人達の案内役をやっている自分に気づく〉今朝から1日家から持ち出したパン1枚を口にしただけであった。体調が変・下痢気味となる。

1/18 断水、ボタボタと落ちる水を貯めて洗面、戦時中を思い出す。

(夜明け～) 誰からともなく「避難命令」が伝わってくる。詳細不明、手荷物・毛布を持って山手へ逃げる。方々から多くの人が逃げてくる。甲南小学校あたりまで行った時、「解除」になったという。訳

がわからぬうちにゾロゾロと元に帰る。ほっとする間もなく「解除になっていない、液化ガスタンクが危ない、JRの線より上に避難せよ。」と伝えてくる。

今度は2号線から本山中学まで避難する。途中多くの家が潰れ、線路も曲がっている。TVカメラマンが避難の姿を撮影する。空にはヘリが飛ぶ。運動場に場所をとる。(教室は損壊のため入れず) 壊れた家より材木を取り出し随所に焚火が始まる。粉雪ちらつき寒さひとしお。

〈こんな場所では野宿もできぬ。甲南大学まで様子を見に行く。先客で満員、えーい運を天に任して灘高へ戻るか！〉(結果的にみてこれが正解であった。隣りのご夫婦も戻ってみえた。)

(午後～) 国道2号線を東から西へ、続々と救援物資を背負った人達が続く。自衛隊の車、全国(?)からの消防車、救急車が集まる。空には新聞社、自衛隊のヘリがとんでいる。救援物資も届き出す(もう安心！ ジーンとくる)

夕方近く、息子夫婦が茨木から救援にくる。西宮北口から歩いてきた由途中の惨状を始めて知る。握り飯、お茶など沢山持参してくれる。始めて熱いものを口にできた。自分たちだけでは相い済まぬので周りの方々にもお分けする。一緒に避難するよう勧めてくれるが、もう暫く避難所で様子をみることにする。〈思いがけずやってきた。さすが親子の情嬉しい。気の利いた見舞い。周りの方々から感謝される。よくぞ来てくれたと思う。〉

(夜になって) 暗がりの中に次々と救援物資が届く。パン・握り飯・毛布・水など、どこからか大勢の若者たちがきて分配してくれる。避難所の「糞づまり」解消の為プールより水を運び掃除をはじめてくれる。〈どこの人達だろう？ ボランティアとはなかなか思いいたらなかった。夜通し警戒の為巡回をしてくれている。昔の有名な話、山本五十六大将の言葉の「近頃の若い者はなどと申すまじく候…」を思い出す。しっかりとした行動に、献身的な態度に頭の下がる思いがする。〉キリスト教のボランティアによる炊き出し(暖かい肉団子入りスープ)に身も心も暖まる。今夜は寝られそう。

1/19 新聞を配っている。聞けば「配達先が潰れ配る家がない。自分の家も潰れたがなんとか読んで欲しい。読者にとどけねば」とやっているとの事。TVがなく、ラジオのみの生活。はじめて写真を見て惨状を知り、被害の大きさに驚く。避難所に持ち帰り回覧をする。

(午後になって) 持病の心臓の診断に工藤医院に行く。医院にも被害あるも先生に診て貰い安心する。家の被害もほったらかしにしてかけつけ治療にあたる医師、看護婦、薬剤師、事務員の皆さんに感謝する。

垂水から一番案じていた娘一家より婿と孫（中3男）の2人が自転車で救援物資を持ってやってくる。全員無事のこと。安心とビックリが同時にくる。途中方々迂回しながら2時間位できた由。勧めに従い娘と一緒に自転車にて垂水へ避難をさす。〈若いということは素晴らしいもの。ようあの混乱の中を来たものだ。そして今元気よく3人で自転車に乗って帰って行く。途中無事であるように祈る。〉

(夜になって) 住吉川右岸渦森台から六甲山にかけて電気が灯るのを発見する。〈ホットする。こちらも間もなく電気がくるだろうと安心する。しかし区役所、消防署、住吉川病院は依然として停電。早くこちらに送電してやればよいのに…〉自衛隊の発電車が来る。肉親の安否を訪ねる来訪者が続く。

〈なんとなく「こじきを3日やればやめられぬ」が分かるような気持ちになってくる。黙って座っておっても救援物資があって食べ物の心配もいらなくなり、ゆとりがでてきたからか？〉

1/20(午後になって) 息子が大きな救援物資をもっててくれる。熱いお茶、インスタントラーメン、寿司など。周りの方々、一人でボツンと座っておられる高齢の方などへお分けする。手を合わせてお札を言われる。初めての経験にびっくりする。〈お互い様、困った時には助けあわねば…〉

(神戸より脱出) 息子の勧めにより脱出を決意する。貴重品・肌着など少量必需品を持って、倒壊した自転車置場より自転車を持ち出し2号線を東へと歩く。初めて見る景色の変わり様に言葉を忘れ、足元に気をつけながら歩く。途中夙川のキリスト教会の奉仕のお茶を頂きホッとする。阪急の線路が無残な姿に、駅舎も壊れている。3時間半をかけて西宮北口に辿り着く。同じ思いの人達が続く。電車に座れホッとする。〈大阪より多くの通勤客が乗ってくる。こちらの姿を見て同情の目と全く知らん顔。地震などどこのことといった顔が混在する。〉

南茨木駅にて孫たちと逢い、一緒に遅い夕食を摂る。電気、水道、ガスあり夢のよう。味噌汁のうまかったこと、お代わりをする。

〈ああ生きていて良かった！おかげで孫たちと一緒に暮らせる。〉

久しぶりにTVを見る。地震の全貌と惨状が目にに入る。夢の様、自分の事とは信じられぬ。布団の上で横になる。神経が高ぶりなかなか寝つかれぬ。

1/21 方々から、思いがけぬ人から電話を次々と戴く。見舞いと激励に思わず涙さえ浮かぶ。みんなさんざん探し回って電話をして戴いた由有難し。

一日中TVは地震関係のニュースを伝える。時に評論家・地震専門家と称する男がしたり顔で解説をする。〈ええ加減なことを言うな！震度7を体験してからいえ！初めに分かっておるんならもっと体をはって世間にいえ。今になって活断層がどうのと偉そうに言うな！〉だんだんと腹が立ってくる。

1/26 阪神電車が青木まで開通する。家内・息子と3人で東灘まで衣服などを取りに帰る。室内の家具は倒壊、なにから手をつけたらよいか、大事にしていた家財も全部壊れている。〈これだけ物が倒れた中で3人が怪我もなく無事に逃げられたもの、神仏の加護を痛感する。随分多くの物を持ち過ぎた。これからはシンプル イズ ベスト。戦争中のことを思えばなんでもない、思いきりよく整理しよう。〉

大混雑の中、区役所にて「罹災証明」を貰う。マンション住民の緊急集合あり。てんでに勝手な事を言うのみ。順番制の理事長の為非常時のリーダーシップに疑問あり、話し合いは長引く模様、覚悟を要す。

1/28 午後1時よりマンション住民大会が開かれる。出席のため大混雑と埃の中を東灘へ帰る。管理会社の簡単な説明。建設会社の責任逃れとも思える建物診断報告など、なかなか話合いはまとまらず。

偶然に垂水より娘夫婦、疎開した娘が車にてくる。片付けと助かった家財の持ち出しがはかかる。〈早く家を見つけねば〉

1/29 娘より北舞子に家がみつかる、どうするかとの電話あり。このさい難しいことは言えぬ。(入居は一か月先、家賃・敷金など) 仮契約をする。

〈1か月先とはいえ、『ねぐら』が決まって一安心…〉

2/7 東灘へ、火災保険社員と落ち合い家屋の損壊査定に立ち合う、「全損」となる。市の罹災認定も「全壊」、立入禁止となる。

〈僅かでも地震災害保険に入っていてよかった。多少共心丈夫になる。〉

2/9 JRにて住吉まで初めて行く。住吉さん、阿弥陀寺山門倒壊、変わりようにびっくり。引っ越しに備え片付ける。エレベーターは動かず、引っ越し業者はみあたらず、どうするか思案する。

帰途くよくよしてもはじまらぬ、思い切って梅田大丸14Fにて夕食をする。久しぶりに満腹感を味わう。〈ここにくれば地震なんかどこ吹く風、一方には避難所暮らしをしているというのに…。おまけに大阪の知事までが神戸をなめた発言をするし（後で訂正をしたが）今度大阪がやられた時はほっといてやる！（もちろん大阪の人達が神戸を助けてくれているのも承知しているが）と思いたくなる。〉

目の前をエコ若いもんがデレデレしながら通る〈おまえら神戸へボランティアにいってこい！根性叩き直してこい、同じ若いもんでも一生懸命頑張ってくれているというのに…〉

2/20 予約していた「罹災証明書」（全壊）の交付と義援金の支給書をやっと貰える。

3/6 いよいよ東灘より北舞子に転宅。幸い娘の勤務先の紹介で引っ越し業者もみつかり、エレベーターも動くようになり、スムーズに引っ越しができる。息子や娘一家も手伝いに来てくれる。

今までより4割位狭くなった。多くの家財を思いきりよく捨ててきたが、それでも手狭、なんとか工夫して暮らしていくかねばと思う。

〈兄弟、親戚、友人、知人から、被災以来物心両面にわたり多くのご援助を戴いた感謝の他なし。果たして自分が反対の立場だったらここまでしただろうかと反省する。これでやっと落ち着き元の生活に早く戻れる。〉

3/21 マンション再建総会が大阪にて開催住民の殆どが出席する。話合いは進まず再建委員を選んだのみ。補修・補強・再建のそれぞれの見通し予算についての説明がなされたが、いづれも不確定要素を含んだ話にて現実性に乏しい。それに一番問題になるのが容積率・日影規制・公開空地などの法規制である。越えねばならぬハードルは高い。

〈いづれにせよ早く決めて欲しい。幸い家のローンは済んでいるが、毎月の家賃は老後の生活設計外、年金生活者にはこたえる話。行政もこの時とばかりに理想の（と思っている）計画を押しつけずに考えて欲しい。老いの身、いつまで持ちこたえられるやら？金を貸してくれるのやら…〉

3/23 ここ数日体調が変。目やに・充血・鼻づまり、今までになったことのない症状になやまされる。“花粉症”と診断される。

3/27 神戸商大へバレー部の春季合宿援助金を持参し、現役の練習を見る。幸いにして学生に被災者なく、親もともに被害がなかった。（OB会の会長

をしている為）

段々と生活リズムが元に戻りだす。健康に気をつけ再建に向かって頑張らねばと思う。（こちらにおれば地震があった事すら忘れそうになる。東灘に帰れば埃・悪臭・騒音にハッとする現実に呼び戻される。それでも何となく落ち着く。大勢の被災仲間がいるからか？運・不運を嘆くより前途を見つめより逞しく生きねば！なにしろ自分は戦時に「原爆」にもきわどいところを助かっている男、自分を信じて努力して行こう。）

男性・66才・御影山手

1/17 ○活断層の支筋に位置していたため、家屋中央部分から前面、道路を隔て南下の家筋を含め、巾20m、東西80~100mが陥没、家屋1階部分が前面に傾斜、横搖れによる現象も生じ、倒れる可能性あるものは全て倒れ、壊滅的打撃を受けた。2階は頑丈に設計していたことにより、屋根を含め無事であったが、倒れるものは全て倒れ、電化製品を含め被害は甚大であった。

○周辺の状況…倒壊家屋2軒

…倒壊しなかったが住居不能4軒

…倒壊しなかったが住居可能乍ら全壊
同様2軒

…補修を要する家屋、上記以外…全戸

○特色…活断層から20~30m離れた場合は無傷

○本日、只今から如何にすべきやを考えた。

1. 茫然自失の中、

- (1)ライフ資産の全てを滅失したこと、
- (2)ライフラインが全て機能しなくなってしまったこと、
- (3)行政機関は全く頼りにならないこと、
- …等々を実感した。

2. 無性に不安感が起った。

- (1)倒壊は免れたものの、打続く余震のため何時倒壊するか分からない。
 - (2)倒壊家屋の人命救助は相互間で。
 - (3)情報が入らない（停電と有線アンテナ切断でテレビ不能）携帯ラジオがあったが、全貌が分からぬ。
 - (4)ガス管破裂によるガス臭あり、水もなく火災でも発生すれば…。
 - (5)玄関始め脱出口全て不能の状況で、居間のガラス戸をこじあけて、出入り出来るのみであった。
3. 取敢えず貴重品を鞄に詰め、ガレージで籠城を

決意した。

○緊急避難…日没直前、西宮の会社々宅に居る息子が見舞に来て呉れたが、被害の状況を見て危険と感じ息子宅へ、緊急避難のこととした。(当日の深夜に至り、大震災の全貌を知り得た。)

1/22 ○現住居ハイツを賃貸契約…息子の知人の斡旋による。

※住居は確保したたが、被災地から荷物が持出せぬため(衣類程度)、生活用品一切調達を要し、かつ、ガス不通のため暖房器を始め、全て電化製品であること、ふとんに至るまで買整えに狂奔した。

1/27 ○ハイツに入居

※電話移転。1/23~N.T.T.と交渉していたが、開通には更に2週間を要した。

2月中 被災地から転居したため

※神戸市災害対策本部よりの情報は…新聞とテレビより入手。

◎倒壊家屋撤去申請について

- 2/1…市による撤去申入れ並びに出入危險査定申入れ(口答)実施されず
- 2/12…書面で申入(同意書を提出方)→2/15持込み(6~12か月以上になる)

3月中 •市に委すと何時になるか分らぬ…業者が見付かった…周囲の方も同意

• 3/8…於神戸市役所…3者折衝…3/16迄に完了した。

◎罹災証明書並びに第1回配分義援金受取

- 2/7…受付票のみ徵求
- 2/15…全壊…義援金10万円受取(市の判定半壊…調査は杜撰と思う。)

◎確定申告

- 2/21…転居したので申告用紙徵求
災害減免法 or 雜損控除の適用ありと
- 3/22…申告…雑損控除による証明書不足…3/28…受理

※2~3月中に上記手続を済ませたが、

◎交通不便の中、東灘区役所へ出頭せねば埒があかず、都度、公報を貰うことにしたが、予定と確定に乖離あるものもあり(行政の混乱)諸証明の徵求を含め、2か月間で12回往復したことになる。

4/1~現在 ○家屋の再建計画開始

※3月中に撤去したので望郷の念にもかられ再建のこと、し、目下一社に絞り見積要請中、使用可能な電化製品、器具、ベッド等々全て放棄(搬出不能)したので、余生の備蓄金の充当を余儀なくさ

れる。

・資金計画 27,000千円…従前、規模には到底及ばない。

借入計画 神戸市の災害援護資金 3,500千円(A)

借入計画 兵庫県民住宅復興ローン貸付 8,000千円(B)

(A)申込済 (B)詳細検討中のこと

その他

◎未曾有の大震災に際しての行政面に対する私見

1. 行政機関の活動体制、役割分担、応急、復旧活動状況

- 防災対策で地震については予測していなかったのではないか?
- 役所自体並びに職員にも罹災者多く、初動、応急活動は感心出来なかった。せめて復旧活動は整々とやって欲しい。

2. 兵庫県の震災復興計画基本構想を策定(県民だより5月号)「震災復興基金」が発足

- 運用財産5,800億円、10年間の運用益2,700億円で事業展開し、住宅、産業、生活、教育対策に充當
- 何れも緊急事乍ら震災規模から過少ではなかろうか?
- 住宅対策については利子補給が主体であるが、現状の公定歩合並びに経済情勢から見て、可成り思い切った低利貸付の斡旋等の方違を考えてよいのではないか?

3. 震災義援金について

- 第2次配分について、持家再建助成は中止になった。対象世帯が、266千世帯が→最終的に477千世帯になると云う。
- 行政の判断と査定の甘さに基因する。
- 金額的には何ら問題にする程のものでないが、拠出者の善意に報いる様配慮すべきと考える。

女性・43才・住吉台

1/17 ゴーッといううなりとともに、メリメリといいう音、グラグラと横ゆれ、一瞬の間、と今度は下からつきあげる。立ち上がる事も動く事もできなかつた。その時聖書の最後の日がとうとうきたかと心をよぎる。聖書に何て書いてあったか、そのいましめを思い出そうとしていた。あ、死ぬのかなと頭をかすめる。ラジオをつけると、神戸に大きな地震があったと叫んでいた。あ、日本全土がつぶされた

んじゃなかったんだ…。

ベランダから下を見る（マンションは住吉台の一番高台にある）。うす暗い中で次々に火の手があがる。山のむこうからは黒い煙がモクモク。マンションが無事だという安堵と共に山手だけが残ったのかという孤立感と恐怖。ウラ山はくずれ、大きな石がゴロゴロ落ちていた。そして、ただ静寂……。隣のベランダから「すごかったですネエ。大丈夫ですか。」という声。又、その隣からも。あー、みんな生きていた…。

4日後に西宮北口まで4時間歩いて、名古屋へ避難。子供達（男2名）にまともなものを食べさせなきゃ…。

梅田のデパートのトイレに入った時には、ほとばしる水を見て、思わず涙が出てしまった。大阪は普通の暮らし（？）だった。そのあまりの落差にとまどい？悲しみ？くやしさ、情なさ…。

5/ あれから100日以上たちました。子供達も元気に元の生活に戻りました。何にもなかったようですが、次男の方は（9さい）相変わらず、私の部屋で寝ています。こんなに小さいうちにあんな恐ろしい思いをして本当に可愛いそุดと心が痛みます。

あの17日の夕方には電気が通じました。ベランダから見る百万\$の夜景はものみごとなく、暗い帯がつづくのみでした。

今思う事は、人間の計画なんていうものは本当にもらひものだと思いました。主の祈りの中にある『われらの一日の糧を今日も与えたまえ、』と祈るたびに、今までの祈りの本当の意味がわかつてなかつたと思いました。あの日、水を、食べる物をと祈った気持を大切に育てていきたいと思います。

といいながら、毎年、結婚記念日に2脚ずつそろえていったコーヒーカップもこなごなになりましたが、今は『絶対とりもどすぞ！』という気持です。

女性・53才・岡本

1/17 枕元のラジオで5時半のニュースを聞いて、もうそろそろ起きようかなあと思いつながら、ふとんの中でいると突然激しい揺れ、「何!! 何!!」とあ、地震、立とうとしたが隣にいた主人が座れ、落着けという声で座る。ものすごい音。（特に階下）私達は全員二階にいたので、部屋の中に本棚、タンス、鏡台と飛びかう様に倒れ、部屋のまん中で主人と二人カスリ傷もなく、ぼう然としていた。気がつくと

大学生の息子に声をかけ、大丈夫とわかるとすぐ服を着て、くつ下をはき、かならずスリッパをはいて階下に懐中電燈を取りに行く。ガスの臭いがしていたので元栓をしめる。一階の台所はもう壊れた食器、冷蔵庫も倒れ、リビングルームもテレビはひっくりかえり、食器棚も倒れ、ガラスも飛びちって手をつけられない。台所の壁がぬけて落ち、しかたないのでブーツをはいて足をけがしない様にした。階下にいく階段もグラグラ、そろそろ歩く。

お隣の一人暮らしの大家さん（自分の家に庭つづきの借家）に無事かと声をかけるが返事がない。いつも早朝登山で5時30分には家を出て山に行かれるので、山だったら安心と思う。福井の主人の母も一人暮らしで心配で電話を入れる、無事。須磨の実家にも電話を入れる、無事。結婚した娘にも大阪にかける、無事。良かった!! 後から考えると一番ひどい自分の所が一番でんわを入れている。少しづつ明かるくなって来たら、まわりが大変。二階建の隣の家がつぶれてぺちゃんこ。空室だったので安心。しかし、向いの家、道路一つむこうの家は家族の人人が名前を呼んでいる。手伝ってあげたいが、どこから手をつけたら良いか、ボー然としていた。今から思えば、もっと打つ手はなかったのか、悔まれる。しかし、息子はロープを持って近くの中学生を助けに行き、2時間後、無事助ける。良かった。

余震のことが心配で夜、甲南大学へ行こうと思ったが、主人はこれ以上大きい地震はないから家にいるという。一階のリビングにホームコタツをおいて、石油ストーブにヤカンをかけて、頭にヘルメット、背中に貴重品を入れたリュックを背おって、リビングの戸は開けていざとなったらすぐ外に出られる様がんばった。お風呂の残り湯をトイレに使い、飲み水は友人からヤカン一杯いたゞく。そのうち、息子の友人が京都から水や食物を持って来てくれる。とてもありがたかった。

冷蔵庫におもちがあったのが助かった。

1/18 電気は比較的早くついたので、ぱっとついた明かりは本当に不安をやわらげた。

主人の会社が灘区にあるので、自転車で安全か否か確かめに行く。やはりビルがつぶれていた。会社も家もダメ。何ということ。

1/19 大阪の娘が心配して、早くこちらに来て、ゆっくりとお風呂に入って休んでという。主人は、後片づけや壊れた家の整理に行けないという。息子も部屋を片づけたり、友人と無事を確かめあったり

していた。

1/20 あまり心配する娘のことがあって、阪急西宮北口まで岡本から歩いて行く。途中、国道ぞいの家々はあまりにも悲さん。死者2,000名余りといっていたが、私は5,000名はあるだろうと思った。時間の感覚ナシ。やっと大阪に着いたら、別世界。品物も何でもある。きれいな服、笑い声、(大きいリュックサック、フードつきコート、ズボン、ブーツ、無表情な声!!顔!!)。大好きな神戸がこんなになるなんて!!

女性・48才・住吉山手

1/17 あまりにも長い揺れを感じながら、家の中の倒れ得るもの全てが倒れ、壊れ得る全てのものがこわれていく音をイヤにはっきり聞こえる。がしかし、ベッドに寝ていたため何も上から落ちてくるものではなく、恐怖心より奇妙な腹立しさを感じる。揺れが止むと同時に立ち上がったが、足の踏み場がなく、まず私はベランダの戸を開けに行くと同時にマッチをさがして、テーブルの上に残っていたキャンドル(プレゼントの花とのセット)に火をつけ、主人はトイレの水の音が聞こえたため、それを止めるべく工具をさがすが、足がいろんなものにつっこむし、以前の場所に物がないため、非常に時間がかかる。その一方洋服を着こむ。

そのうちマンションの下の方でガスの臭いが強いため、外に出るよう呼びかけがあり、慌てて外に出る。我家は4階建の4階にあり、揺れはひどかったが、被害の方はよくわからなかった。しかし、1、2階は破損がはげしく、壁のコンクリートが所々破れて内のものが見える家があり、始めて恐怖心がわく。

しばらく外にいるうち夜が明けるが、家に入れないのであたりを歩くと、比較的この地域は家の倒壊等は少ないけれど、地面の陥没、地割れ等がひどいようだ。その段階でも我々はそんなに深刻に考えられず、その午後、家の中に入り、割れたものをかたづけ、夕方近くには電気がきたため、その夜も家で寝むるが、ほとんどの家族は学校等に避難し、マンションに泊まったのは2、3家族だろうと思う。

1/22 その後、不自由ながら、一応の食生活と睡眠、そして暖房もある生活を保ち、余震が多発する不安があるものの夜になると一時にかかるあちこちからの見舞電話に心をなごませていたが、朝からの雨で

一丁目上が崖くずれの危険から避難勧告が出て非常に不安な思いをしていたら、ついにこの建物も避難勧告が出る。建物に黄色の紙がはられ、もうこのマンションにも住む事が出来なくなってしまうのか、何とも言えない気持で4時間以上かけて、千里に避難する。

1/25 千里からJRで芦屋まで行き、リュックをつけて森北町のバス停へ。そこからバスでマンションまで行き、昼間何時間か、かたづけをしてまた千里へ帰るという生活が始まる。それでもJRが芦屋まで開通し、バスも本数が少ないのでマンションのすぐそばまで行ってくれるので、ずい分恵まれている方だと思う。

千里に居る時は、以前と全く同じ生活だが、神戸にむかい近くなるにしたがって緊張感が増し、気が知らず知らずのうちに重くなってくるが、それでも特に用事のないマンションではあるけれども帰って様子を見ずにはいられないでただ通う。

2/4 主人は、会社が神戸岩屋から西神に移転したため、千里から三田経由で3~4時間かけて西神まで通い、一週間のうち1回は東京への生活となるが、週末は家の中はまだ雑然としたままのマンションに泊まる。時々、余震はあるし、水道、ガスはまだだが、それでも自分の家の方が少しあは落着くよう思う。

2/5 知り合いのお母さんが震災で亡くなられたと聞き、阪神御影駅近くの家跡に行く。お父さんがつぶれた家で一人残ったものを堀り起こしていらして、声のかけようもない。やり場のない怒りと悲しみを感じる。

マンションの今後についての集会があるが、全くはかどらず。

2/17 震災から1ヶ月、避難にもつかれるし、マンションの方も住めなくないと言う事でもどつくる。

まだ水、ガスがこず、余震も思いだした様にあるが、気分的には落ち着く。

2/19 水がくる。マンションの人々も少しずつ帰ってきて、徐々に生活らしくなる。

2/20 主人が東京へ長期出張というかたちで行き、週末にはもどるというパターンとなる。

私はマンションの今後の事もあり、毎日かたづけに明け暮れる。

3/27 マンションの用事とか、震災後の手続き、家の中のこわれたものの修理等をしてすごすうち

に、少しづつではあるが家中の中は以前の生活にもどるが、一歩外に出るとまだまだ震災の爪跡はひどく心痛める事ばかり。知らないうちに心の平安をかいだいて、今までの神経ではない行動なり、言動なりをしている様に思う。

5/8 震災から100日余り、マンションの修理はまだ出来ていないが、ほぼ生活のリズムは出来、不自由もなくなりつつあるが、まだまだ心の奥底の不安みたいなものが残っているように思う。

最後に今はほとんど自分達の事ばかりで、ボランティア出来なかった事が心残りです。

男性・73才・本山中町

課題の「震災後の復興体験」となりますと、社会的復興など大変なことをとしよりには出来ませんので、たゞの震災体験にさせていただきたいと思います。先ず第一に震災前のことについて、現在、予知を感知することは未だ明白でないそうです。昔、こうへいさんと云う人がこうへい虹を考え、それを見て地震を予知したと云われています。大学の先生方には通報していたが、一般にはなかった。しかし、大体の場所、時刻が通報されてそのような地震があったそうです。私は予感者ではないですが、それに対処する準備は少ししておりました。例えば、タンス、本棚（大きいものだけ）は転倒防止をし、非常用カバン（なかに必要なもの）も用意しました。しかし、今回の地震ではすべて役に立ちませんでした。なぜかと云うと、今回の地震があまりにも大きくひどかったからです。災害（地震）は忘れずにやってくると云い、改めたいです。

1/17 第2の震災当時について、その当日は午前3時30分頃に起床しました。私の習慣で殆ど毎日、4時迄には起きます。私は低血圧ですので、早朝起床はつらいです。起床後は神仏へのお参り、かいわいを散歩。体操して朝食をします。ストーブにあたり新聞を見ます。そして、午前5時46分、突然地震がおきました。上下振動が強く、そして横に振動して、ひどくびっくりしました。割合に落着いておりまして、ストーブの火が消えていくのを見て大丈夫と思い、すぐ2階の家族たちを起こしました。家族の返事がくるのを確かめて、はじめて助かったと思いました。しかし、たしかにひどい地震だったと思ったのですが、家は倒れていません。懐中電灯をよ

うやく見つけ、室内を見ましたが、ものが倒れ、くずれ、割っていました。大変なことだと知りました。午前6時を少しまわった頃、玄関から外へ出てびっくりしました。向いの家が、1階がつぶれて2階がその上にのっています。向い三軒両隣すべて全半壊傾斜しています。改めて地震の大きさ、ひどさにくづくおどろきました。後日、聞きましたが、東灘区本山中町は最大の災害地でした。だんだん明るくなつて附近周辺はすごい被害です。2階からいつも見えない国道2号線、向いの方のビルが見えています。あちこちからざわめきの声が聞こえてきました。

昼間は近所の方々とお会いし、助った喜びを互いに確め、被害状況を話し合いました。当夜は近くの駐車場にねることにしました。冷蔵庫から食べるものを取出し、近所の人と分け合って食事しました。夜はふとんを出してきてそこへ野宿しました。幸い雨は降りませんでしたが、冷えてあまりねられませんでした。ふとんより顔を出すと夜空の星と満月が出ていました。それから約10日して、おばさんに会いましたが、そのおばさんの云われるのは、あの日は満月でしたね、それで地震がおきた。次の2月15日も満月で地震がくるかも知れない。私はあの日は仏滅でしたよ、2月15日も仏滅ですと云うと、それは大変とあわてていました。太陽と月との引力にかかるかも知れないと考えているかも知れません。その後、避難所である小学校へ寝泊りするようになりました。

そこで、いろいろな方と種々雑多な情報を得ました。すこしのことでも助け合い、なぐさめ合って力づけました。ボランティアの方々もよくやっていたきました。何か手助けしようと思っても体があまりききません。時々帰り整理していました。床の間に布袋さんがにこやかに笑っている座像を見つけ、気を落とさず、おこらず、にこやかにと云う気持ちがつたわり、それ以来おこらずにくらすことになりました、今も続いています。又、庭に紫のすみれの花が咲きました。心がなごやかになり、時々、あの宝塚のすみれの花のうたを口づさみました。すみめ、からす、ひよなどの鳥たちも来ました。ただ、つばめとこうもりはまだ見ていません。2月下旬には、電灯がつくようになり、ようやく自宅でくらすようになりましたが、水道は未だでしたので毎日早朝から水汲みに走りました。それがこたえて体の具合がよくありませんが、老身にむちうちがん

ぱりました。今完了している柱の補強もして、建物の全面の検査もしました。

ふりかえってみますと、地震のおかげで多くのものをこわし、失ったことは残念でした。また亡くなつた人々のことを思うと、毎朝午前5時46分頃に御めいふくを祈り、お経をあげている次第です。又、別に知らなかつた人々とお会いし、お話をし、心のきずなをむすび、再び生きる喜びを感じ、互いに助け合う気持ちがするようになりました。

私が助かったのも早朝から起きていたことにもあります。家族たちも家具のそばにねなかつこともあります。だが家が倒れなかつたことも最大の幸だったとも考えております。たゞ、無きずではなく、壁も落下しています。通し柱、管柱（くだ）も動いています。だが、基礎は鉄筋コンクリートで土台と固定し割れていません。屋根は瓦棒（鉄板塗装仕上）ですので軽く少しも傾むくことなく、雨もりもしません。要は基礎がしっかりしていたと思います。

私は今回の震災で命は助かりましたが、やはり疲労が多く、精神的なことがあるかも知れません。目はつかれ、耳はとおくなりましたのは確かです。私の娘は当大学に4年間お世話になり、何か御礼にと思いますが、この状態では5月21日には出席出来ないので、前記のような体験を申上げるだけでお許しの程お願い申し上げます。大学の御要望には少しそれますがお願いします。

宜しく

乱文、乱筆はお許し下さい。

男性・67才・北青木

1/17 夢の中で体は揺れを感じていたが、頭はまだ眠ったまゝである。何秒か経っていた。突然、娘の大声に目を覚まし現実を直感した。「大丈夫!？」引き戸が開かれ、闇の中に懐中電灯の光が射しこんで來た。私の寝室は巨人の手でひとかきされたのか、本棚はベットに激突し、収っていた文庫本は大半私の体の上に散乱、人形ケースのガラスは粉々に碎けて床を埋め、テレビは予想外の方向に吹きとばされていた。私は注意深く体をフトンから抜出し、光りで安全な床面を確認して、階段の踊り場に立っていた。スリッパを足の先で探し当て、片手を婿と娘に支えられて傾いた階段を片足づつ降りて行った。玄関で愛用のスニーカーを素足で履いて玄関を出た。道路までの約10mは落下した隣家の瓦の小山を乗り越えた。静かな早朝の空気を破って人々のざわめき、

悲鳴、青木市場と火災に走る人…あの大空襲を思い出した。

寒い、真冬の早朝、薄手のパジャマ1枚では寒い。婿が1枚カーディガンを渡してくれた。電柱が倒れていて危い。高層住宅の途中階から火災発生し、熱い空気を全身で感じて足早に北へ向い、長女の住むマンションへ到着した。皆元気で、やっと顔触れ（7人）は揃った。余震、火災の危険はどうか？ 避難所であるF小学校へ移動した。校舎内はもう何千人かの人で一杯。吾々はフトンや毛布で体を守り、校庭で夜明けを迎えた。サイレン、人々の叫び声、『助けて下さい、下敷きになっています。』悲劇のドラマは現実のものとなり、多分この時、何万人かの人が倒壊した家屋の下に埋もれていたのである。

1/18 自転車で43号線の阪神高速高架の倒壊現場を見る。夕方、毎日通っている保久良山に登った。石造の鳥居は折れて1本足となり、休憩所であった絵馬堂はペチャンコに崩れ落ちていた。何人かの犠牲者があつたらしい。誰もあがって来ない。「灘の一つ火」で有名な灯籠は無惨にもバラバラに落ち、5m下の遊歩道にころがっていた。

1/18～1/29 国道はあらゆる車が走り廻り、特に原付バイク、自転車が目立つ。路面は落ちこみ、或は盛り上り、亀裂が走り、最悪の状態であった。この間、長女のマンション、実兄の芦屋住宅、親戚の甲子園住宅、北鈴蘭台の実弟住宅、F小学校（避難所）の教室を転々とした。

1/29～4/30 自宅に同居していた次女夫妻は、職場に近い伊丹市に引越しした。地震から10日余、伊丹で安住のひとときには恵まれ、毎日昼間は荒廃した家に通い片付け、将来の方針、専門家の住居診断、事務手続を行い、六甲仮設住宅も与えられた。

5/1 家屋の査定は全壊であり、補修は巨費を要すると分かった。今は仮設への移転、家財の整理に忙しい。持ち込めない家財は知人、親戚又はそのルートを通じて差し上げる事とし、楽器はすべて完了、又は決定。家具の大半も行先を決めた。あとは六甲アイランドへ移り、家を解体する事となる。今からの人生は1人用の小住宅を建て（財産の大半を投じて）生活する事となる。幸に二人の娘が近郊に住み、孫も2人見守ってくれる。愛する肉親が居るだけで安心感がある。山に登れば何人かの親しい男女と喋り、アイツツする。あと多分10年余の人生を大過なく過ごしたい。好きな音楽、オペラを毎日聴ける日が待ち遠しい。

- こんなデーターは蒐められているか。
- 貴方は何人かの人を救助しましたか？ ○人で○人を助け、うち死者〇人
 - 貴方は埋もれ又は下敷になりましたか？
 - 貴方は埋もれ又は下敷きになった時、誰が助けてくれた？
 - 貴方は埋もれ又は下敷きになった時、およそ何時間かかった？
 - 貴方は埋もれ又は下敷きになった時の負傷の程度は？
 - 貴方は埋もれ又は下敷きになった時的心境
個人的推定では死者5,500余人の約4～5倍の人が、下敷き又は閉じこめられたと思える。これは友人、電車の会話、マスコミなどから割出した私見で約3万人に近いと思へる。記憶の消えぬうちに、アトランダムでもよい。(出来れば全市民) 調査し、数字を分析。災害時の救急対策に備えるべきである。こんな集計は多数の学生を持つ貴学の如き、大学が最も適任である。

又、貴方の一世帯で失った経済的損失はイクラかとの聞き取り調査も必要である。平行して資料を集めて頂きたい。私の場合、家築30年余なので償却して1,000万、家財1,000万、雑費300万、計2,300万で火災保険の額に近い。(計算出来ない絵画や音楽資料は別)

残念であった事……地震発生の日と翌日の2日間は救助を求める声をよく耳にした。その度に体は動いた。だけど薄い生地のパジャマだけの姿では…と思いつ止まつたし、娘に「若い人に任せとき…」と制止され、娘2人はすぐ駆け出した。1～2時間して帰って来た時の顔色は蒼白で聞かずとも結果は分かった(曰く死である)。こんな事が何回もあり、何も出来ない無力さに自責した。情けなかった。出動出来なかった無念さ、この悔、私の一生を通じて思い得ぬ事実である。あの時、もう少し若く、それなりの服を着用していたら迷う事なくとび出して人命救助に最大の努力をした、と確信している。

今考えてもあの時の助けを呼ぶ女性の声は忘れられない。生命は本当に貴重であり、万難を排して救わなければならない。自衛隊応援の要請をする自治体決断が半日早ければ1割の人、500人位は助かったかも知れない。

行政に対して望む事……自治体の職員は自宅の損傷が多いのによく努力した。が、トップはもう一つ、ある知事は悠然と迎えの車を待ち、やっと出勤した。

ある市長は100人位の死者が出るやろう…と述べた由、知事さんよ、歩いて行くんや。そうすれば何人かの人が自宅に下敷になって生死の境にある事が解る。私は、『大変な事だ。多分、これでは何千人、いや1万人位の死者が出そう。…と予測した。これは歩いて見たからである。そんな事を予見出来ない行政の長は情けない限りである。情報はどうして伝えない？公報車は何故に眠っていたのか、停電でT Vは見られない。ラジオは持ち出せなかった。情報は全く公的機関より伝わらなかった。

復旧には、国家予算の5%位カットして(向う2年間) 対策費に充当すれば早急に立直れる。持ち家再建の場合は3～4割補助するとか、鉄道は7～8割、事業者は税の減免を2～8年行う。その原資として10～15兆あれば立直り復旧可能なりと思う。

とも角、政府の対応は、精神的のみで、具体性に欠き頼りなく誠意が認められない。角栄氏健在なれば、と考えた。

女性・52才・本山南町

1/17 お隣りの老犬が変な声を出しているので、いよいよだめなのではと思いながらうとうとしていたら、信じられない揺れで飛びおきた。闇の中、警報(自動販売機だった)が鳴り、「お母さん」「…」近所の人の声が聞こえた。私は娘の名を呼んだ。娘は二階からトントンと軽い足音で降りてきた。「大丈夫だからね。体さえ有ったら何とかなるから」と云って懐中電燈を持ってまず靴を履いた。大事な物を持って、ガスの元栓も確認し、パジャマの上にオーバーを着て外に出た。毛布をまとった人、息子さんの学生服を着た奥さん達が三三五五集まっていた。裸足の人の為に靴を取りに帰った。

昼頃、長女のフィアンセが来て「二日前に入れたタンスが倒れ穴があいてどうしようかと思ったが、この家を見てもっとショックだった」と云った。大阪の次女と奈良の義姉に無事を知らせ、主人は電話の通じない義姉、義兄、私の母の事が気になり、須磨まで自転車で13時間かけて往復した。主人の気持を思うと止められなかつたが、全員無事で安心した。

1/18 15日に娘の荷出し、16日に京都で義父と義姉の法要、17日に震災と疲れもピークに達し、風邪をひいた風でもないので咳がでて、横隔膜の辺りが痛くなり3日間寝た。

1/21 彼の家を出て家の近くの避難所に行く事に

したが、夜10時頃になったので、自動車の中で寝た。翌日、小学校に行き、すんなり入れたのではほっとした。部屋では既に食事を運ぶ人、トイレ掃除をする人が決まっていたので、私は本部の仕事を手伝った。暇をみては傾いた家からすぐ取り出せる様に品物を玄関に集めていた。ある日、小学1年くらいの男の子がゴミ袋を引きずり、後から食料品が落ちていた。幼稚園くらいの男の子もいて、ズボンのポケットと手に食料品を持っていたので箱を入れかえて、家まで持って行ってあげた。2、3日して校庭でその子達が声をかけてくれた。「みかんをあげる」とも云ってくれた。

2/3 主人の高校時代のお友達の空家（4LDK）に無償で入れて頂ける事になった。この日、偶然にも水道が復旧した。後に再開したお風呂屋も40m先に有った。当初、家は勿論、道具も全部だめかと思った。主人は「仏壇もカーペットも、ピアノも買ったらしい」と云ったが、私は最後まで諦めず、殆どの物は持って来れた。ラッキー。まだスペースが有るので、義兄と義姉の荷物も預った。義姉も本箱、げた箱、三面鏡、仏壇もいらないと云ったが説得し、後日、仮設住宅にきれいに収まっているのを見ると嬉しかった。がしかし、私の独り善がりでないようにとも念じる。

2/4 ホテルで結婚式をするはずだったが、彼の実家で8人だけのお祝となった。私達はまずお風呂に入れて頂き、それから花嫁に花束贈呈、エンゲージリング、ケーキカットをした。何とも云えない気持だった。年末に白無垢、色打掛け、ウエディングドレス、カラードレスの写真を取っていたのがせめてもの慰めとなった。二人はハネムーンを中止する事も考えた様ですが、予定通りに実行された。私は見送ってやれなかったが、彼のお母さんと妹さんに見送って頂き、オーストラリアに旅立った。

3/ 3年前から家を探し、1年7ヶ月前マンションから一戸建に買い換えて、昨年暮にローンを払い終えた。長女も結婚し、主人と二人になった時の事を考え、私は昨年からボランティアを2つ、そして卓球をも始めた矢先に家が全壊してしまった。しかし、あまり実感がなく皆に励ましの言葉をかけていたが、その人達の殆どの人より私の方が被害が大きいのである。主人も定年前でもあるし、先の事を考えると空しさが募り、何もする気がなくなってきた。主人の怒りも爆発。家でじっとしていては駄目だ。兎に角外に出ようとデパートに行ってみた。買いた

いものはあっても、買えないと思うと見る気がしない。コンサートにも行ってみた。「故郷」の歌を聞くと涙が溢れた。焼けた長田の町を見ると泣けてくる。テレビを見て泣いてしまうが、見たいのである。

4/ 京都太奏映画村に行く時、三宮からの町の風景を見てまた涙が出そうだった。電車の中は話しそう一つしなかった。辺りを見回しても皆、平氣のように見えた。「誰も怪我もなく、火災にあわないだけでも良かったと思うようにしよう」と思うと気が楽になる。

娘の勧めもあり、7、8分の所に教室が有るので、勉強する事にした。52才も過ぎて、就職できるか又役に立つかどうか判らないが、ほけかけてる頭に少しでも刺激になればと考え、若い人に混じり勉強しています。果して最後まで続けられるでしょうか？

5/ 震災にあい、人それぞれ色々な言葉で表現してくれた。「運命を感じる」「ホームレスのような生活をするとは思わなかった」「一寸先は闇だ」「神も仏もない」「一遍に貧乏になっちゃった」「道具は多くいらないものだ」「人はすぐ死ねるものだ」「助かって善かったのか悪かったのか」「親爺の力のなさを感じた」等々。

私も色々の事を考えてみたが、先の事は考えずに今を一生懸命生きよう。行き詰った時はその時考え方。『助かって本当に善かった』と云える日が有る事を望み、ようやく余震の時以外は以前の私に戻りかけている今日此の頃です。

女性・73才・岡本

1/17 トイレに起き床に入り、時計を見ると5時30分、未だ早いから一眠り出来るとウツラウツラしていると、大震動。呼吸が止まると思った。途端、又大揺れ。真暗で簾筈の上の物は落ちた様で、危い!!と感じ布団を被ったまゝ暫くして、薄明くなって来たので、起き上り「スリッパ、スリッパ」と叫びながら、寝室を出た。外では人のざわめく声がする。台所のドアが開いていて、食器棚の戸扉があき、コップや皿等が所狭しと毀れ、散在し、ジュースや蜂蜜の瓶が破れ、ジュースや蜜や油で足の踏場もない。それを見て、ガックリ気が遠くなった。

すっかり夜が明けて、門を開けて、外を見て、ビックリ。凄いことだ。初めて大地震、恐ろしさと驚きばかり。

1/18 電気が付いて、テレビで被害の状態を知る。

家族皆無事。家屋も瓦が落下、温水器が倒れた程度で、思わず「神様有難う御座います。」と心の中で叫びました。

電気が付いた時は、心が明るく有難味をつくづく感じました。

その後、電話も次第にかかり、兄弟、親戚、暫くつき合いのなかった友達からも、私達が無事で居る事を心から喜び、与えられた言葉は何よりの励ましで、多くの人々の支えで生かされている事を、痛い程感じました。水道も1ヶ月半も出ませんで、寒い日々住吉川の側まで汲みに通い、重労働でしたが、待つ間、運ぶ通路で「お宅は被害はどうでしたか」と知らない人々と声をかけ合う。今までに見られない事。今思い出しても心暖まる良い経験だった。

ガスも2ヶ月以上も出ませんでしたが、出た時はほっとして今までの（地震前）生活の有難味をつくづく感じました。救援隊が全国から来られ、よく働いて居られるのには頭が下がります。

若い学生さんが真に良い働きをされました（不自由な生活を永い間されながら）。

外国からも早々と駆け付け、援助の手を差しのべられた事を知りました。

私は地震災害地で人々の厚い友情を感じ、兎に角避難されている若者達が、見直された事と思います。

復興の為に一生懸命になって近所同志、同業者力を合せ、一日も早く復活の神戸・阪神の蘇りを祈るものです。

此の様な時、私に何が出来るかと考えさせられます。

拙ない文を思うまゝ述べさせて頂きました。

男性・82才・魚崎北町

1/17 5:46 春眠暁を覚えず熟睡中、ドーンと突き上げられ、続いて激しく振り廻された。何事か、地震だ、唯の地震ではないと思った。天井板が落ちてくる。本棚が倒れる。ジタバタしても駄目だと観念。布団をかぶって動かず、いや動けなかった。何分位かして揺れがやや鎮まった。真っ暗で何も見えぬ。タバコのライターをつけ、身の周りを見る。寝ていたベッドが移動して、机と重なって折れ曲っている。外へ出るには出口を開けなければ。垂れ下った木片をちぎりとり、屋根庇と思われるあたりを突く。穴があきそうだ。隣家が○○さんと呼んでいる。オーイ、大丈夫だ。すぐ出て行くぞと応じ、庇

の内側を突き続ける。10回位突いたら、抜けだせる程の穴があいた。寒い。パジャマに丹前を重ね着して外に出た。

崩れた屋根に立ち、しばし茫然、我を忘れた。ペチャンコの屋根だけである。

裸足だった。誰かが靴下をくれた。スリッパを貰った。有難く着用。近隣の人々と無事を確かめ合う。Aさんのご主人は圧死されたと聞く。Bさんの老人は助け出され、道路上に毛布と布団にくるまれ寝かされている。Bさんの婆さんは皆さん協力して救出の最中だ。両隣とも全壊状態だ。

娘一家の安否が気懸り。公衆電話へ走るが不通。東灘電話局へ走る。既に架ける人の行列ができる。列んでいる人達の話によると、近距離が架からず長距離は架かる。大阪、京都、東京と通話したが、皆無事だったと聞き、この辺、神戸を中心とした局部的な地震だったか、全国的な激震ではなかったようだ。そうであれば良い。兎に角、詳しい情報が欲しい。

11時頃、娘の主人△△君が来てくれ、顔を合わせたとたんに、おとうさんと路に坐り込んでしまった。次に抱き合って無事を喜ぶ。家族全員無事との事に喜びが全身を走るのを覚えた。

完全に崩壊した家屋の中に居て、無事に一命をとり止めた事は運が強かったのか、神仏の加護か、宿命の然からしむ事か。考えて判る事ではない。天の摂理即ち道仏の加護に依るものと考へて神様、仏様に感謝の生活を忘れず大切にしたい。残された生涯はどれ程であろうとも。

(追記)

2階に寝て居た為、助かったと考える。階下に居たら僅かの空間もなく、おそらく駄目だったでしょう。

重量物を身の周りに置いてなかった事も、助かった要因の一つと思われます。

女性・28才・魚崎北町

1/17 家屋の揺れと共に目を覚ました時、何かが落ちてきて「痛い」と思ったら、もう埋まっていた。その時は何がどうなったのか、まっ暗で分からなかったが、下で父母が「おばあちゃん！」と叫んでいるのが聞こえてくる。私は手さぐりで自分の上ののっているものが本棚であるのに気付き、布団の中で体をねじってうつぶせになり、力いっぱい背中で

押し上げようとするがびくともしない。頭上に手をのばすといす、机のあしらしきものが手にさわり、砂がいっぱいあるのが分かると、ただ事ではない事に気付く。揺れがあり、海外で起こった地震、そして生き埋めになった人が浮かんできて、「自分もそんな状況なのだろうか」「自分も死ぬかもしれない。」「上に、もしたくさんのっていたら、息苦しくなってくるかも」とあれこれ思いながら、『死』を意識し、自分のこれまでの生き方について考えてしまう。自分が人に対してもった怒り、不安、そんな感情もあつたけれど、祖父を父母と共に看取り、祖母を介護する生活時間を大切にできることは決して間違いではなかったと思う。そうすると少し気持ちが落ち着くが、やはり再度揺れがあり、時間がたつると、死ぬことへの恐怖が頭をもたげてきて、「怖い！」「死にたくない！」と号泣する。しかし、下の父母と言葉のかけあいができると、又、気持ちが静かになり、自由な右手で板や土壁、かわらを少しずつはずす作業を始める。2時間位で小さな空間ができ、空の明るさが目に入る。「助けて！」を連発し、声が耳に入った近所の人が助けてくれる。その後、近所の人とつかまえた救急隊の人に父母も助け出してもらう。しかし、祖母は耳が遠く、呼んでも応えが返ってこないこと、祖母の寝ていた場所には、大きなはりが重なって倒れていたことで、自衛隊がくるのを待つしかないと告げられる。私は自分が埋まっていた恐怖を、祖母が今、味わっているかもしれないと思うと、胸がかきむしられる様な気持ちになり、父、近所の人2人とで、もてるものだけでものけようとするが、あまりも大きすぎる材木に何も変えることができず、「人間は何て無力なのだろう」と悲しい様な、くやしい様な、情けない様な思いにかられる。

1/18 午前2時頃、自衛隊20人位がきてくれ、祖母を出してくれるが、すでに冷たくなっていた。近くの集会所に遺体を運んでもらい、遺体安置場所で一晩をすごす。同じ様に身内を亡くした人と助け出された状況を語り合うが、今自分たちの身に起こった事に対応するのに気持ちがとても緊張しているせいか、涙も出ない。そして朝、浜の方でLPGガスもれの危険性があるという警察官の告知で、身の周りのもの、食料品をまとめ、近所の人の車に毛布を詰めこんで北へ移動を始める。86才の亡くなった祖母の妹は車に乗せてもらって移動する。しかし、2号線より上の公園に落ち着いたものの、寒さが厳しく

雨がポツポツしだしたこともあるって、学校の体育館に移る。雨がしげる場所に居られることで少しホッとする。今まで顔も覚えていなかった近所の人と、とりとめのない話をし、互いの食料を分けあい、気持ちが安らぐ。

その夜、雨が体育館の屋根にあたる音を聞きながら、たった2日間に起きた出来事が頭に浮かび、前の晩まで笑って言葉を交し、「おやすみ」と寝床に入った祖母が、今この世にいないのだと思うと、涙が止まらない。そして、自分が埋まって死んでもおかしくない状態に置かれていた時、大変な恐怖が襲ってくる前に色々感じた事を思い出した。今までの自分の意識は自分が仕事においても、存在感を感じるのにも『認められる』ことに気持ちが傾いていたけれど、『死』を前にすると人に対して感じた温かさ、心を交しまえたと思える実感が何よりも支えになる様な気がした。

1/26 撤去には時間が相当かかりそうで、しっかりしためども立っていないので、取りだせるものだけでもこの日までにいくらか取り出す。この日は関東から母の姉夫婦、私と年の近いいとこがたずねててくれる。ただ不思議なのは、同じ被災した友人や心配して遠方からたらづねてきてくれた兄弟と同じ様に再会を喜ぶ気持ちが起らなかったことだ。同じ地震を体験し、今恐怖と不安のかけらを残す私たちとどこか距離がある様な気がしたからかもしれない。祖母の妹の大伯母は地震での恐怖、避難所での不満、色々と話していた。後から叔母が「Sちゃん『なんでもっと早く助けてくれへんかったんか。そしたら姉ちゃん（祖母）は死なへんかったかもしれへん。姉ちゃんが死んだのに誰もやさしい言葉をかけてくれへん、って言ってたよ。』と耳うちしてきた。その時の叔母の言葉と表情から、私に何を伝えたいのか分からなかった。唯、私にとってそれは冷たいものに感じ、祖母を助けるまで、避難所にくるまでの経過を話し、祖母の死をゆっくりと感じ、言葉を交しあう暇さえなかったのだと応えた。死と隣りあわせになり、必死でその日を過ごすのに、ウロウロしていた私たちの立場は、テレビでは伝わらないものなのかなと思った。私自身、普賢岳や奥尻での様子を「大変だね。」と御飯を食べながら、テレビで見ていたのだと考えると、私はちっとも分かっていなかったのだ。そして分かってもらえず、あれこれ言葉をかけられる事はこんなに気持ちを冷えさせるものなんだと思った。

2/5 昼、夜と学校で炊きだしがあったり、仮設風呂があったりと、行政や地域のボランティアの人たちから恩恵をうけた。色々な人たちが地震の為に何かを失った私たちに真心を与えてくれている様に思える。同じ地震の怖さを知っている者として、何かを失った者として、共感できることのありがたさを感じる反面、水が出たら家に帰れる人、全壊、半壊で帰る家のない人、子どもを失った人、祖父母・親を失った人、友人を失った人、ずっと1人で生活してきている人、自分の生活を取り戻すのにそれぞれのペース、そして不安な思いのレベルがある様で「ああ、やはり違うんだ」と当たり前の事なのに、何だか1人なのだなと改めて感じてしまう。

3/3 祖母の妹のSおばあちゃんが関東の母の姉夫婦の方へ行くことになった。避難所での食事、生活ペースは、慢性病をもつSおばあちゃんにとってやはりしんどいものらしい。撤去を控えて、全壊の家に毎日通う父母と私は仲々ゆっくり話もできないので、不満もあるらしい。広島からきた医療班の先生から「おしゃべりがとてもしたいですね。」と聞き、関東の親せきにお願いすることにした。Sおばあちゃんを関東の親せきに預けることになるまで、私たち家族もぎりぎりの所までがんばったという感じがする。

祖父、祖母を介護し、看取ってきた母にとっては、自分の生活のめども立っていない状態で、更に1人お世話をするには体力も精神力もなくなっていたらしく、「もう疲れた。休ませてほしい。」と電話で話す母を見て、「もうこれ以上母に何をがんばらせる事があるんだろう。『よくしてくれたね、と心よく引きうけてほしい。』と思った。

3/26 久しぶりにお墓参りに行く。三田の方なので、山に囲まれ、うぐいすの鳴き声、若葉の緑が気持ちいい。被災した少し後、破れた家の庭にある梅の木にもうぐいすがきていたのを思い出す。周りの家並みがこんなに変わっても、季節にあわせて変わらずに訪れる鳥や自然の芽吹きが、何だか悲しかったけれど、今は気持ちがいいと思えることが嬉しい。

4/2 避難所統合の計画があり、今の避難所を出る日が告知される。とりあえずの身の寄せ場所は決まっているが、決まっていないでこれから新しい避難所に移る人たちの不安は大きい様に思う。私は日がたち、周りにいる人たちが身近になるにつれ、避難所の人同士、互いに干渉しあいだした様に感じ始めている。自分がどう思われ様と、気にしなければ

いいとは考えても、やはり主觀であれこれみて、批判している人を見ていると、いやだなと思ってしまう。それにボランティアの人と一緒にになって、同じレベルでうわさしているのを小耳にはさんだりすると、とても嫌な気分になる。もしかしたら、それぞれの思わくが違うのかもしれないし、はっきり聞いたり話したりできる関係であればと思うが、お世話になっているという立場、又、話をややこしくするかもしれないという懸念があって、思い切れない。

お世話になる受け身の立場から自立へという声もあるが、病気の人をかかえたり、年をとって全壊の家を行き来する人、会社を長い時間かけて行く人等、今時間のゆとりも心のゆとりも持ちにくい人にとって、胸をしめつけられる思いだろう。私も、職場でボランティアに参加している人が「被災者は甘えている。もう少し自分の事は自分でしたらいい。」と口にするのを聞き、何だか悲しくなった。被災した人たちは色々な人がいて、ひっくるめて『被災者は甘えている、とかたづけられると辛い。私の立場では、祖母、家を亡くし、様々な手続き、撤去、仕事、大伯母のこと、1つ1つ根気をもって、父母と進めてきた。母が叔母に言った様に「少し休みたい。』という気持ちがあっても自然だと思う。「休みたい」というスペースも確保できず、慣れてくるが故の干渉もあって、やはりしんどくなる。こんな愚痴を言うのも「甘え」で片付けられるかもしれないと思うと、被災し避難所で暮らす私の立場はとても弱く、小さなものに思われる。

5/2 避難所を出て、親せきの官舎に身を寄せてからの生活ペースができる。今頃新しい避難所へと移った人たちはどうしているだろうと、ふと思うことがある。

1日、愛媛の伯父がガンで亡くなった事を電話で聞き、仕事を終えてから田舎へ発つ。昔から伝わる葬儀を手伝いながら、神戸とは違う、時間の流れ、空気の流れを感じる。3日目の49日には亡くなった伯父の身につけていたタオルを、近所の人と2人でひっぱりながら川で洗う。タオルを洗いながら、『こうやって人の魂は流れて、大きな生命の海、宇宙へと辿りつくのかな…』と思う。

5/6 5日の夜、愛媛を発つ。山道を車で登っていくにつれて、私の3日間いた家並み、みかん畠は小さな箱庭の世界の様に見える。この3日間は、神戸で過ごした年月、被災して過ごした3ヶ月とつながっているながらも、別の空気と時間をもっていた様

に感じる。

神戸について、東灘の町へと帰る道のりで、愛媛の風景、時間の流れと東灘の今、そしてこれから自分の生活の流れ、生活の流れ、風景との違いに今までの様にギャップを感じなかったのが不思議だった。何かが私の中で少しづつ変わってきているのかな…。

女性・68才・魚崎北町

1/17 何が起こったのか分からぬ中、本能的に頭から布団を被り、揺れるに任せしかなかつた。唯々揺れが止む事だけを祈つた。固定してある懐中電燈が外れて飛び出し、思いもかけない所で光っていた。それを拾い娘の部屋へと思うが、仮壇もテレビもひっくり返り、廊下は壁土と竹材で埋まって、とても通れる状態ではなかつた。よぢれてちぐはぐになつた戸の透間から、どうにか体を滑らせて外へ出る。素足に庭下駄を突っかけて、夜明け前の薄明かりの中に、二階がぐしゃぐしゃに崩れて落ちてゐるを見る。近くの男の方4人の協力で娘を引っぱり出して頂く。

幸い怪我も無く助かった娘。もうこれだけで十分であった。後は何一つ要らないと思った。そのまま、弟の家へ避難した。

2/～3/ 当初は給水車から救援物資の運搬、又最近は代替バス、ガス工事の車までが北海道から沖縄までのマークをつけてゐる。日本中から車が人が神戸へ集まつて來た感じ。全く皆様のご親切は有難く、感謝し切れない気持だ。然し、又同じ痛みを持つ神戸市民が地震前に比べて、人間としての優しさ、相手への思いやり等深くなつたと思う。人の情をしみじみ感じる事が度々であった。人間も究極に立つ時は、その真心、良心のまゝ行動出来るものだと感じた。

此の度の震災で失つたものは余りにも大きく計り知る事が出来ないが、どうしても逃れられない自然現象であるならば、せめて、その為に得た僅かなよき事を何時までも残してゆきたいと思う。

解体を控えて何か取り出せば…とプロを頼んで崩れた家へ行く。(素人ではとても何一つ取り出せる状態ではないので) 私自身としては家が無くなつては何も必要でなかつた。みんな要らない物に思えた。貴重品の入れてあった手元簞笥を抱え出してくれた。通帖、現金、印鑑だけをビニール袋にあけて、

かさばる書類箱、袋等の入れ物は不要の方へ捨てる。息子の結婚式に関する記録、主人の叙勲の記録、葬儀の記録、和服、冷蔵庫、ピアノ、簞笥などなど、家があつてこそ残したい物だが置き場所も無くなつた今、どうしても掘り出し、運びださねば…という物は無かつた。

今まで整理しよう、身軽くなろうと思いつゝ、中々捨て切れなかつた品々を整理するチャンスだと思つた。此の後、一週間のうちに解体、排棄工事は終わつた。

避難先で炊飯器が壊れた。『うちに余分なのがあるから持つてこようか』と口から出かゝつて、あ、もう家は無いのだと心に云つてきかす。解体、排棄後の丸裸にされた我が家跡を此の目で見たのに、末だに夢の中の出来事の様で、そのまゝ存在する様な錯覚を起こす。

4/末 震災後百日以上が過ぎた今、当初の緊張もうすれ何とか此の不安定な生活から逃れたい気持で一杯だ。小さくてもいい、自分の家で落ち着きたい。残り僅かな人生がドンドン無駄に過ぎてゆく感じがして気が焦る。『無事に助かったのだからもう何も要らない』と感じたあの一瞬の思いは…。『命があつた』という事だけに感謝して力一杯生きよう。と決心したあの気持は…。忘れたわけではないが生きてゆくという事は、何と色々の物が必要な事か。何と煩わしい事が…。何と思い通りにならない事が多い事か…。今はたゞ此の貴重な？体験を心の糧にして少しでも人格の向上につながる事を祈るだけである。

男性・72才・魚崎中町

1/17 破壊的な揺れに、これでは家はもたないかも知れないと思しながら、揺れが収まるまで寝て待つ。身体の廻りで色々な物が倒れたり、飛んでいたりしているのを感じる。

暗闇の中で先ず眼鏡と懐中電灯、衣類を身につけ折重った家具類をかきわけて扉をこじあけて外に出るまで30分程かかる。妻は外泊していたので家には私1人。ガラスで足を切らないよう注意する。自宅は1階が10～20°程傾いていたが、近所では完全に潰れた家が多く、若い人達が勇敢に内に入つて救助に当たつているのを見る。こちらも手助けしたいが素手で何も出来ず。東西南北で火の手が上がるが、幸い類焼せず。a.m. 6:00 六甲アイランド病院に入院中の娘よりTEL、無事を知る。6:20頃 1km程の

所に住んでいる娘むこが様子を見に来てくれて無事を知る。

明るくなるに従って被害の様子が判って来て、家は駄目かも知れないと思うが、この際古いしがらみを一切すてられればという解放感も感じる。

1/18 当夜は娘むこ宅に泊まるが(着のみ着のまゝで)、a.m. 6:00前に管理人に叩き起こされ、2km程離れた処まで退避させられる。p.m. 6:30まで、この間情報は携帯ラジオだけ。食料の配布なし(LPタンク洩れ) 行政の無能に怒りを感じる。

当夜、神戸全家族と三田の娘の家へ避難。ここは殆ど被害なく別天地。

この日から1/22まで娘とむこ2人が家財の運び出しに奮闘してくれる。危険な家に入れることに危惧と後めたさを感じる。この間路上で持参の弁当を喰べる。被害の無かった隣家が私共の家が傾いて危険だといって、自衛隊をつれて来たのには他人のエゴと怒りを感じる。止むを得ず、友人に突かい棒工事を依頼する。

2/8 震災後初めて安野光雅のNHKテレビ講座「絵を画く道具を見る」を見る。

2/10 仕事で大阪に出て震災と無関係の生活を見て、やりきれなさを感じる。

3/27 自宅解体撤去に着手。

4/11~13 三田の農家をスケッチ、絵の具が無いので鉛筆だけ。

男性・67才・魚崎南町

5/15 1月17日早朝の激震により、目覚めたが。ベッドの柵が天井板、梁等を支えてくれて、かすり傷一つなかったのは、今にしてつくづく幸運だったと思います。

我家は全壊、近くの家の母宅へ避難して現在にいたっています。その間、なんということなく、日々を過ごして来ていますが、震災より1ヶ月ほど経った頃、昔の友達—旧制中学時代の同級生—がリュックを背負って、各鉄道が不通の中にわざわざ見舞いに来てくれたのには感激しました。

その時、くしくも二人から出た言葉は、戦争中、勤労動員で神戸の造船所へ行っていた頃、アメリカ空軍のB29の空襲に逢い、鉄道、電車が不通となり、真っ黒な土煙り、ほこりの中を帰宅した時の思い出話でした。

今度の震災で、安全と信じていた神戸でのよう

な大震災がおこるとは想像もしなかったことです。ただ、友人と話しているうち、これから特に大切にして行かねばならないのは、人との関係、人情の有難さとつくづく思いました。

女性・32才・須磨区

1/17 「キャアッ」という自分の叫び声に目が覚めた。叫んだのと同時に飛び起きていた。ミキサーでかき回されているような激しい揺れに、すぐには地震だとは思われなかった。

外から「助けてー、助けてー」と叫ぶ女の人の声がきこえた。「大丈夫か」と男の人の声がした。窓を開けてみたが暗かったので何も見えず、恐くなつてすぐに閉めた。

隣室の妹から声がかかり、階下の両親の安否が気になった。床に物が散乱していて、動けそうにない。

しばらくして、兄が降りてくるようにと私たちを呼びに来た。

夜が明けて、外に出てみると、家屋のあちこちが壊れて、ケガをした人も外に出ていた。空は不気味なくらい暗く、火災による煙とは知らず、天候が悪いのだと思った。

水がすぐに止まって、不便さをつくづく感じた。

何がどうなっているのかわからず、静かに様子をみる以外なかった。

1/19 朝9:00に透析患者の為姫路に入院することになった父を近くの通院先まで送る。重病患者と一緒に救急車に乗って行くのを見送って初めて大変な病気と実感する。心細いというより安心した。

知り合いの人が訪問して、必要なものがあればと乾電池をもらった。直接の知り合いではなく、サークルを通じてここまで来てくれたので、感謝の気持ちがこみ上げてきた。

1/20 午前9:30 電気がついた。

テレビで震災の様子を見て、涙が止まらなかった。

1/23 身内で1人連絡のつかない伯母を訪ねて妹と新長田へ、近くの避難所には名簿にも名前はなかった。

家の近くは火災中の跡やまだ煙っているところもあり、被害もひどく、不安だった。

次の避難所へ行く途中の道でばったり会い、思わず路上で安心から、泣き出してしまった。

とにかく、身内の安否はひととおり確認できて、出向いてみて良かった。

1/24 三宮の職場へ顔を出す。神戸駅から歩く中、ビルが崩れそうになっているので足早に通った。もし余震が来たらと思うと、恐くて、とにかく決死の覚悟で歩いていた。

帰りはバス道が混んで、途中下車して歩く。歩いている人が多く、暗かったが、他の人と一緒に須磨を目指す。

途中で家に電話すると、近くで火事があつたらし

く、不安になって急いで帰った。

この日は職場で働く見通しができたことと、交通の復旧が望めそうにないという希望と困難の入り混じった今の状況を思い知らされた。

まだまだ元のようにはもどれないが、仕事があるということが救いだった。

歩きながら、道は悪く遠いけれど、進んでゆくしかない。そう思って帰途につく。

あとがき

震災後の復興に関して、甲南大学が地域の復興とのかかわりの中で行おうとしている色々なレベルの企画があるが、総合研究所としては震災体験に関する公開討論会と被災者の心理的回復プロセスを調査する研究チームを発足させることで対処した。この討論会は震災後の色々な意味での復興体験を色々な立場にあった人々から出し合い、討議の中で色々な立場での考え方や行動を理解し合うことによって、さまざまな立場での明日の復興に向けての活力になることを願って企画され、平成7年5月21日午後1時から8号館813教室で開催された。この趣旨は河合隼雄先生の基調講演の中で、臨床心理学の専門家の立場から判りやすく述べられている。また、この

討論会の為の資料として、主に東灘区に居住する多数の方々から貴重な体験記が送られてきた。これらは時間の経過を意識して書きつづられたもので、最近、甲南大学大学院生の協力により兵庫県長寿社会研究機構家庭問題研究所から「阪神・淡路大震災と家族（面接調査による事例研究報告書）」や、甲南大学震災調査委員会が編纂する「甲南大学 大震災」が出版されるが、それらとともに、この所報が今後の復興に色々な面で寄与することを期待する。

総合研究所としては今後、心理的回復プロセスに注目して、長期的に震災後の復興に目を向けてゆくことになるだろう。

(所長 太田 雅久)

)

C

)

C

C

C